

敷地天神山遺跡群

1987

石川県立埋蔵文化財センター

敷地天神山遺跡群

1987

石川県立埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、石川県加賀市大聖寺敷地町・同岡町にかけた、天神山丘陵部に主として営なまれた遺跡群の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、広域営農団地農道整備事業に係るもので、石川県農林水産部耕地建設課の依頼を受けて、昭和54年度（第1次調査）～昭和57年度（第4次調査）にかけ石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間および調査担当者は下記のとおりである。
 - 第1次調査 期間 昭和54年6月12日～9月19日
調査担当者（現在）
田嶋 明人（県立埋蔵文化財センター 調査研究専門員）
浅田 耕治（能都中学校教員）
 - 第2次調査 期間 昭和55年4月22日～10月6日
平田 天秋（県立埋蔵文化財センター 調査研究専門員）
市堀 元一（会社員）
 - 第3次調査 期間 昭和56年4月20日～12月22日
谷内尾晋司（石川県教育委員会事務局文化課 専門員）
垣田 修児（小将町中学校教員）
市堀 元一（同 上）
 - 第4次調査 期間 昭和57年4月28日～10月2日
中島 俊一（石川県立埋蔵文化財センター主査）
藤田 邦雄（石川県立埋蔵文化財センター主事）
田中 孝典（国家公務員）
4. 出土遺物の図化等整理については全面的に社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託した。
5. 本書の編集、執筆は担当者の協議のうえ行った。なお、第2章については越坂一也（石川県立埋蔵文化財センター主事）の執筆協力を得、その他の執筆については各文末の記載による。
6. 本書における挿図等の扱いは下記のとおりである。
 - (1) 挿図の番号は各節ごとの一連番号であり、全体の一連番号ではない。
 - (2) 挿図中の水平基準の数値は海拔高（単位m）である。
 - (3) 挿図中の縮尺についてはそれぞれスケールによって標示した。
 - (4) 写真図版中の遺物の縮尺はそれぞれ不統一である。
7. 本調査によって得られた資料は現在、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。
8. なお、第1次～第4次にかかる調査にあたっては多くの方々の指導・助言・協力を頂いており、個々に明記しえなかったが関係者各位に深謝申し上げたい。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第1項 第1次調査の経過	2
第2項 第2次調査の経過	3
第3項 第3次調査の経過	4
第4項 第4次調査の経過	5
第2章 位置と環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	11
第3章 遺構と遺物	16
第1節 A地区の遺構と遺物	16
第1項 層序	16
第2項 遺構	18
第3項 遺物	19
第2節 B1、B2区の遺構と遺物	28
第1項 B1区の調査	28
第2項 B2区の調査	36
第3節 C、D2調査区の遺構と遺物	51
第4節 D1、E、F調査区の遺構と遺物	105
第1項 D1区の遺構と遺物	105
第2項 E地区の遺構と遺物	120
第3項 近世火葬場地区（F区）	129

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

敷地天神山遺跡群の発掘調査の要因は、広域営農団地農道整備事業とする基幹農道網の整備に伴うもので、大聖寺市街地の北郊より小松方面に向けての国道8号線に通ずる道路の新設および整備に係るものであった。この計画は、昭和48年頃より検討・立案されてきた模様で、昭和51年に至って県文化財保護課に計画跡線の提示があった。

この路線計画には、南加賀の大社菅生石部神社の背後域から周辺に広がる平坦部を貫通させる計画となっていた。この、現社殿の背後には当社の旧社殿跡と思われる基壇状の遺構や神苑跡の他、その東側では社僧坊群跡・神人屋敷跡や土豪の居館跡ともみられる広範な台状遺構群がよく遺されており、昭和51年6月に現地踏査が行なわれている。昭和52年10月に県耕地建設課より、遺跡の在り方によっては路線の一部変更も検討したいので詳細な分布調査を実施して欲しい旨県文化財保護課に打診があり、その後隣辺部も含めて数回の分布調査が実施されている。昭和53年9月、試掘を伴う分布調査を実施。この調査では、遺構の存在も含めて広範に遺物の分布も確認されて一層の大遺跡であるとの認識が相方関係者で持たれることとなり、路線の一部変更・発掘調査計画の検討や用地買収の進捗状況とも照らして協議を重ねることとなり、昭和54年5月大聖寺土地改良事務所で県農林部・県埋文センター・加賀市教委・学識経験者の四者で当該遺跡の調査方法・保存方法について協議が行なわれ、顕著な遺構群として確認される平坦部をできるだけ避けて計画路線を山側に移動することと、調査計画は昭和54年度より57年度の4ヶ年計画で終了を目指す方針で合議され、また、当該遺跡群を敷地天神山遺跡と命名する旨申し合わせた。

この結果、昭和54年6月初旬に路線の一部が修正決定され、遺跡の主要部分が保護されることとなったと考えるが、この変更は土地買収の話合いがほぼ終了し、工事計画が出来あがっていた段階であっただけに建設関係者や地元の方々には大変御苦労があったと推測され、路線計画段階で調整が図られたならばスムーズでしかもより適切な対処方法があったとも思われるが、以降工事計画と調査計画と調整を計りながら進められて第1次調査(A調査区)は昭和54年6月12日～9月19日、第2次(B₁・B₂区)は昭和55年4月22日～10月6日。第3次(C・D₂区)は昭和56年4月20日～12月22日。また、昭和56年度に入って、大聖寺市街地から本線への取り付け道路に付属する工事が実施されることとなり、この部分の隣接地約250㎡については加賀市教育委員会が調査を担当されることになり、『敷地町後方遺跡発掘調査報告』(昭和57 加賀市教育委員会)として既に報告書が刊行されているので参照願うこととし、最終年度となる第4次調査(D₁・E・F区)は昭和57年4月21日～10月2日にかけて実施し、第1次～第4次及び加賀市教委の協力を得て一応の成果を得ることができたと考えているが、この間埋文センターでは職員の転出入等により当遺跡の調査担当者が年度毎にかなりの変動があり、調査区(年度)相互間の連携的理解や問題点を十分に把握しえないまま推移してきたきらいがあり、反省点として心に留めている。

第2節 調査の経過

第1項 第1次調査の概要

1) 概要

約2,500m²の調査を実施した。調査区は地形により主要地方道橋立港線との取り付け部に当る低地（A地区）、天神山丘陵の西南部分（C地区）およびその裾部の台地平坦面よりなる。

水田部分では縄文時代中期および弥生時代末期～中・近世にかけての遺構・遺物を検出した。遺構では溝状遺構および土拵等が認められ、過半は奈良・平安時代から中世のもので占められていた。遺物では縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中・近世陶磁器類の他、木器・古銭・馬歯等が認められた。

天神山丘陵西南裾部の平坦面（B地区）は、トレンチ調査では遺構・遺物を確認できなかったが、平坦部と水田部分との境の傾斜部分で石垣状の遺構を検出した。丘陵裾部の緩斜面を平坦に造成し、その裾部に土止めの石垣をめぐらせた中・近世頃の屋敷跡の存在を想定しておきたい。

天神山丘陵の西南部分（C地区）では、竪穴状遺構（図版4）、土拵、砦跡の存在を想定させる土塁状遺構、段状に成形された平坦面等を検出した。これら遺構は中・近世を主体としたものと推定されるが、遺物が少なかったこともあって、その内容は明らかにできなかった。

当報告書ではA地区での内容を中心に報告したい。

2) 昭和54年度（第一次調査）調査日誌（抄）

- 54・6・7 発掘調査準備。器材搬入、プレハブ設営（2棟）
- 6・11 発掘調査の具体的な方法について、大聖寺土地改良事務所、加賀市教育委員会と協議。
- 6・12 発掘調査開始。調査区の設定。第3調査区より耕土除去作業を始める。
- 6・13
 - ） 第1・2調査区も第3調査区と併行して表土除去作業を実施する。湿田のため排水作業に難渋する。
- 6・21
- 6・22 第3調査区より「人形」出土。木器の出土が目立つ。
- 6・25
 - ） 第1調査区～第3調査区の排土作業。1～4層までの掘削をおおむね終了する。
- 7・18
- 7・19 第3調査区で遺物出土（溝）。発掘作業に入る。この頃より遺構検出、発掘作業にとりかかる。
- 7・20 第3調査区で土拵検出、発掘にかかる。第6層から土師器、須恵器が多数出土。
- 7・24 この頃より遺構検出・発掘作業と併行し、実測図の作製にかかる。
- 8・2 この頃より、A調査区の発掘作業と併行して、B・C調査区の発掘・分布調査にとりかかる。また、A調査区の全体平面図、土層図の作製にとりかかる。
- 8・3 敷地天神山遺跡の現況平面図（20分之二）作製のため現地打合せ。
- 8・10 この頃、B地区で分布調査のためトレンチ設定、発掘を実施する。遺構確認できず。
- 8・17 A地区の調査を終了する。
- 8・20 この頃より9月20日まで、C地区の雑木伐栽とトレンチ設定。分布調査を実施する。
- 9・20 C地区の発掘（分布調査）調査を終了する。
- 9・27 発掘器材を点検・収納し発掘作業を終了する。 (田嶋)

第2項 第2次調査の経過

昨年度の第1次調査に引き続き、菅生石部神社後背の天神山西端部の調査を実施した。調査区のはほとんどが天神山の南東および南向き斜面である。必然的に調査は、斜面中位に造成された平坦面および山頂部に重点が置かれたB1区。また、敷地集落（県道串・加賀線）からの取付道路部分の調査もあわせて実施したB2区。以下、調査日誌を抄録する。

調査日誌抄

4月22日(火) 晴 器材運搬。本年度調査区周辺の踏査を実施する。

4月23日(水) 晴時々雨 大聖寺土地改良事務所と本年度調査について打ち合わせを行う。現場事務所のプレハブの器材等の整理をし明日からの調査に備える。

4月24日(木) 晴 樹木伐栽後の樹枝等の始末、下草刈りを行う。斜面中位の平坦面（約幅3～5m、延長50m）が確認できる。

4月25日(金) 晴 昨日確認した平坦面に平行して幅2mのトレンテを設定して調査を開始する。標準的な土層は、表土約15cm、黄褐色土（地山流土）20～30cm、黒褐色粘土30～40cmである。第3層の黒褐色粘土は山側に片寄って認められ、遺物を含まないことから古くに堆積したものと考えられる。第2層の流土中から縄文土器片（コップ形）土師器片、須恵器片が若干検出される。

5月6日(火) 晴 トレンチ内の東西にのびる黒褐色粘質土の性格を把握するために立ち割りをする。礫（軟かい地山質の）を多量に含有するが無遺物層であることが判明する。また、直交するトレンチも設定して確認作業を続行する。中位の平坦面東側で焼土を伴う土壇（長方形）を検出した。周辺部においても焼土ブロックが、かなりの範囲で認められる。

5月14日(火) 晴 焼土を伴う土壇の検出を行う。長辺1.10m、短辺0.5mの長方形のもので壁は直立に近く、壁面も随所に焼痕が認められる。伴出遺物はない。また、周辺の焼土ブロックの精査を行うが不明の点が多い。焼土を立ち割ると浅い10cm程度の皿状のくぼみを呈する。

5月19日(日) 晴 ほぼトレンテ調査等により、広範囲に流土排土を実施しないと本遺跡の実態を把握できないと言う観点から、以後伐栽のままの倒木、樹枝等の整理作業を続行する。かなりの期間を倒木の整理等に費す。斜面に厚く堆積する地山流土の排土も続行する。下位では、土師器、須恵器が流土に混じって検出される。

6月20日(金) 曇時々雨 中位平坦面西側の先のトレンチ調査の際比較的出土遺物の多かった地点の精査を行う。地山面に切り込んで土壇状のもの、ピット、溝状遺構等が検出される。出土遺物は六世紀前半代の土師器、須恵器がほとんどである。遺構の遺存状況は悪く、平坦面造成時あるいはそれ以前に流失（下位へ）してしまったものと考えられる。斜面上方の丘陵頂には、古墳等を築くだけの面積がなく、斜面中位を成形して住居跡等が設けられた痕跡なのであろうか。

6月30日(日) 曇 上記山側の方形の土壇を調査する。上面では、上位からの転落かと考えられる加賀焼の甕破片が認められた。また、中位で漆器被膜片を検出した。底面近くでは、20cm大の石を多く検出したが、他には伴出遺物はなかった。

7月10日(木) 曇 山頂付近の調査を続行する。越前焼甕片が破碎されたような状況で検出される。また、中位平坦部の検出遺構の図面作成もあわせて行う。それ以後、遺物取り上げを行って本地区の調査をほぼ終了する。次いで敷地後方遺跡の取り付道路部分の調査にかかる。

8月8日(金) 晴 草刈り等を済ませて表土剥ぎを開始する。本調査区は、平野部に向って造成された平坦面の西隅にあたり、ほぼ3m×30m程度のものでその西側は小川が流れ鞍部となっている。住宅地に近隣しているため、ながらくゴミ捨場となり、また樹木の抜根等によりかなり荒れていた。また、西側を流れる小川では弥生土器が容易に採集された。表土下は包含層となり茶褐色粘質土で黄褐色砂質土の地山となる。

8月19日(火) 曇 北側では、地山面が削平されている半面、南側はかなりの盛土となる。北側地山面で、長楕円形の土壇を検出した。拳大から頭大の石を多く伴い珠洲、瀬戸、鉄製品が若干検出された。また、調査区中央部より南側では厚く盛土がなされ最下層では多くの弥生土器を検出する。土器間に流砂が多く認められる。上方谷部よりの流出なのか、人為的な廃棄なのか判断に苦しむ。

(平田)

8月25日(月) 晴 B2調査区の東側平坦面にトレンチを設定する。これは、農道建設に係わって生じた民地開発の予備調査である。平坦面の中央部に近づくに従って遺構・遺物が多く検出された。それらのほとんどは、中世期の井戸(?)、ピットなどである。以上の結果を土地改良事務所に民地開発に先立って発掘調査が必要な旨連絡する。

9月12日(金) 晴 B2区の調査がほぼ見通しがついてきたので優先順位に従って、B1区の前半に実施した東側の調査の準備にとりかかる。本調査区は現菅生石部神社の中軸線真北に位置する所である。路線にかかる斜面中位には、ほぼ10m×30mの平坦面が所在する。昭和54年度の試掘調査で完形の甕が出土した地点である。

9月25日(木) 晴 本地区の表土および流土の排土を終了したが、流土に混じっての若干の須恵器、土師器のほかは検出されなかった。遺構についても明確なものは検出できなかった。かなり多くの20×30cm大の岩石が散布するが建造物の礎石などにはなり得なかった。

10月2日(木) 晴 センター事業の増大と遅延のため本遺跡群の調査は一時中断して春から次年度にくりのべて実施することとなった。そのため完掘のB2区の写真撮影、実測作業を実施する。左記の作業を終了し、遺物の取り上げなども実施し、一応調査を中断する。

3月4日(火) 曇 冬期の積雪のため、まだ3～40cmの雪が残っている。除雪作業を開始する。以後16日まで、除雪、倒木の処理作業を実施する。昨年の調査区の調査を再開するが、斜面流土が多くまた春とは言え寒く、遅々として進まない。以後の調査は、第3年次の調査に引き続いて実施している。

第3項 第3次調査の経過

第3次調査は、現在の菅生石部神社本殿背後に広がる台地平坦面と、天神山の丘陵斜面の一部にあたる約3,800㎡が調査対象となっている。この内、本殿背後平坦部をC調査区・これより間隔を置いて東側の敷地町よりの進入路接続部をD₂調査区としてそれぞれ経過について調査日誌をもとに抄録しておきたい。

4月20日 器材運搬および路線幅の確認と調査手順の打合せを行う。C調査区より開始する。

4月21日 表土の除去作業と断ち割りトレンチを設けて層序の把握を行う。

5月7日～28日 斜面部の表土除去作業と盛土による小台状遺構の発掘を行う。この台状部南端では東西に並ぶ石列を検出し、何らかの区画を意図したものと思われるがこの台状部上表面では関連する遺構の発見はない。ただ、台状部裾にはこれに平行する2個の柱穴状ピットを検出し、祭祀的な施設であったかもしれない。平面・断面図の作成も併せて行った。

6月5日 近世平坦面(上層部面)の発掘作業と土塁の検出作業を行う。

6月10日～18日 近世土師質土器(カワラケ)群の検出および実測作業を行う。

6月18日～20日 近世平坦面の平板測量および写真撮影を行う。

6月24日～7月10日 盛土整地によって造成されている近世平坦面より下部への掘り下げ作業を行う。下部では古墳時代の遺構が検出され始める。

7月27日～8月4日 竪穴住居跡の検出および発掘作業を行う。

8月5日～12日 調査区の南側では土器溜りが存在し、この検出作業と実測作業を行う。

8月13日～16日 盆休みとす。

8月17日～9月30日 竪穴住居跡の発掘作業。ほぼ完掘状況となったので全景写真を撮る。

10月1日～10月5日 竪穴住居跡平面実測作業とD₂調査区へ移って表土層の発掘を開始する。

10月6日～11月20日 D₂調査区の表土除去に引き続いて遺構の検出および発掘を行う。

11月20日～12月6日 遺構の発掘および点検を行いつつほぼ完掘に向かう。

12月7日～9日 航空測量を行うため清掃をする。

12月10日 航空測量(空撮実施)。遺構の個別写真撮影と調査区南側凹地について一部未確認であったため掘り下げを行う。

12月18日 プレハブと調査機材の撤去を行う。

12月22日 補足の実施作業を済ませて本年度の現地調査を終了とする。

(平田、田嶋、中島)

第4項 第4次調査の経過

発掘調査は本年度を最終年度として漸次、道路予定線の西より東側に向けて進行してきているが、昨年度は本年度の調査区の1つにあたるD1区（仮称天神地区）を後まわしとしてC・D2区が調査されているため、この部分と、D2区より東側に向けた地区が調査対象地となった。

D2区より東側では丘陵斜面部が主に路線敷となっており、この斜面部をE調査区（寺坂地区）と設定した。また、この斜面部より弧状のカーブをとって現敷地町集落の東端部で沖積地向ける線形となり、この出口部分で若干の段状平坦部があってこの地区をF調査区とした。

調査の推移は、F→E→D1区へと進めているが、昨年度に一部未完掘となっていた地下式横穴の発掘・実測より着手して後F区より本年度の予定区の完了を目指すこととなった。

以下、調査日誌を抄録する。

調査日誌抄

4月26日(月) 晴 器材の搬出と現地関係者への挨拶をすませ、調査予定地範囲確認と周辺部を含めた地形的景観把握のため踏査をする。

5月6日(木) 晴 地下式横穴の発掘にとりかかる。縦(縦)坑の発掘がかなり進んでおり、室内をのぞくことができる状態ある。昨年度はこれにシートを被せて越冬されているが雨水の浸入はないが、天井部に一部ヒビ割れが認められる。

5月8日(土) 晴 入口を対面して穿たれた2室の存在が判明し、殊に当初より判明の第1室ではかなりの天井部よりの崩落が推測され、排土・作業の安全性を考慮して最も崩落で薄くなっている中央部に約1m角の穴をあけて作業をすることとした。

5月10日(月) 晴 1号室では縦坑及び入口部より倒壊したとみられる玉石が、室内のほぼ中央部まで転入しており、入口部から室内に向かって傾斜した推積となっていた。しかし、2号室ではこうした状況はなく、流入土ののって数点の礫が存在したのみである。

5月11日(火) 晴 地下式横穴実測用杭打ち作業及び、F調査区発掘等準備作業を行う。

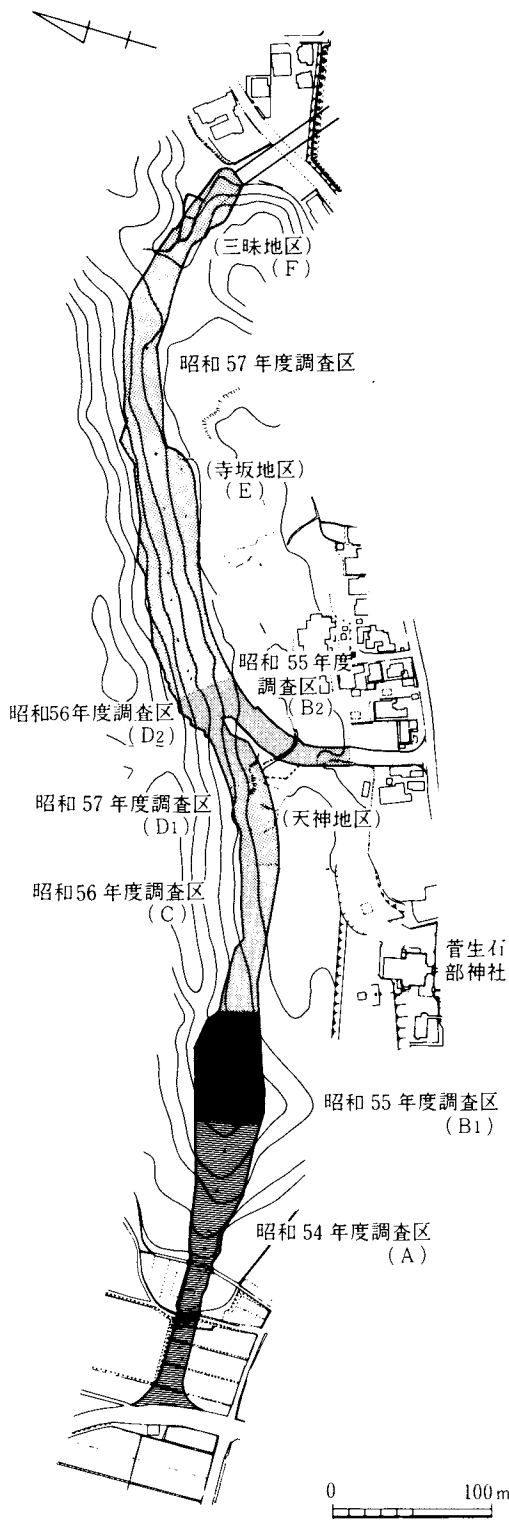
5月13日(木) 晴 プレハブ（仮設事務所）の建て上げ。F調査区の清掃・杭打ち等を行う。

5月15日(土)～7月2日(金) F調査区の発掘を行う。この地区では、小谷あいに段築の平坦面があり、下段部は水田として使用された畔が残り、中段部に相当する発掘地点では表面に近世以降の陶磁器が採取されるとともに細炭が表面で確認されていたところであった。発掘の進行に伴い、焼土ブロック・骨片などが出土し、ついに土坑状遺構等を発見するに至った。これらは焼け方の強弱はあるもののすべて焼土坑・焼溝状跡で占められており、坑内では釘・焼石・骨片・炭などが含まれるのが通常であり、火葬用遺構と判断されることとなった。また、同一的地点でかなり輻輳して使用された為か坑底部のみが遺存する例が多く、あるいは使用後に破壊・埋め戻すというあり方をとっているものとも考えられる。現地古老においても、この地が火葬場であったとの伝承はなかった。

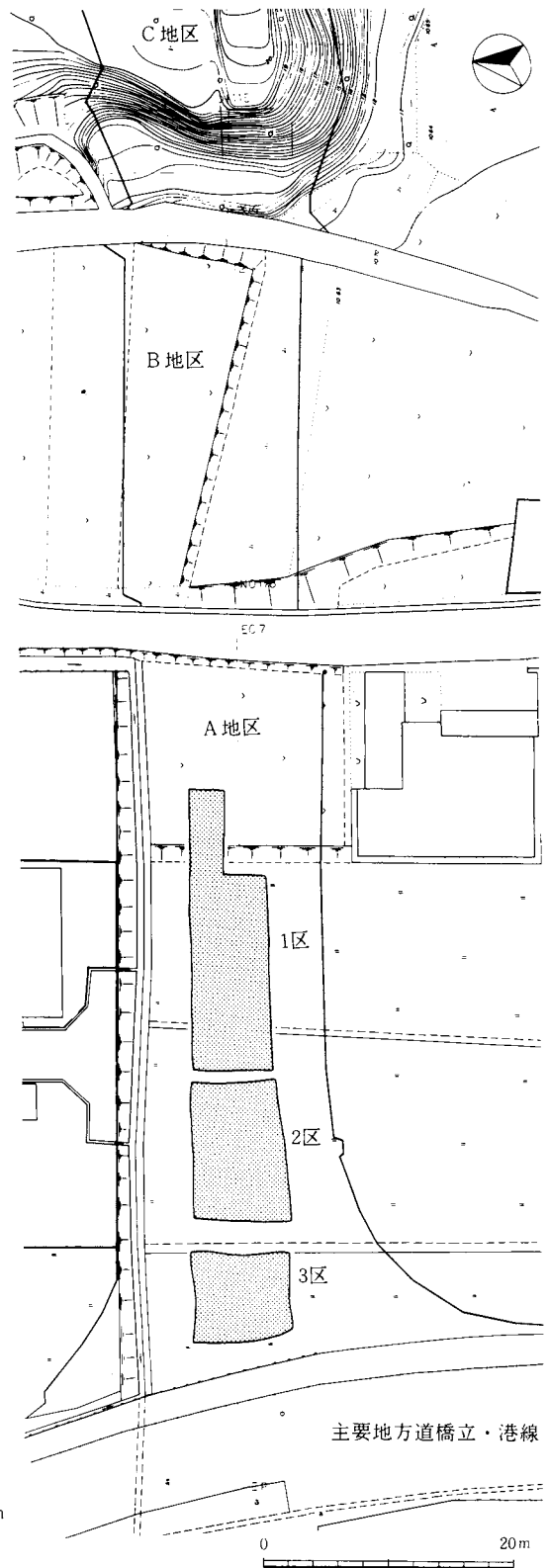
7月5日(月)～7月31日(土) 本日よりE地区の調査を開始する。この地区は比較的急傾斜をもつ丘陵斜面部にあたり、ここに眉状平坦状地3ヶ所が存在した。これらの地点についてトレンチを設けて確認した結果、眉状地中最も広い平坦状地盤面に土器の点在があった1ヶ所の他は、斜面の崩落によって形造られたものであった。丘陵中腹部にあたるこの地点より裾部では、平坦地が広がりをもち、沖積部を望む前面に宝暦10年（1760年）建立と伝えられる真宗大谷派空善寺があり、この裏手にあたって丘陵山林地に登る小径があってこれが寺坂と呼ばれているので、仮称寺坂地区とした。完結的で明確な遺構の発見はないが、須恵器を主とする土器群があった。

8月2日(月)～10月2日(土) D1調査区の調査を開始する。調査区の北側では丘陵斜面部の崩盤により、厚く流入土の堆積があってこれを重機で排土する計画とした。谷側にあたる路線幅内側縁にトレンチを入れ、土層状態の把握と掘削深度を見きわめる作業より着手した。上部層を取り除くと近世以降に想定される溝状跡が検出されてさらに下部では中世の遺物が内包されており、この中世の遺構検出面が黄色系の地盤面となっていた。

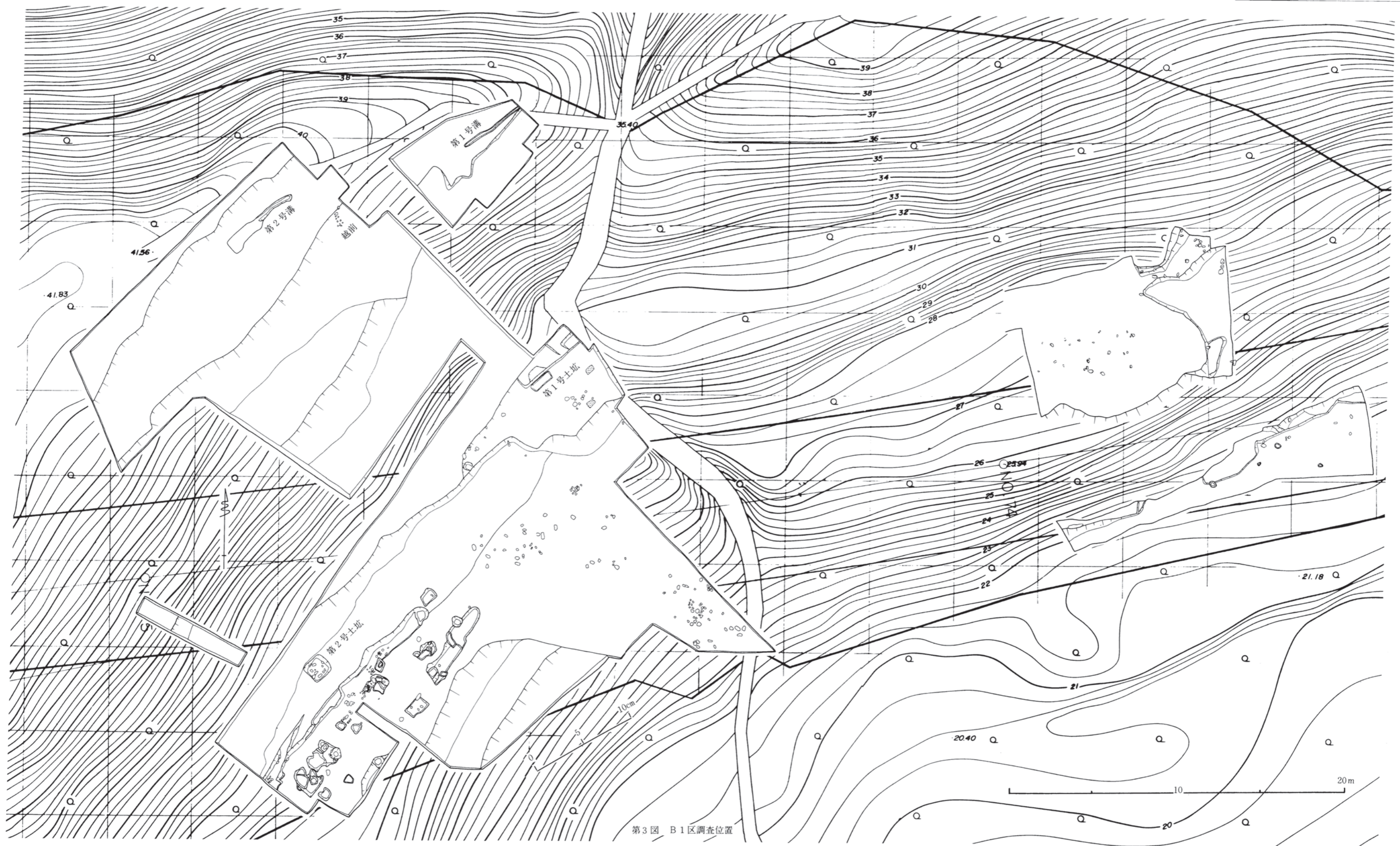
調査には、第1次～第4次にかけて一貫して加賀市域の有志の方々の協力を得て実施し、各々御芳名を記さないが、感謝申し上げたい。



第1図 調査区全体位置図



第2図 第1次調査区割図



第3图 B1区調査位置



第4図 B2区調査位置

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

白山山系の大日山（標高 1,368m）に源を発する大聖寺川は、国指定史跡九谷古窯跡のある江沼郡山中町九谷で千束川、杉ノ水川と、昭和40年に完成した我谷ダムで大内谷川と合流し、そこで流れを北に大きく変え、鶴仙溪、加賀温泉郷のひとつ山中温泉を経て江沼盆地に達する。上河崎付近から大聖寺市街地の手前にかけて著しく蛇行し、大聖寺市街で三谷川、熊坂川を合わせて日本海に注ぐ。流程約40km、流域面積約 209 k m²の2級河川。下流域で蛇行が著しいことや大聖寺市街で三谷川、熊坂川が合流することなどから大聖寺は古くから水害に悩まされてきた。大聖寺は東西約 8 km、南北約 4 kmを測る江沼盆地南西端に位置し、江沼盆地が西に向かってわずかに開口している門戸の位置を占め、古来より交通の要とされてきた。また当該地区は、江沼盆地内であって、さらに小さく区画された小盆地的景観を示す。これらの地理的条件は本遺跡の位地を考える上で重要なポイントとなろう。

遺跡地はこの、市街地に東接して大きく蛇行（通称ガマノマガリ）する大聖寺川を前面に望む海浜部より内陸部の市街地の北縁にまで横たわる洪積台地（橋立丘陵）の東側端部に位置しており、大聖寺岡町・敷地町にまたがる通称テンジンヤマという丘陵～裾部にあけて営まれた遺跡である。この天神山の裾部では山該の発掘調査地に隣接して、御願神事の「竹割り祭り」の奇祭で知られる菅生石部神社が鎮座し、この3月9日に県指定文化財に答申されている。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

加賀市大聖寺およびその周辺地域の考古学的調査は比較的浅く、牧野隆信氏（現加賀市立図書館）らを顧問とする県立大聖地高等学校郷土研究部のメンバーによって、昭和25年の黒瀬瓦窯跡、黒瀬御坊山古墳〔大聖寺高校社会部考古班 1951〕、26年の敷地古墳、経塚〔大聖寺高校社会部考古班 1952〕、40年の敷地団地遺跡〔大聖寺高校郷土研究クラブ 1966〕など地道な調査が行われた。また54年から57年にかけて埋蔵文化財センターにより敷地天神山遺跡群〔石川県立埋蔵文化財センター 1983〕の調査が行われ、ようやく当該地の遺跡の在り方が理解出来るようになってきた。その後、加賀市教育委員会が調査された敷地町後方遺跡〔加賀市教育委員会 1982〕、藤ノ木遺跡〔加賀市教育委員会 1985〕、そして埋蔵文化財センターが実施した58年の永町ガマノマガリ遺跡と永町大聖寺高校遺跡（仮称）、59年の敷地鉄橋遺跡等の大規模な遺跡の調査が相次ぎ当該地の歴史像もより一層明確なものとなってきた。以下、時代別に周辺の遺跡と歴史環境について述べてみたい。

旧石器時代

昨年5月に加賀市宮地町地内の丘陵畑地で旧石器時代の石刃（ブレイド）が発見された。この石器は技法的にこれまで石川県内で発見されている東山系石器群とは異なっている点が興味深い。

県内ではここ数年来旧石器時代の遺跡の数が増えており、ようやく該期の研究が緒についたといえよう。今年の夏に加賀市教育委員会が調査を予定しており、その成果が期待される。

縄文時代

縄文時代の遺跡は橋立台地の南側低台地および微高地上に分布する。単独出土であるが敷地天神山遺跡では早期の尖頭器（石槍）が出土しており大聖寺市街地においては最古の遺物となる。⁽¹⁾ 中期末になると、この台地の縁辺部に集落が営まれるようになり、敷地団地遺跡、敷地天神山遺跡群、御坊山遺跡、岡遺跡、藤ノ木遺跡、永町大聖寺高校遺跡からは中期末から後期初頭にかけての縄文土器が主体的に出土している。特に藤ノ木遺跡では中期初頭から後期初頭にかけて、南加賀地方の土器の編年作業を行う上で重要な土器群の他、漆塗り土器、三角檜形土製品、耳栓、土偶、石製品など貴重な遺物も出土している。これらの遺跡群から西に約1 km離れた台地の縁辺には、晩期の畑遺跡が知られるが詳細は不明。

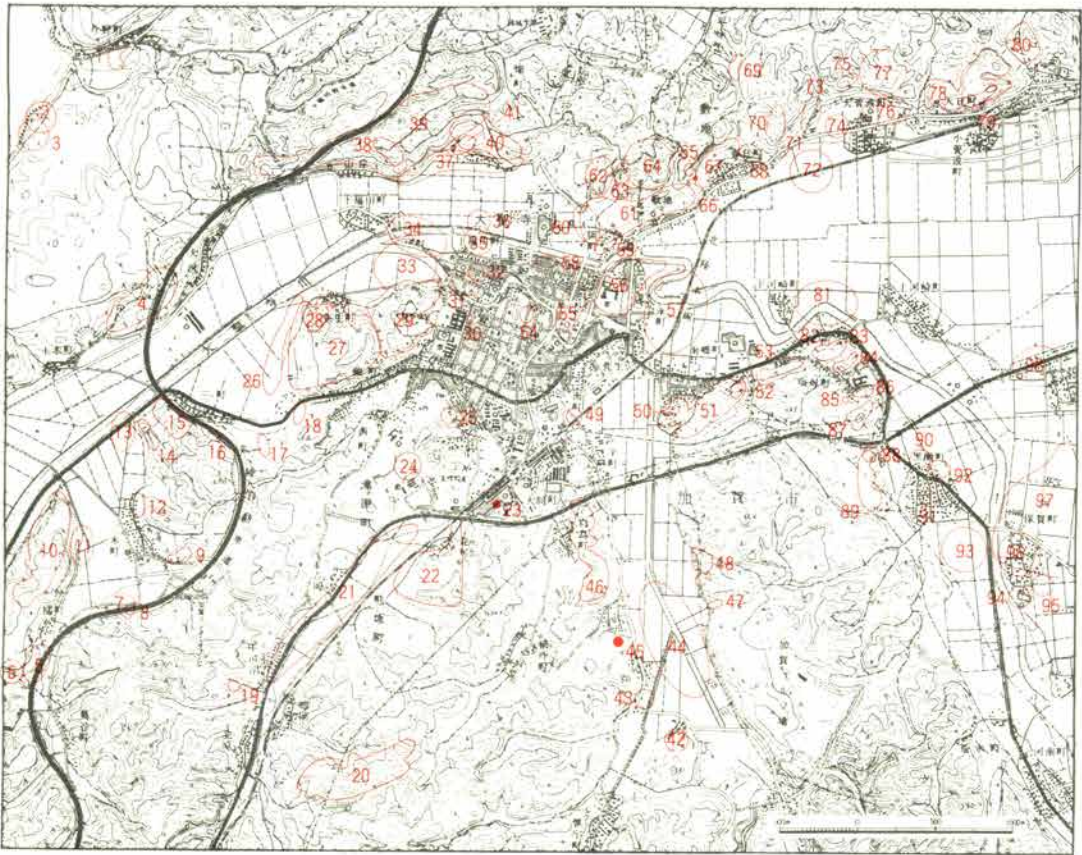
弥生時代

加賀市の弥生時代の遺跡は、弥生時代中期初頭の柴山出村式土器の標準遺跡である柴山出村遺跡と弥生時代後期の猫橋遺跡が広く知られているが、永町ガマノマガリ遺跡や永町大聖寺高校遺跡の調査によりこの両型式の間を埋める中期の遺構や遺物が検出された。後期になると遺跡の数は増加し、これらの2遺跡の他に敷地天神山遺跡群、敷地後方遺跡、岡遺跡、藤ノ木遺跡、幸町遺跡、畑遺跡等が知られるようになる。台地縁辺部および微高地に集落を営み、低湿地に水田を耕作していたものと推定されるが、現状ではこの沖積部の遺跡の状況については未解明な部分かなり残されているものと考えられる。

古墳時代

古墳時代に入ると遺跡の数は急増する。まず古墳は、大聖寺市街地の北側の橋立台地南端に下福田古墳群、敷地古墳群、敷地平野山古墳群、大菅波古墳群、小菅波古墳群が、市街地南側の能美・江沼丘陵北端に南郷・吸坂・黒瀬地域に分布する南郷古墳群が位置する【石川考古学研究会1978】。敷地平野山古墳群は昭和58年に加賀市教育委員会によって分布調査が実施され、方墳3基、円墳6基、不明1基の合計10基の古墳が検出されたが明確な時期は不明【加賀市教育委員会1984】。敷地古墳群は8基の円墳からなる敷地春日町古墳群、4基の円墳からなる敷地A古墳群、円墳・方墳各1基からなる敷地B古墳群の合計14基、3古墳群から構成される。敷地A古墳群1～3号墳は埴輪を伴う。時期は敷地春日山古墳群が5世紀中葉前後、敷地A古墳群が5世紀後半から6世紀と推定され、敷地B古墳群はA古墳群よりも遡る。また4群7基の古墳からなる小菅波古墳群の小菅波神社裏B古墳群1号墳は江沼地域最古の前方後円墳で、主軸長17.0mを測る。一方、南郷古墳群は前方後円墳2基、前方後方墳1基、円墳52基、方墳10基、不明3基の合計68基、14古墳群から構成される。古墳は4世紀後半頃から6世紀中葉頃まで間断なく築造されている。中でも5世紀前半から中葉にかけて築造された吸坂D古墳群13号墳は主軸長68.3mの前方後円墳で江沼地域最大の規模を誇る。次に集落は古墳近くの台地縁辺部や微高地上に分布し、遺跡の数は多い。

敷地天神山遺跡群では第3次調査において古墳時代後期（5世紀～6世紀）の竪穴住居20数軒、



第1図 周辺の遺跡分布図

- 1、片野遺跡(奈良～平安) 2、長者屋敷遺跡(縄文・古墳) 3、長者屋敷製鉄跡(不詳) 4、上木城跡(不詳) 5、橋遺跡(不詳) 6、橋の関跡(江戸) 7、三木B遺跡(古墳) 8、石城の尾古墳(古墳) 9、三木C遺跡(奈良～平安) 10、小森堡跡(不詳) 11、三木A遺跡(縄文～中世) 12、三木E遺跡(古墳) 13、三木だいもん遺跡(平安～中世) 14、上皇古墳群(古墳) 15、三ツ堡跡(不詳) 16、三ツ町B古墳群(古墳) 17、三ツ町古墳群(古墳) 18、錦町古墳群(古墳) 19、庄司谷窯跡(近世) 20、熊坂城跡(不詳) 21、熊坂川吉岡遺跡(奈良～平安) 22、熊坂口之城跡(室町) 23、大同古墳(古墳) 24、大聖寺実業高等学校遺跡(縄文・奈良～平安) 25、全昌寺跡(不詳) 26、萩生B遺跡(古墳) 27、津葉城跡(室町) 28、作見古墳(古墳) 29、大聖寺城跡(安土～江戸) 30、八間堂遺跡(奈良～中世) 31、馬場町遺跡(奈良～平安) 32、上福田春日神社遺跡(平安) 33、萩生A遺跡(奈良～平安) 34、上福田A遺跡(不詳) 35、上福田C遺跡(縄文) 36、上福田B遺跡(奈良～平安) 37、畑遺跡(縄文～平安) 38、下福田古墳群(古墳) 39、畑城跡(南北朝) 40、極楽寺跡(中世) 41、畑古墳群(古墳) 42、三谷縄文遺跡(縄文) 43、百々遺跡(古墳) 44、三谷川遺跡(奈良～平安) 45、百々古墳(古墳) 46、細坪・三谷古墳群(古墳) 47、三谷F古墳群(古墳) 48、三谷H古墳群(古墳) 49、幸町遺跡(古墳) 50、南郷八幡神社古墳(古墳) 51、南郷城跡(室町) 52、南郷A古墳群(古墳) 53、南郷B古墳群(古墳) 54、鷹匠町遺跡(古墳) 55、耳聞山遺跡(古墳) 56、永町・ガマノマガリ遺跡(縄文～中世) 57、敷地鉄橋遺跡(奈良～平安) 58、麻島遺跡(不詳) 59、藤ノ木遺跡(縄文・弥生～中世) 60、岡遺跡(縄文・古墳～平安) 61、敷地天神山遺跡・敷地町後方遺跡(縄文～近世) 62、坊山遺跡(縄文) 63、坊山長者屋敷遺跡(不詳) 64、金吾ヶ城跡(室町) 65、敷地B古墳(古墳) 66、敷地C古墳(古墳) 67、敷地団地遺跡(縄文・古墳) 68、敷地春日町マルヤマ古墳群(古墳) 69、平床遺跡(奈良～平安) 70、平野山古墳群(古墳) 71、敷地経塚(不詳) 72、大管波D遺跡(古墳・奈良～平安) 73、大管波A遺跡(奈良～平安) 74、大管波B遺跡(奈良～平安) 75、大管波古墳群(古墳) 76、大管波C遺跡(奈良～平安) 77、西の御城(不詳) 78、小管波遺跡(古墳) 79、小管波神社裏古墳群(古墳) 80、作見陣跡(室町) 81、下河崎遺跡(奈良～平安) 82、片山古墳(古墳) 83、吸坂A・B古墳群(古墳) 84、吸坂神明神社古墳群(古墳) 85、吸坂焼窯跡(江戸) 86、吸坂C古墳群(古墳) 87、吸坂D古墳群(古墳) 88、黒瀬瓦窯跡群(奈良) 89、黒瀬御坊山古墳群(古墳) 90、黒瀬掃部邸跡(室町) 91、黒瀬覚道館跡(室町) 92、黒瀬遺跡(不詳) 93、新黒瀬遺跡(古墳) 94、保賀遺跡(縄文) 95、保賀A遺跡(不詳) 96、保賀廬寺(奈良) 97、保賀C遺跡(奈良～平安) 98、中代A遺跡(奈良～平安)

倉庫かとも思われる掘立柱建物数棟も検出されており、昭和58年調査の永町ガマノマガリ遺跡では、6～7世紀の掘立柱建物60数棟が発見されており、天神山遺跡群との関係が注目される。

奈良・平安時代

7世紀も後半になると保賀廃寺、弓波廃寺、宮地廃寺等の寺院跡が多く見られるようになる。また保賀廃寺から北西に約1.2km離れた黒瀬瓦窯跡では保賀廃寺出土瓦と同型式の瓦が確認されており、供給関係が注目されるが今後の検討課題である。

奈良・平安時代の遺跡には荻生A遺跡、上福田B遺跡、上福田春日神社遺跡、八間道遺跡、耳聞山遺跡、敷地鉄橋遺跡、下河崎遺跡など大聖寺川沿岸付近に遺跡が営まれるようになるが、遺跡の実態はほとんどわかっていない。埋蔵文化財センターによって昭和59年に調査された敷地鉄橋遺跡では30数棟におよぶ奈良時代の掘立柱建物が検出された。建物は整然とした配置で、庇付建物を伴う事から、宮衛的色彩の強い遺跡と考えられている。また遺跡からは皇朝十二銭も出土している。平安時代になると菅生石部神社が文献に登場する。現菅生石部神社が古来より現在地を踏襲しているかは不明であるが、「三代実録」の元慶7年(883年)12月28日の条に「加賀国従五位下菅生神進正五位下」とあり、また延喜式内社としても現われてくる。

中世

中世になると遺跡の数も再び多くなり、橋立台地や江沼・能美丘陵上には畑城跡、上木城跡、津葉城跡、熊坂口之城跡、金吾ヶ城跡、南郷城跡等数多くの山城が作られるようになる。

中世の江沼郡には額田庄、奈多庄、横北庄、山代庄、富墓庄、福田庄、熊坂庄、右庄等の庄や郷が文献に見られ、本遺跡が所在する辺りは北野社領福田庄域内に当たる。福田庄の地頭職は、承久の乱(1221年)後、伊豆より着任した狩野氏およびその一族が代々世襲し、菅生社(菅生石部神社)の神主職も兼務した。本遺跡の周辺には八間道遺跡、藤ノ木遺跡、永町ガマノマガリ遺跡、敷地後方遺跡等の遺跡が存在し、近年の調査からその歴史的 성격が明らかになってきた。敷地天神山遺跡群や敷地後方遺跡では12世紀から17世紀の遺物がみられ、その中心は14世紀から15世紀前半頃である。遺構では遺跡群の西側で屋敷跡を連想させる石垣、掘状遺構、土塁等が、天神山南西端でも砦上の遺構が検出されている。また永町ガマノマガリ遺跡では12世紀から16世紀の遺物がみられ、12世紀と15世紀から16世紀前半頃の物が多い。遺構では15世紀後半から16世紀前半頃の堀跡が検出され、館跡の可能性が強い。永町ガマノマガリや本遺跡は狩野氏およびその一族と何らかの関連が窺われ、庄園制の展開に従い庄鎮守とされた菅生石部神社を軸として中世的都市が形成され、展開していったものと思われる。しかし一向一揆の勃発とともに、狩野一族のように中世の江沼郡を支配した武士達の勢力も弱まり、これらの遺跡も衰退していったものと推定される。

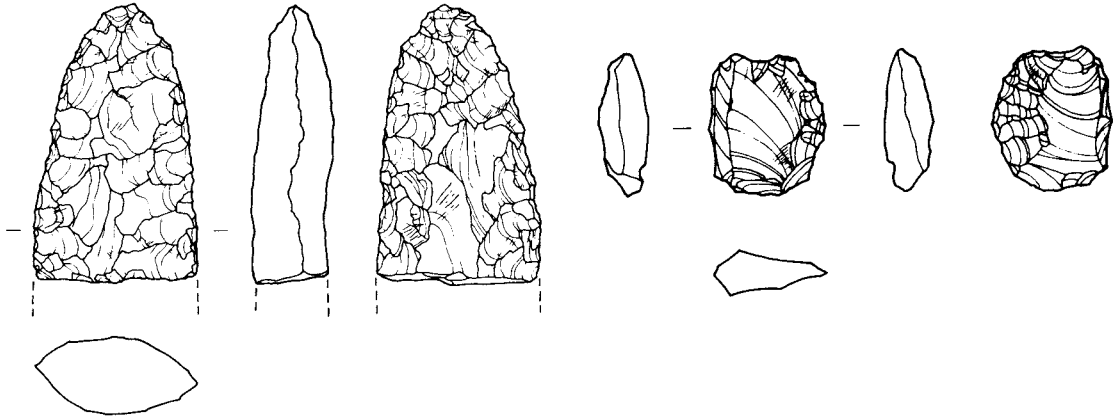
(越坂)

〔註〕

- (1) 石器は真中で折れ基部を欠損するが、草創期にまで遡る可能性も十分に考えられる。早期の土器は加賀市橋立町・大野山遺跡から椅田押型文土器が採集されている(上野与一 1953 「石川県江沼郡橋立町の押型縄文(予報)」 石川考古学研究会々誌5)。

引用文献

石川県立埋蔵文化財センター 1983 『敷地天神山遺跡群』



第2図 C調査区近世整地土中採取の石器実測図（S=1/2）

石川考古学研究会	1978	「江沼古墳群分布調査報告」	石川考古学研究会々誌21
加賀市教育委員会	1982	『敷地町後方遺跡発掘調査報告』	
加賀市教育委員会	1984	『敷地平野山古墳群』	
加賀市教育委員会	1985	『藤ノ木遺跡』	
大聖寺高校社会部考古班	1951	「石川県江沼郡南郷村字黒瀬 御坊山古墳調査報告」	石川考古学研究会々誌3
大聖寺高校社会部考古班	1952	「石川県江沼郡月津村字柴山貝塚報告書 附同郡大聖寺町敷地々内古墳及び経塚調査報告」	石川考古学研究会々誌
大聖寺高校郷土研究クラブ	1966	「敷地団地遺跡調査報告」	郷土4

参考文献

橋本澄夫 1971 『加賀能登・城堡館名集』

「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1981 『角川日本地名大辞典 17 石川県』 角川書店

石川県立埋蔵文化財センター 1980 『石川県遺跡地図』

加賀市史編纂委員会 1978 『加賀市史 通史上巻』

第3章 遺構と遺物

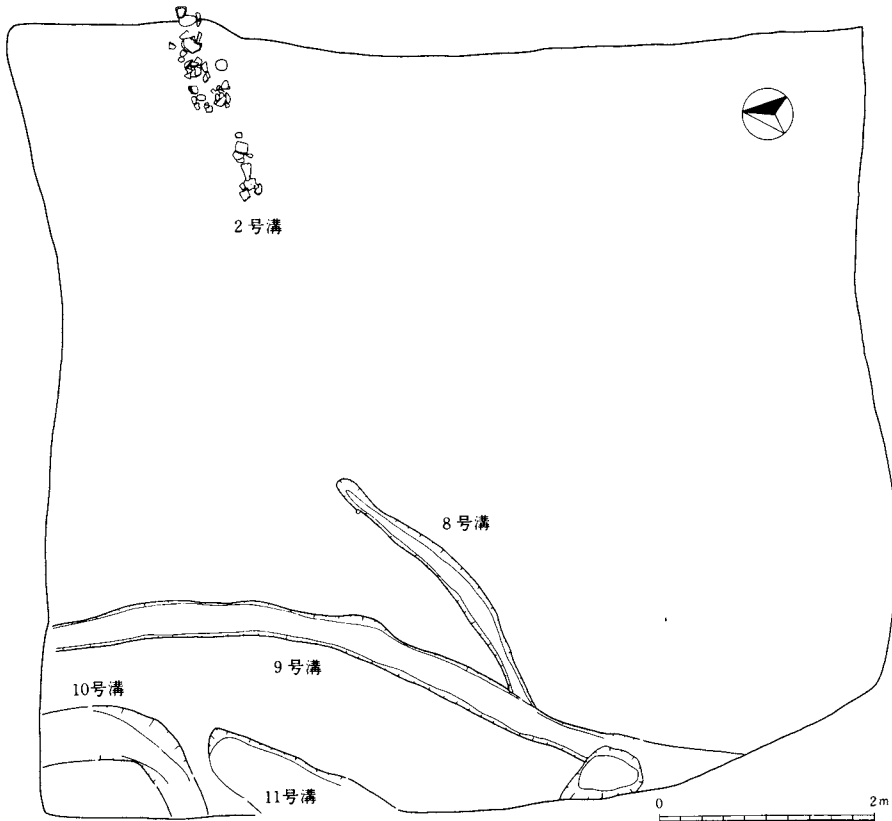
第1節 A地区の遺構と遺物

1) 層 序

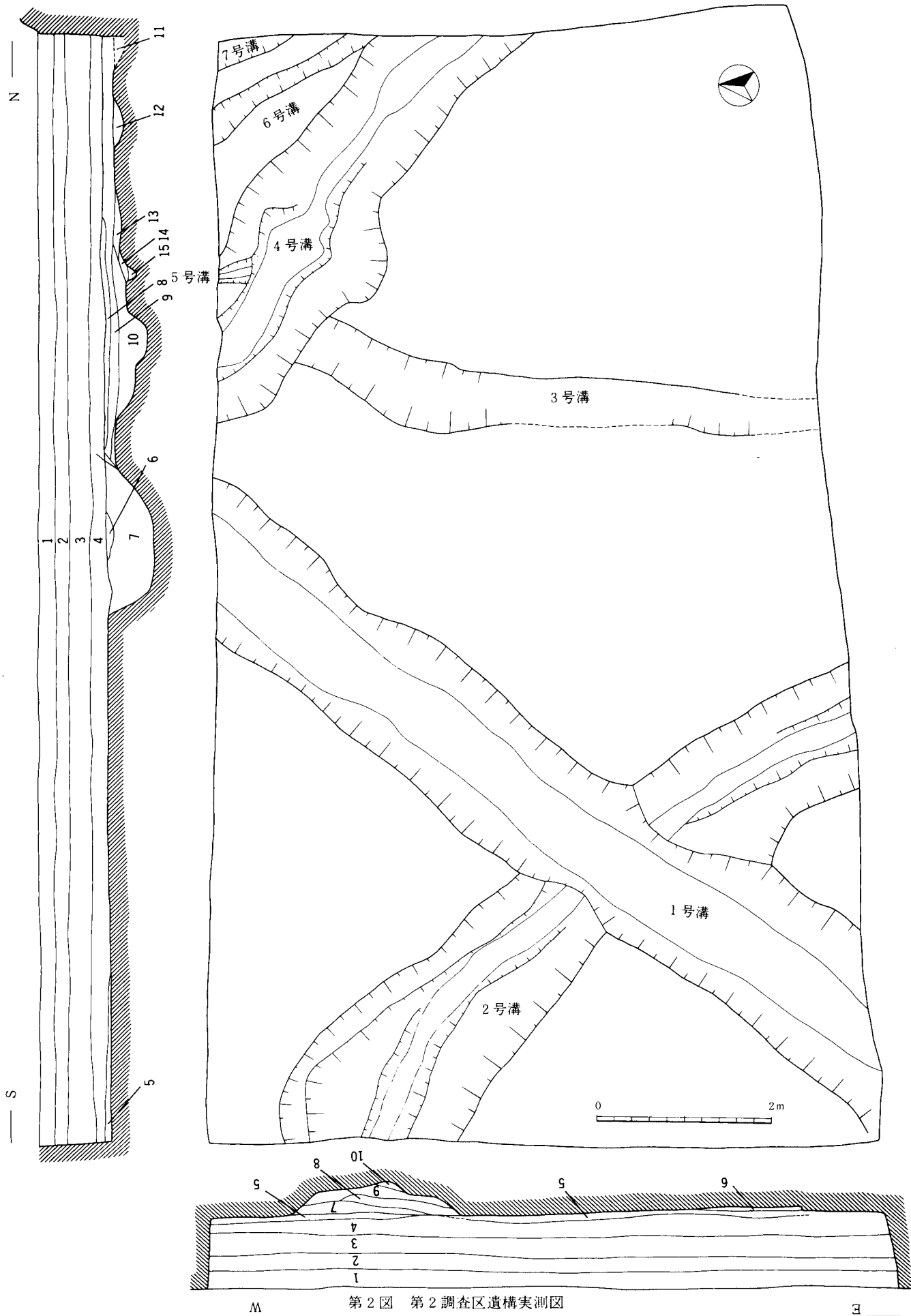
調査区が丘陵裾部の凹地に当たっていたため、数次の堆積層がみられ、様相は複雑である。ここでは基本層位を確認できる第3調査区西壁土層断面（第2図）に即して概観しておく。

基本層序は、古墳時代初頭の遺構面までが、6層（1～6層）よりなり、遺構面となっている。灰白色粘土層下約150cmに黒色粘質土層（縄文中期の遺物包含層）が認められた。地山は調査区東側の地形的に高い部分でのみ確認でき、礫を混在した赤褐色粘土層（通称赤土）よりなる。

第1層は水田耕土、第2層は水田床土（客土層）で、3層の暗灰色青灰砂層と4層の暗褐色砂層は中世の遺物包含層。2層と3層の間には小礫を混えた薄い層がみられる。5層は無遺物の暗灰色砂礫層で、位置によっては粗砂層、粘土層に変る。6層は暗褐色砂質土層で、中世～古墳時代にかけての包含層。当調査区での遺物のほとんどは当該層に包含されていた。



第1図 第1調査区遺構実測図



第2図 第2調査区遺構実測図

遺構は第4層下、第5層を切って造られているものと、第6層下にみられるものに大別でき、後者で時期が確認できた最新のもののは11世紀中頃の1号構である。前者の遺構の時期は特定できていない。

2) 遺 構

当該調査区では溝状遺構17条以上、土坑3基以上が検出された。遺構の時期を特定できたものは少ないが、古墳時代初頭のものから中世にかけてのものまで認められた。

1号土坑 第3調査区。150cm×140cm、深さ15cmを測る略円形の不定形土坑。暗褐色粗砂層を覆土として、土坑上層部分より木片が出土している。時期不詳。

2号土坑 第3調査区。150cm×130cm、深さ10cmを測る略円形の土坑。坑底は1号土坑に比較して平坦に造られている。暗褐色砂質土層を覆土とし、部分的に細砂層を混える。土師器・須恵器破片を出土しているが時期は不詳。

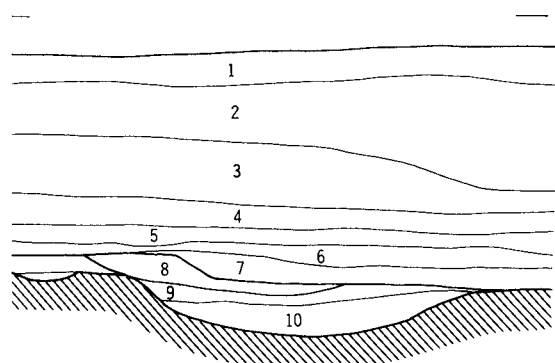
3号土坑 第3調査区。170cm×130cm、深さ15cm程度の不定形な小判形の土坑。坑底は皿状をなす。時期不詳。

1号溝 第2調査区 東北方向から南西方向に流れる大型溝。傾斜は調査区西隅と東隅とで約15cmを測る。幅は約150cm、深さ50cmを測り、断面形は部分的に2段掘りに近い形態をもつ。覆土は第2・3区のとおりで、特に下層には粗砂層、砂礫層がみられ、水の流れの早い溝であったことを窺わせている。当該溝からは11世紀中頃から後半（Ⅶ期—田嶋1986）の土師器皿（第12区）が一括出土している。土師器皿は若干粘性を帯びた砂質土層から出土しており、溝の廃絶時ないしは、流速が弱くなった時点で一括投棄されたものと考えられる。

2号溝 第1・第2調査区で検出。第2調査区で1号溝と交叉している。幅約130cm、深さ40cmを測る中型溝。断面形は中央部で幅約50cm、深さ20cm程度掘り込んだ2段掘りをなす。覆土は溝底に砂礫層を堆積していたが、砂層から粘質土層を基調とする。遺物は第1調査区で比較的まとまった土師器が出土しており、「白江式」（田嶋1986）前後と推定される。

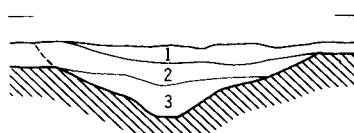
4～7号溝 第2調査区東北隅から、第3調査区南西隅に重複して検出された。第3調査区での溝番号は、12・16・17号溝と表示したが、第2調査区での4～7号溝のいずれかに該当するものである。断面観察では4号溝は2本の溝からなっている可能性もある。4号溝は5号溝より新しい。4号溝は砂質土層、5・6号溝は粘質土層を覆土とする。

13号溝 第3調査区で検出。幅60cm、深さ20cmの溝で、断面形は「U」字形をなす。覆



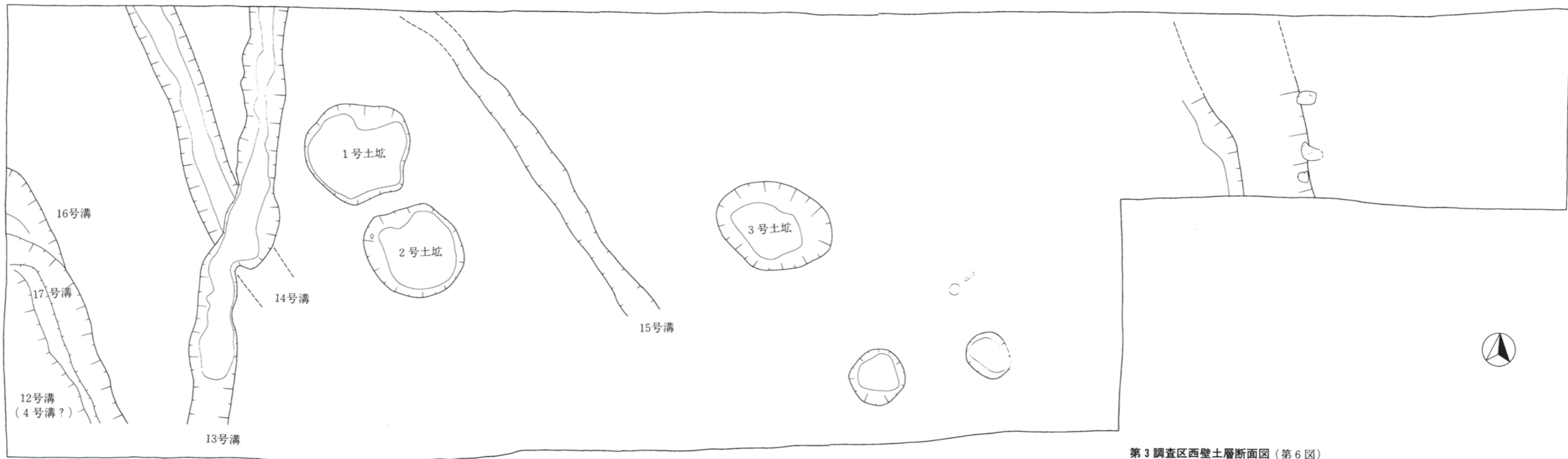
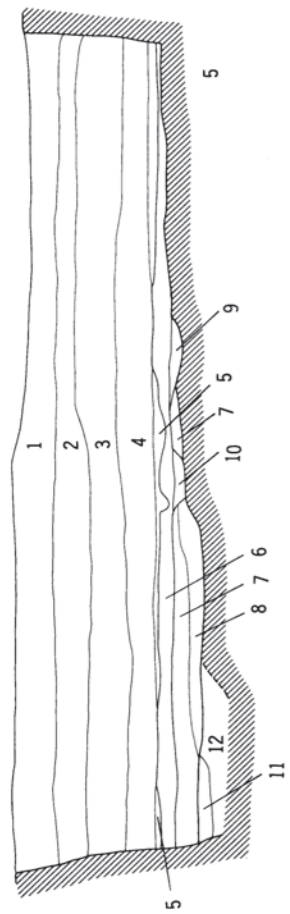
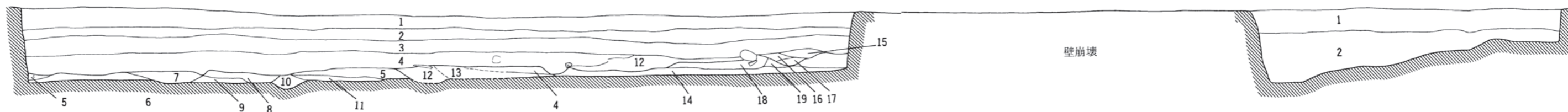
第3図 1号溝東壁セクション

- 第1層 耕土
- 第2層 客土層
- 第3層 暗青灰色砂層（中世包含層）
- 第4層 暗褐色砂層（中世包含層下層）
- 第5層 暗褐色砂層（中世包含層下層）
- 第6層 黄褐色砂礫層（間層・流土層）
- 第7層 暗褐色砂質土層（遺物包含層）
- 第8層 暗褐色砂質土層（砂を多く含む）
- 第9層 黄褐色粗砂層
- 第10層 黄褐色砂礫層



第4図 2号溝東壁セクション

- 第1層 暗青灰色粗砂層
- 第2層 暗青灰色粗砂層（第1層と同一の覆土）
- 第3層 暗褐色粘質土層（木炭・土器含む）



第6図 第3調査区実測図

第2調査区北壁土層断面図(第2図)

- 第1層 耕土
- 第2層 水田床土(客土層)
- 第3層 暗青灰砂層(中世遺物包含層)
- 第4層 暗褐色砂層(")
- 第5層 暗褐色粘質土層(11世紀以前の遺物包含層)
- 第6層 黒褐色粘質土層
- 第7層 暗褐色粘質土(2号溝覆土)
- 第8層 暗黄褐色砂層(" 木炭・小礫含む)
- 第9層 暗褐色粘質土層(" 土器・木炭多量に含む)
- 第18層 砂礫層(")

第2調査区西壁土層断面図(第2図)

- 第1層 耕土
- 第2層 水田床土(客土層)
- 第3層 暗青灰砂層(中世遺物包含層)
- 第4層 暗褐色砂層(")
- 第5層 暗褐色粘質土層
- 第6層 暗黄褐色粗砂層(1号溝覆土)
- 第7層 暗褐色粘質土層と粗砂層の互層(1号溝覆土、底部に砂礫層)
- 第8層 黒褐色粘質土層(第5層と対応?)
- 第9層 " (")
- 第10層 暗青灰粗砂層(黒色粘質土を混在、4号溝覆土)
- 第11層 暗褐色砂層?(7号溝覆土)
- 第12層 暗黄褐色粗砂層(6号溝覆土、黒色粘土層少量混在)
- 第13層 暗黄褐色粗砂層
- 第14層 黒褐色粘質土層(5号溝覆土)
- 第15層 暗青灰粗砂層(")

第3調査区北壁土層断面図(第6図)

- 第1層 耕土
- 第2層 水田床土(客土層)
- 第3層 暗青灰砂層(中世遺物包含層)
- 第4層 暗褐色砂層(")
- 第5層 暗褐色砂礫層(間層)
- 第6層 暗褐色砂質土層(遺物多量に含む、第2調査区西壁土層第8・9層に対応?)
- 第7層 黄褐色砂層(17号溝覆土、下部に粗砂層)
- 第8層 暗褐色細砂層(")
- 第9層 黄褐色砂層(16号溝覆土)
- 第10層 暗褐色細砂層(溝覆土)
- 第11層 黄褐色砂層(12号溝覆土、青灰色粘土層混在)
- 第12層 黄褐色砂層(" 、砂質強い)

第3調査区西壁土層断面図(第6図)

- 第1層 耕土
- 第2層 水田床土(客土層)
- 第3層 暗青灰砂層(中世遺物包含層)
- 第4層 暗褐色砂層(")
- 第5層 暗褐色砂礫層(間層)
- 第6層 暗褐色砂質土層(遺物が多い、以上1~6層は北壁土層と対応)
- 第7層 黒褐色砂質土層(14号溝覆土)
- 第8層 黒褐色砂質土層(遺構覆土)
- 第9層 暗褐色砂礫層(第5層に類似するが礫多い。遺構覆土?)
- 第10層 黄褐色砂層(13号溝覆土)
- 第11層 黒褐色砂質土層(遺構覆土)
- 第12層 黄褐色砂礫層(")
- 第13層 " (" 、流木多量混入)
- 第14層 黒褐色砂質土層
- 第15層 黄褐色砂礫層(遺構覆土)
- 第16層 暗青灰色砂層(")
- 第17層 黄褐色砂礫層(")
- 第18層 暗青灰色砂層
- 第19層 黒褐色砂質土層
- 第20層 黒褐色砂質土層

土は黄褐色砂層。断面図では複雑な遺構の重複が観察される。

3) 遺物

遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師皿、中・近世陶磁器、土製品、石製品、金属器、木器、古銭、馬歯などが出土している。

縄文時代

縄文土器（第5図）、磨製石斧（第13図6）がある。

縄文土器は第3調査区の灰白色粘土層（古墳時代初頭までの遺構面）より約150cm下位より出土した。試掘的な調査であったので、詳細は明らかでないが、縄文中期後半（大杉谷式）の比較的良好な遺跡が存在していた可能性が高い。

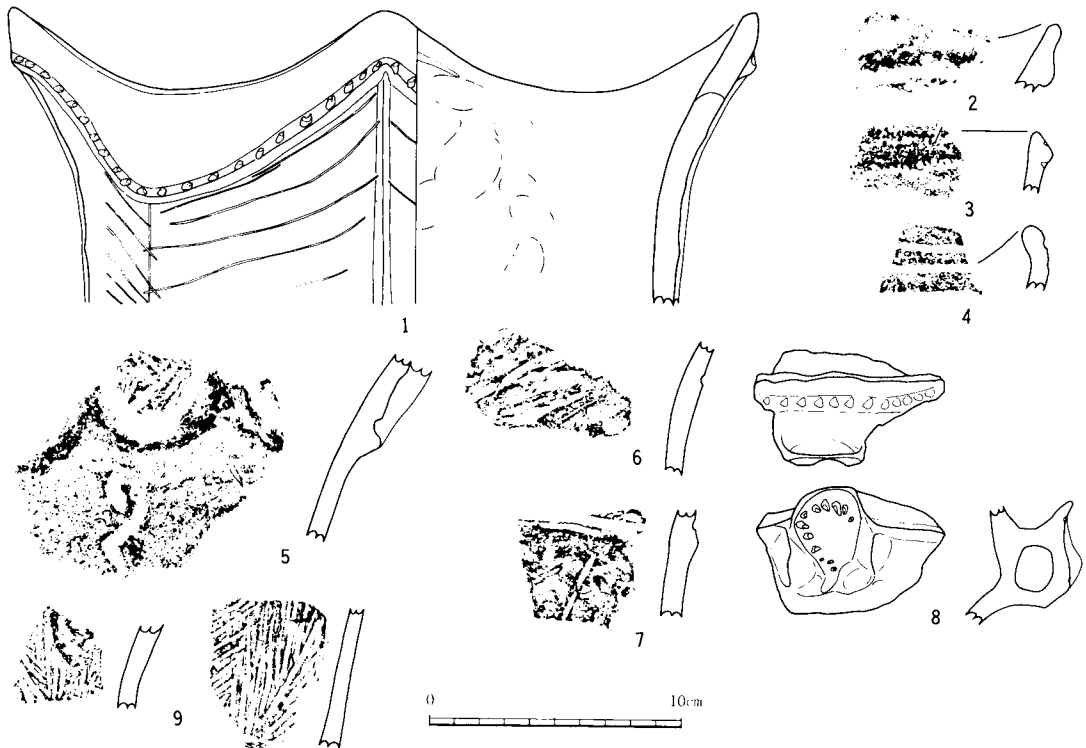
古墳時代～中世

出土遺物のほとんどは当該期のもので、内でも奈良時代～平安前期と、中世の資料が多い。包含層出土品が主体を占めるが、第7図2は2号溝、同・9、10は2号土坑、第12図は1号溝出土品で、特に1号溝資料は11世紀中頃から後半にかけての類例の少ない一括資料である。その他、第9図は、昭和53年度の分布調査により昭和56年度第一次調査区より出土したものである。

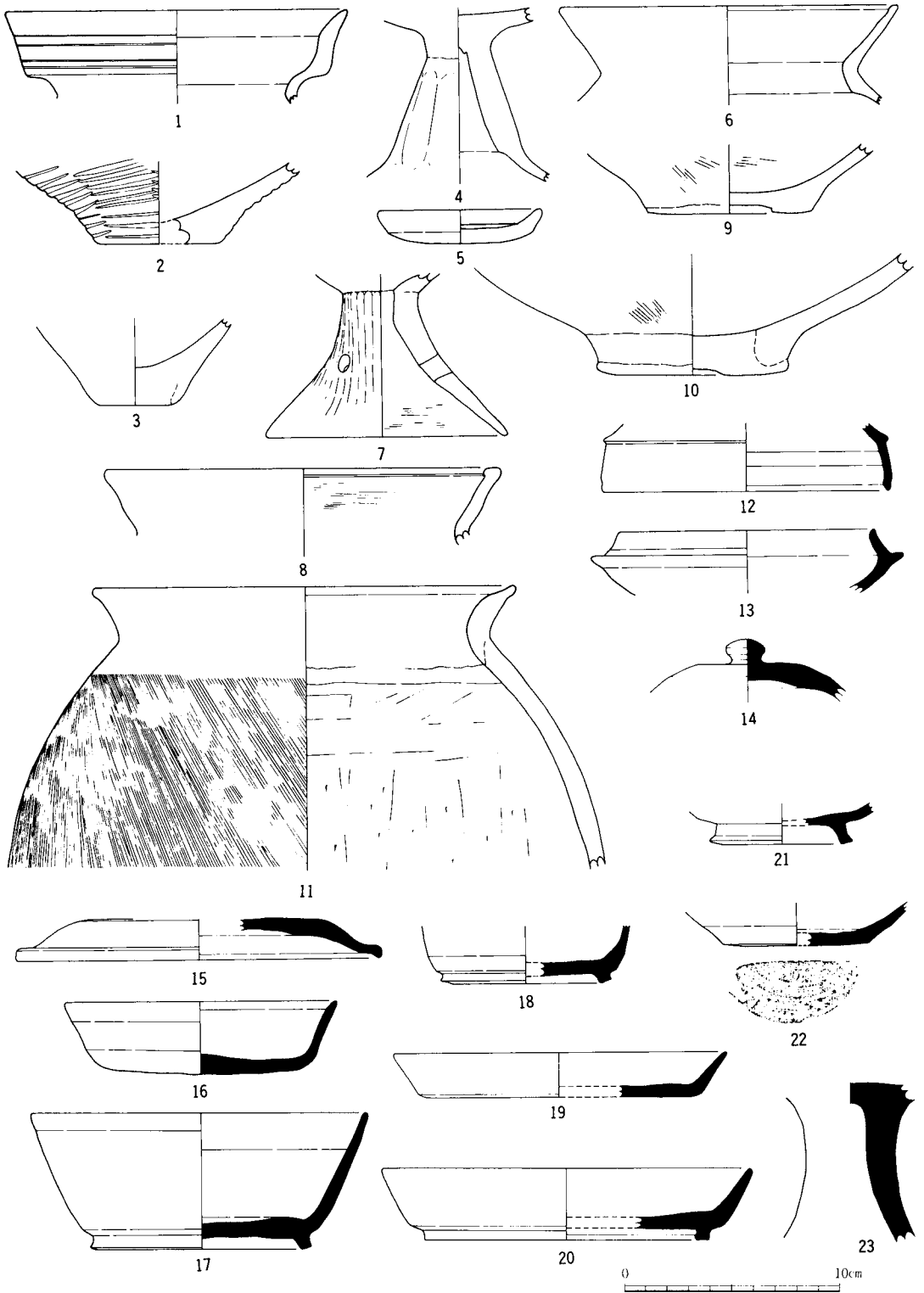
個々の遺物の具体的な報告は省略するが、遺物は古墳時代から16世紀頃までのものが、ほぼ間断なく認められる。

1号溝出土遺物（第12図）

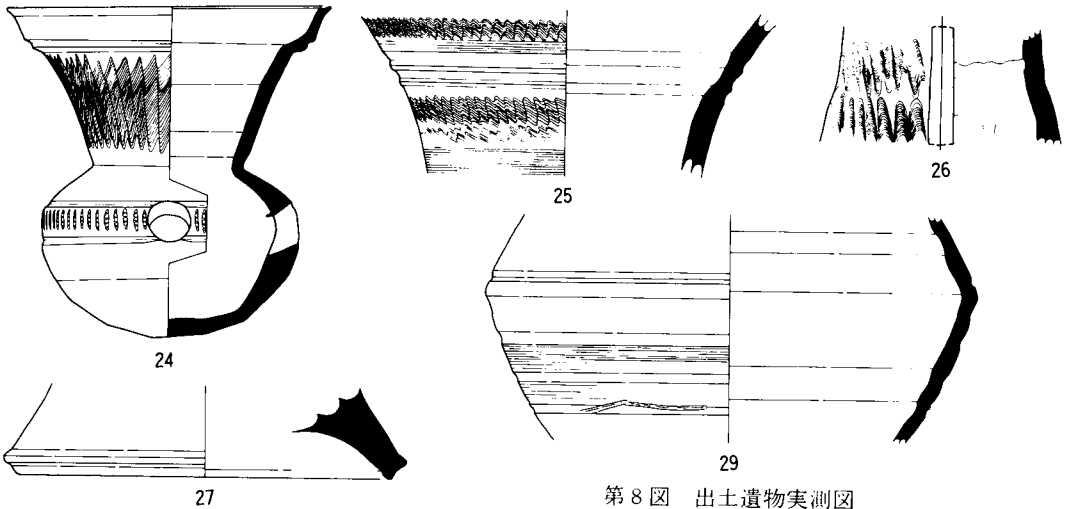
1号溝からは土師器小皿19点、有台椀1点、木器が図版3のごとく集中して出土した。



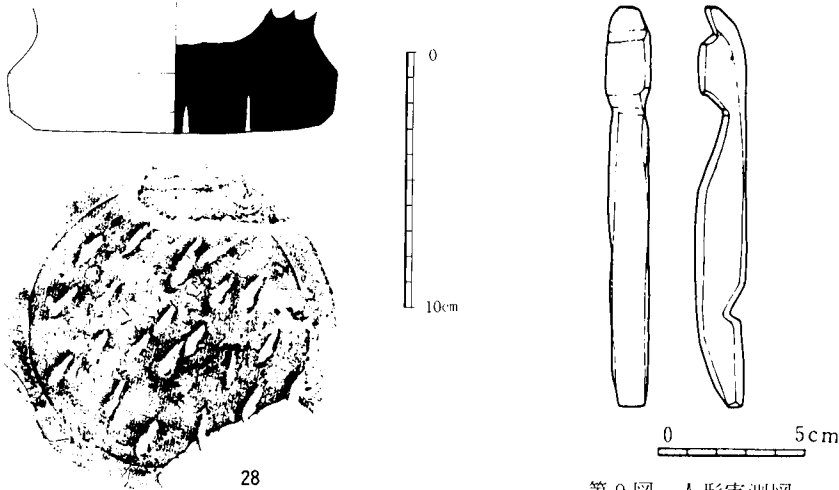
第5図 出土遺物実測図



第7図 出土遺物実測図 2 (2号溝)、9・10 (2号土坑)、他は包含層



第8図 出土遺物実測図



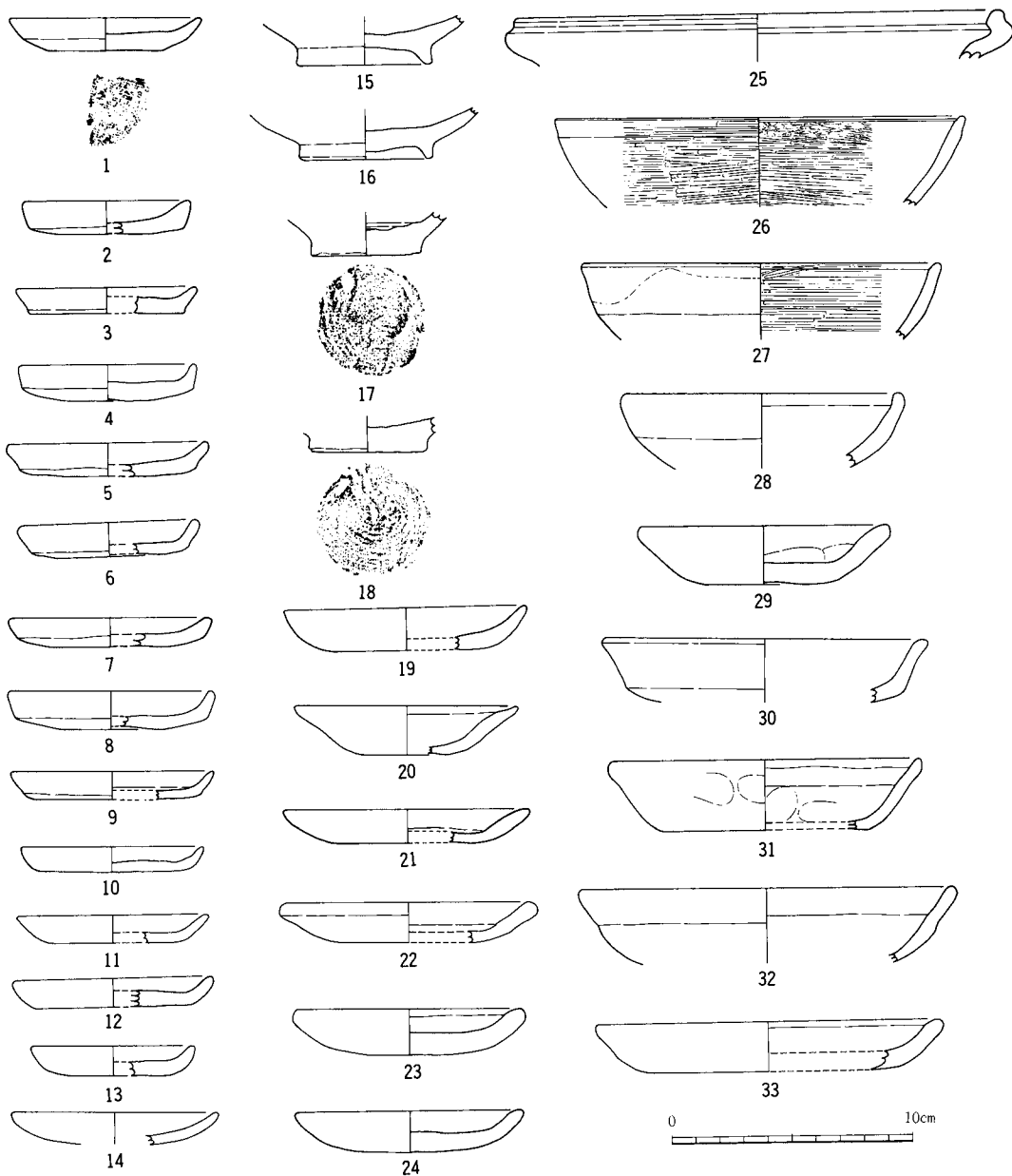
第9図 人形実測図

小皿は19点あり、1点を除き完形品である。ほぼ同一の法量をもち、調整・胎土も共通している。法量は口径11.5cm前後、器高 3.5cm前後、底径 5 cm前後で斉一性は高い。体部は内外面ともヨコナデ調整を施し、ロクロ整形痕は外面のみでなく、内面にも残る。11・17などの体部外面にはヨコナデの工具痕による沈線状の整形痕を残すもの(11・17など)もみられ、沈線状の整形痕は中心に向って左巻で、その際の砂粒の移動は右回りに移動している。底部はすべて糸切り未調整。内底面に回転による沈線をもつものもある(4)。胎土は砂粒を比較的多く含み、VI期(田嶋1986)に通常の砂粒をほとんど含まないものとは明瞭に区別できる。焼成は普通で色調は暗黄褐色。

有台碗は1点のみである。底径 6.2cmを測る。側底部外面のケズリ調整は認められない。胎土・焼成・色調は小皿に同じ。

当該遺物は出土状態から推定して一括性の高いものと考えている。時期は小皿が主体であるため、特定は難しいが、11世紀中頃～後半(VII期 田嶋1986)と推定しておきたい。

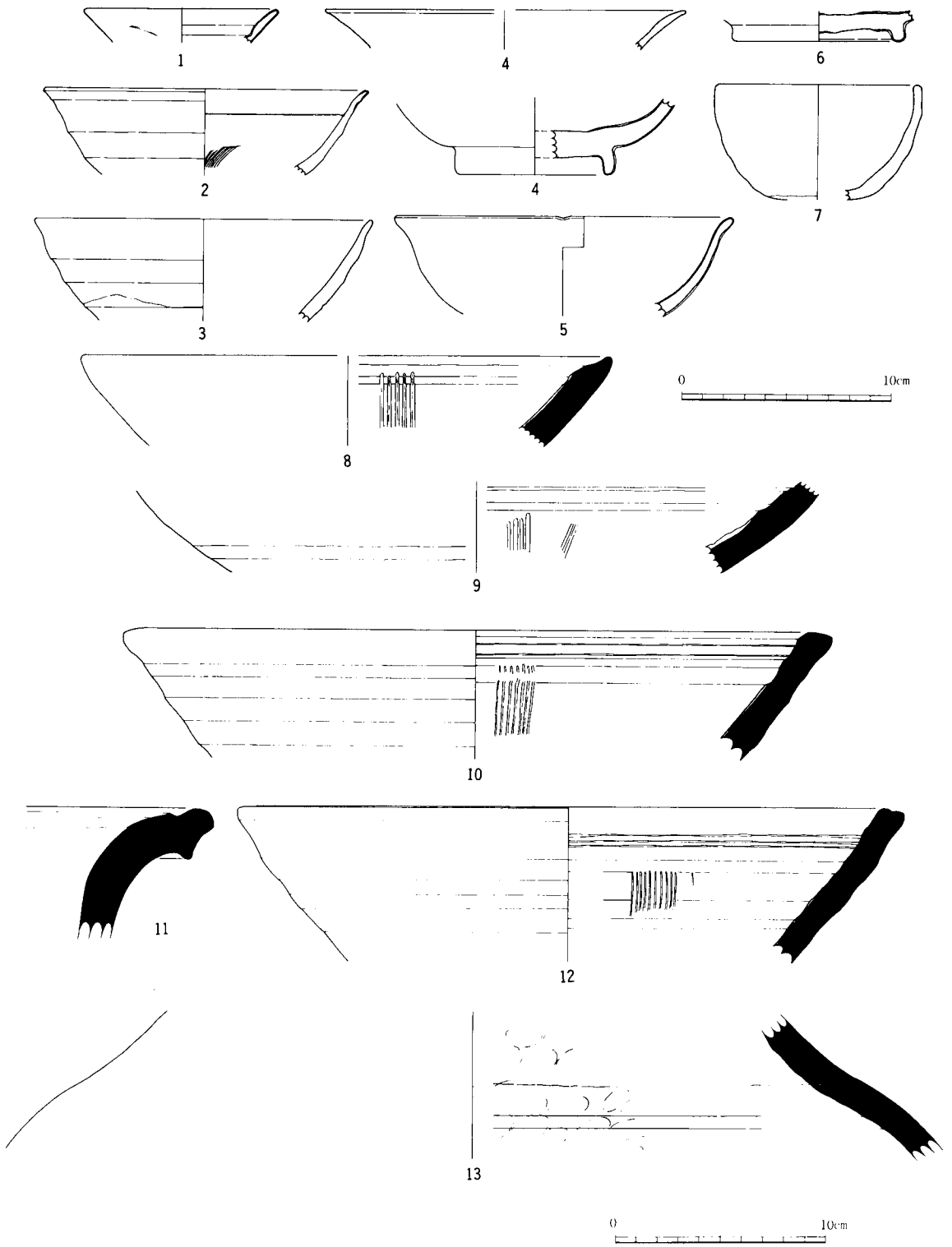
(田嶋)



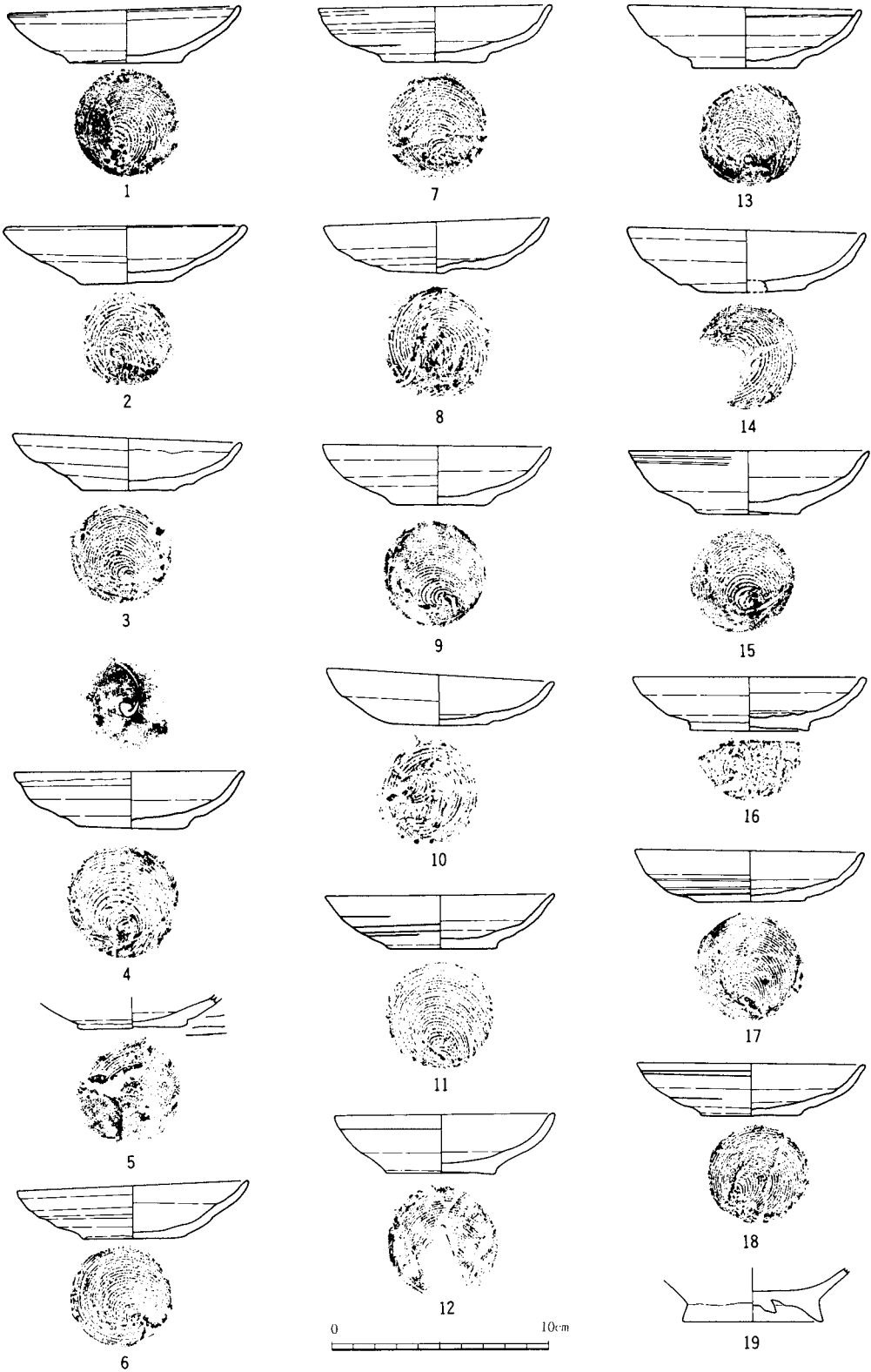
第10図 出土遺物実測図

人形（第9図）

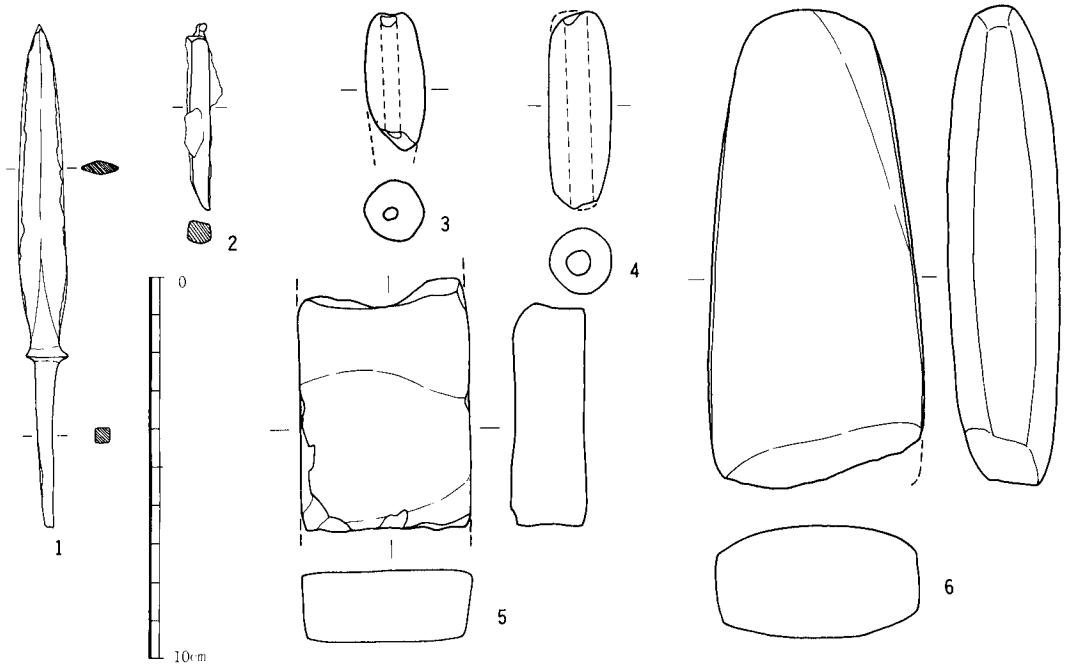
人形は県内では類例の少ない遺物である。長さ13.5cm、幅0.8～1.8cm、厚み0.9～1.6cmを測る。頭部に冠を表わし、顔面の表現はないが、頭部は刻みを入れて区画している。第3調査区の包含層中より出土した。



第11图 出土遺物実測図



第12图 1号沟出土遗物实测图



第13图 出土遺物実測図

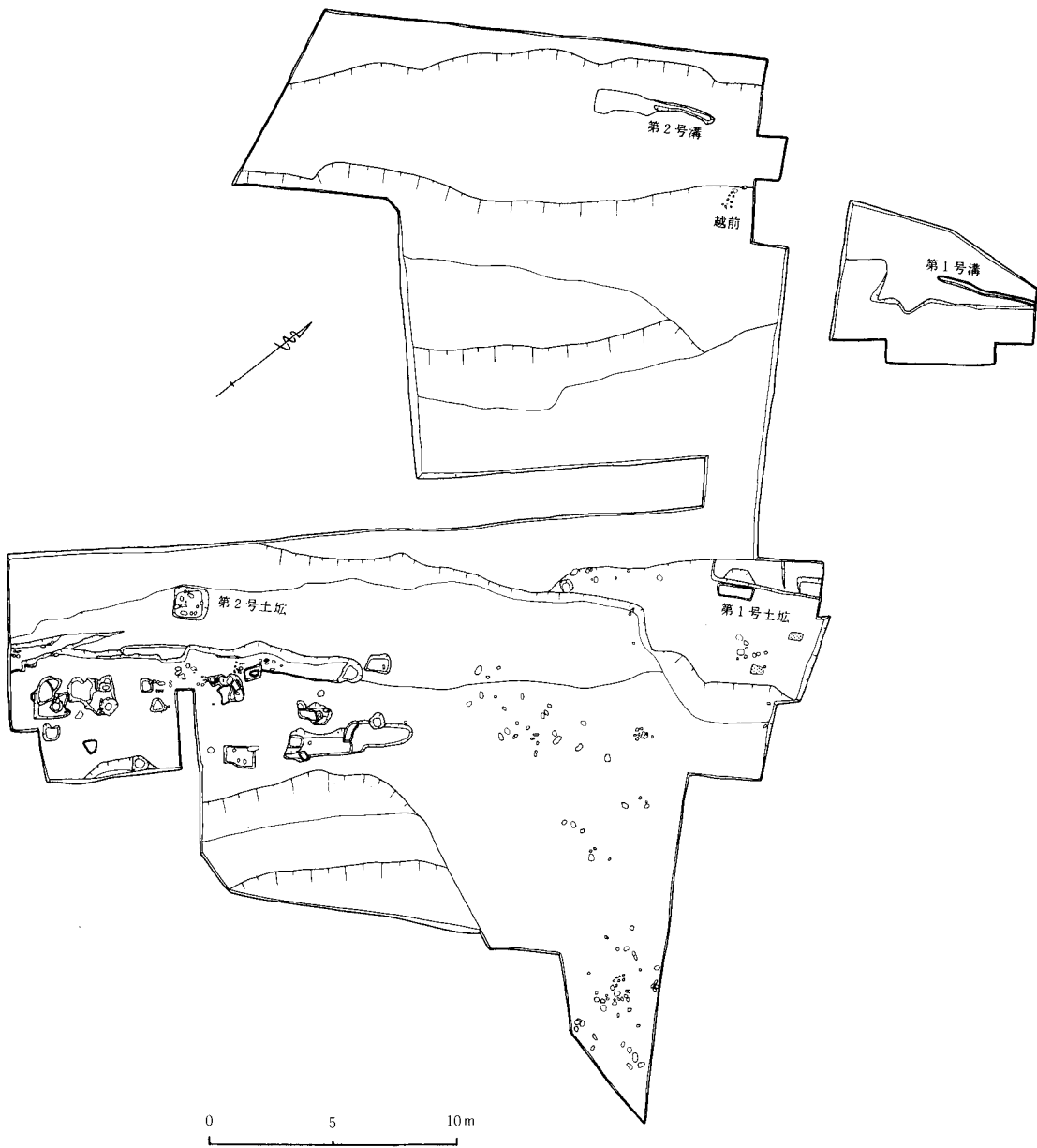
第2節 B1、B2区の遺構と遺物

第1項 B1区の調査

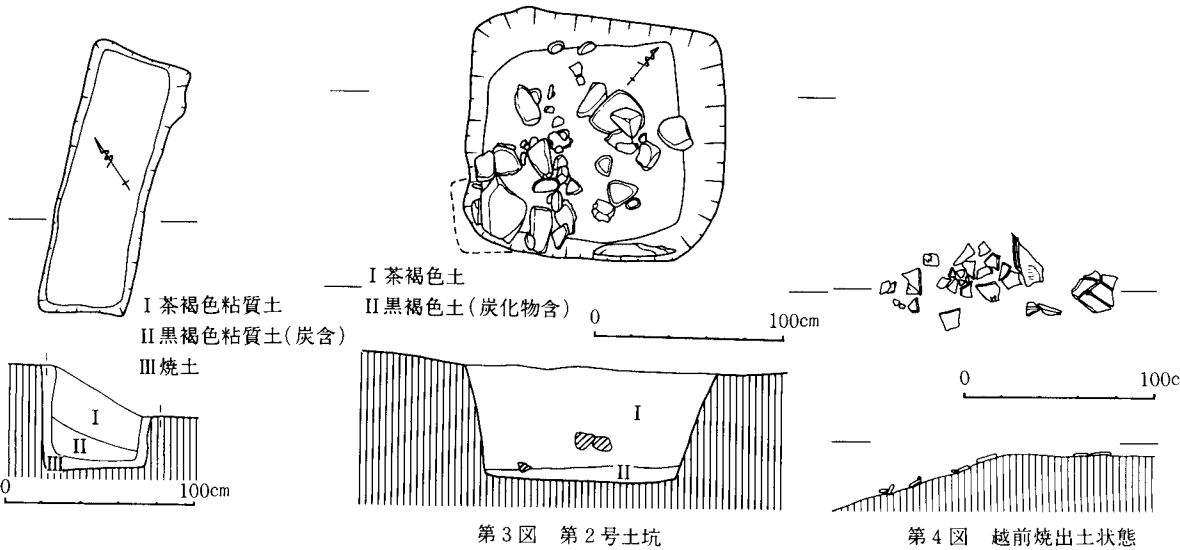
1) 調査の概要

菅生石部神社の後背には、東西90～100m、南北40～50mを測る広大な平坦面が所在している。この平坦面の東側は土塁、北側は天神山で区画されほぼ中央部に連結した二カ所の池跡がある。永年の樹木の枯枝、落葉のためにほとんど埋まっている。平坦面前面（南側）に向ってやや高さを増している。本地区は社群の中核的機能を有する区域と言えよう。本調査区は、この中央平坦面を隔壁するような天神山南側斜面にあたっている。また、中央平坦面の北西方向にあたる。斜面中位、海拔27～30m地点に幅8～10m、延長50～55mの平坦面が所在する。第1号土壇は、その北東端近くで検出した。長辺140cm、短辺46cm、深さ40cmを測るほぼ長方形をなすものである。周囲の壁は、加熱のため赤茶褐色に焼けて脆い。第2層の黒褐色粘質土には、炭および炭化物などが混在しており、壇内で火を焚いた可能性を示している。伴出遺物はなかった。この第1号土壇の所在する地点は、周囲より高くほぼ5m×6m程度の区画をなす。この面には焼土塊を伴う浅い皿状のピットが二カ所認められた（ドット表示）。この周辺より鉄砲玉が検出されている。第2号土壇は、南西端近くで検出された。一辺137cmのほぼ正方形のもので、深さ60cmを測るものである。壇内には、頭大から拳大の岩石がかなり検出された。特に中位面に集中している。伴出遺物は漆器の被膜片のみであった。下層の第II層には炭化物（竹か）がかなりの量混在していた。第2号壇前面（南東）には、不整形なピット、土壇、溝状遺構が検出されているが、明確なものではない。この周辺では、古墳時代の須恵器、土師器、不明鉄製品が多く出土している。調査区南東側の斜面でも流土中から多くの同期の遺物を検出している。山頂部近くの海拔39～40mあたりに幅5m、延長15m程度のやや平坦な面が所在している。第1号溝はこの平坦面で検出された。幅25～30cm、延長400cm、深さ15cmを測り、北東方向に低位である。溝底近くの暗茶褐色砂土には、多くの炭化物（竹か）、炭を含んでいる。伴出遺物には、鉄製釘、銅製飾具が各々一点がある（紛失）。山頂部付近海拔41m地点で第2号溝は検出された。第1号溝同様に溝底近くでは炭および炭化物を多く含む。北東端で砥石一点が伴出している。第1号溝の東3mの地点で越前甕破片が集中するカ所がある。調査区にも若干散らばってはいるが、ほぼ同一個体のものである。

海拔25～38mを測る東部調査区は、南北約10m、東西約30mの平坦面である。53年の試掘調査時に須恵器甕（完形）が出土していた地点である。調査の結果、明確な遺構を検出するには至らなかったが、現菅生石部神社中軸線の真後に当たっており、中核的機能を有した平坦面であった可能性は非常に高い。



第1図 B1区の遺構配置図



第2図 第1号土坑

第3図 第2号土坑

第4図 越前焼出土状態

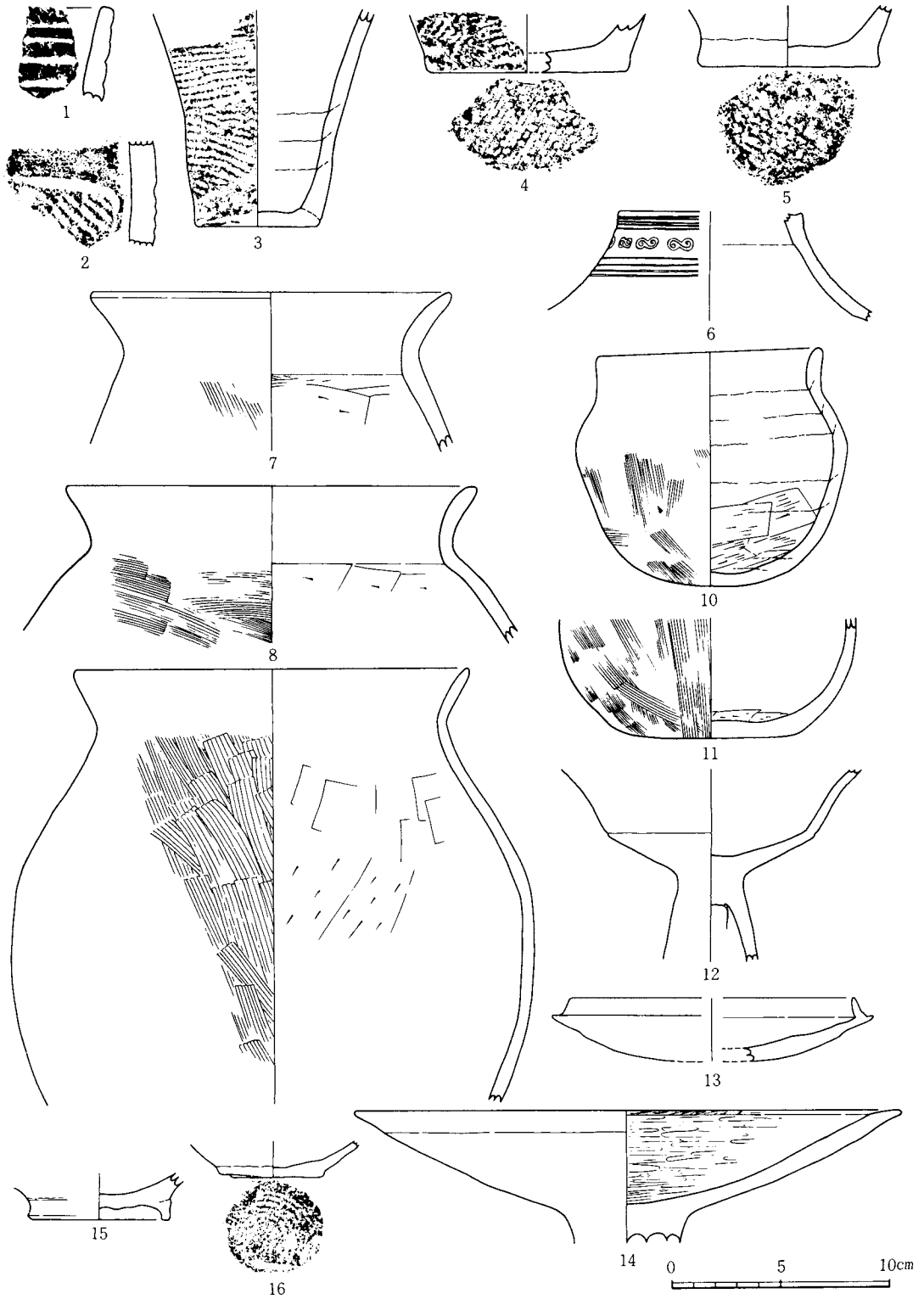
2) 出土遺物

前節の遺構の項でも述べたが、遺構に伴って出土したものがほとんどなく、大半は流土中からの検出で縄文時代から近世に至るものが少量ずつ見られる。

縄文土器 10点程度が出土している。第5図1は深鉢の口縁部片で、やや太目の竹管状具で数条の凹線を施す。3は底径5.5cmを測りコップ形を呈するもので体部全面に縄文を施す。底部はやや平滑にナデを施す。焼成は堅緻である。4、5は底部片でいずれも網代痕が認められる。3を除けばいずれも細片のため明確にしたがいが概ね中期後半頃の所産と考えられる。前年度の調査区の水田部分でかなりまとまって縄文土器が出土しており、それらにかかる山地部分での散布と見られる。また、水田部分のものは岡遺跡（縄文・古墳～平安）からの拡がりと考えられるものである。

弥生土器 数点が出土しているが、図示できたのは第5図6の1点である。高坏脚部片と考えられるもので二段の沈線間にS字のスタンプ文を配するものである。概ね北陸地方編年の法仏期のものと思われる。

土師器 ほとんどが、中位平坦面と最下段平坦面（神苑）境の二箇所から出土したもので須恵器とともにやや多い。第5図7、8、9はくの字口縁を有する甕で口縁部内外面ともに横ナデ、胴部外面はハケ調整、内面は粗いケズリを施すものである。10は、口径10.2cm、器高10.8cmを測る小形のもので口縁内外面は横ナデで平滑に仕上げ、胴部および底部は細かいハケ調整、内面では中位以下を掻き取りに近いケズリを施す。中位より上方は巻き上げの輪積み痕跡がそのままに残る。11は底部片であるが調整は10と同様であるが底部は平滑である。12の高坏は器面が磨耗しており詳しくは観察できない。13の坏は受部立上りが短かく内傾するものである。内外面とも横ナデ調整と見られるが器表の風化が甚しい。14は内面黒色のもので口唇部内外面はともに横ナデ、体部外面はケズリ、内面は丁寧なミガキを施す。口径25.2cmを測り比較的大きく脚部を欠失する。15、16は坏の底部片で16の底部に僅かに糸切り痕が認められる。



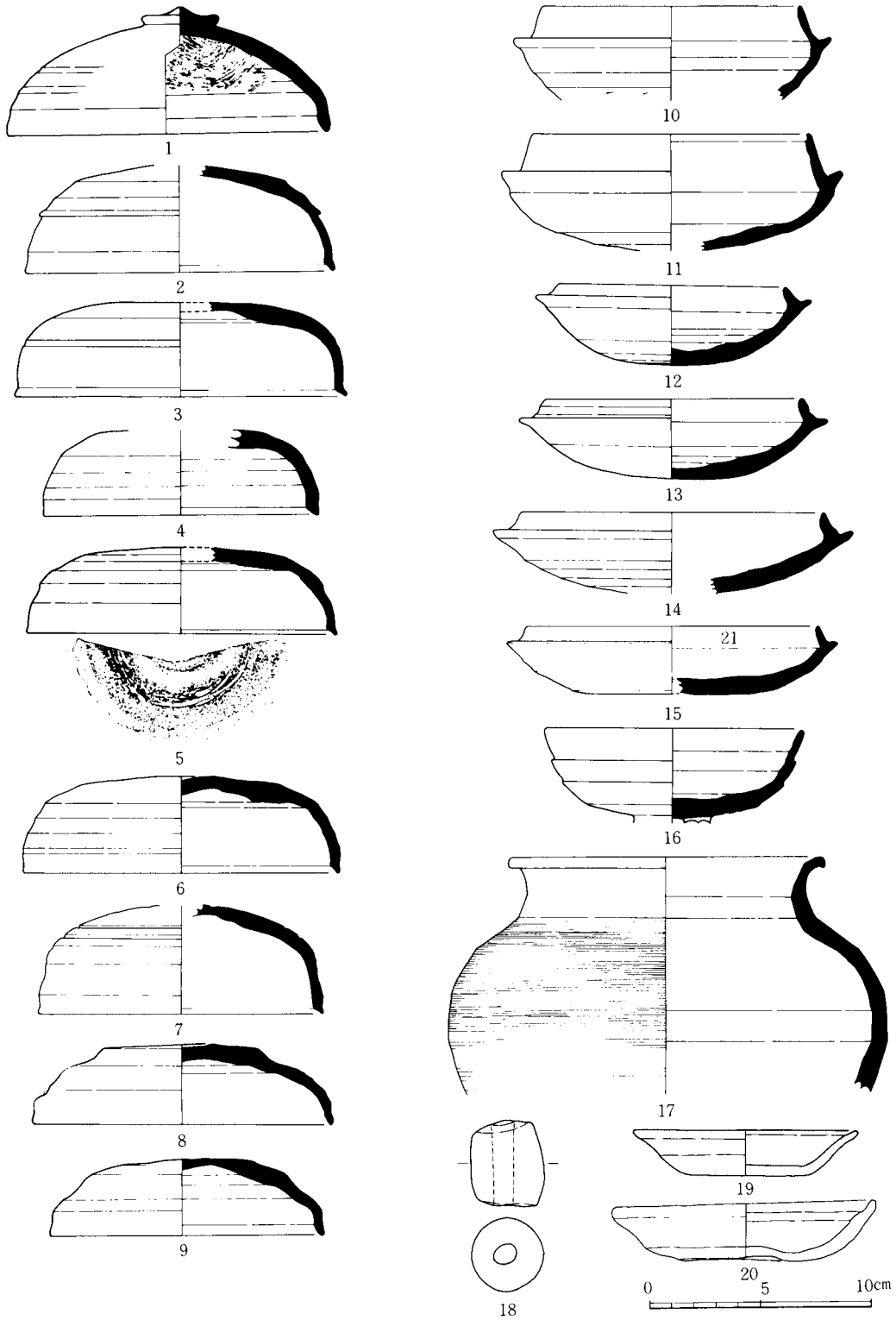
第5図 B1区出土遺物（縄文土器、土師器）

須恵器 土師器と同様破片が多いのであるがやや須恵器の方が量的には多い。坏蓋は鈕を有するもの、体部に段を有するもの、段を有しないものの三種が出土している。1は天井部はへラケズリ、天井部内面には細い同心円状のタタキ、その他はヨコナデを施し偏平な鈕をもつものである。2は段を有し天井部 $\frac{2}{3}$ 程度はへラケズリその他はヨコナデを施し、端部はやや外側に踏ん張るものである。3、7では段が消失し沈線となる。天井部では2と同様に $\frac{2}{3}$ 程度に粗いへラケズリを施す。5にも沈線の痕跡が僅かに残り、天井部も粗いへラケズリで、内面にタタキ(?)を僅かに残している。4、6は稜も沈線も有しないもので丸く端面に至るものである。天井部もへラ切り未調整であるが胎土は緻密で焼成は堅緻である。7、8は、さらに肩の張り(丸味)を消失し、器高も低く天井部もへラ切未調整の粗雑なものとなる。坏は、比較的立ち上りが長く、器高の高いものと比較的短い立ち上り、器高の低いものとの二者が存する。10は、長く内傾する端部は丸く、底部外面約 $\frac{1}{2}$ が回転へら削り他は回転ナデ調整される。11も同様であるが立ち上り端部に段を有する。12~15は、比較的短い立ち上りが内傾しその端部は丸くおさまるものである。底部外面 $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{2}{3}$ に回転へら削りを施し他は回転ナデ調整である。13は、完形で口径11.5cm、器高3.6cmを測るものである。12、14、15には鉄分の混入が甚しい。16は、長脚二段透しの坏部であるが、外面に二段の鋭いをなす。内底面に僅かにタタキ(?)痕跡を認める他は回転ナデ調整である。胎土も緻密で焼成堅緻である。口径11.6cmを測るものである。17は体部外面ではカキメを施し他は回転ナデ調整である。口縁端部は屈曲し外方に鋭い面をもつ。口径14.0cmに復元しうるものである。焼成堅緻で淡青灰色を呈する。第7図1の臑は口縁端面と底部の一部を欠失するがほぼ全形を知り得るものである。口縁部はゆるく段をなし外方に拵がり頸部にかけては櫛状具による稚拙な波状文を巡らす。胴部下 $\frac{1}{3}$ 程度は回転へら削り他は回転ナデ調整される。焼成堅緻で暗緑色の自然釉がかかる。2は、甕口縁部の頸部近くの破片である。

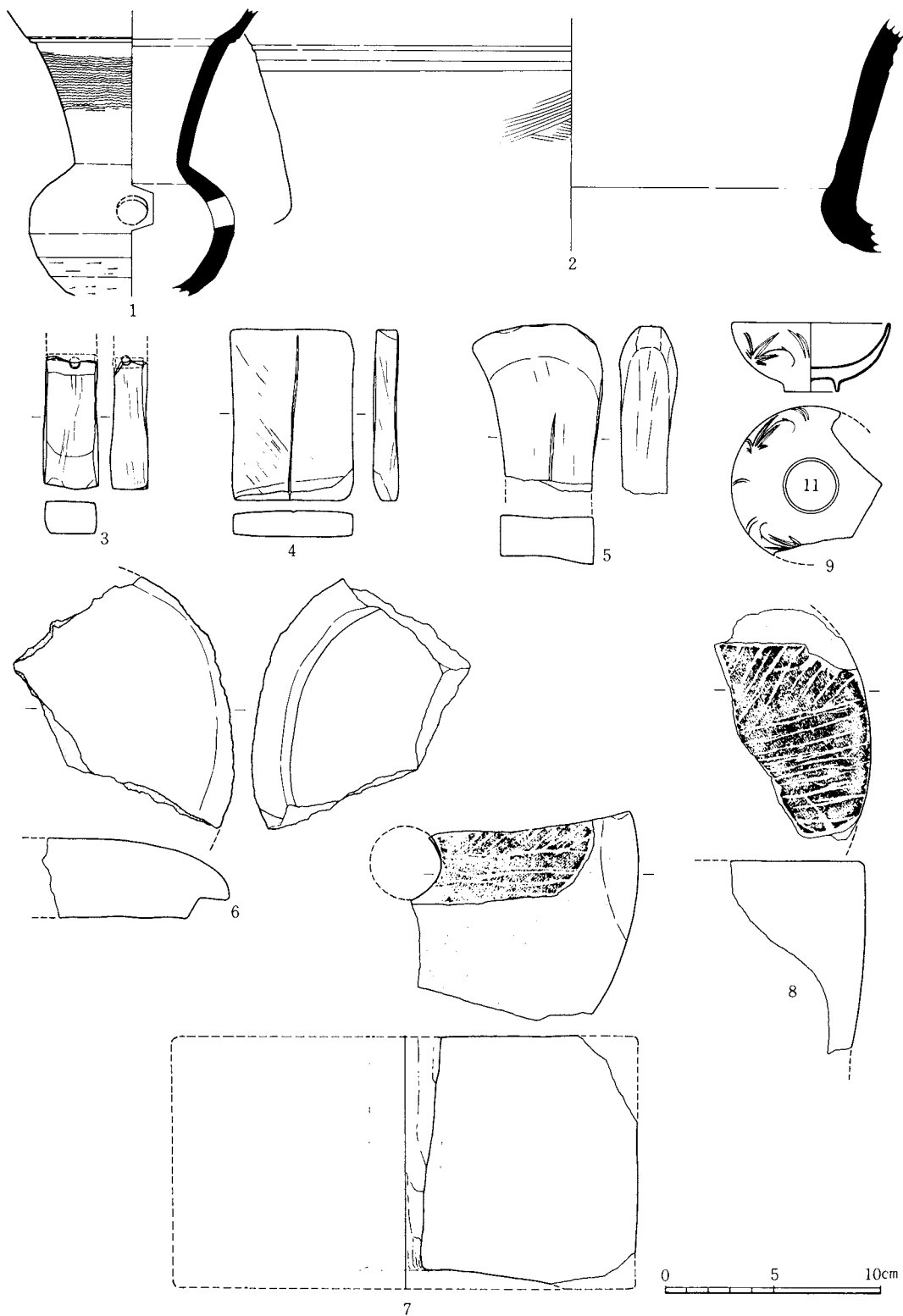
土師質土器 図示し得たのは僅かに2点のみである。ほかに数点見られるが少ない。19は、口径10.0cm、器高2.1cmに復元できる $\frac{1}{2}$ 片のものであるが器肉もほぼ均一化され、すべてナデ調整である。内面の体部と底部境に指頭によると思われるやや強いナデが一周する。20は、内外面ともにナデ調整されるが、底面では一次の押えの凹凸が残る。19に比して胎土は砂っぽく器肉も一定していない。口径11.7cm、器高2.5cmを測る。

越前 第8図1、3、5、6は山頂部で破碎された状態で出土した同一個体と思われるものである。口径65~70cmを測るものと思われ、口縁部はゆるく外反し、その端部をナデによりつまみ上げ、外側に約2.5cmの縁帯を造り受け口となる。肩部では、ゴマシオ状の降灰釉が見られ、へら先によると思われる刻文が施される。さらにその下部に3、5のような格子目と「木」(本とは読めない)とを組み合わせた押印が一周するものと考えられる。6は、その底部片と考えられるもので、径34~35cmに復元できる。最終的な調整は内外ともにナデと考えられるが、底部外面近くがやや雑である。2の口縁部は、中位平坦面の出土であるが山頂からの転落等を考えれば同一個体の可能性がある。5は鉢でゆるく外反して口縁端面は丸く終るものでその端部中央部に細い沈線一条が回る。おろし目は認められない。

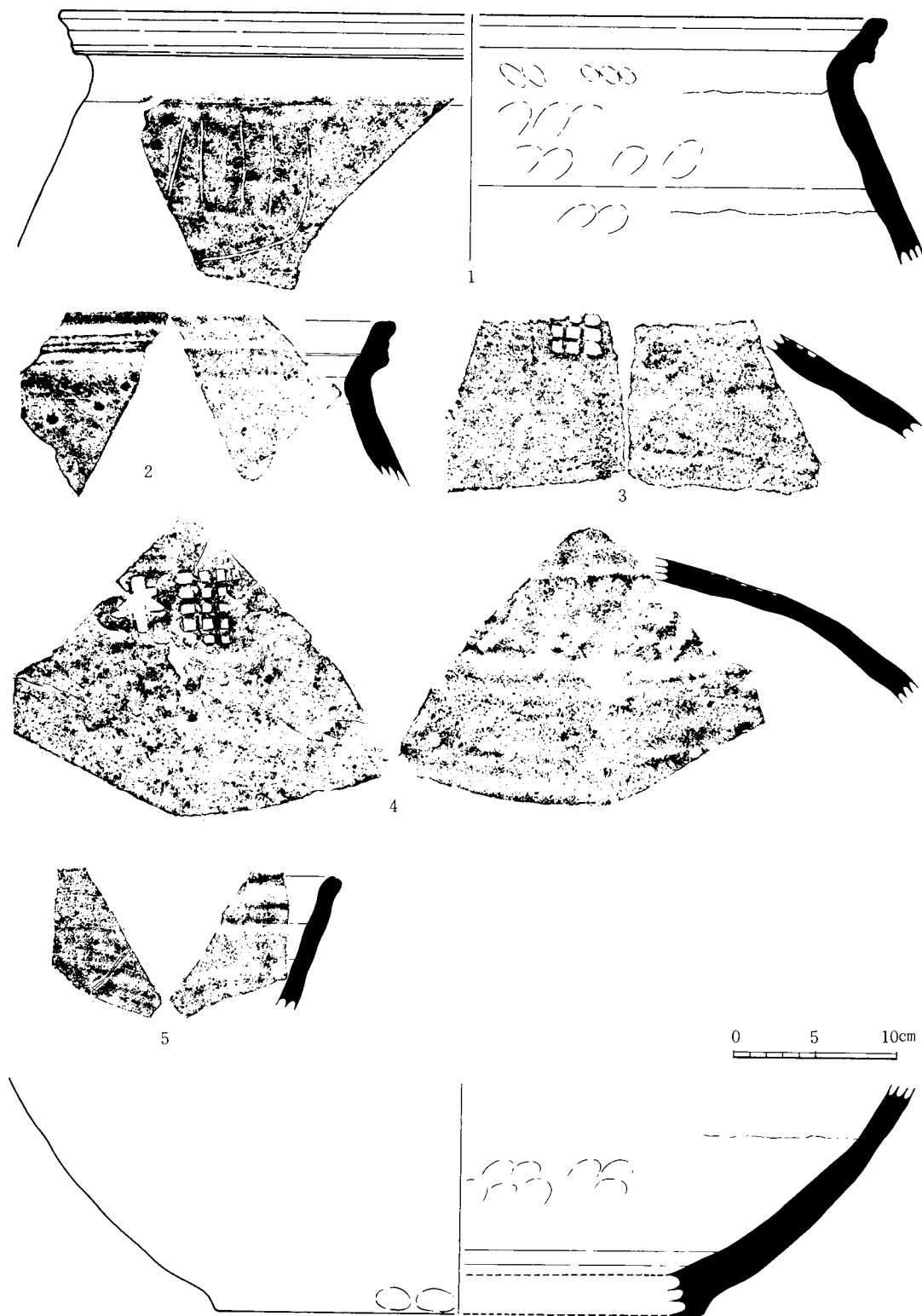
土埴 1点出土しており18は土師質、紡錘形をなすもので長さ4.0cm、最大径3.4cm、孔径0.9cm、



第6图 B1区出土遺物（須恵器、土錘、土師質土器）



第7图 B1区出土遺物(須惠器、石製品、近世磁器)



第8图 B1区出土遺物(越前)

重さ 3 g を測るものである。

砥石 6 点出土している。第 7 図 3 は断面長方形の棒状を呈するものでほぼ中央部で欠損しているものと思われる。欠損部の長辺に直交する小孔（径 5 mm 程度）が穿たれるが貫通していない。また短辺に直交して同様に小孔が穿たれ貫通している。これら二個の小孔については類例がなく不明であるが一次製品を砥石として再利用したものであろうか。4 は、断面長方形の比較的薄いもので 5.6×7.9×1.1 cm を測るものである。ほぼ八面ともに砥石として利用され滑らかである。片面ほぼ中央部に溝状痕が見られる。5 は、断面長方形を呈するが、平面形は使用のため不整形である。図上頭部はほぼ自然面を有し、一面中央部に図のような小溝状痕がある。3、4 は灰白色、青灰色を呈する比較的軟い材で中砥か仕上砥として、また 5 は茶褐色を呈する砂岩質のもので中砥か荒砥として使用されたものであろう。

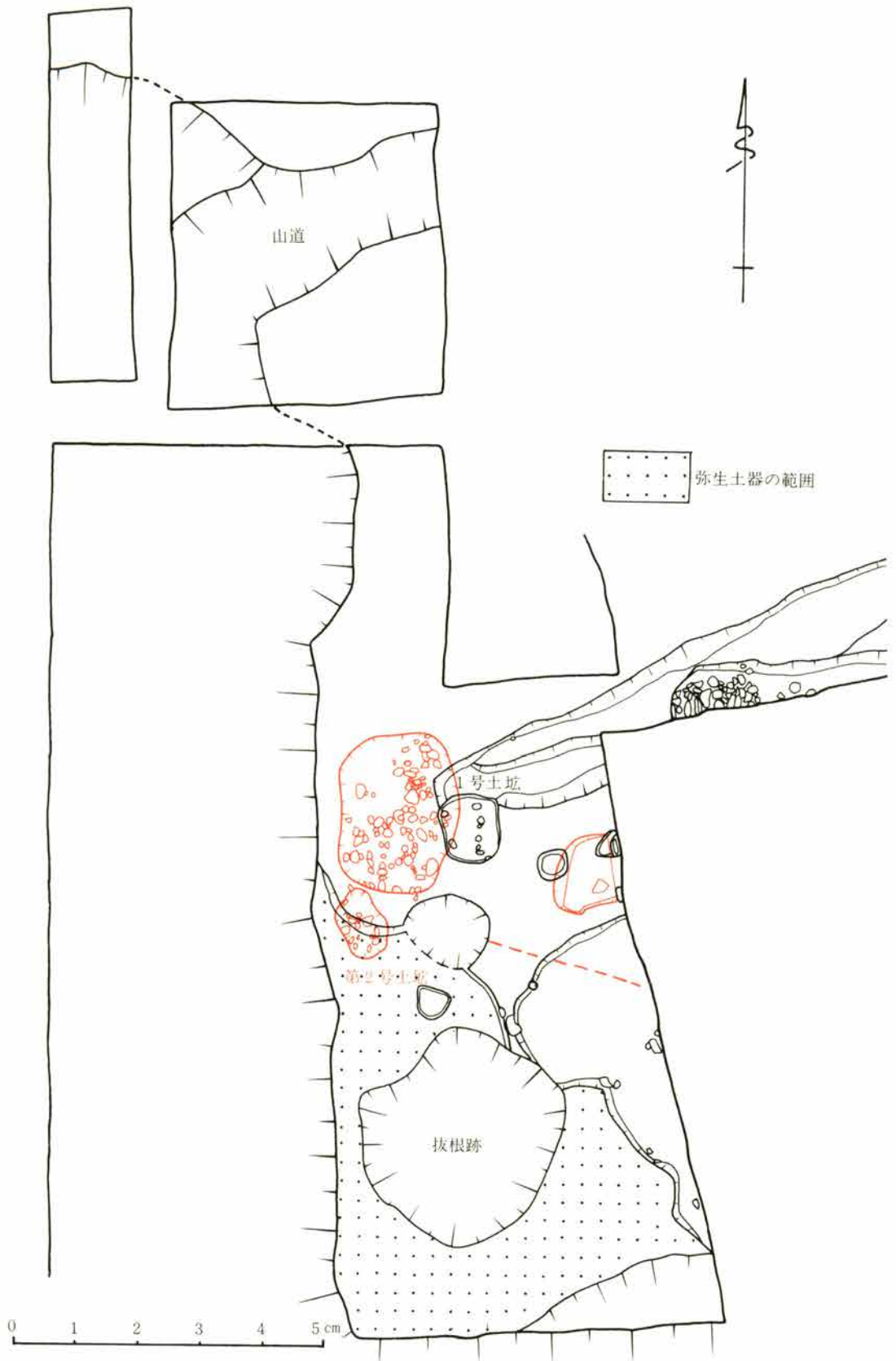
石臼 2 点出土している。いずれも上臼と考えられるものであるが全て破片のため全形を知り得ない。おろし目は 9 本以上が単位で何分割かで施溝されるものと考えられるが溝は浅く直線的ではない。底面は上げ底風に造られ側面とともに成形痕を磨きにより丁寧に消去している。径 21.8 cm、高さ 11.8 cm 程度の大きさのもので、芯棒穴は底面まで貫通し、上径 3.4 cm、下径 1.0 cm の円錐形を呈する。

第 2 項 B 2 地区の調査

1) 調査の概要

天神山南側裾野には何段かの平坦面が造成されていることは、前述したとおりであるが、本農免道と県道串・加賀線を結ぶ取り付道路部分が、そのうちの一の平坦面の西南端をかすめることとなった。この一角は、従来から敷地後方遺跡として周知されている部分でもあり、また天神山山麓に広がる社僧坊群の候補地の一として考えられた。以上のことから、取り付道路設計にあたっては、この平坦部分に支障をおよぼさないようにとのことで協議が数度もたれたのであるが、県道沿の住宅の関係、小学校の通学路の関係などもあって、僅かに西南端かすめる案で対応せざるを得なかった。一方、遺跡の上からも西側によると本遺跡の中枢部を縦断する形となり好ましくなく、また、東側によるとさらにいくつもの平坦面部分（社僧坊群）を横断する結果となることから現位置での建設が最小限の破壊で留まるのではないかと結論に至り今回の発掘調査となったのである。

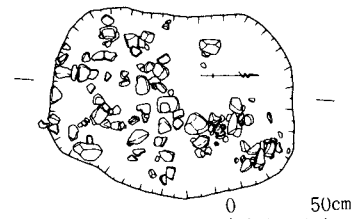
本調査区の位置する平坦面は、概ね南北 25 m、東西 55 m を測りその東側は空善寺横の道路と空善寺により削平されている。また、県道沿の住宅地からの段差（比高）は、約 2.5 m を測り山側（北）に約 1 m 暫位的に高さを増している。前端部分（北側）は、住宅等の敷地のため数カ所が僅かに削平されている。平坦部は、竹林（孟宗竹）となり集落の廃材その他の塵芥捨て場となっていたものである。西側は鞍部となり、さらに西側の平坦面部分まで約 10 m を測る小さなもので湿地帯をなし小川が流れる。この小川の源流は、天神山裏側（北）の溜池あたりと思われ隊道により結ばれる。その小川の中に後述する台付装飾壺をはじめとする多くの遺物が採集された。調査区は、取り付道路の法面として削平される部分に限定した。概ね南北 20 m、東西 5 m の小区



第9図 B2地区遺構実測図

画なものである。本調査区の東側主要平坦部については、次年度（昭和60年度）に加賀市教育委員会が発掘調査を実施している（敷地町後方遺跡発掘調査報告 加賀市教育委員会 57.3）。調査区南側では、樹木の移植のため大きな穴（抜根跡、径約3～4 m、深さ1.5 m）が数カ所に開けられており決して遺存状況が良好であるとは想像できる状態ではなかった。

調査区北側部分では、表土下15～20cmで地山（黄褐色砂土）に達し、ほとんどの遺構は削平されたものと推定された。ただ北端近くで幅1.2～1.5mの浅い凹み（10～20cm）が上段の平坦面裾に沿うように検出され、その端部は西側鞍部に至るように観察された。その浅い溝状遺構からの伴出遺物は皆無であった。これは、比較的新しい時期の敷地集落から天神山に至る山道でなかったかと思われる。調査区中央よりやや南に偏してから整地層、包含層が認められる。第1号土壇は、地山削平面の最南端部分で検出されたもので長軸250cm、短軸1.88cmを測り、ほぼ長軸を南北にもつものである。壇底までの最も深い部分で20cmを測り、20×40cmの頭大から10×10cm程度の拳大の岩石が多く検出された。遺物では後述するが珠洲、越前、瀬戸・美濃、青磁が伴出している。第1号土壇の

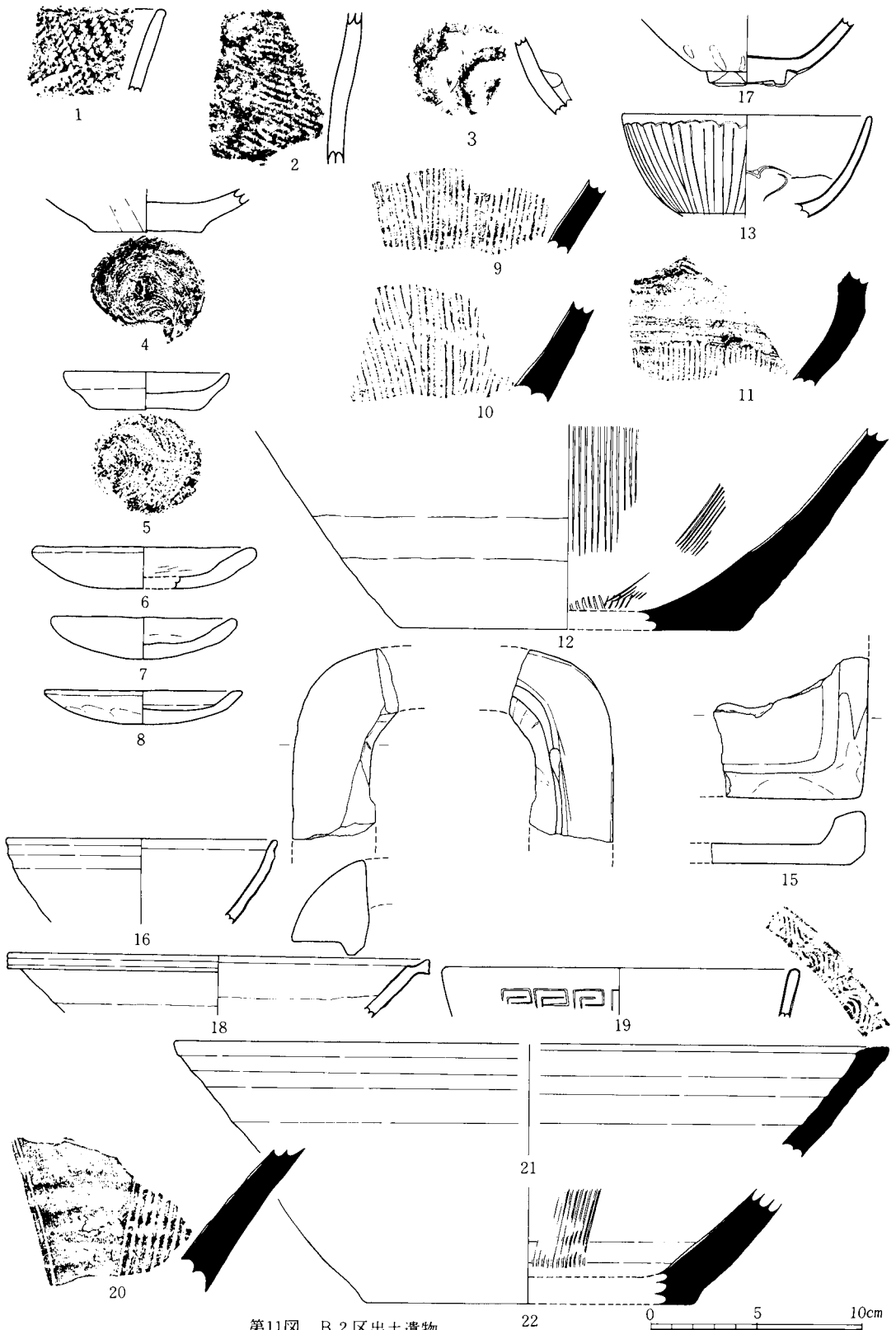


第10図 第1号土壇

南西隅に接して第2号土壇がある。長軸125cm、短軸77cm、深さ20cmを測る皿状に浅く凹むものである。第1号土壇同様に多くの岩石が検出された。伴出遺物はなかった。第2号壇より南側では第3層とした茶褐色粘質土で整地され中世の面と考えられたが、先述したとおり大きな抜根跡のためほとんど遺構は検出されなかった。調査区南端では整地盛土および包含層は約2mの厚さを測るが、前述の攪乱のため必ずしもプライマリな状態ではなかった。最下の暗灰茶褐色粘質土から大量の弥生土器を検出したが、同期の遺構は皆無であった。検出した弥生土器もほぼ地山面に近く、多くの頭大程度の岩石に混じって採集されたものである。また弥生土器、岩石に混じって鉄分を含んだ川砂が多く観察された。西側鞍部上方（北側）の用水中から同期の遺物が採集されること、56年度に加賀市教育委員会の調査によっても調査区の西北隅に集中していることなどを考えあわせると鞍部上方（北）にあったと推定される弥生集落から集中的に流れ出したものと思われる。調査期間中にも梅雨のため隧道口の西側で山崩れに遭遇したことなどを考えあわせると上述のこともうなずけるのである。

2) 出土遺物

第1号土壇では、珠洲1、加賀1、越前2、瀬戸・美濃3、青磁1の8点が出土している。第11図21は珠洲鉢である。やや肥厚する口縁帯に7本の櫛状具による波状文を施す。おろし目のつくものであるが破片なので確認できない。20は、加賀の播鉢片である。内面には9本以上を単位とするおろし目が施される。内面に若干の使用痕が認められ煤の付着がある。割れ目に漆による接合痕跡が認められる。18は瀬戸の盤と思われる破片で口縁端部近くに淡緑色の灰釉が施釉されるものである。16、17は同一個体と思われるもので瀬戸・美濃産の天目茶碗である。口径12.7cm、器高5.8cm、底径3.5cmに復元できるものである。釉は黒褐色（ところどころ茶褐色の鎔状を呈する部分がある）を呈するが、底部まで流れ三ヶのツクと融着している。底面は薄く鉄釉が施されて



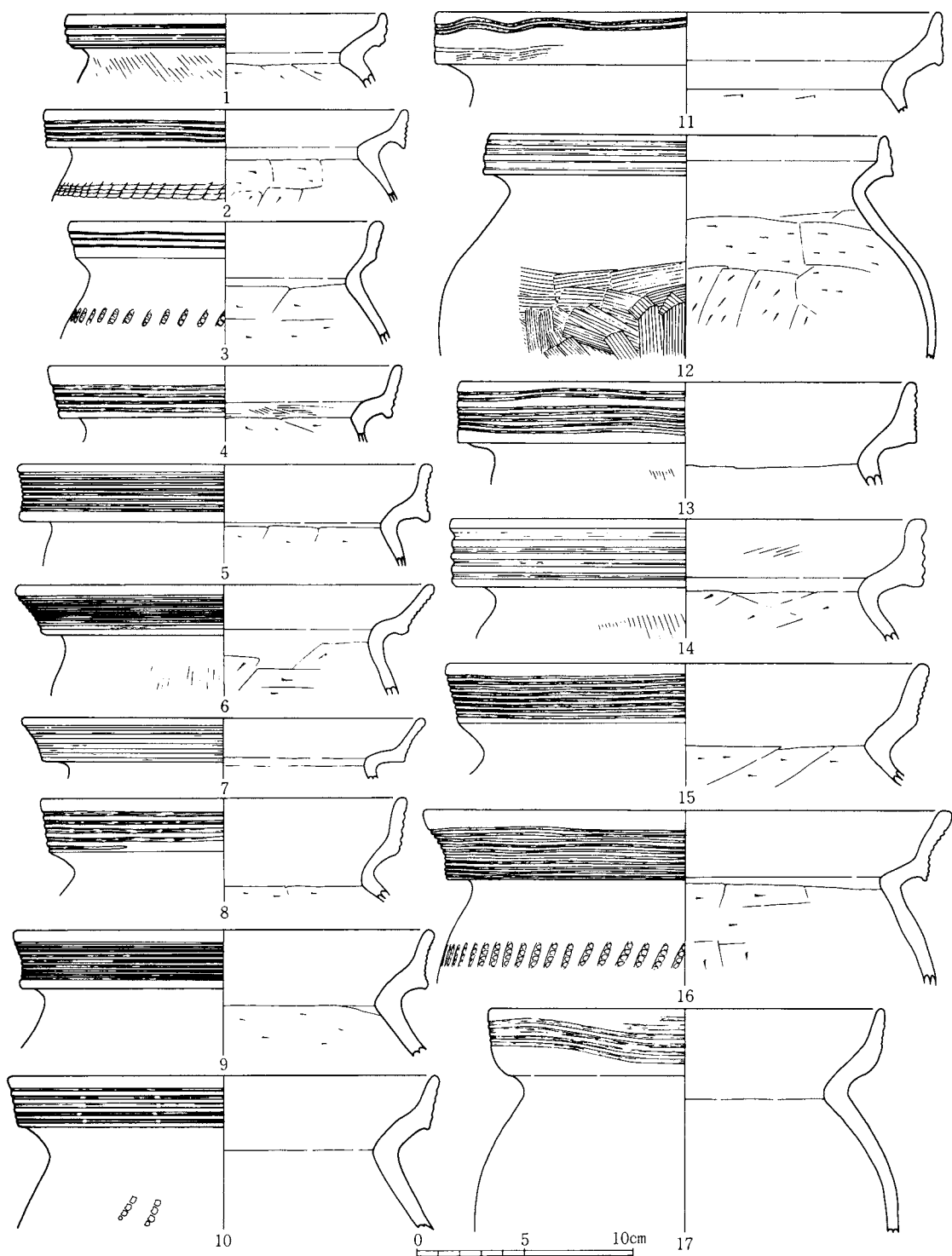
第11図 B 2 区出土遺物
 (16~22は第 1 号土坑出土)

いる模様である。19は青磁碗で口径16.5cmに復元できるものである。口縁部近くに雷文帯を巡らし淡灰緑色を呈する。内面には使用痕と見られる擦痕が多く観察される。以上が第1号土壇から出土した遺物である。14は凝灰岩製の蓋物と考えられるが不明である。15は瓦質の方形をなす箱物の一部と考えられるが不明である。いずれも第3層とした茶褐色粘質土から出土している。以下に表土および整地層、包含層などから出土した遺物については、一覧表でまとめた。

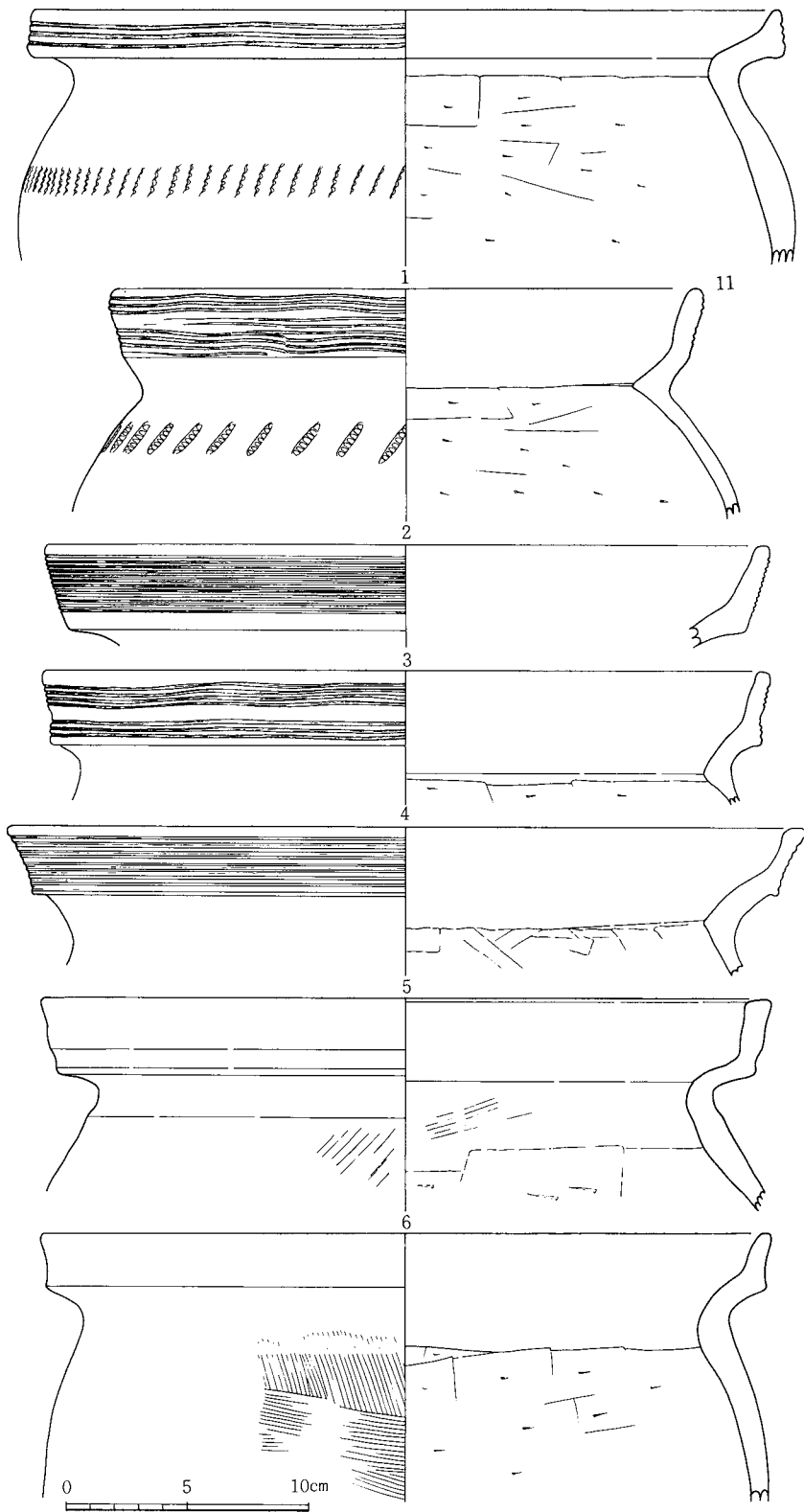
(平田)

出土土器観察表

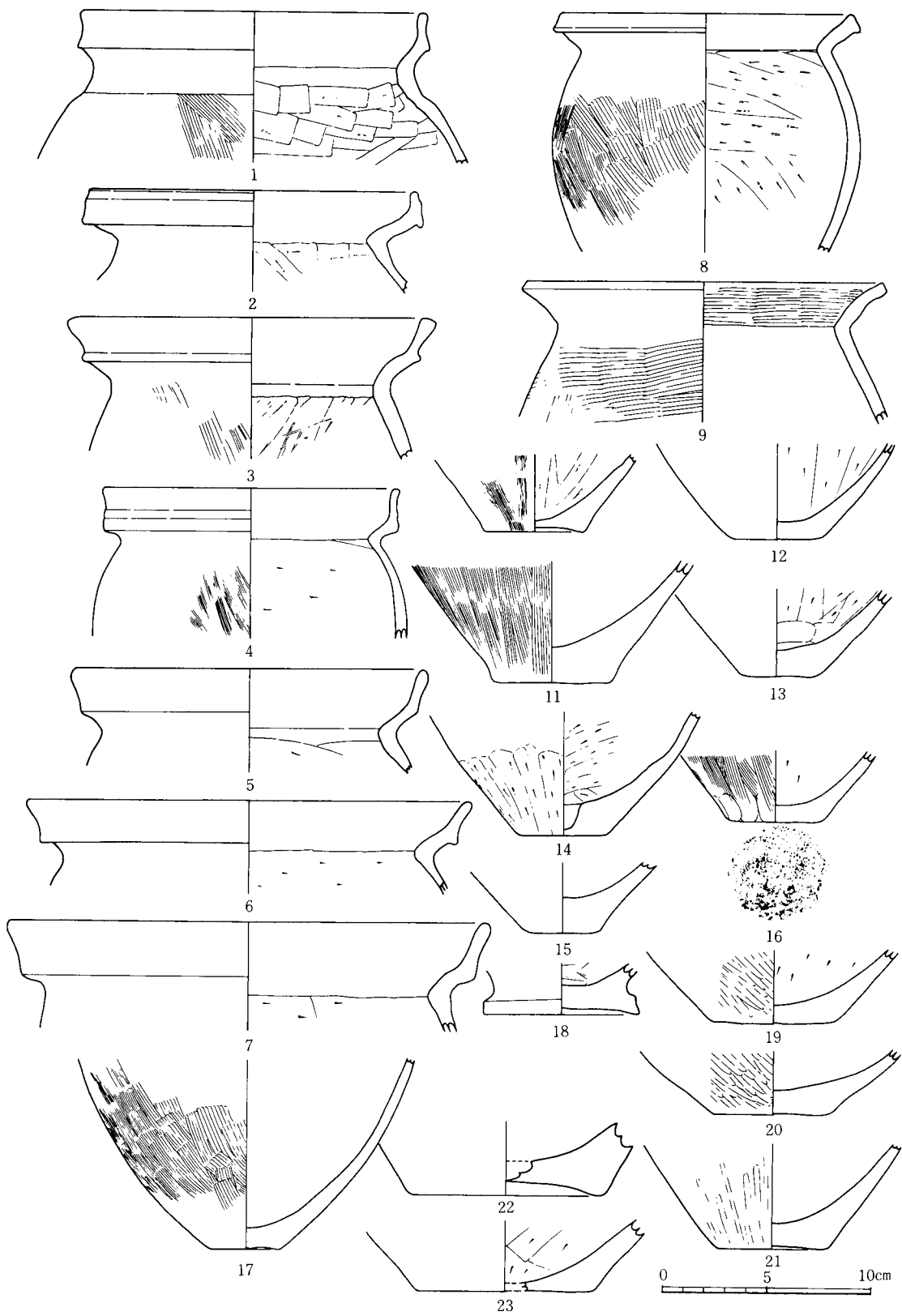
番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土/ 焼成	色調 外内	備 考	番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土/ 焼成	色調 外内	備 考
B-1-1	甕	口径15.0	やや良	淡黄褐色	擬凹線3、外 面ハケ	B-3-3	甕	口径17.9	良/良	淡褐色	外面煤
流土	"	"	/良	"	"	第4層上面	"	"	並/良	褐色	外面煤
-2	"	17.0	並/並	淡褐色	擬凹線4、肩部 に蕨状の刻文	-4	"	14.4	並/良	"	"
用水表採	"	"	"	"	"	第4層上面	"	"	"	"	"
-3	"	14.6	並/並	淡褐色	擬凹線3、肩 部に蕨状の刻文	-5	"	17.0	良/良	褐色	内外面鉄分付 着甚しい
用水表採	"	"	"	"	"	流土	"	22.0	並/良	淡褐色	外面煤、鉄分
-4	"	"	並/良	淡黄褐色	擬凹線4、外 面煤	-6	"	"	"	"	"
第4層上面	"	16.1	並/良	"	"	流土	"	24.0	良/良	褐色	外面煤
-5	"	19.2	並/良	淡褐色	擬凹線9、外 面煤	-7	"	"	"	淡褐色	"
用水表採	"	"	"	"	"	表土	"	13.9	良/良	淡褐色	外面煤
-6	"	19.4	並/良	淡褐色	擬凹線9	-8	"	"	"	淡黄褐色	"
第4層上面	"	18.7	"	"	"	第4層	"	17.0	良/良	淡褐色	内外面ナデ
-7	"	18.7	やや不	淡褐色	擬凹線9、外 面煤	-9	"	"	"	"	"
第4層層	"	17.0	良/良	"	"	第4層	"	"	"	"	"
-8	"	17.0	良/良	淡褐色	擬凹線7、外 面煤	-10	底部	直径5.0	良/良	淡褐色	外面ナデ、内 面ケズリ、外 面煤
第4層上面	"	"	"	"	"	表土	"	"	"	暗褐色	"
-9	"	19.0	並/良	橙褐色	擬凹線9、外 面煤	-11	"	5.7	良/良	淡褐色	外面ナデ、内 面炭化物付着 甚しい
表土	"	"	"	灰白色	"	第4層	"	"	"	黒褐色	"
-10	"	19.6	並/良	淡褐色	擬凹線5、外 面煤、肩部に 蕨状刻文	-12	"	4.0	並/良	淡灰褐色	内面煤、ケズ リ
流土	"	"	"	"	"	用水表採	"	"	"	黒褐色	"
-11	"	23.3	並/良	茶褐色	擬凹線7	-13	"	3.6	良/良	淡褐色	外面ナデ、内 面ケズリ
第4層	"	"	"	"	"	第4層	"	"	"	淡褐色	"
-12	"	18.1	並/良	淡褐色	擬凹線3、外 面煤、肩部に 蕨状刻文	-14	"	4.1	並/良	淡褐色	外面ケズリ、 内面ケズリ、 外面煤
第4層上面	"	"	"	"	"	第4層	"	"	"	"	"
-13	"	27.0	並/良	褐色	擬凹線8、内 外面煤	-15	"	3.7	並/良	淡灰茶褐 色、淡褐色	外面ナデ、内 面ケズリ
第4層上面	"	"	"	淡褐色	"	第4層	"	"	"	淡褐色	外面ハケナデ、 内面ケズリ、 内面炭化物
-14	"	22.0	並/良	淡褐色	擬凹線4、外 面煤	-16	"	4.0	並/良	淡褐色	外面ハケナデ、 内面ケズリ、 内面炭化物
流土	"	"	"	"	"	第4層	"	"	"	淡褐色	"
-15	"	22.4	並/良	淡褐色	擬凹線11以上 外面に煤	-17	"	3.4	並/良	淡褐色	外面ハケナデ、 内面ケズリ
第4層上面	"	"	"	"	"	-17	"	"	"	"	"
-16	"	34.4	良/良	淡褐色	擬凹線12以上 外面煤、肩部 に蕨状刻文	第4層	"	7.6	並/良	淡橙褐色	内外面ハケナ デ、内面煤
第4層上面	"	"	"	"	"	-18	"	"	"	灰褐色	"
-17	"	18.2	良/や	明淡橙褐 色	擬凹線5	流土	"	5.8	やや不 良/良	黒褐色	外面ナデ、内 面ケズリ
第4層	"	"	や不良	"	"	第4層	"	"	良/良	淡褐色	外面ナデ、内 面ケズリ
B-2-1	"	31.0	並/良	褐色	擬凹線4、肩部 に貝殻刺突文	-20	"	5.7	良/良	淡褐色	外面ミガキ、 内面ナデ
表土	"	"	"	"	"	第4層	"	"	"	黒褐色	"
-2	"	34.6	良/良	淡褐色	擬凹線10以上 肩部に蕨状刻 文	-21	"	5.2	やや不 良/良	淡褐色	外面ミガキ、 内面ケズリ
第4層上面	"	"	"	"	"	第4層	"	"	"	"	"
-3	"	30.0	並/良	褐色	擬凹線12	-22	"	9.2	やや不 良/良	淡橙褐色	内外ナデ
第4層上面	"	"	"	"	"	第4層	"	"	"	淡褐色	"
-4	"	30.0	良/良	淡灰褐色	擬凹線10以上	-23	"	8.6	良/良	褐色	外面ナデ、内 面ケズリ
第4層上面	"	"	"	"	"	流土	"	"	"	"	"
-5	"	33.0	並/良	淡褐色	擬凹線10	B-4-1	壺	口径12.7	良/良	明淡橙褐 色	内外ミガキ、 外面一部赤彩 (?)
第4層	"	"	"	"	"	流土	"	"	"	"	"
-6	"	30.0	並/良	淡褐色	外面煤	-2	"	13.6	並/良	淡橙褐色	外面荒いソデ、 内面ケズリ
第4層	"	"	"	"	"	流土	"	"	"	淡褐色	"
-7	"	30.0	やや不 良/良	褐色	外面煤	-3	"	13.8	並/良	灰褐色	磨耗が甚しい
流土	"	"	良/良	淡褐色	"	第4層	"	"	"	褐色	"
B-3-1	"	16.5	良/良	褐色	外面煤	-4	"	口径14.3 器高25.5	良/並	濁褐色	外面ハケナデ、 内面ケズリ、 肩部に刺突文
第4層	"	"	"	"	"	第4層	"	直径5.7	"	淡褐色	"
-2	"	16.0	並/良	淡褐色	外面煤	"	"	"	"	"	"
第4層	"	"	"	黒褐色	"	"	"	"	"	"	"



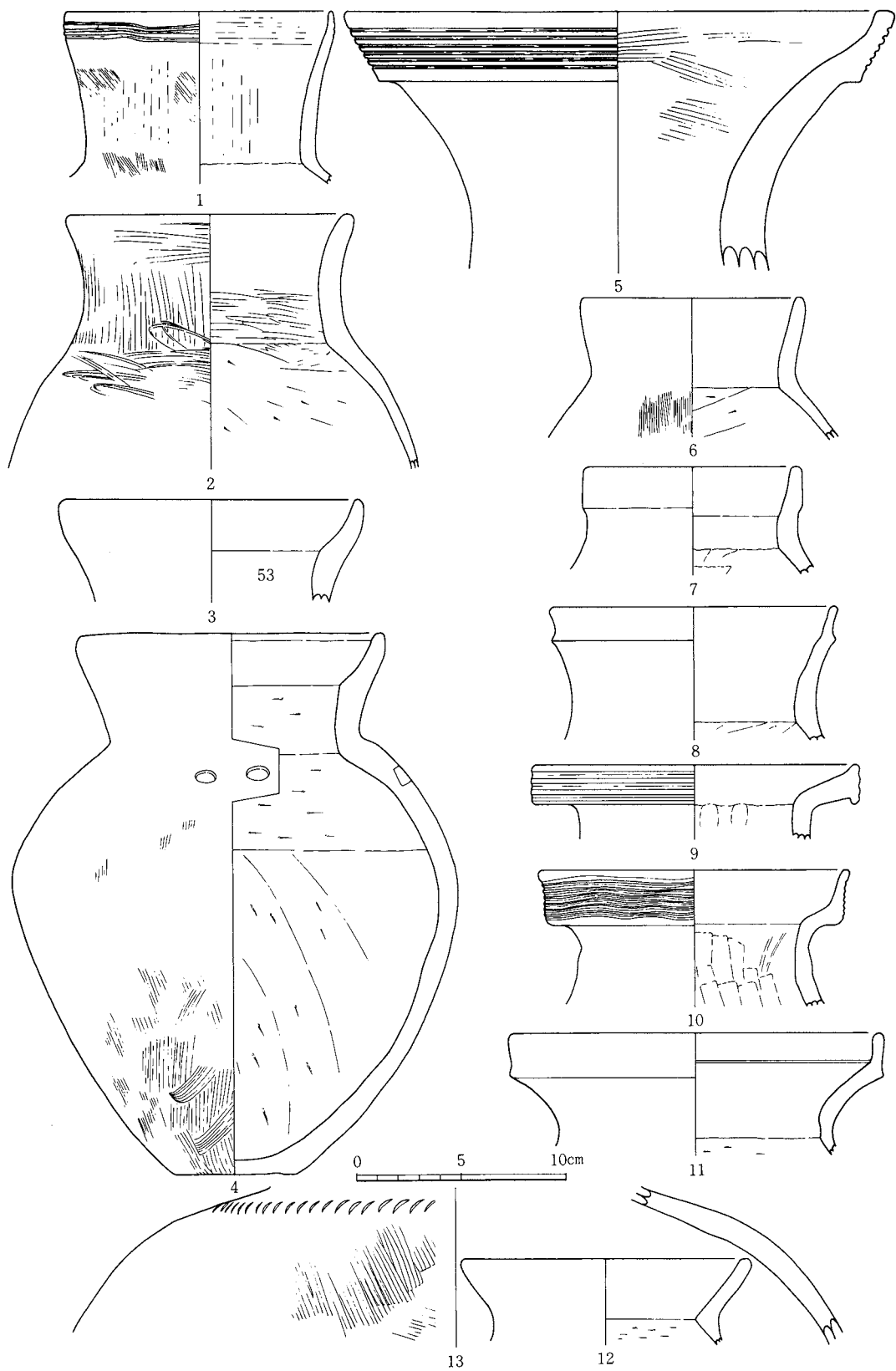
第12图 B2区出土遗物



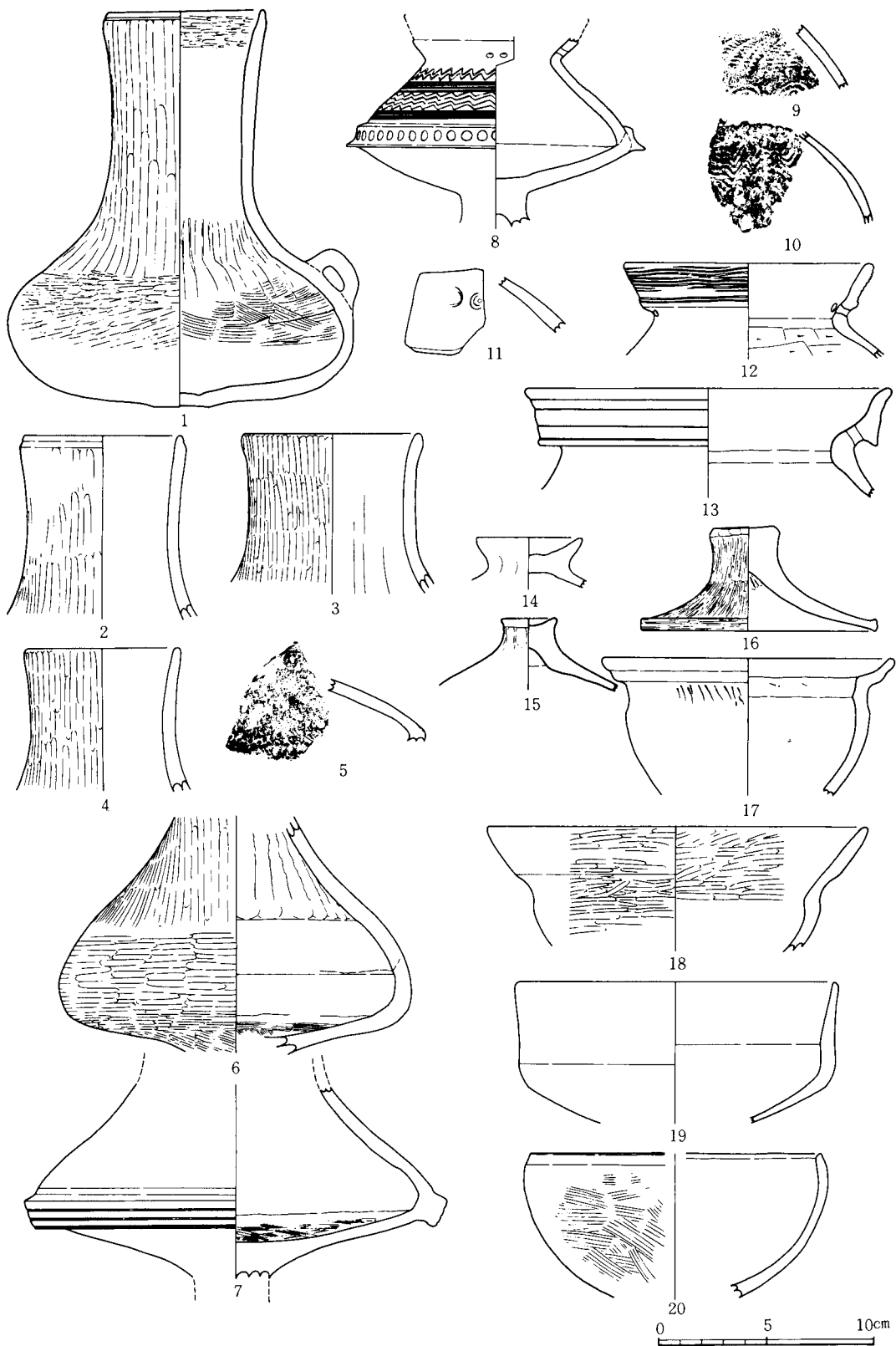
第13图 B 2区出土遗物



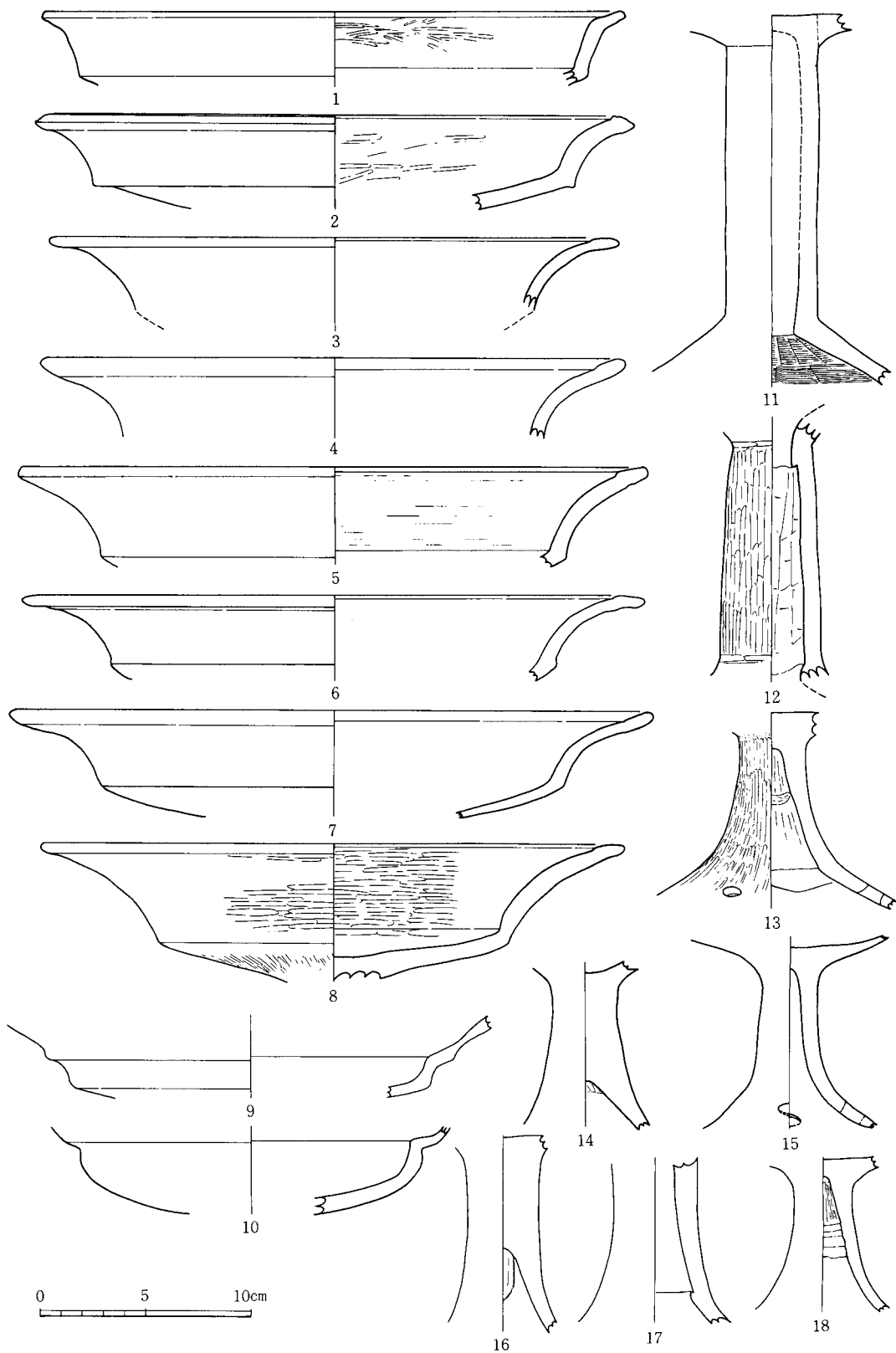
第14图 B 2区出土遗物



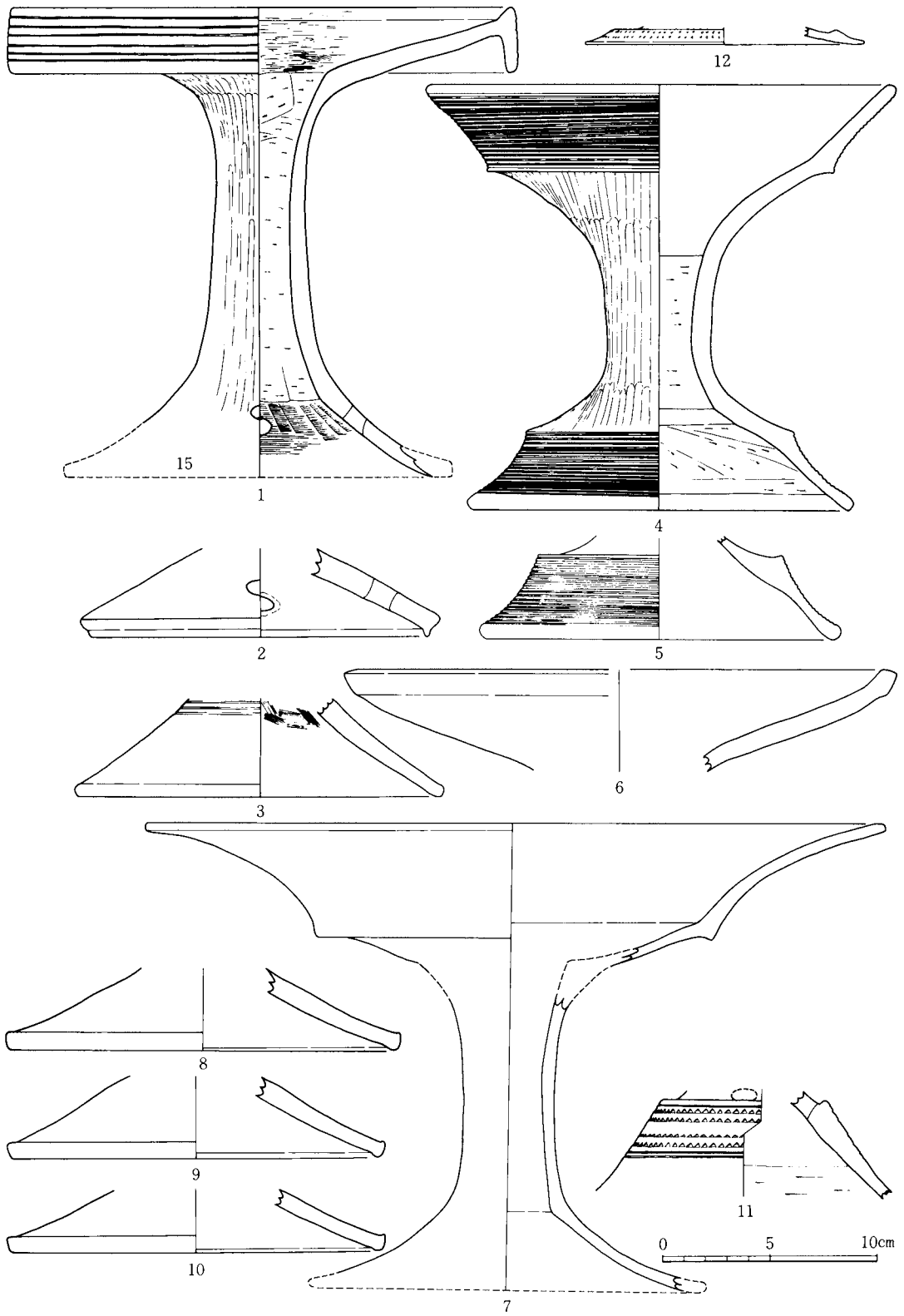
第15图 B 2 区出土遗物



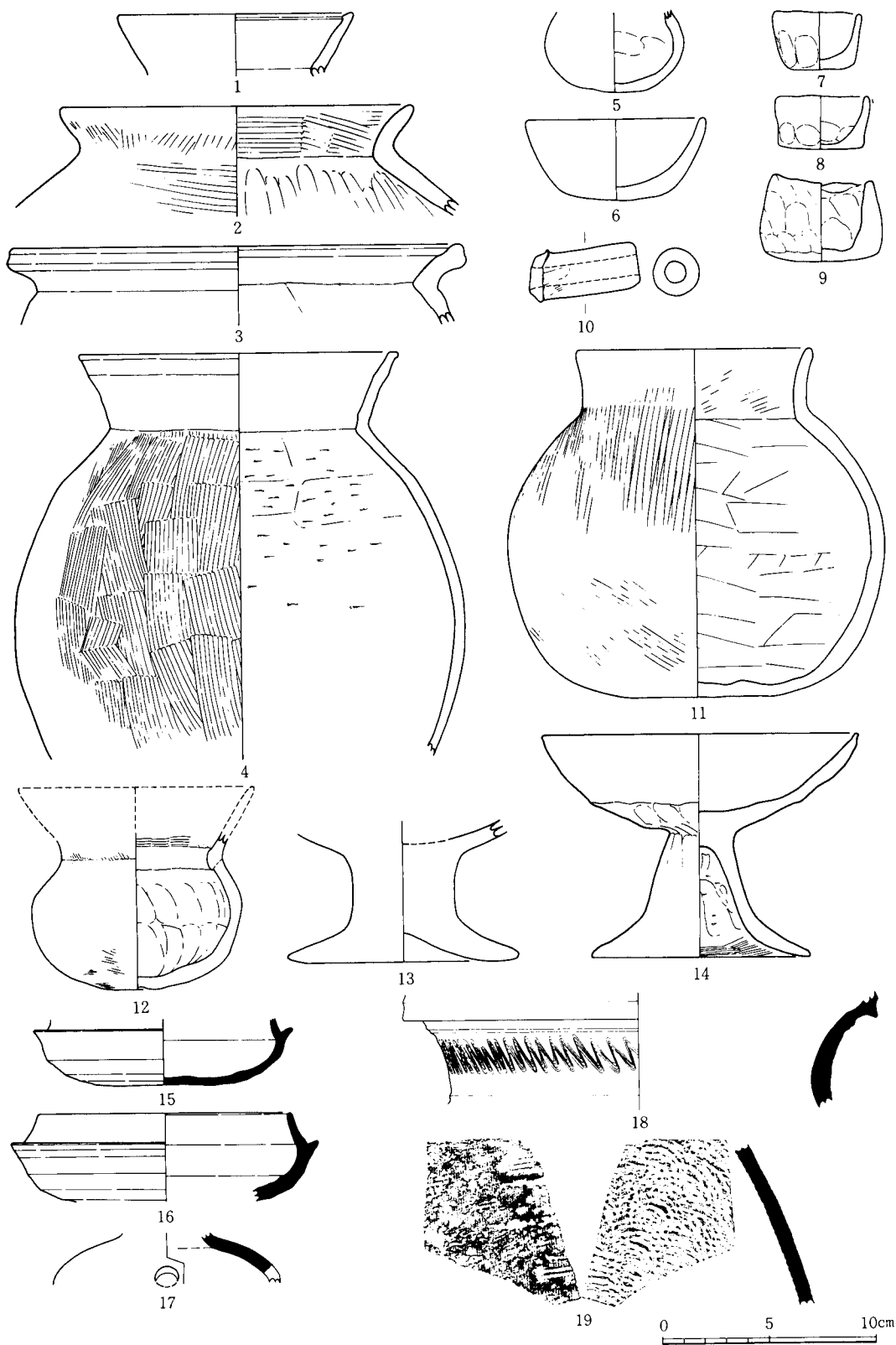
第16图 B区出土遗物



第17图 B2区出土遗物



第18图 B 2区出土遗物



第19图 B2区出土遺物

番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土/ 焼成	色調 外 内	備 考	番号・区 出土状況	器種	法量(cm)	胎土/ 焼成	色調 外 内	備 考
B-4-5 用水表採 -6	壺	口径26.0	並/良	淡褐色	擬凹線6、内 外面鉄分の付 着により不明	B-5-18 流 土	鉢	口径18.0	良/良	淡灰褐色	内外面丁寧な ミガキ
第4層上面	"	" 10.6	良/良	橙 色	内外面ハケナ デ	-19	"(?)	" 14.8	並/や や不良	淡褐色	磨耗のため不明
第4層上面	"	" 10.0	並/良	淡褐色	内外面ナデ、 胴内面ケズリ	-20	"	" 13.5	並/良	淡褐色	内外面ナデ
第4層	"	" 13.6	並/良	淡褐色	内外面ナデ、 胴内面ケズリ	B-6-1 流 土	高 坏	" 28.0	良/良	淡褐色	内外面ともに 赤彩
第4層上面	"	" 15.3	並/良	淡褐色	擬凹線3	-2	"	" 29.3	良/良	淡褐色	内外面ともに ミガキ
第4層	"	" 14.7	良/良	淡褐色	擬凹線7、内 外ナデ	-3	"	" 27.0	並/良	淡褐色	鉄分付着のため不明
第4層	"	" 17.2	並/良	淡褐色	外面ナデ、内 面ミガキ、胴 内面ミガキ	用水表採 -4	"	" 27.2	良/良	淡褐色	内外面ともに ミガキ
第4層上面	"	" 13.5	並/良	淡茶褐色	内外面ナデ、 同内面ケズリ、 外面煤	-5	"	" 26.5	良/良	淡褐色	内外面ともに ミガキ
-12	"	" 不詳	並/良	淡褐色	外面ナデ、内 面ケズリ、外 面煤、内面炭 化物	流 土	"	" 27.0	良/良	淡褐色	内外面ともに ミガキ
第4層上面	"	" 7.3	良/良	淡褐色	外面ミガキ、 口頸部内面ミ ガキ、胴内面 ハケナデ	-6	"	" 30.0	良/や や不良	淡褐色	磨耗のため不明
B-5-1 第4層	長頸壺	口径7.3 器高18.6 底径2.5	良/良	淡褐色	外面ミガキ、 口頸部内面ミ ガキ、胴内面 ハケナデ	-7	"	" 27.6	良/良	淡褐色	内外面ミガキ
-2	"	口径7.8	良/良	淡褐色	外面ミガキ、内 面丁寧なハデ	-8	"	" 不詳	良/良	明橙褐色	外面ミガキ、 内面磨耗のため不明
表	"	" 8.6	良/良	淡褐色	外面ミガキ、 内面ハケナデ	-9	"	" "	良/良	淡灰褐色	磨耗のため不明
第4層上面	"	" 7.4	良/良	淡褐色	外面ミガキ、 内面ナデ	用水表採 -10	"	" "	良/良	淡褐色	鉄分付着のため不明
流 土	"	" 不詳	"	"	肩部に竹管文	-11	"	" "	並/良	淡褐色	内外面ミガキ、 内面ケズリ
第4層	"	" "	良/良	淡褐色	外面ミガキ、 内面ハケナデ	-12	"	" "	良/良	橙 色	外面ミガキ、 内面ケズリ
第4層	"	" "	良/良	淡褐色	外面ミガキ、 内面ハケナデ	-13	"	" "	良/良	淡褐色	外面ミガキ、 三方に円孔
第4層	台付壺	" "	良/良	淡褐色	磨耗のため詳細は不明	第4層上面	"	" "	並/良	淡褐色	磨耗のため不明
用水表採	壺	" "	並/良	淡褐色		流 土	"	" "	並/や や不良	淡褐色	磨耗のため不明、三方に円孔
第4層	"	" "	並/良	淡橙褐色	内面ケズリ	-14	"	" "	並/良	茶褐色	表面磨耗のため不明
第4層	"	" "	良/良	淡褐色		流 土	"	" "	並/良	淡茶褐色	外面ミガキ、 内面ケズリ、 三方に円孔
第4層	"	" 11.6	良/並	赤褐色	擬凹線9以上、 内外面赤彩	-15	"	" "	並/良	淡褐色	磨耗のため不明、内面絞り 痕残る
第4層上面	"	" 16.6	並/良	淡褐色	外面ミガキ、 内面ミガキ、 胴内面ケズリ	-16	"	" "	並/良	茶褐色	表面磨耗のため不明
第4層	"	" 16.6	良/良	淡赤褐色	赤彩	流 土	"	" "	並/良	淡茶褐色	外面ミガキ、 内面ケズリ、 三方に円孔
第4層	蓋	" 16.6	良/良	淡赤褐色	赤彩	-17	"	" "	並/良	淡茶褐色	外面ミガキ、 内面ケズリ、 三方に円孔
第4層	"	" "	良/良	淡橙褐色	磨耗のため不詳	-18	"	" "	並/良	淡褐色	磨耗のため不明、内面絞り 痕残る
第4層	"	口径10.8	良/良	淡褐色	外面ミガキ、 内面ナデ	第4層上面	器 台	口径23.6	良/良	淡褐色	擬凹線6、外 面ミガキ、筒 部ケズリ、台 部内面ミガキ
第4層	鉢	" 13.6	並/良	淡褐色	外面ナデ、胴 内面ケズリ、 頸部篋先刻文	B-7-1 第4層上面	"	底径16.0	並/良	淡褐色	内外面ミガキ、 円孔4
第4層	"	" "	並/良	淡褐色		-2	"	" 17.5	良/良	淡褐色	内外面ミガキ
第4層	"	" "	良/良	淡褐色		流 土	"	" 21.4	良/良	淡褐色	鉄分付着
第4層	"	" "	良/良	淡褐色		-3	"	" 21.5	良/良	淡褐色	外面ミガキ、 筒部内面ケズ リ、台部内面 ミガキ
第4層	"	" "	並/良	淡褐色		用水表採 -4	"	口径18.2	並/良	淡褐色	磨耗のため不明
第4層	"	" "	並/良	淡褐色		流 土	"	底径16.2	並/良	淡褐色	

番号・区 出土状況	器種	法量 (cm)	胎土/ 焼成	色調 外 内	備考	番号・区 出土状況	器種	法量 (cm)	胎土/ 焼成	色調 外 内	備考
B-7-6 表土	器台	口径26.0	良/や や不良	淡赤褐色 "	外面ミガキ、 煤、内面磨耗 のため不明	B-8-14 第4層	高坏	口径14.9 器高10.5 底径10.2	良/良	橙褐色 "	内外面ナデ、 脚部内面に絞 り痕
-7 第4層	"	" 34.6	良/や や不良	淡赤褐色 "	磨耗のため不明	-15 第4層	坏	不詳	良/良	黒灰色 "	胴外面%へラ ケズリ、底部 に×刻文
-8 表土	"	底径18.4	並/良	淡褐色 "	内外面ミガキ	-16 第3層	"	口径11.8	やや不 良/良	灰青色 "	胴外面%へラ ケズリ
-9 第4層	"	" 17.4	並/良	淡褐色 "	内外面ミガキ	-17 第4層	冠	不詳	良/良	黒灰色 "	肩部に緑色の 自然釉
-10 第4層	"	" 16.2	並/良	淡褐色 "	内外面ミガキ	-18 流土	甕	"	良/良	灰青色 黒灰色	楯5本による 波状文
-11 第4層	"	不詳	並/や や不良	淡茶褐色 "	磨耗のため不明	-19 第4層	襖胴部 片	"	良/良	緑灰色 灰青色	外面に緑色の 自然釉、タタ キ内外ともに 細い
-12 第4層	"	底径13.1	良/良	淡褐色 "		B-9-1 深鉢	表土	"	並/並	淡褐色 "	
B-8-1 第4層上面	甕	口径10.2	良/良	淡褐色 "	内外ハケナデ、 外面煤	-2 流土	"	"	並/並	淡赤褐色 "	
-2	"	" 16.4	並/良	淡褐色 "	内外面荒いハ ケナデ、胴内 面ケズリ(?)	用水表採 不明	胴部片	"	良/や や不良	淡赤褐色 "	
-3 流土	"	" 21.0	やや不 良/良	黒褐色 淡褐色	内外面ナデ(?)、 胴部内面ケズ リ	第4層	皿	底径5.2	良/並	淡褐色 "	外底面糸切り、 外面煤(近世 ?)
-4 第4層	"	" 15.0	やや不 良/良	淡褐色 "	口縁内外面ナ デ	表土	坏	口径7.8 器高2.8	やや不 良/や	淡橙色 "	器面の磨耗が 甚しい底面糸 切り
-5 第4層	小型土 器	不詳	やや不 良/不良	淡橙色 "	磨耗のため不明	第3層	"	底径5.2	や不良	"	
-6 第4層上面	"	口径8.6	やや不 良/良	黒褐色 "	内外面ナデ	-6 第3層	"	口径10.8	良/や や不良	明橙褐色 "	内外面磨耗が 甚しい
-7 第3層	手捏土 器	口径4.0	やや不 良/や	淡橙褐色 "	内外面磨耗の ため不明	-7 第3層	"	器高2.0	良/や や不良	明橙褐色 "	内外面磨耗が 甚しい
-8 第3層	"	器高2.7	良/や や不良	"		-8 第2層	"	口径9.4	良/良	淡茶褐色 "	内外面ナデ
-9 第4層	"	口径4.1	良/や や不良	淡褐色 "	内外面磨耗の ため不明	-9 第3層	摺鉢	器高1.6	並/良	灰青色 "	おろし目10単 位
-10 第4層	"	器高2.5	並/良	淡褐色 淡灰褐色	内外面指頭ナ デ	-10 表土	"	不詳	やや不 良/良	暗灰青色 "	おろし目11単 位
-11 流土	注口	口径4.4	並/良	淡褐色 "	内外面指頭ナ デ	-11 第3層	"	"	並/良	灰青色 "	おろし目10単 位、口唇部に 波状文
-12 第4層	壺	口径2.2	良/良	淡褐色 "	外面ナデ	-12 表土	"	口径11.6	良/や や不良	乳褐色 "	
-13 表土	"	口径11.2	良/良	淡褐色 黒褐色	口縁部内外ヨ コナデ、胴部 内面ケズリ	-13 表土	碗	口径11.6	良/良	淡灰白色 "	青磁(暗緑色)
-14 第4層	"	器高16.3 底径7.0	良/良	淡褐色 明褐色 淡褐色	口縁部内外ヨ コナデ、胴部 内面ケズリ 外面ナデ、内 面ナデ上げ 坏部内面黒色 ミガキ、他は 磨耗のため不明						
-15 第4層	"	胴径9.9	並/良	淡褐色 "							
-16 第4層	高坏	底径11.0	並/良	淡褐色 "							

第3節 C・D₂調査区の遺構と遺物

調査区は現在の菅生石部神社本殿背後に広がる台地性平坦面と天神山の丘陵斜面との一部に当るC調査区と、敷地集落からの取り付け道と本線の交叉部分に当るD₂調査区の2地点である。

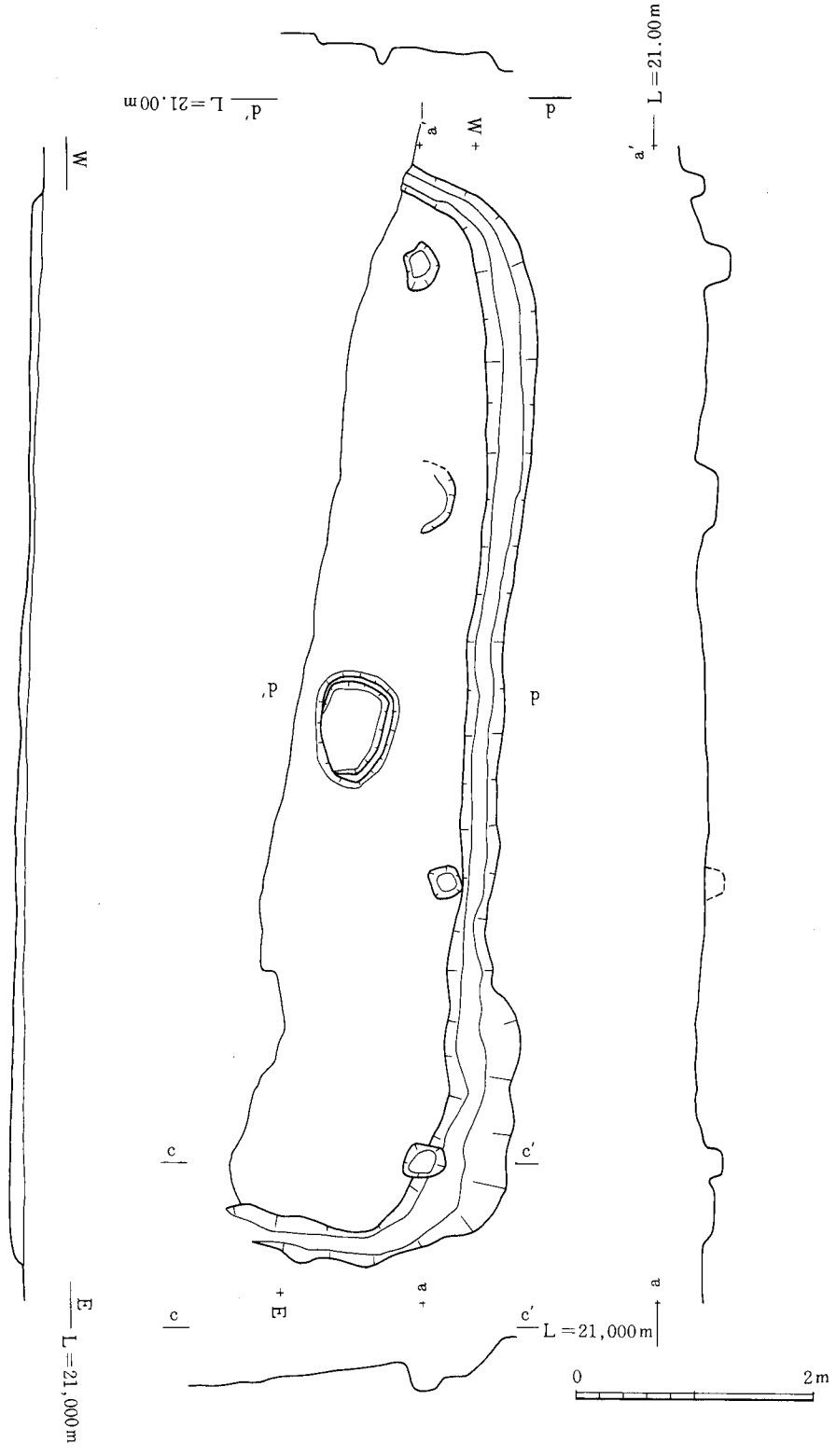
C調査区では近・現代かと推定される当該神社関連遺構・遺物の他に、弥生時代末期頃～中世にかけての遺物の出土がある。この期の遺構では竪穴住居跡約20棟と掘立柱建物2棟、土坑数基の発見があった。これら竪穴住居跡等は緩傾斜地に構築・改築等がなされていたために下半部が流失あるいは平安後期頃・近～現代頃の造作などが推測される、一部遺物の混入なども加わって個々の遺構と遺物群の関係を含め、同時期併存の棟数・グルーピング等といった問題も詳細に検討・提示しえないままの報告となったが、竪穴住居跡ではほぼ6世紀代に主体をもった営為と推測され、倉庫様の建物を想わせる掘立柱建物2棟についても例えば第11号竪穴住と同様の方位をとって隣接して在ることから、これらとの同時期性も類推される。土坑については焼土坑1基を含めて数基の検出があるが、第2号土坑中では10世紀後半代と考えられる土師器で占められものの他、第6号土坑では6世紀代かと推定される土師器が伴出したものも含まれている。なお、当該調査区は現本殿直背後部に相当したことからこれに係わっての中世にまで遡上しうる明瞭な遺構の発見はなく、神域を区画したかと推定される土塁（神苑遺構？）や表～上層面の窪状地での多量に集積状態で検出された土師質小皿群などは明治期の所産と考えられた。

D₂調査区では、ここを含めて以東の縁辺部に台状に整形されたとみられる平坦面が数多く所在し、僧坊域かと推定されている地域でもある。調査ではその内の一つの台状地形を完掘している。この台状地形は約25m×30mの平坦面をもち、背面を削り整形・前面～両側面は主に盛土造成されたもので、これより沖積部方向の下段（B₂調査区＝第2節第2項）平坦面とは約4mの比高差をもっている。遺構・遺物には、整地土層下より平安時代の遺物の確認があった他、平坦面を中心に中世の掘立柱建物群、柵列、溝、土坑、地下式横穴などと、近・現代とみなされている石組遺構、井戸等の検出があった。

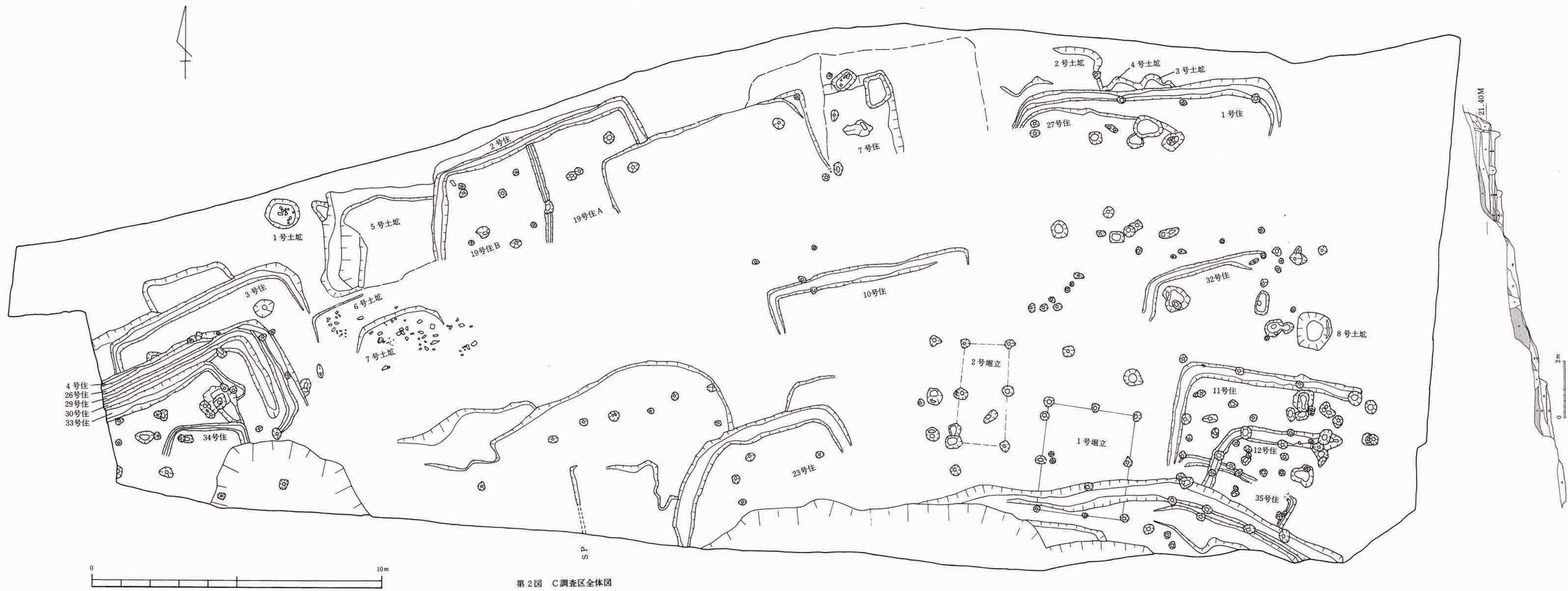
調査は例言あるいは経緯のとおり、4ヶ年計画の4ヶ年も調査地区を分割して担当者も入れ替るという結果となったため、個々の調査区の状況についてはそれぞれに不十分な理解しかもちえないものとなってしまった。従って、報告書の執筆計画も調査地区毎に当該担当者が分担してこれに当ることとして推移してきたが、この一部担当者の転・退出が重なり、殊にC・D₂調査区に携った全員が刊行を控えた最終年度を前に不在となってしまった。幸ともいふべきか、遺物・遺構図等のトレースまでが完了しており、記名・メモ等によりこれを貼付図版化までにこぎつけることができたが、調査時の所見やあるいは留意点・調査後に得られた見解や問題点など、詳細については把握・消化しえず、単に図版類の羅列に終始してしまったことは、識者・関係者の方々、そして不本意の報告となる当該区担当者の方々にも申し開きできないものとなった。御寛容を祈るのみである。

上述の遺構と遺物については『敷地天神山遺跡調査概要』1982 石川県立埋蔵文化財センター・『敷地天神山遺跡群』1983 同の現地説明会パンフ・概報を基調として一部改変組して収録した。（平田・田嶋・中島）

第1号住居跡

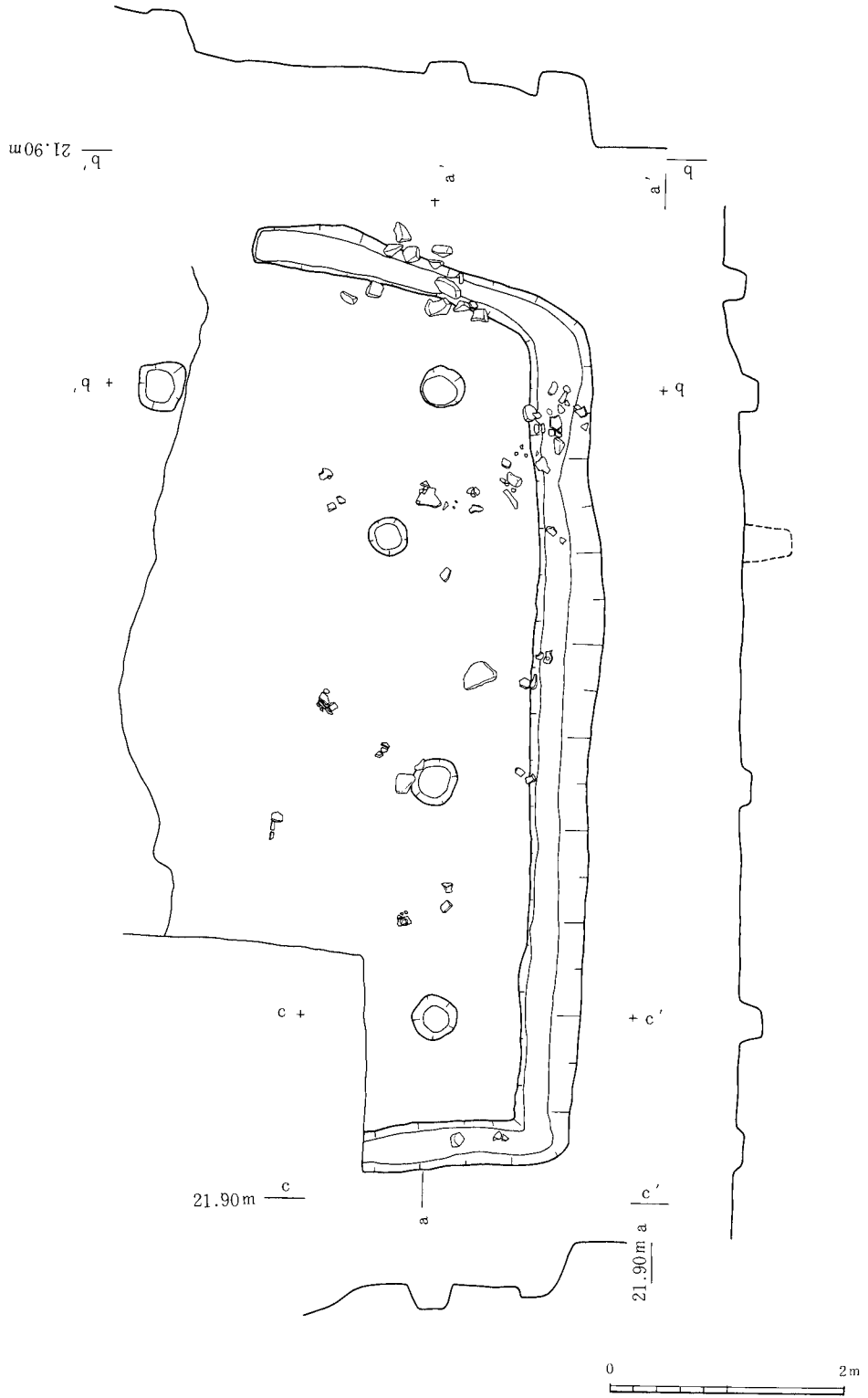


第1図 C調査区第1号竪穴住居跡実測図

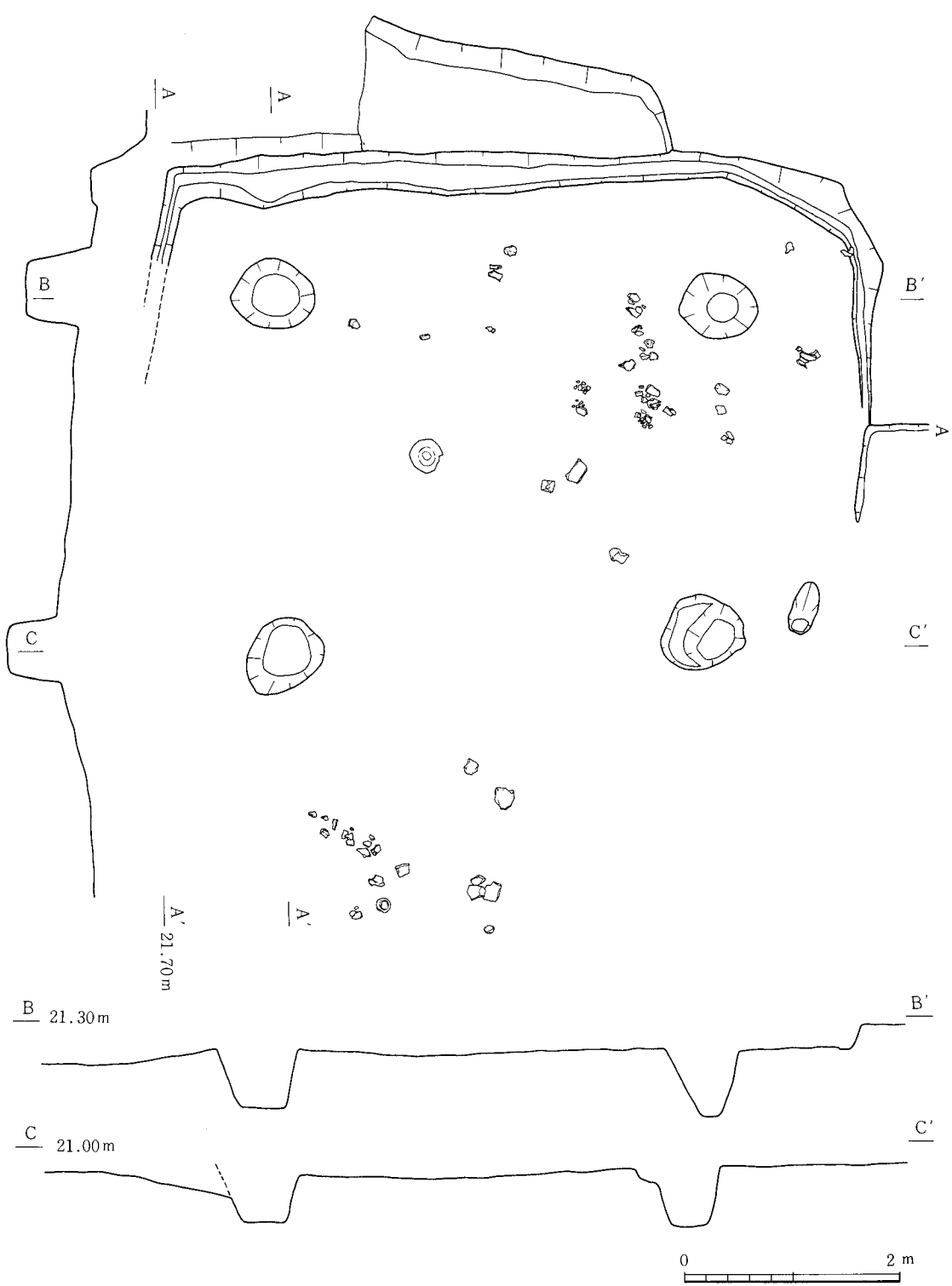


第2図 C調査区全体図

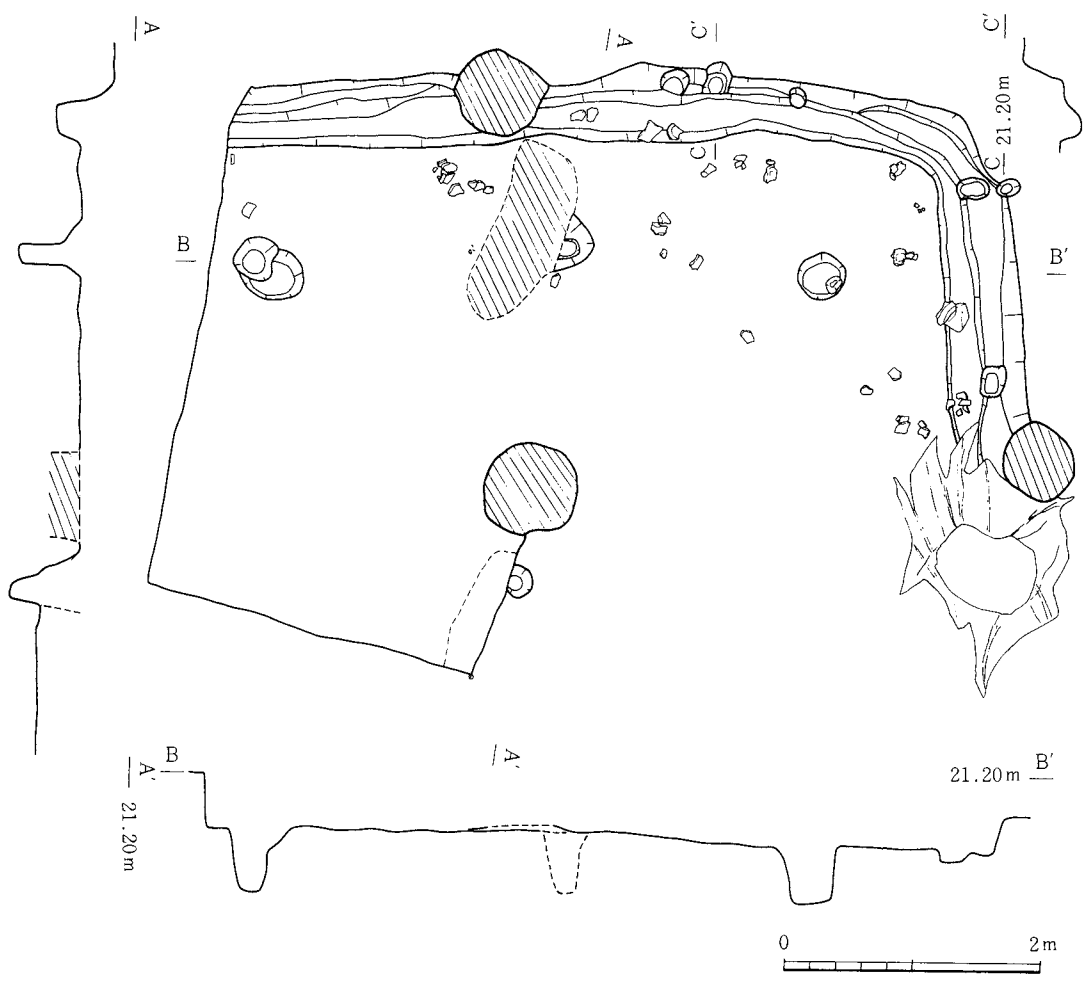
- 1 赤土及び近世以降の流土層
- 2 礫利土
- 3 近世流土層
- 4 暗褐色土 (多量の礫・炭化物を含む。しじりはあるが粘性に乏しい)
- 4 B 黄色土を主体とし、砂利を含む
- 5 暗褐色土を主体とし、4層に比べて礫の混入が少ない
- 6 黄色土を主体とし、少量の砂利を含む (2号住居跡床面・張床)
- 7 黒灰色土を主体とし、多量の炭化物と灰を含む
- 8 暗褐色土を主体とし、少量の砂利を含む (19号住居土)
- 9 暗褐色土を主体とし、微量の砂利を含む (19号張床)
- 10 暗褐色土を主体とし、地山土アロック礫を含む
- 11 暗褐色土を主体とし、地山土アロック礫を含む
- 12 暗褐色土を主体とし、小礫を少量含んで粘性に富む
- 13 暗褐色土を主体とし、小礫・砂利を多量に含む (24号住居土か)
- 14 暗褐色土を主体とし、多量の小礫を含む (地山か)



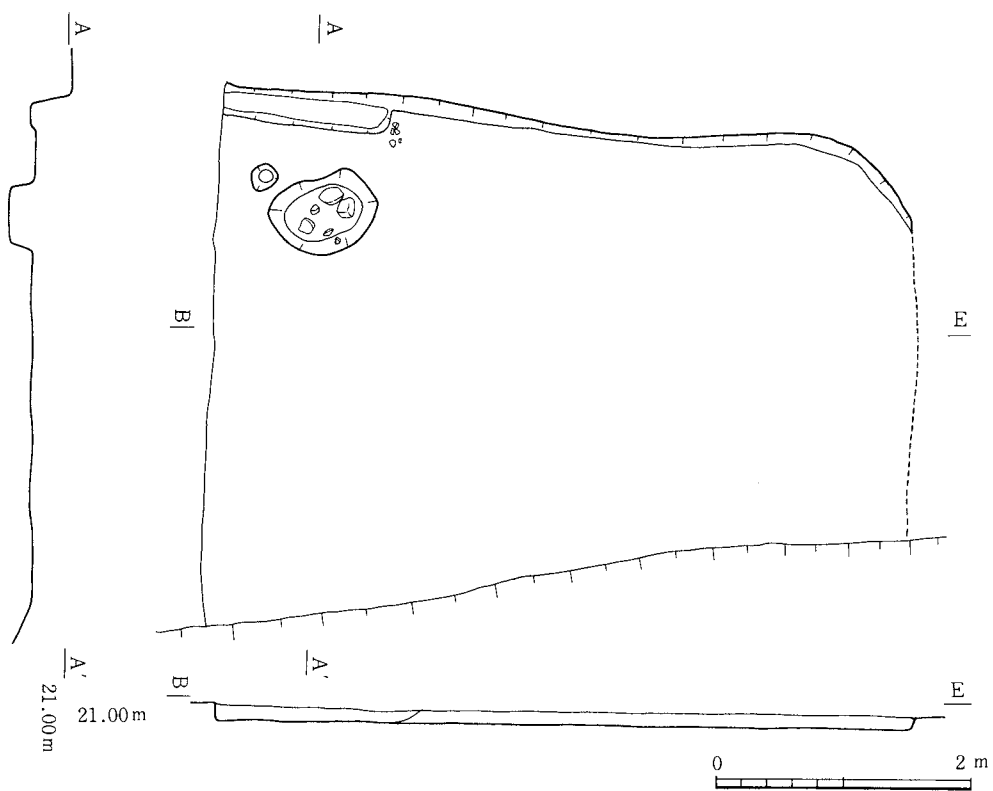
第3図 C調査区第2号竖穴住居跡実測図



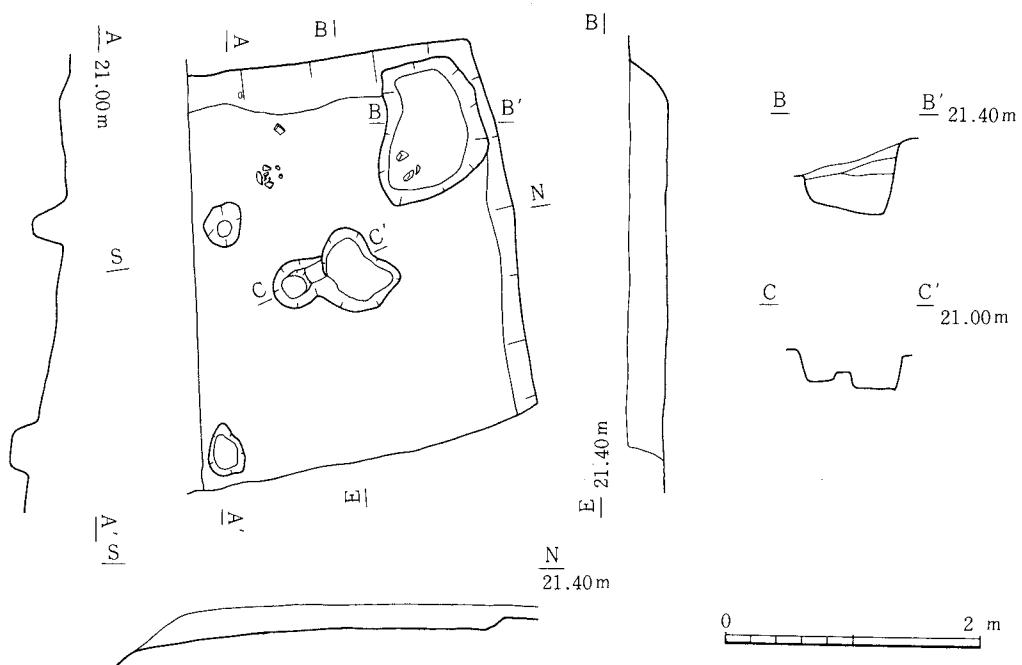
第4図 C調査区第3号竪穴住居跡実測図



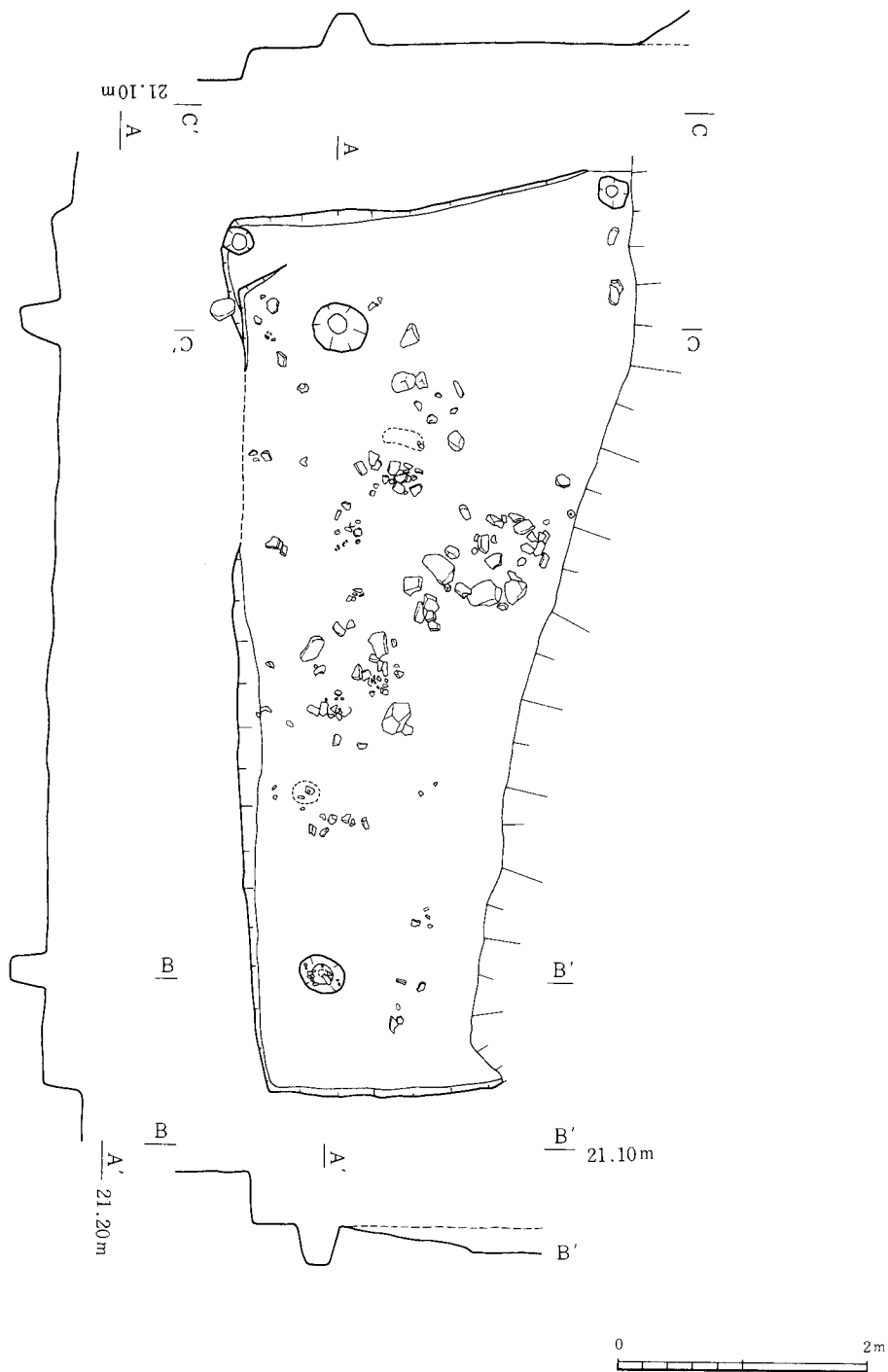
第5図 C調査区第4号竪穴住居跡実測図



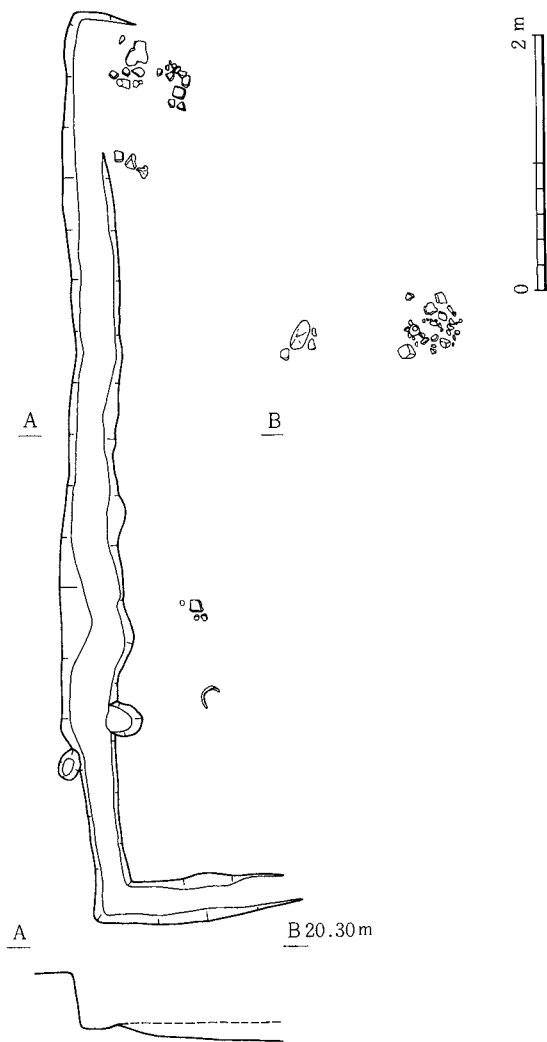
第6図 C調査区第6号竖穴住居跡実測図



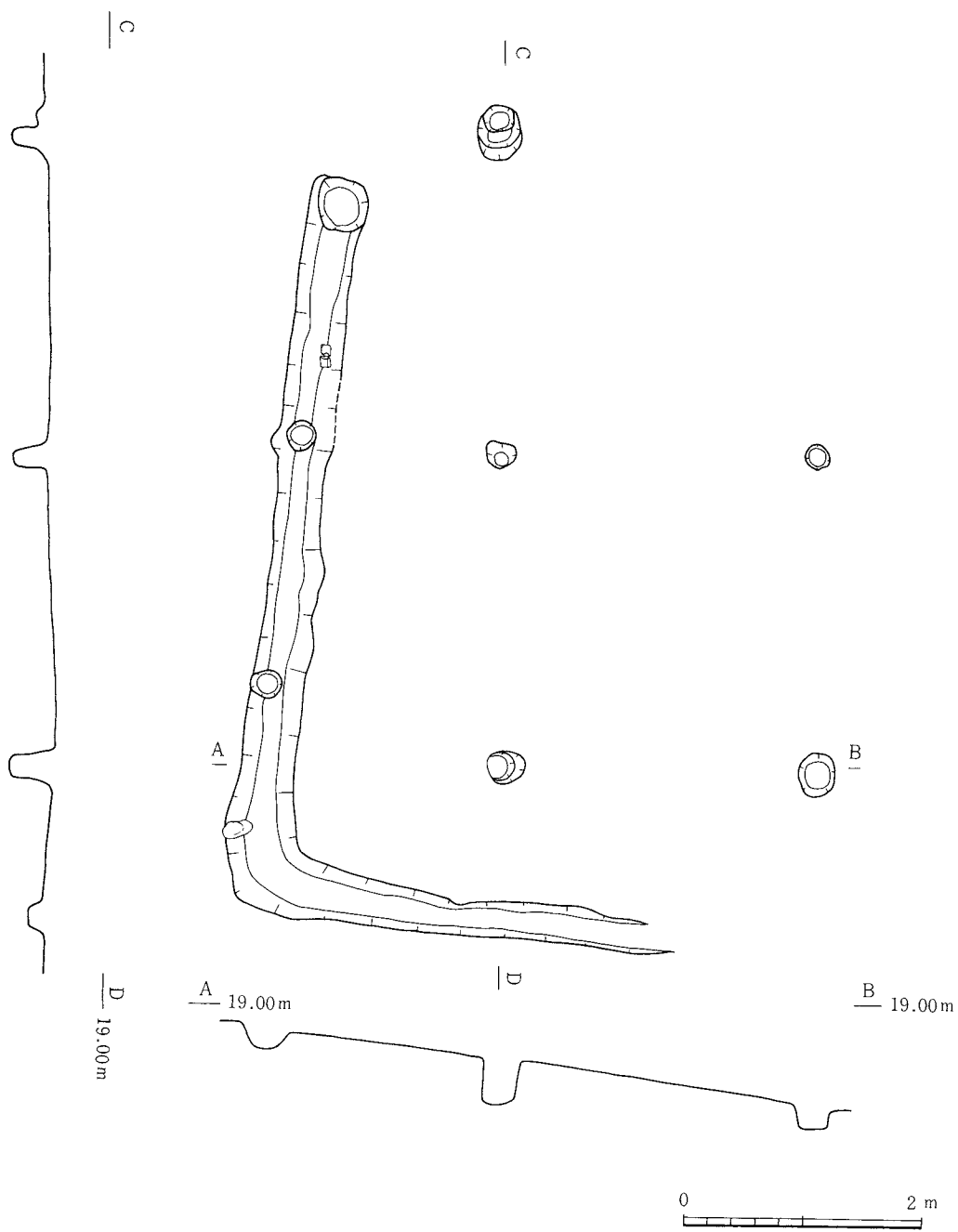
第7図 C調査区第7号竖穴住居跡実測図



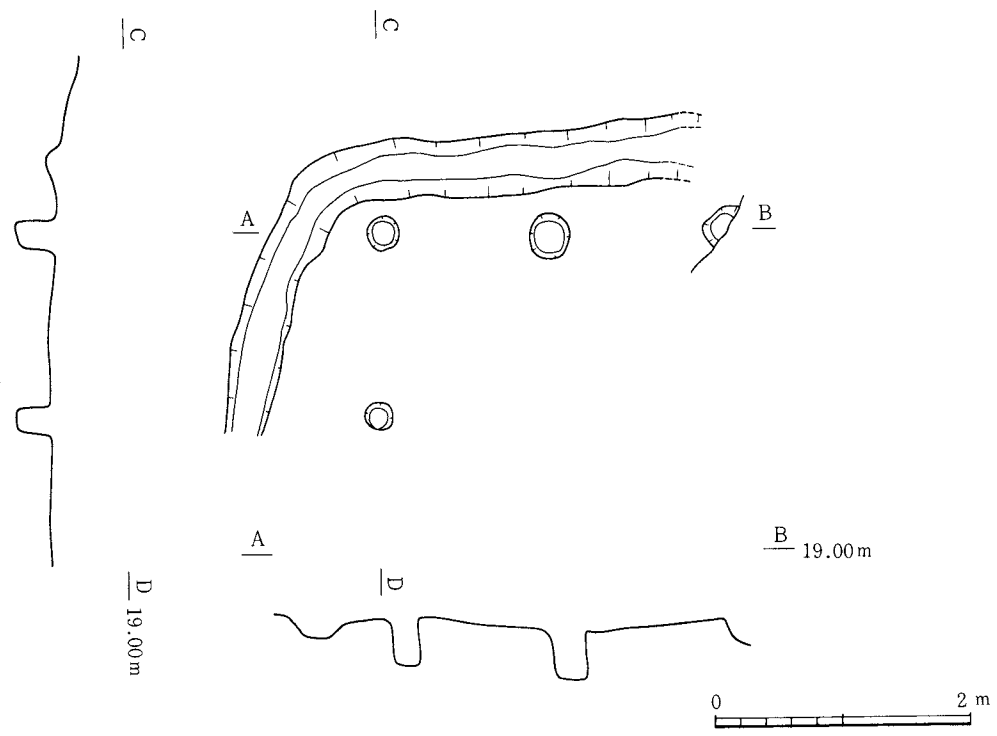
第 8 図 C 調査区第 8 号竖穴住居跡実測図



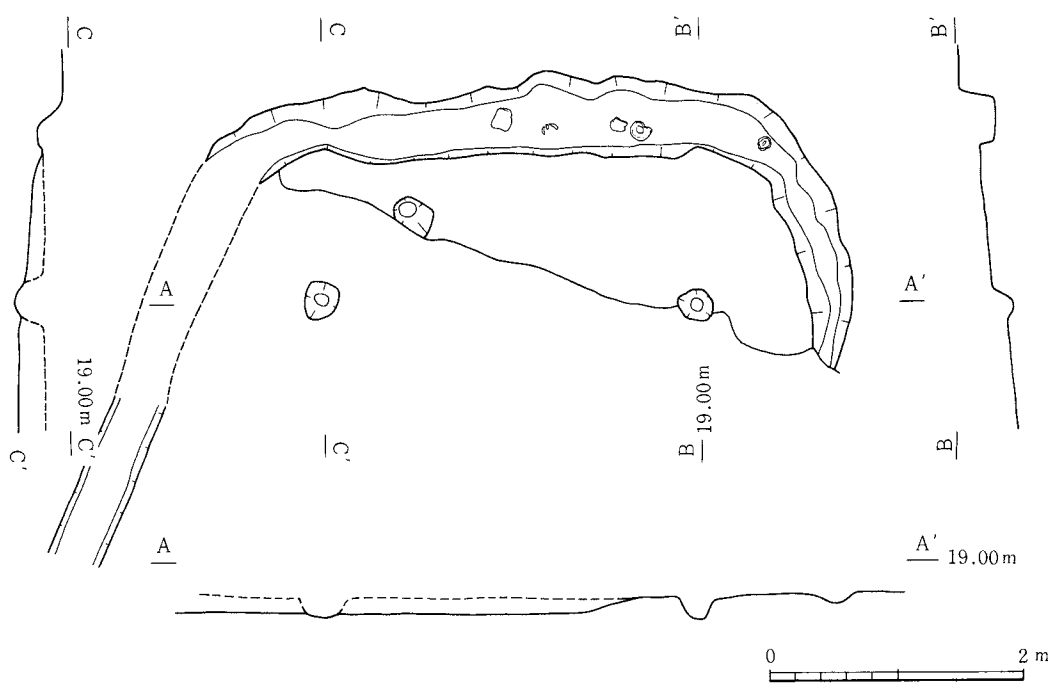
第 9 図 C 調査区第 10 号竖穴住居跡実測図



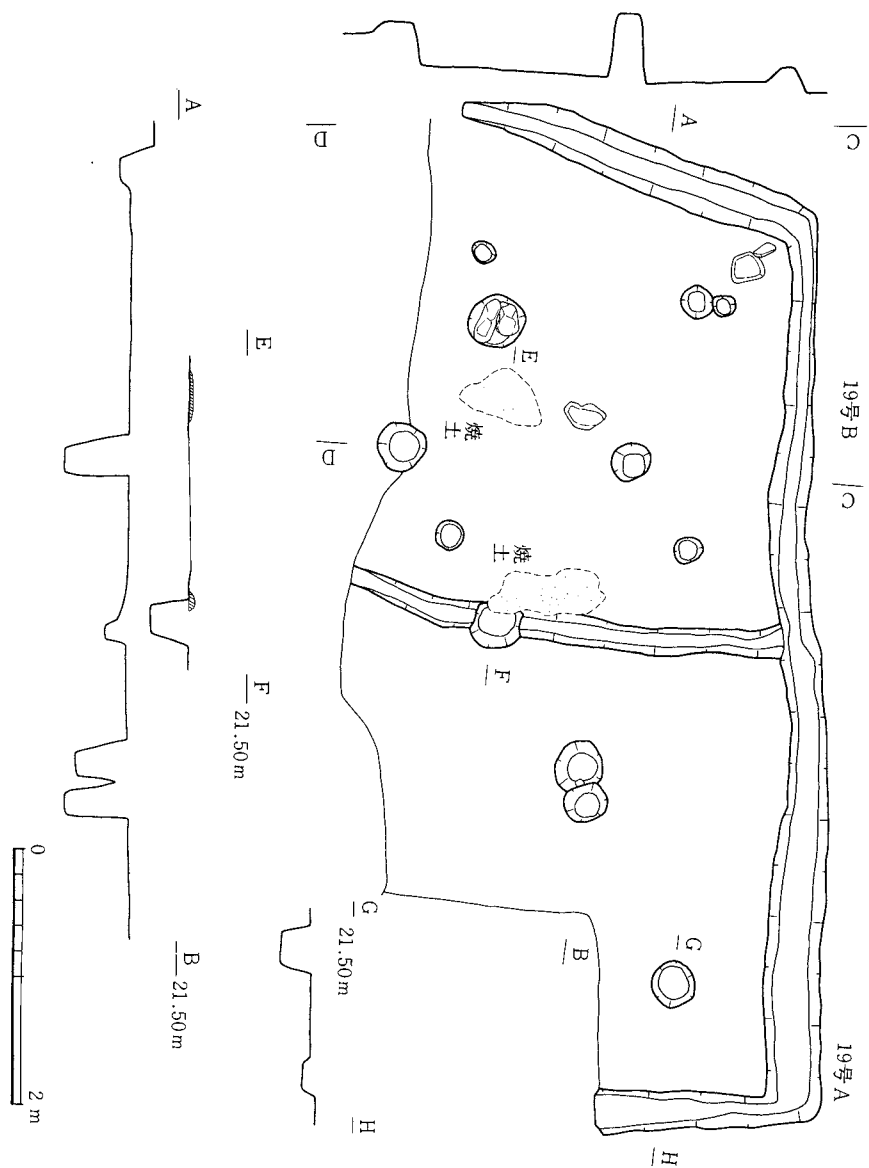
第10図 C調査区第11号竖穴住居跡実測図



第11図 C調査区第12号竖穴住居跡実測図



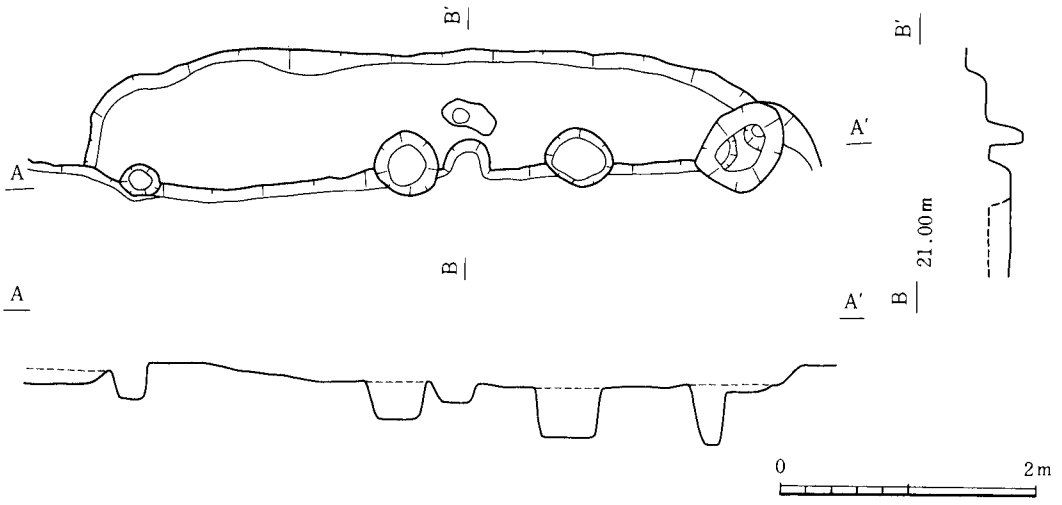
第12図 C調査区第23号竖穴住居跡実測図



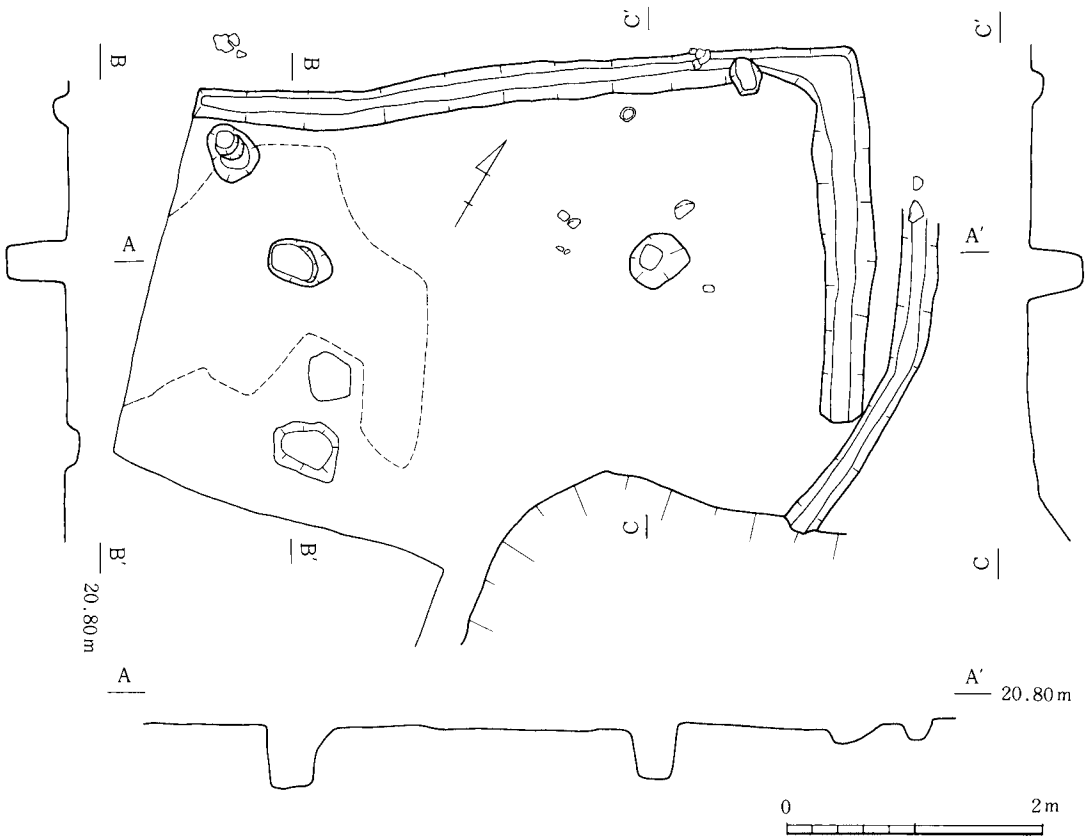
第13図 C調査区第19号A・B竪穴住居跡実測図



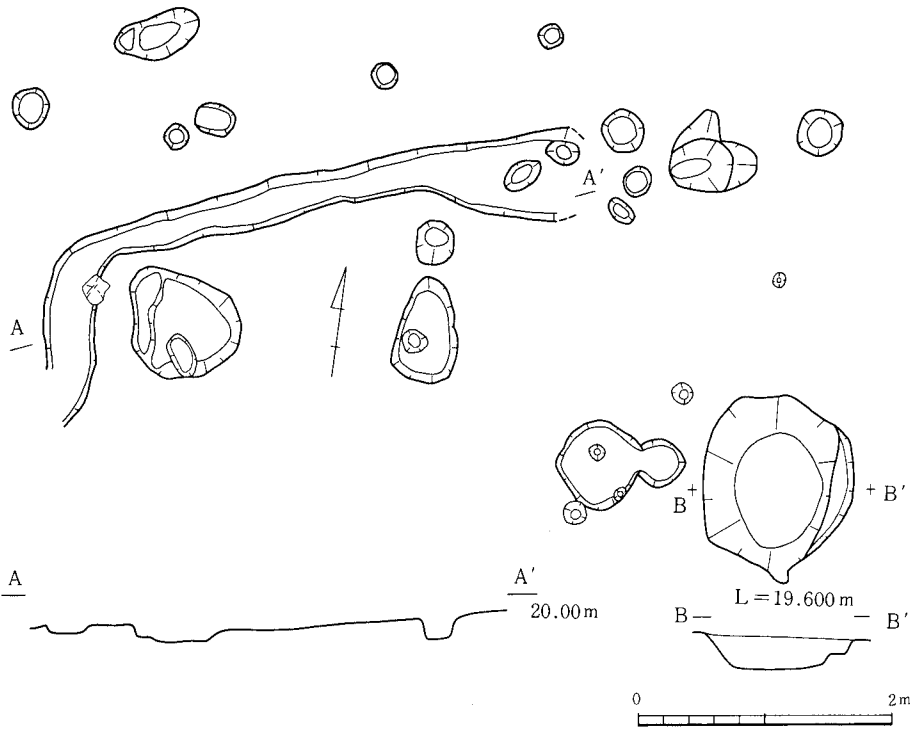
第14图 C調査区第24号竖穴住居跡実測図



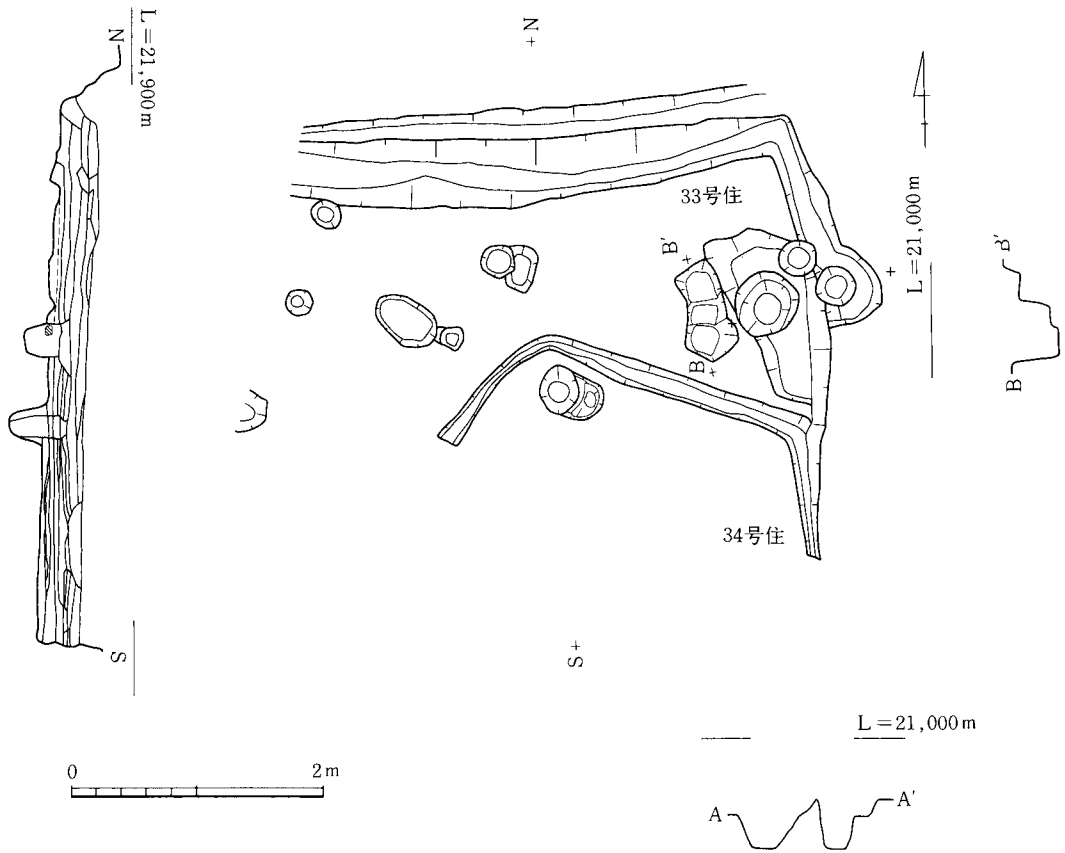
第15図 C調査区第27号竖穴住居跡実測図



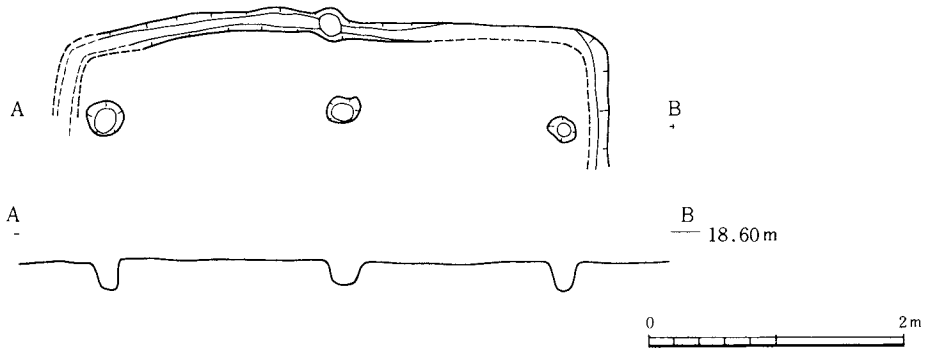
第16図 C調査区第29号竖穴住居跡実測図



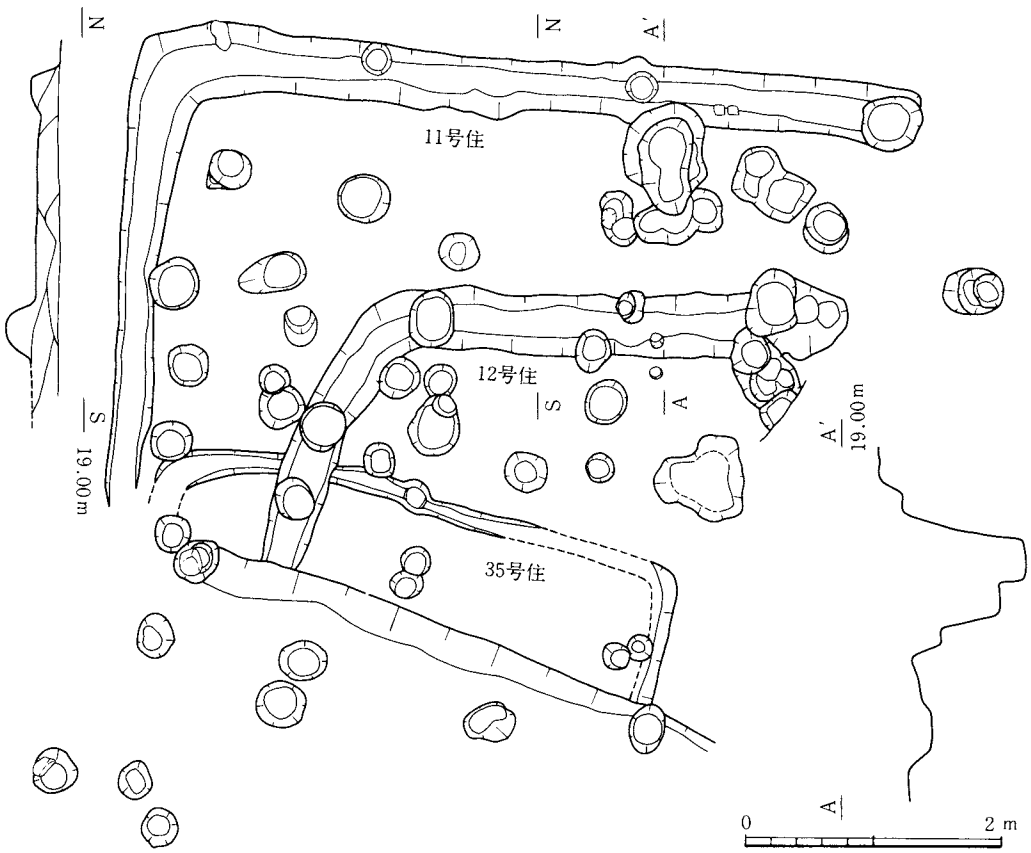
第17图 C調査区第32号竖穴住居跡実測図



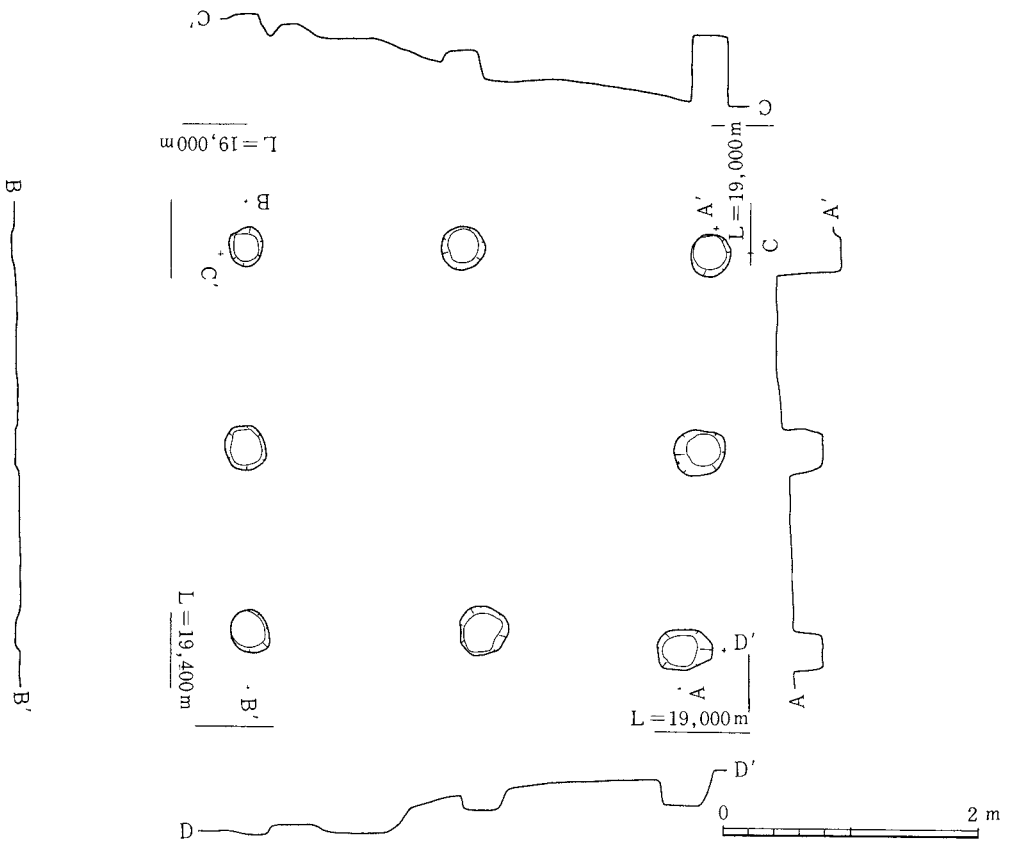
第18图 C調査区第33・34号竖穴住居跡実測図



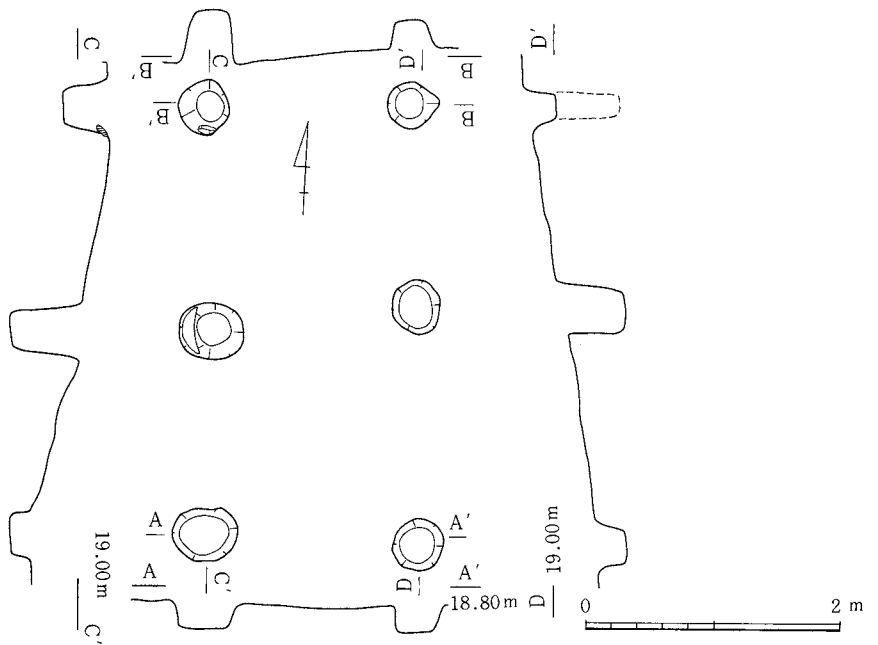
第19図 C調査区第35号竖穴住居跡実測図



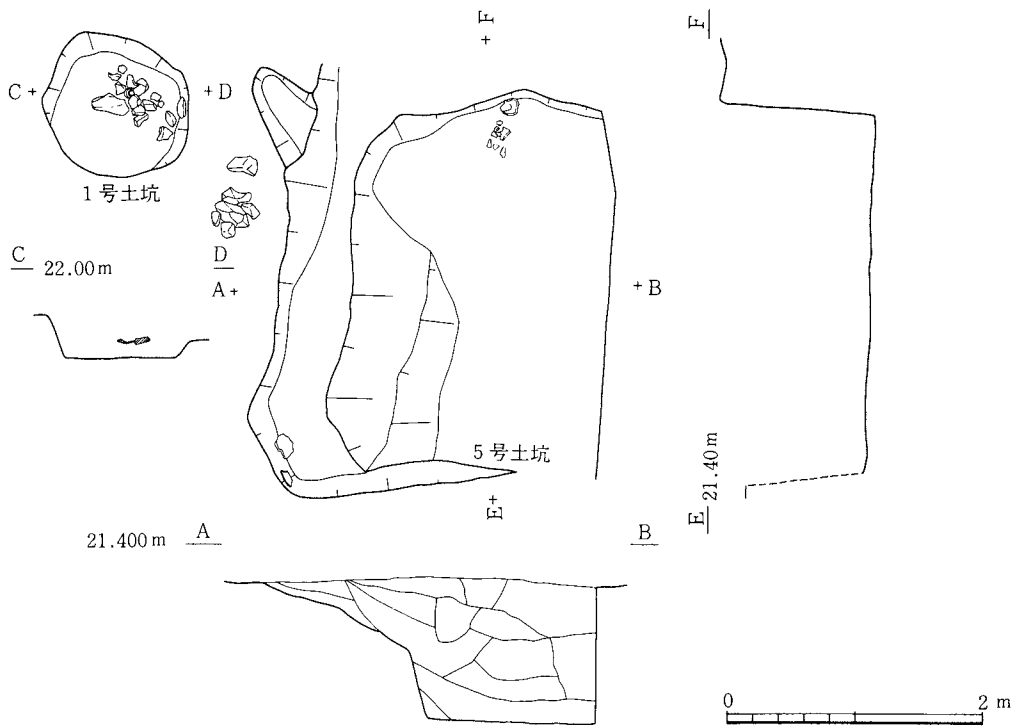
第20図 C調査区第11・12・35号竖穴住居跡



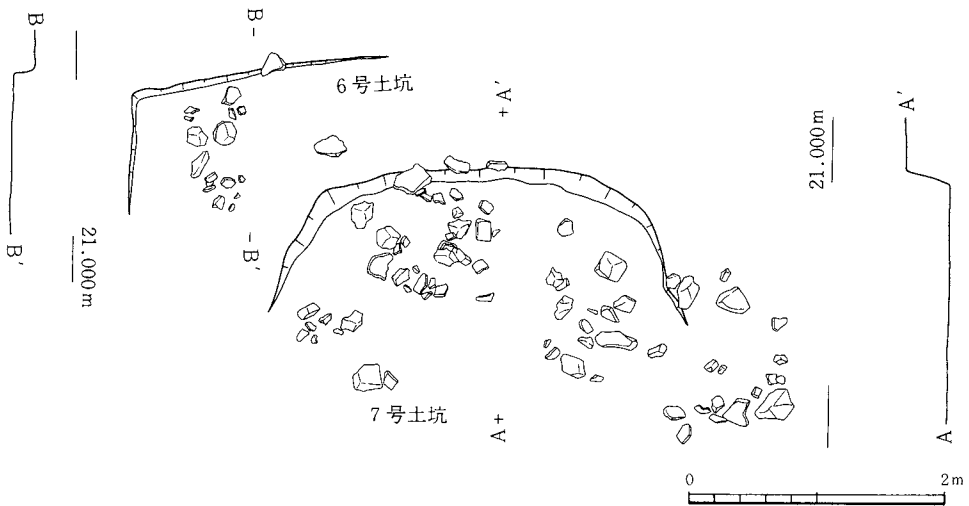
第21図 C調査区第1号掘立柱建物実測図



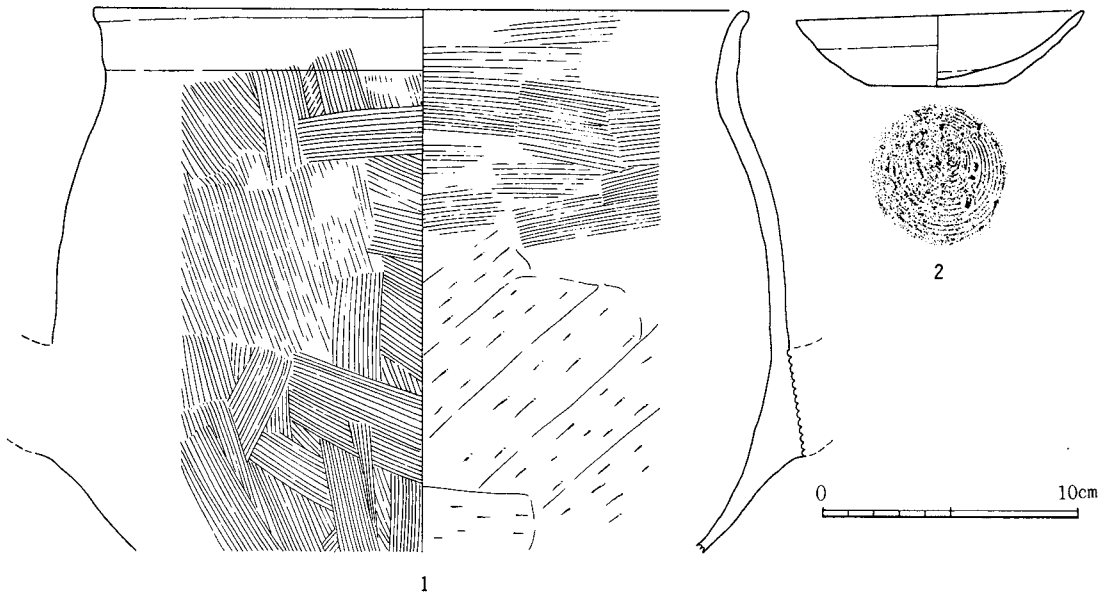
第22図 C調査区第2号掘立柱建物実測図



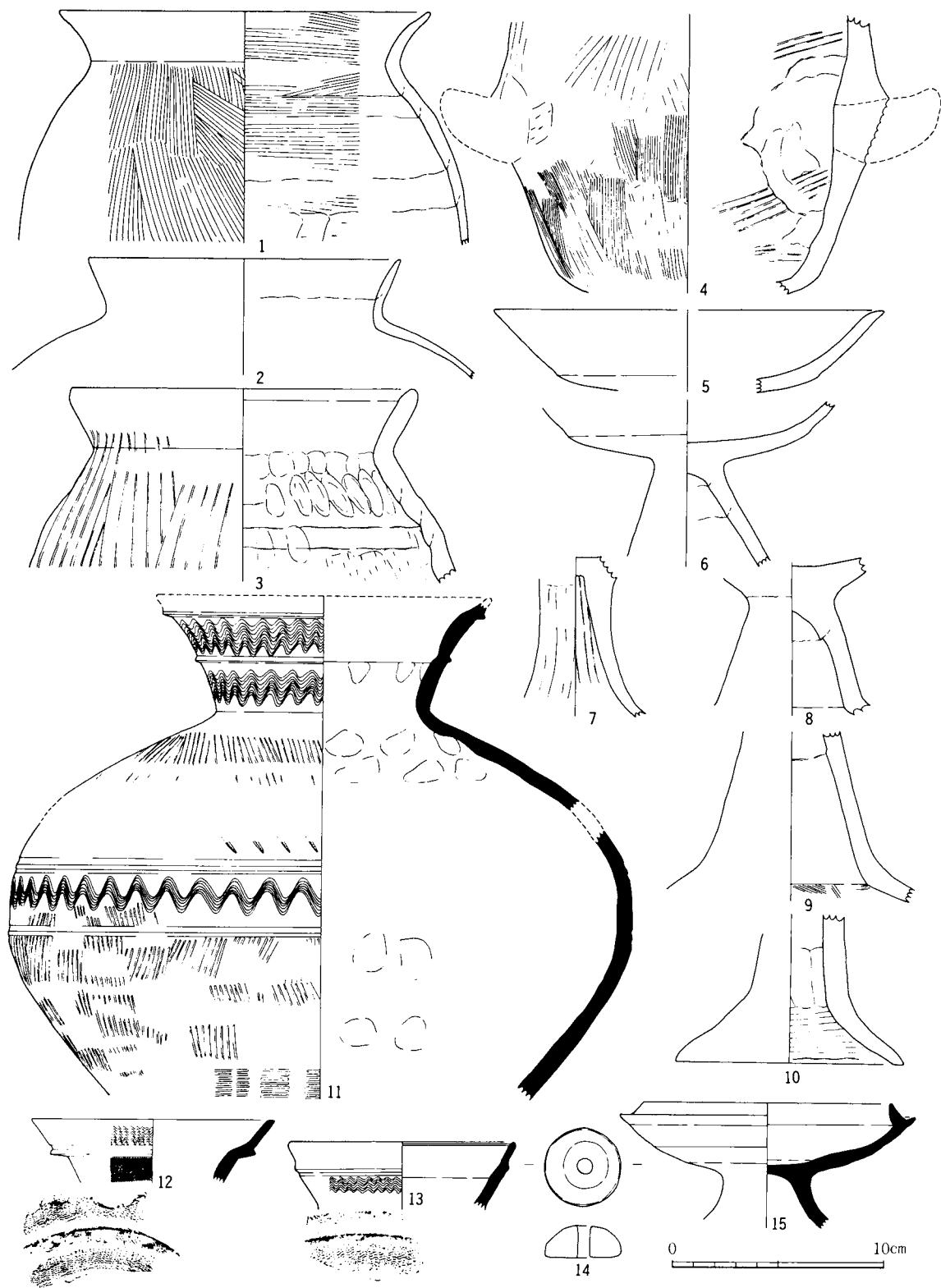
第23图 C調査区第1・5号土坑実測図



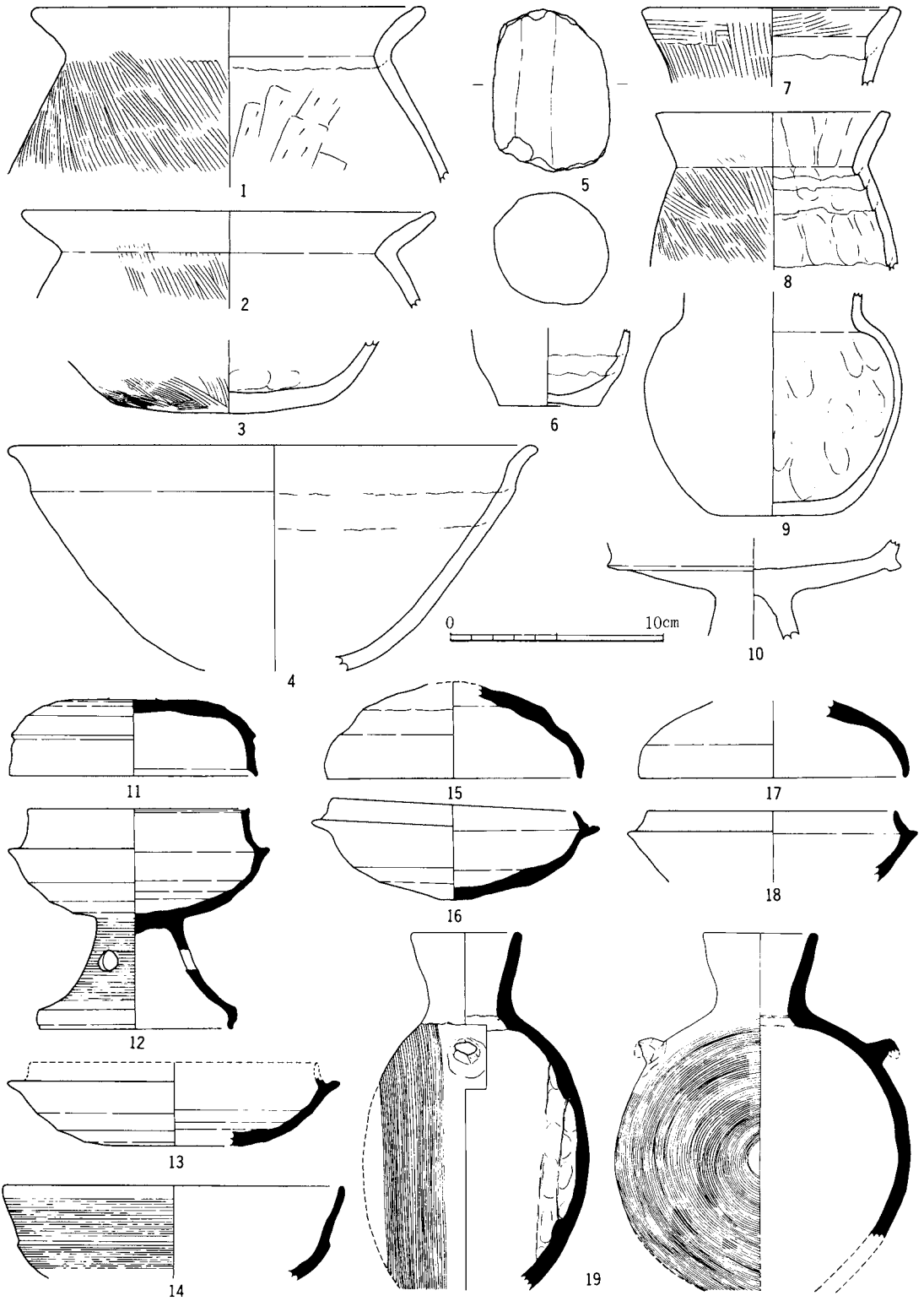
第24图 C調査区第6・7号土坑実測図



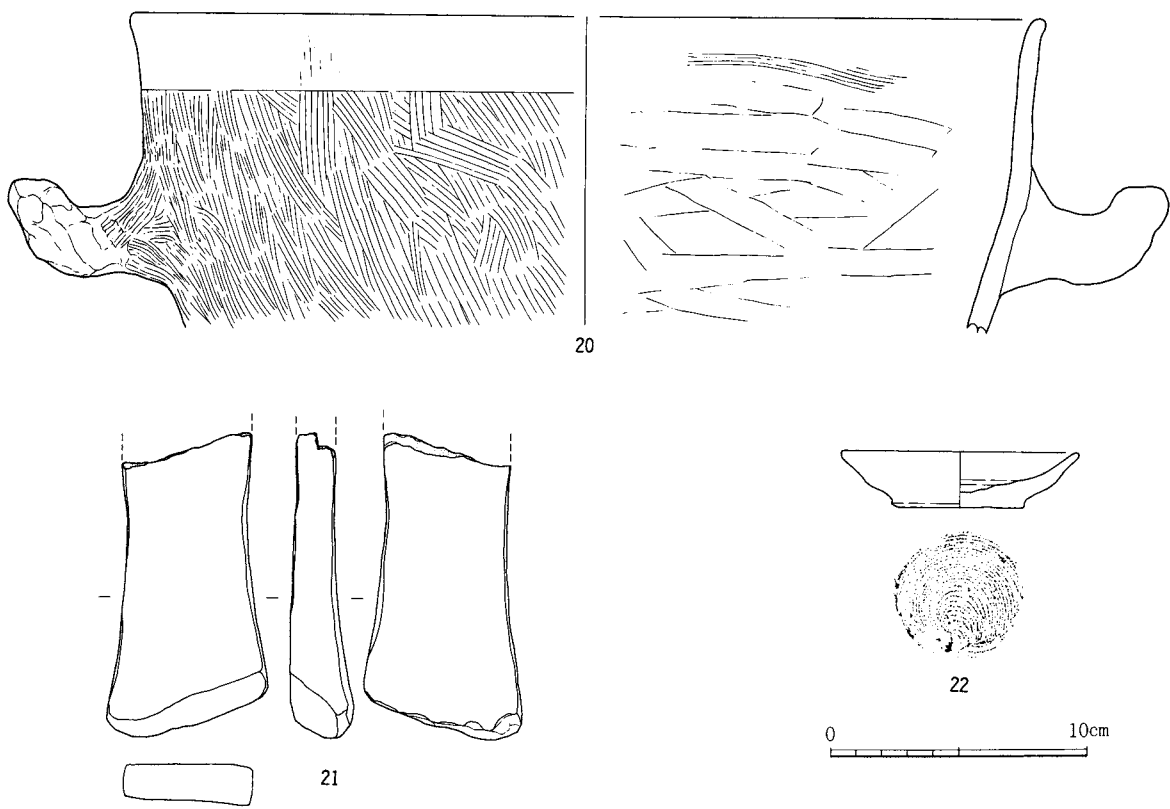
第25図 C調査区第1号竖穴住居跡内出土遺物



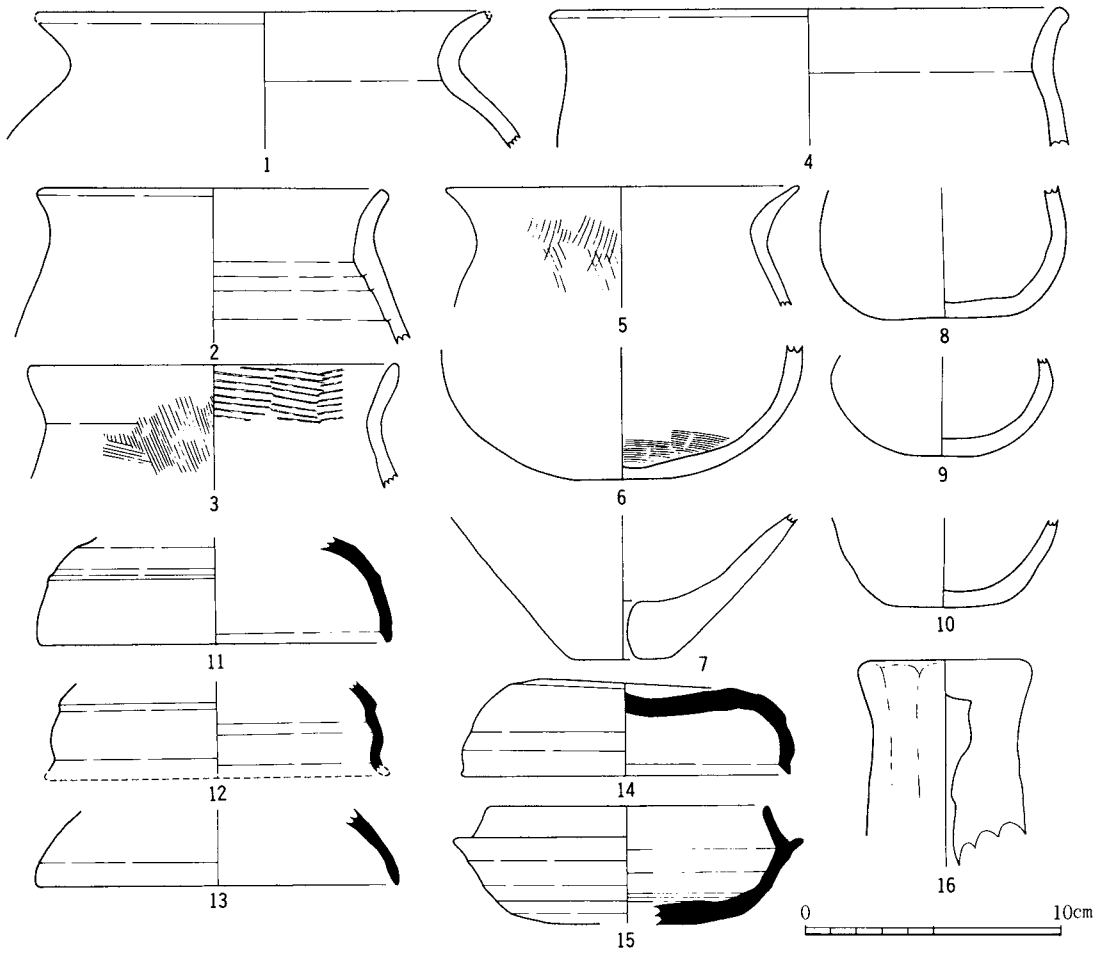
第26図 C調査区第2号竖穴住居跡内出土遺物



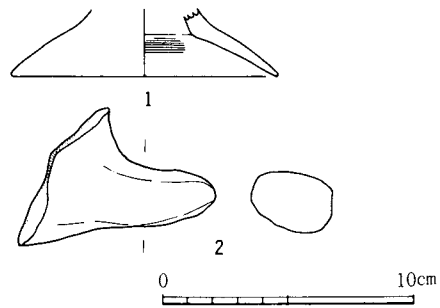
第27图 C 調査区第3号竖穴住居跡内出土遺物 (I)



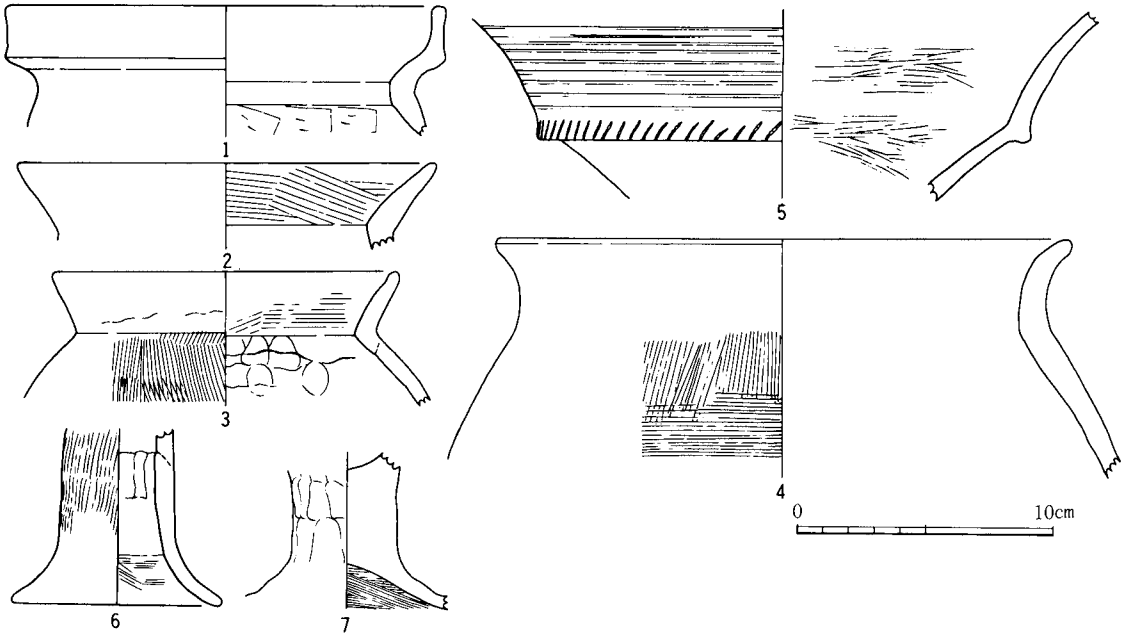
第28図 C調査区第3号竖穴住居跡内出土遺物（II）



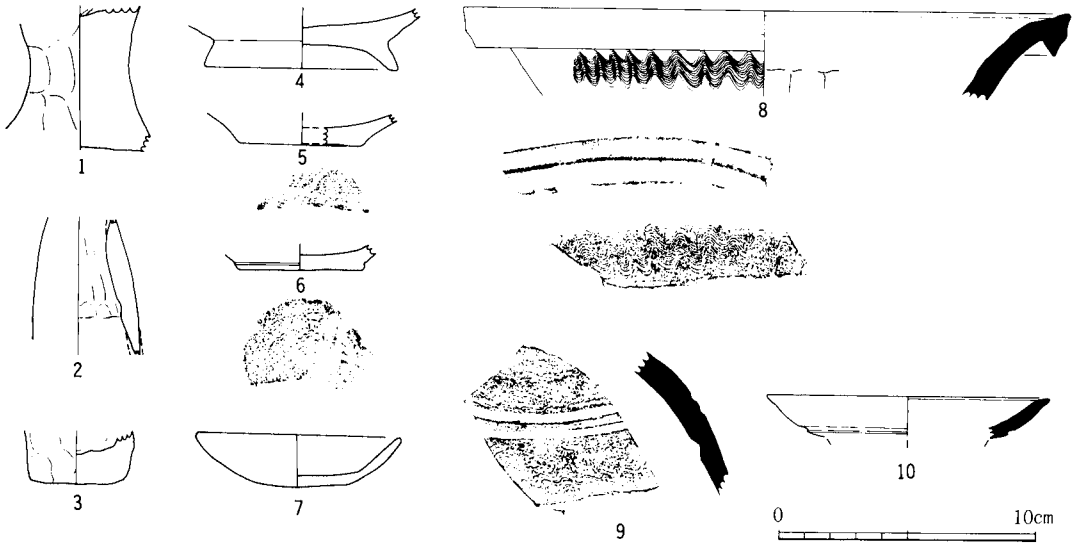
第29図 C調査区第4号竖穴住居跡内出土遺物



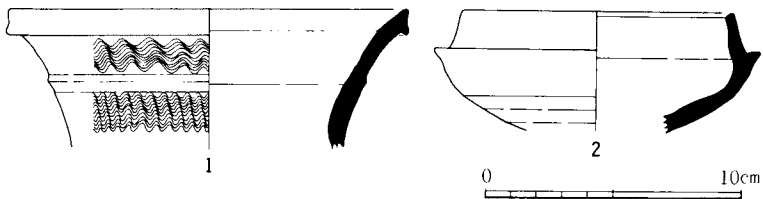
第30図 C調査区第6号竖穴住居跡内出土遺物



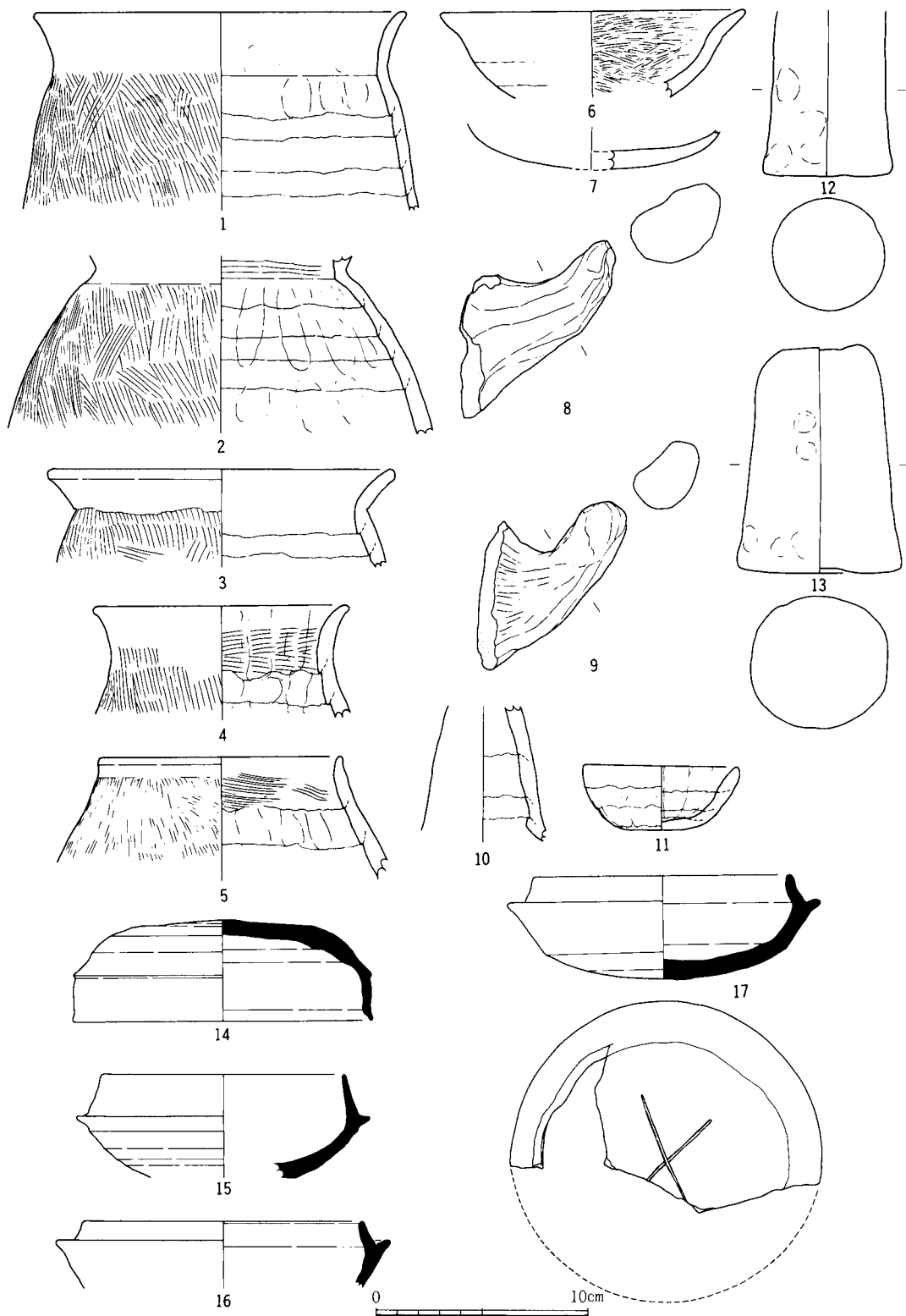
第31図 C調査区第7号竖穴住居跡内出土遺物



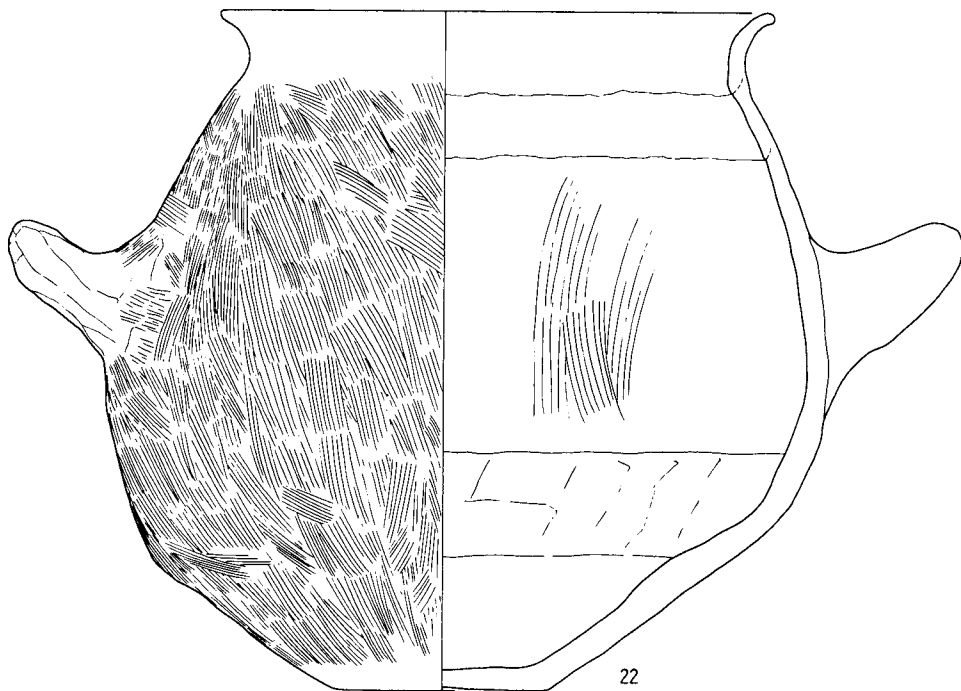
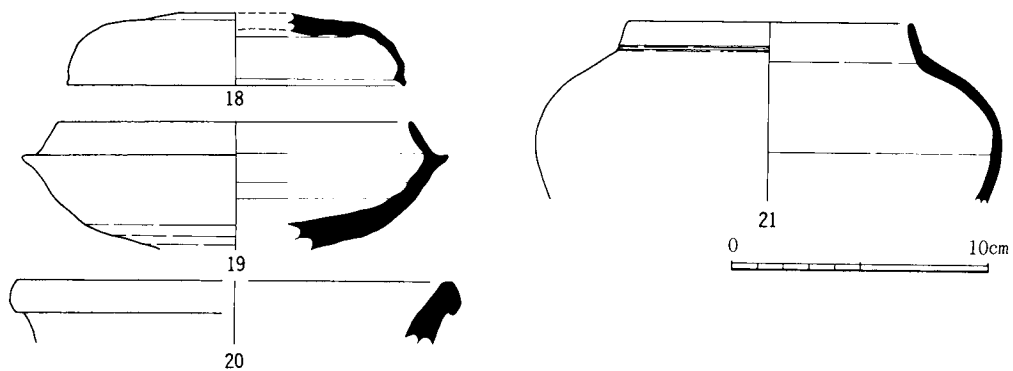
第32図 C調査区第8号竖穴住居跡内出土遺物



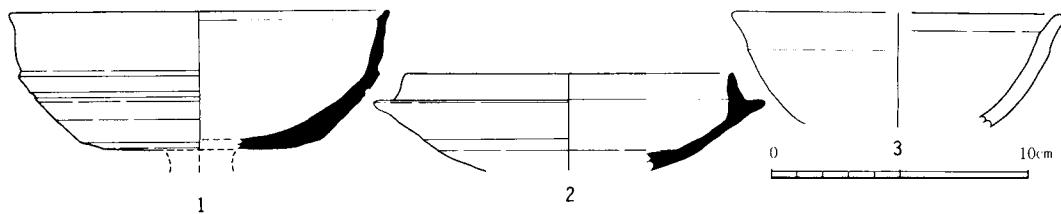
第33図 C調査区第9号竖穴住居跡内出土遺物



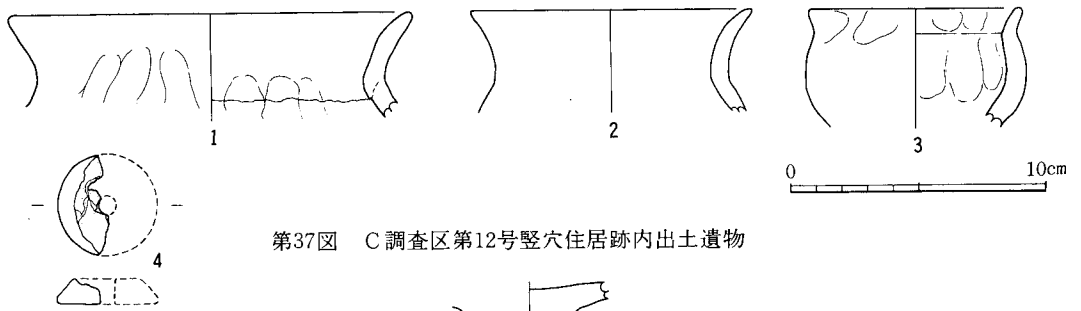
第34図 C調査区第10号竖穴住居跡内出土遺物（I）



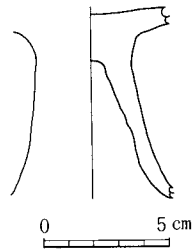
第35図 C調査区第10号竖穴住居跡内出土遺物(II)



第36図 C調査区第11号竖穴住居跡内出土遺物

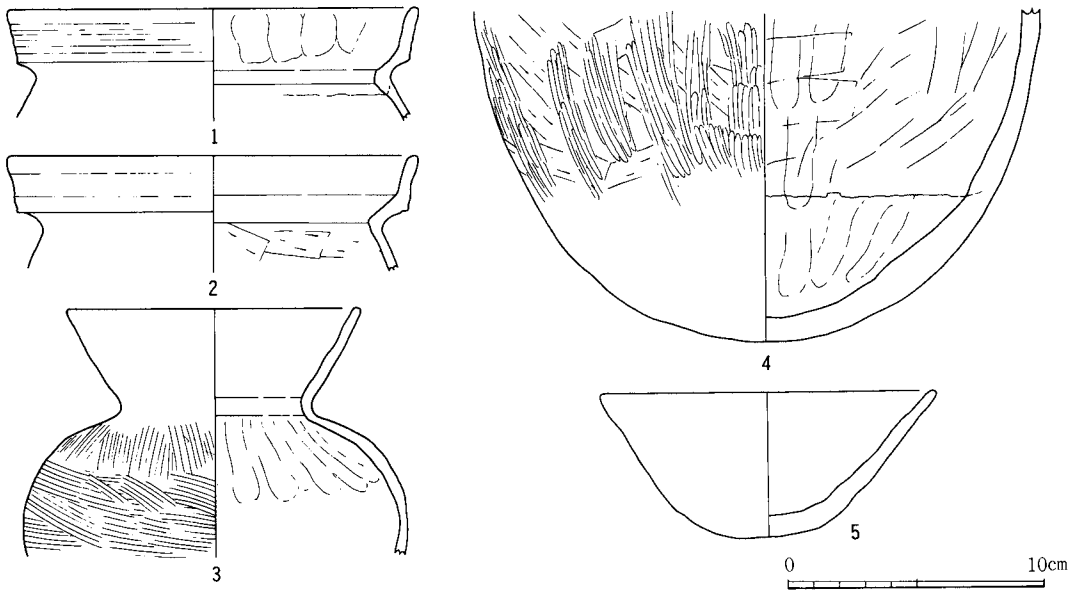


第37図 C調査区第12号竖穴住居跡内出土遺物

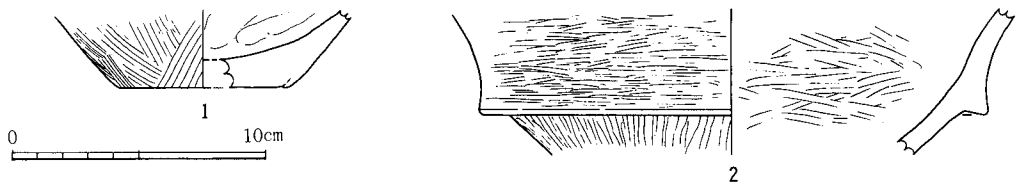


16号住

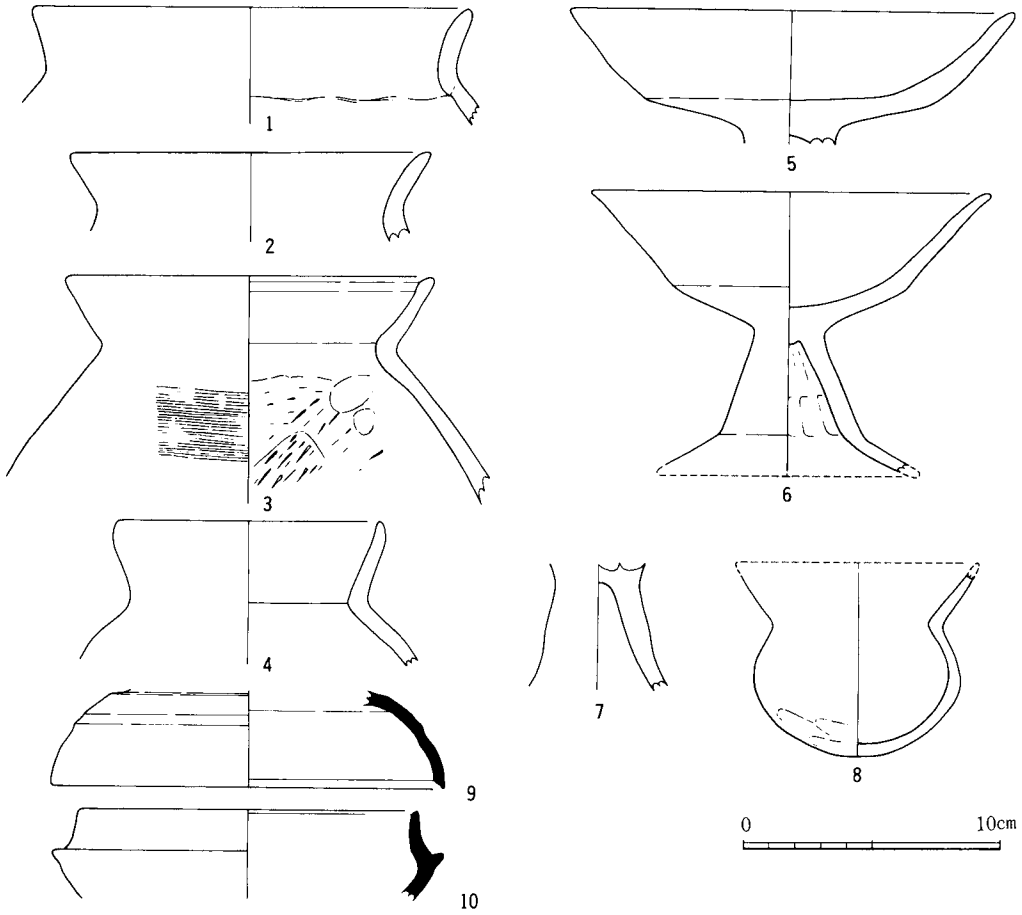
第38図 C調査区第16号竖穴住居跡内出土遺物



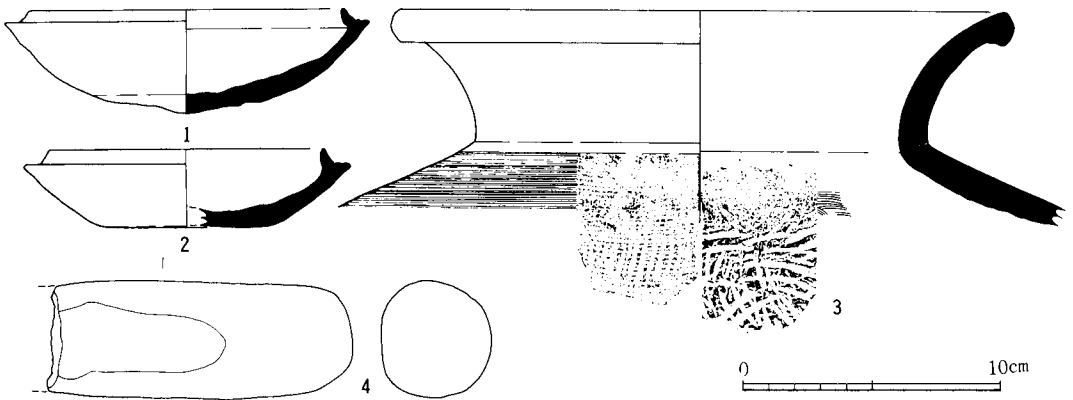
第39図 C調査区第19号竖穴住居跡内出土遺物



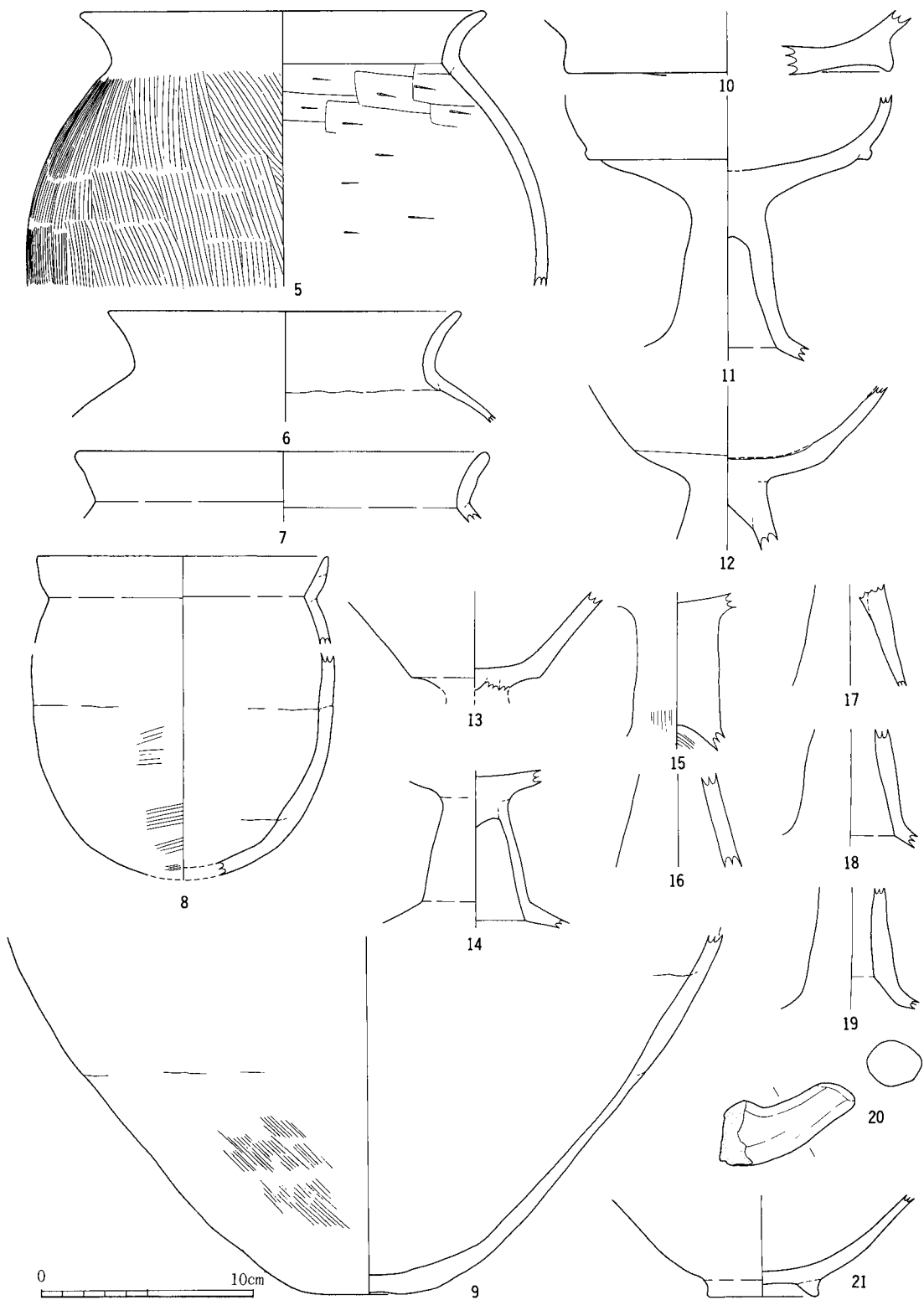
第40図 C調査区第21号竖穴住居跡内出土遺物



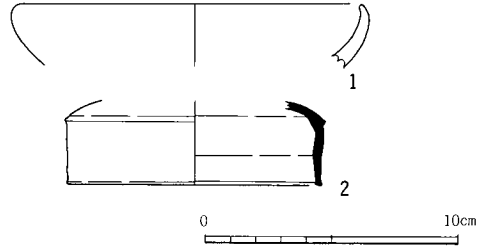
第41図 C調査区第23号竖穴住居跡内出土遺物



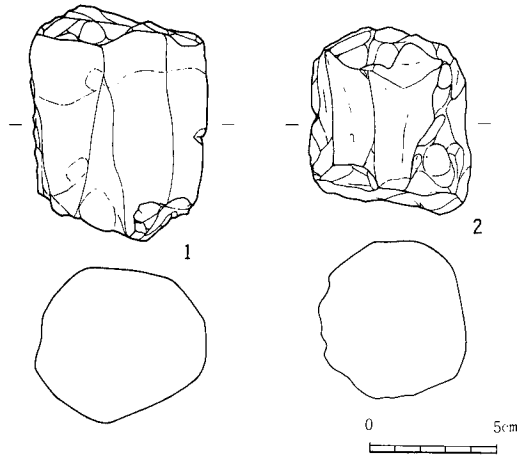
第42図 C調査区第24号竖穴住居跡内出土遺物（I）



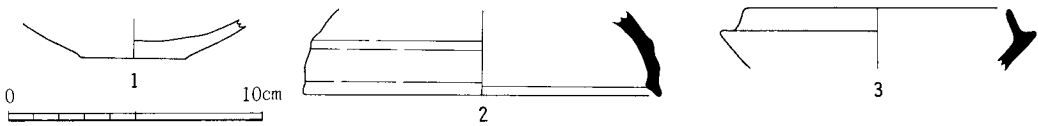
第43図 C調査区第24号竪穴住居跡内出土遺物（II）



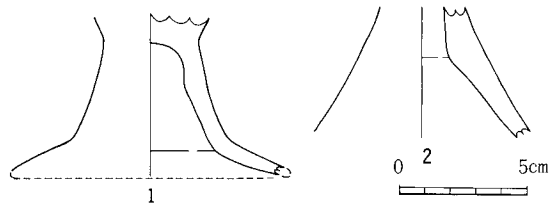
第44図 C調査区第25号竖穴住居跡内出土遺物



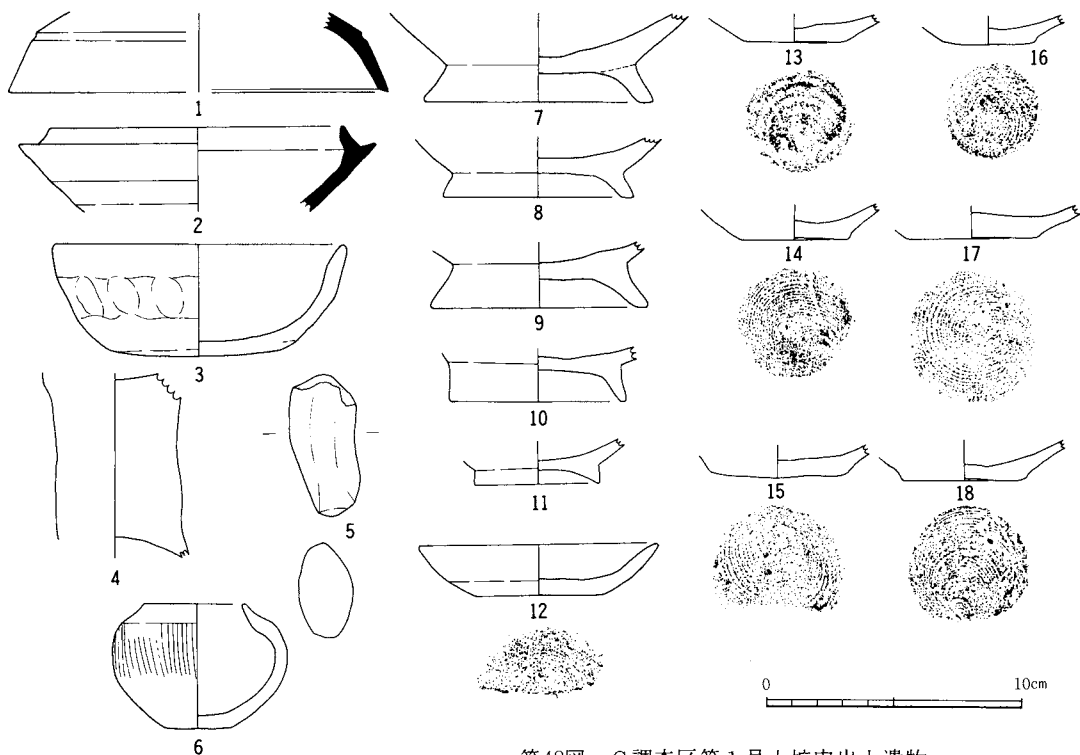
第45図 C調査区第26号竖穴住居跡内出土遺物



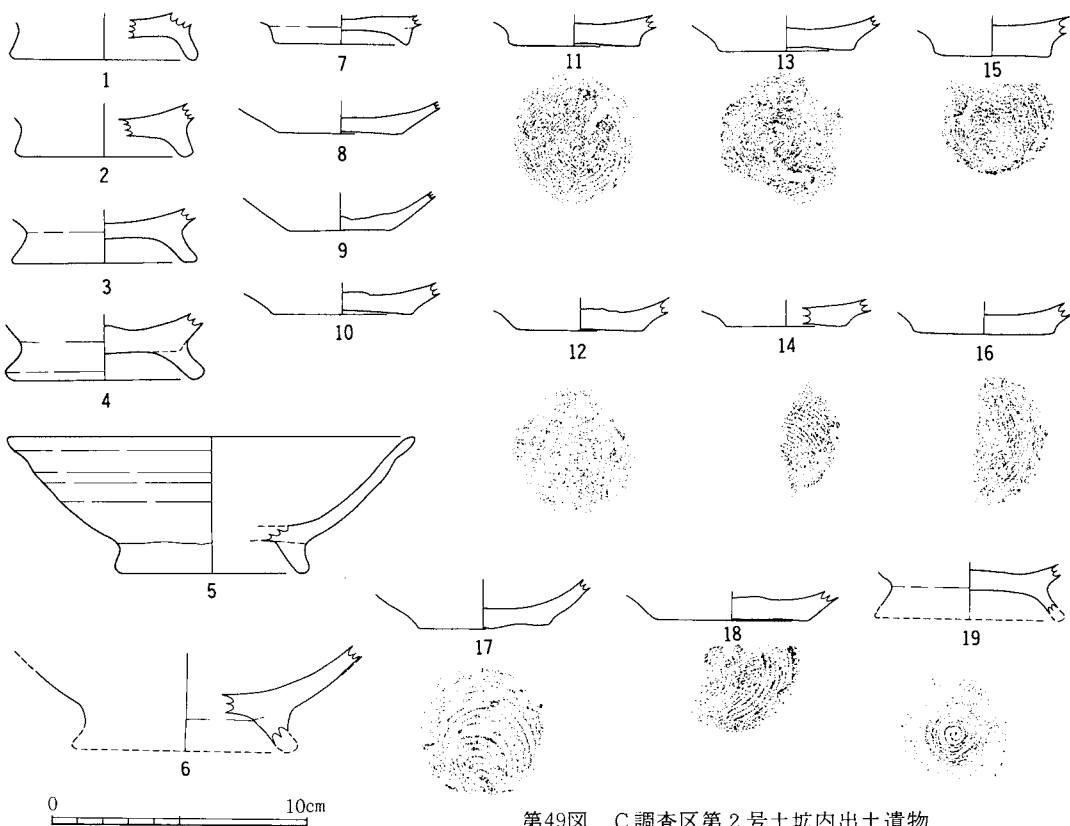
第46図 C調査区第27号竖穴住居跡内出土遺物



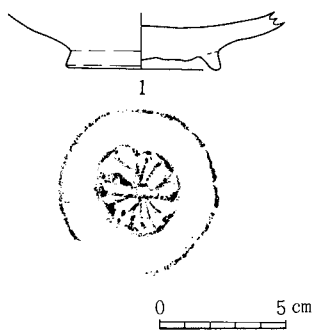
第47図 C調査区第29号竖穴住居跡内出土遺物



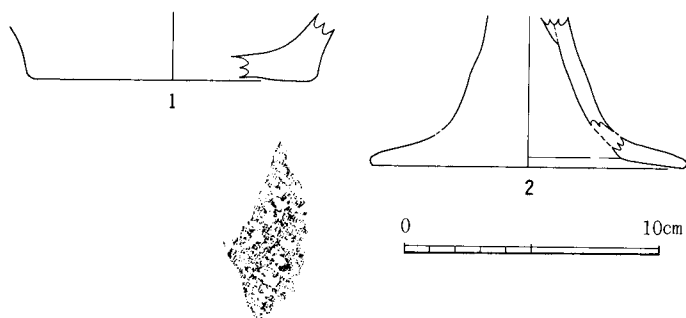
第48図 C調査区第1号土坑内出土遺物



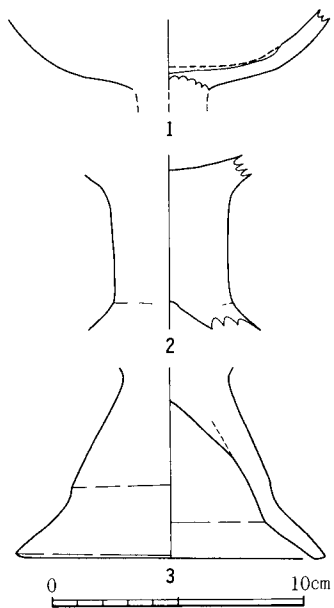
第49図 C調査区第2号土坑内出土遺物



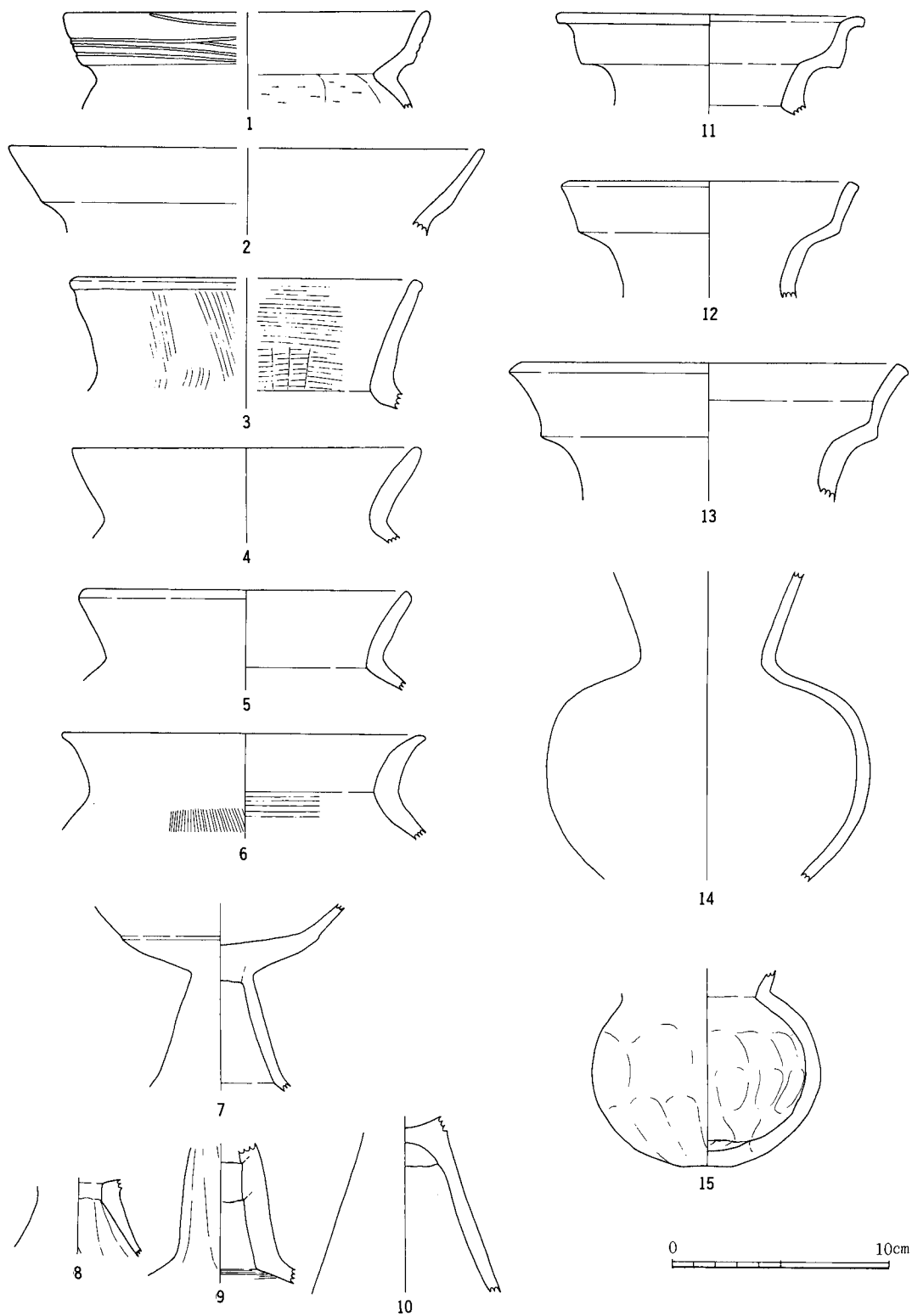
第50図 C調査区第4号土坑内出土遺物



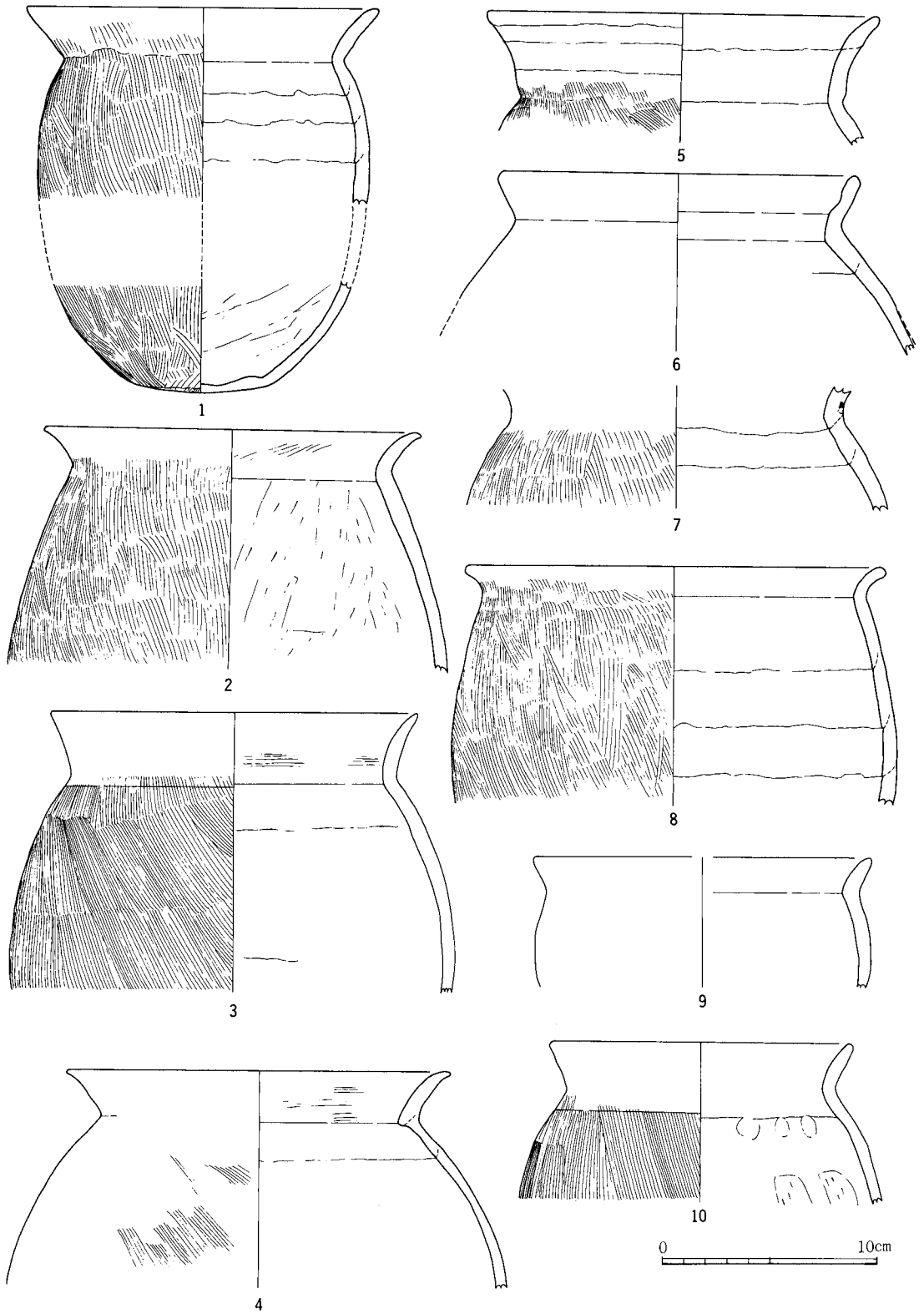
第51図 C調査区第5号土坑内出土遺物



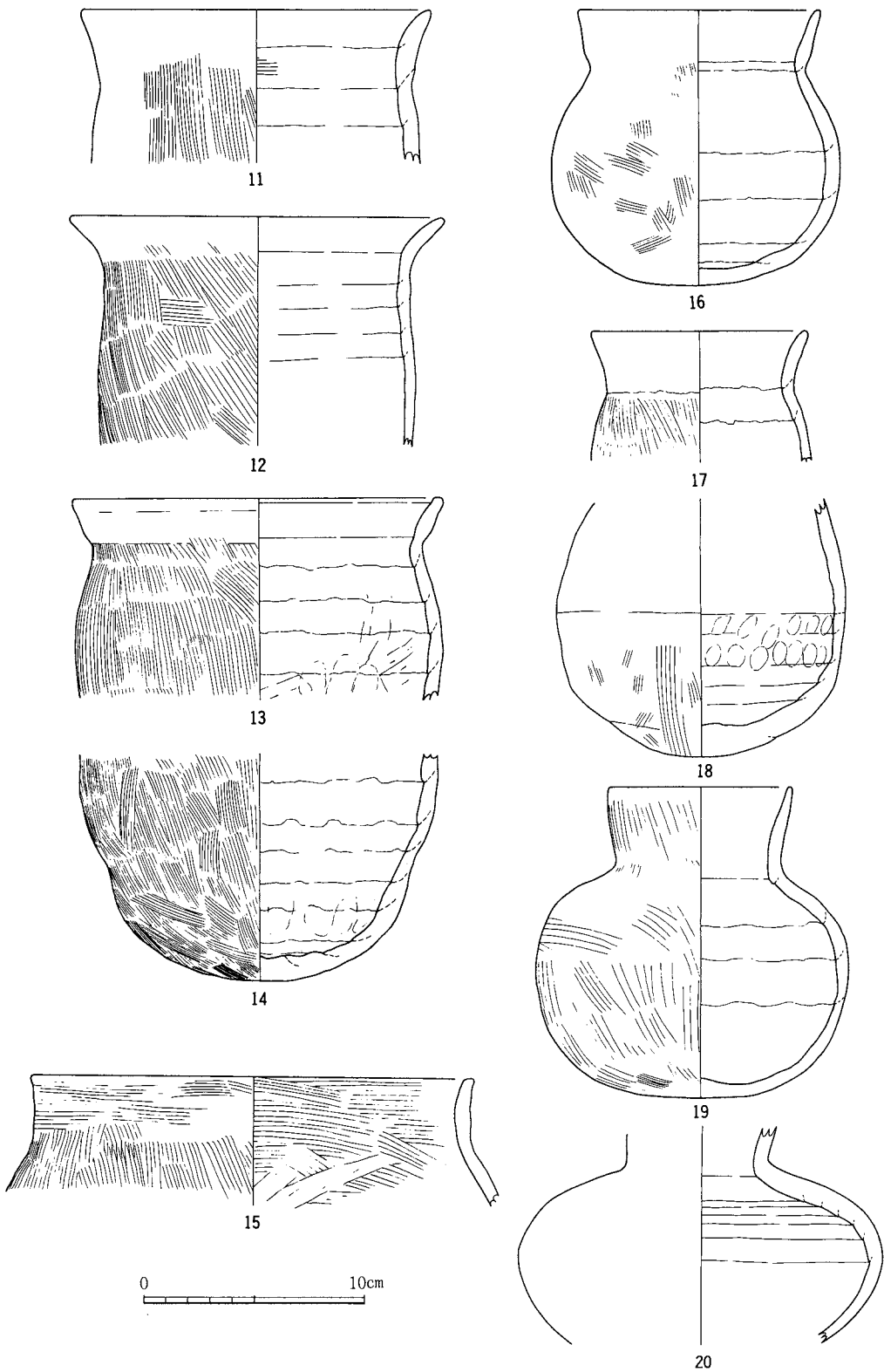
第52図 C調査区第6号土坑内出土遺物



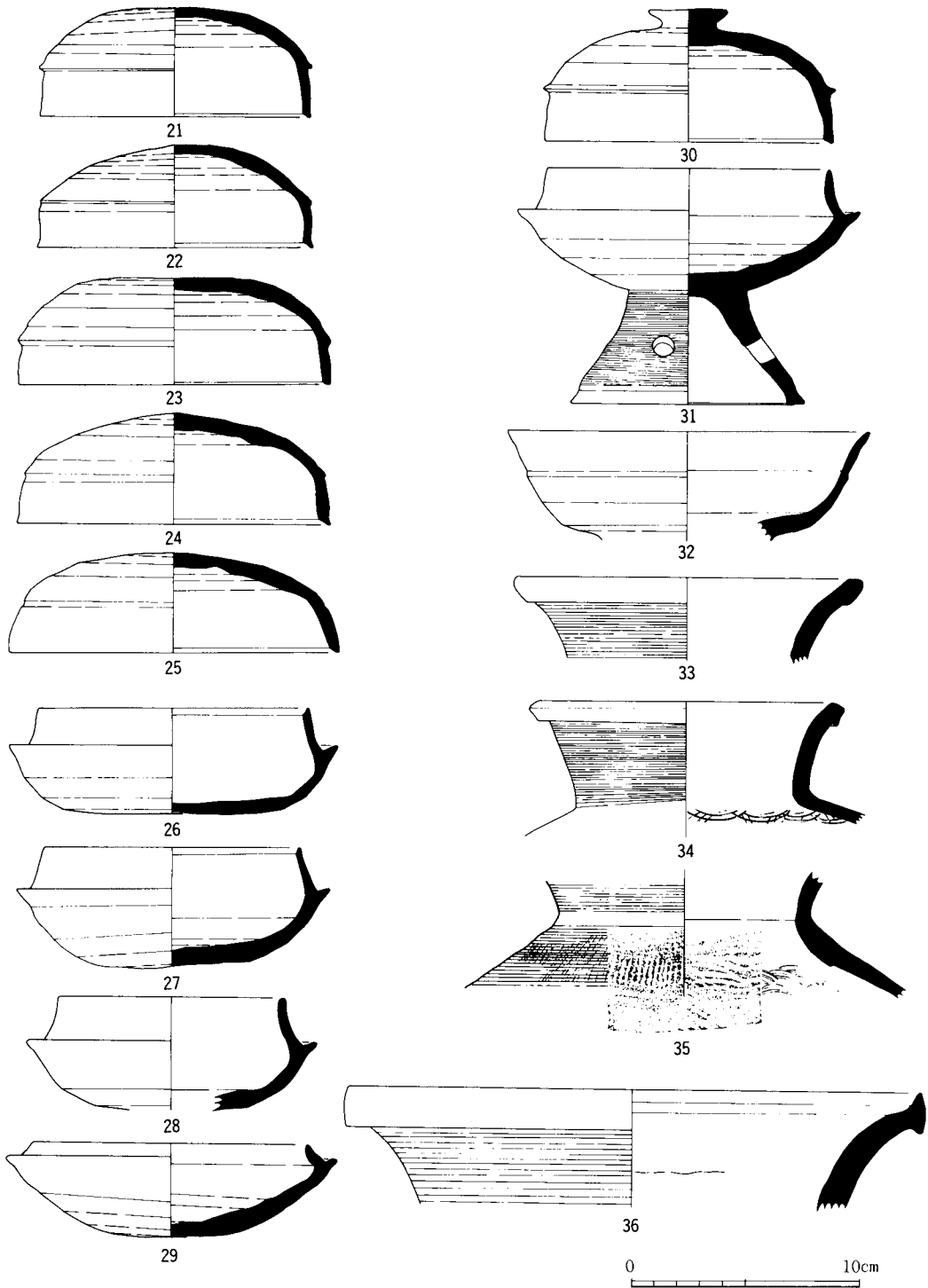
第53図 C調査区第1号溝内出土遺物



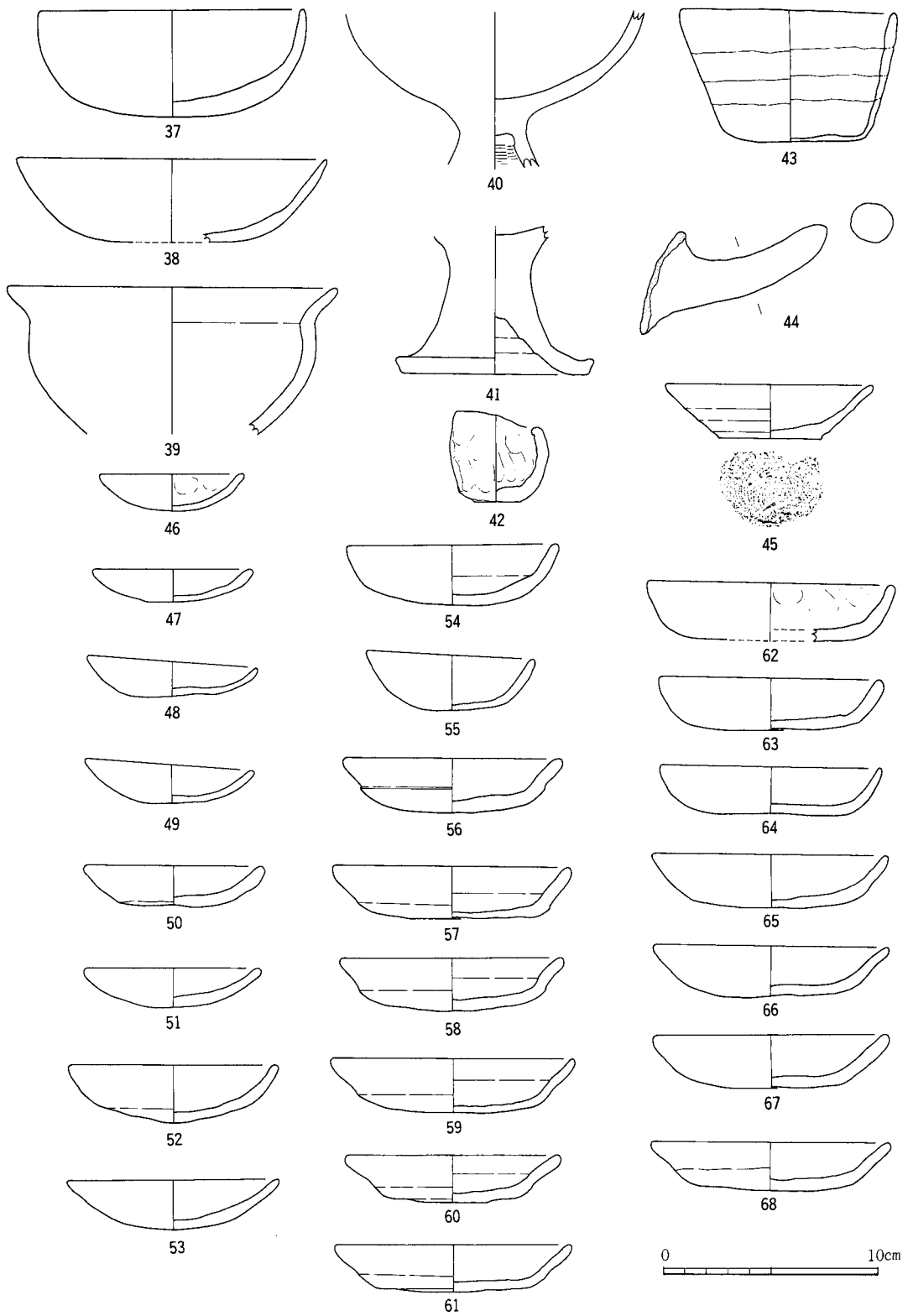
第54図 C調査区土器溜り出土遺物（I）



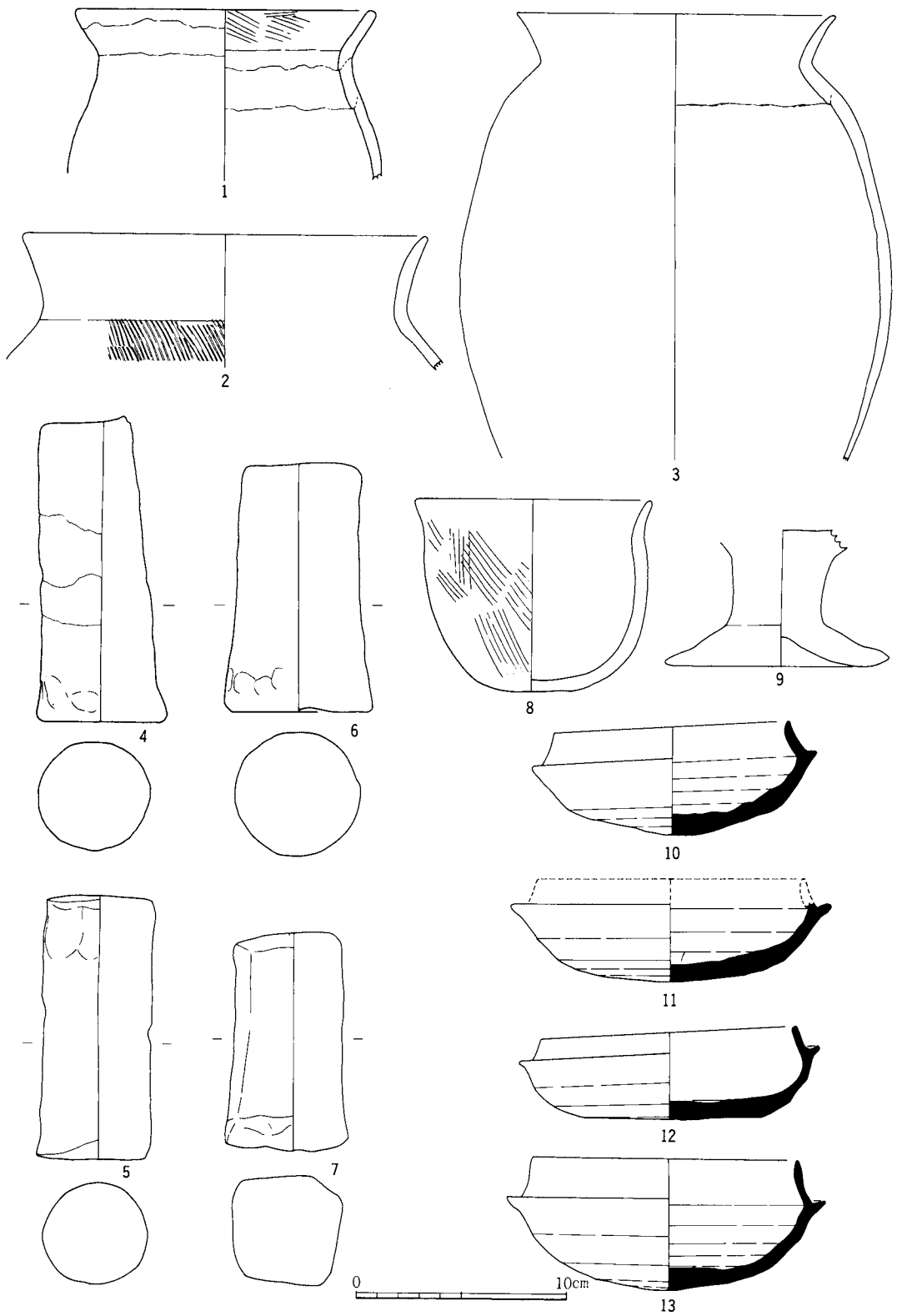
第55図 C調査区土器溜り出土遺物(II)



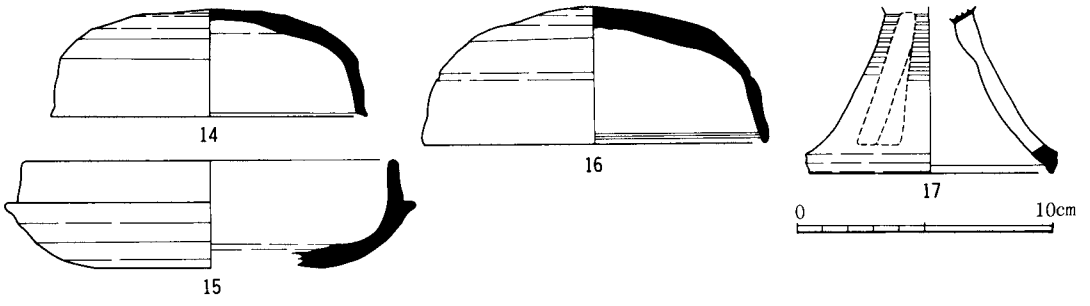
第56図 C調査区土器溜り出土遺物(Ⅲ)



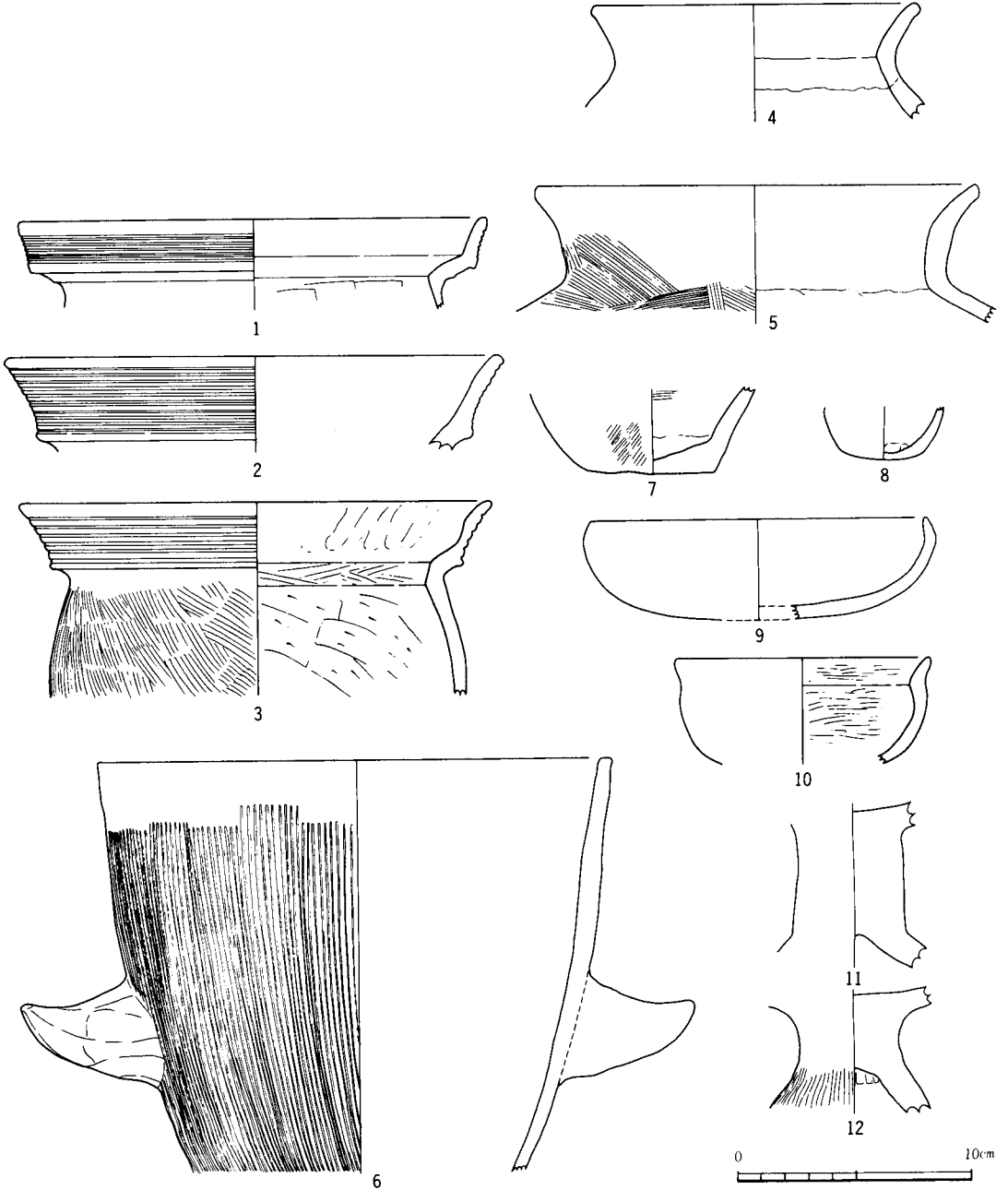
第57図 C調査区土器溜り出土遺物(Ⅳ)



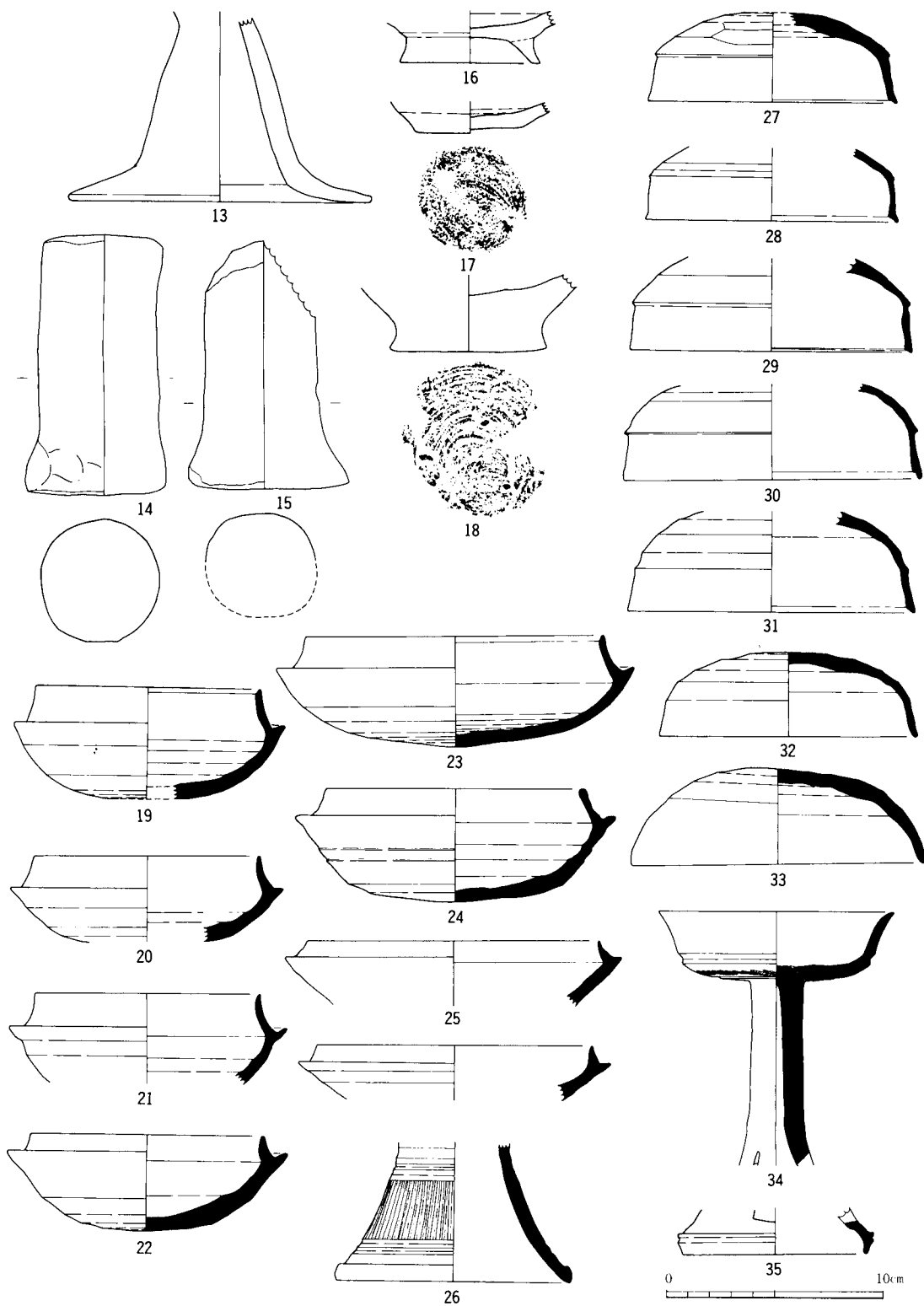
第58図 C調査区南側土器溜り出土遺物（I）



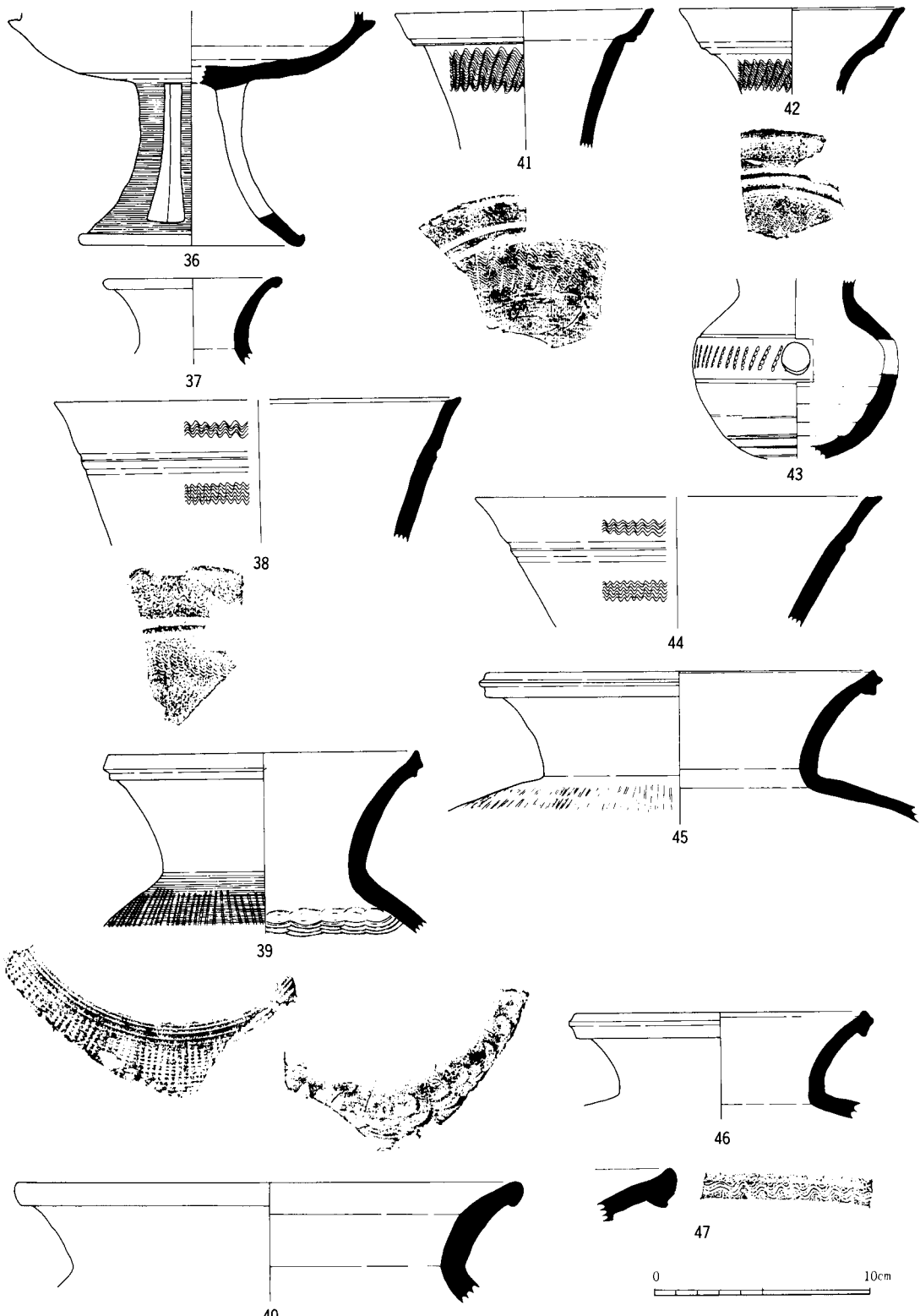
第59図 C調査区南側土器溜り出土遺物(Ⅱ)



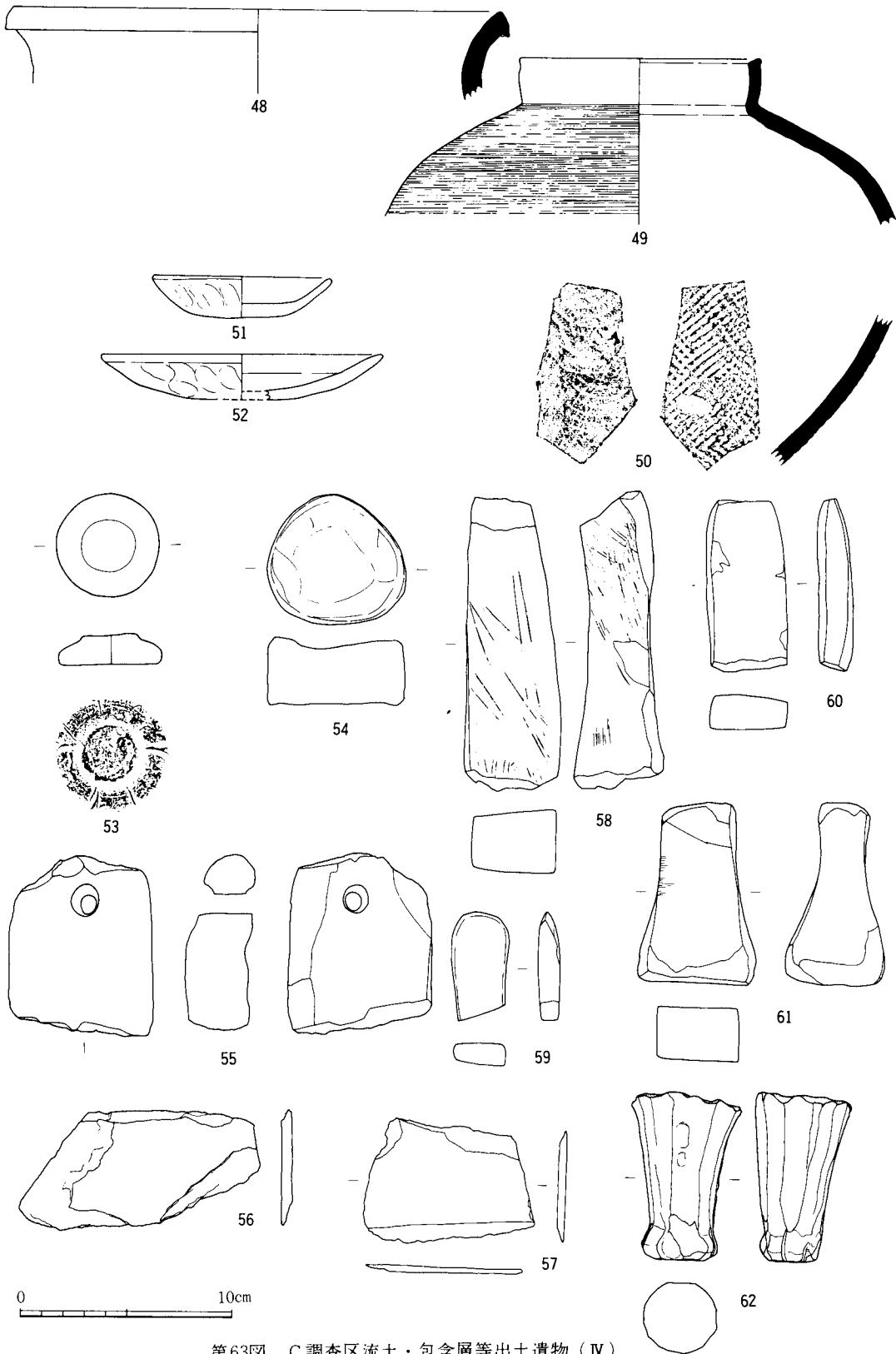
第60図 C調査区流土・包含層等出土遺物(Ⅰ)



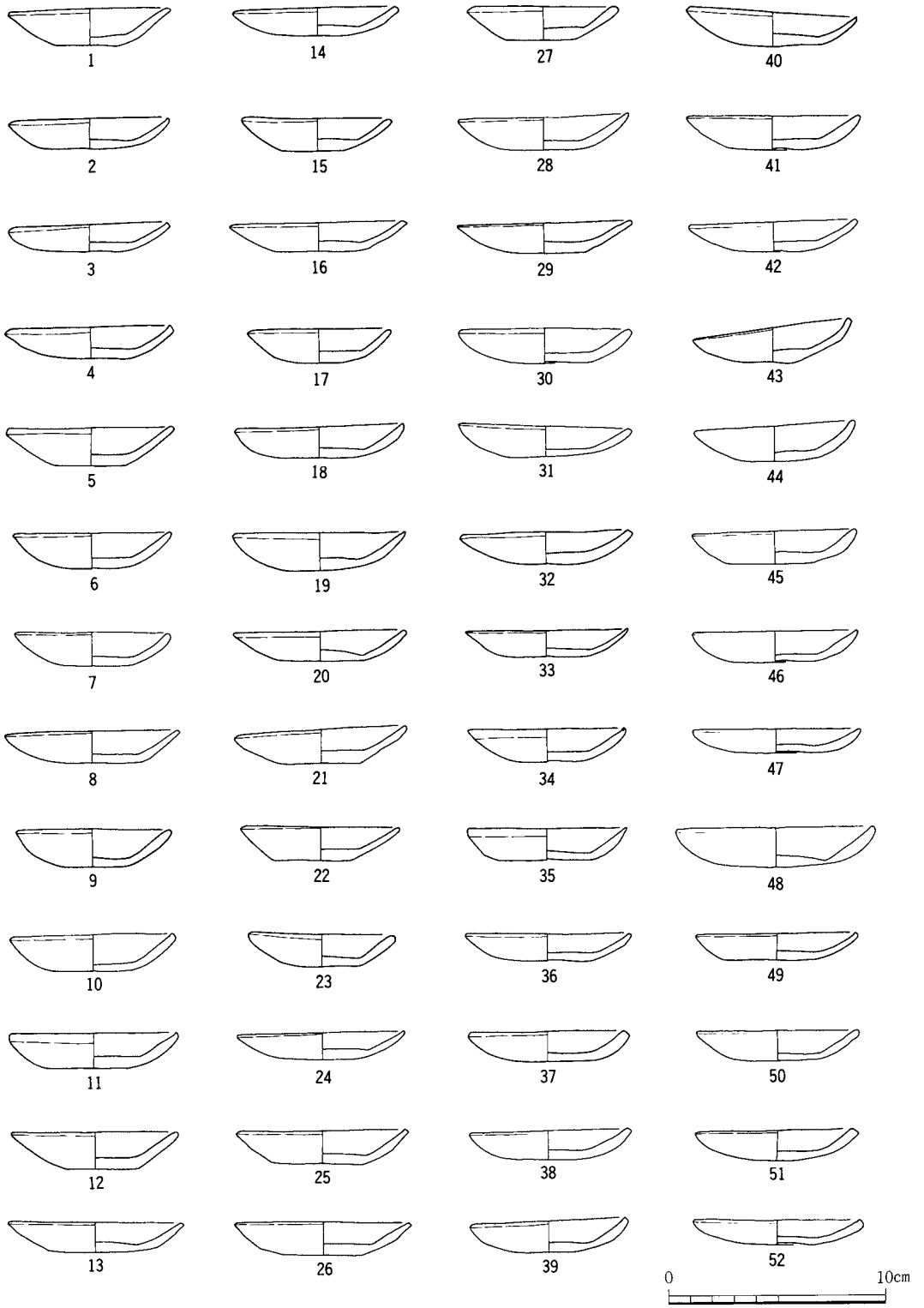
第61図 C調査区流土・包含層等出土遺物（II）



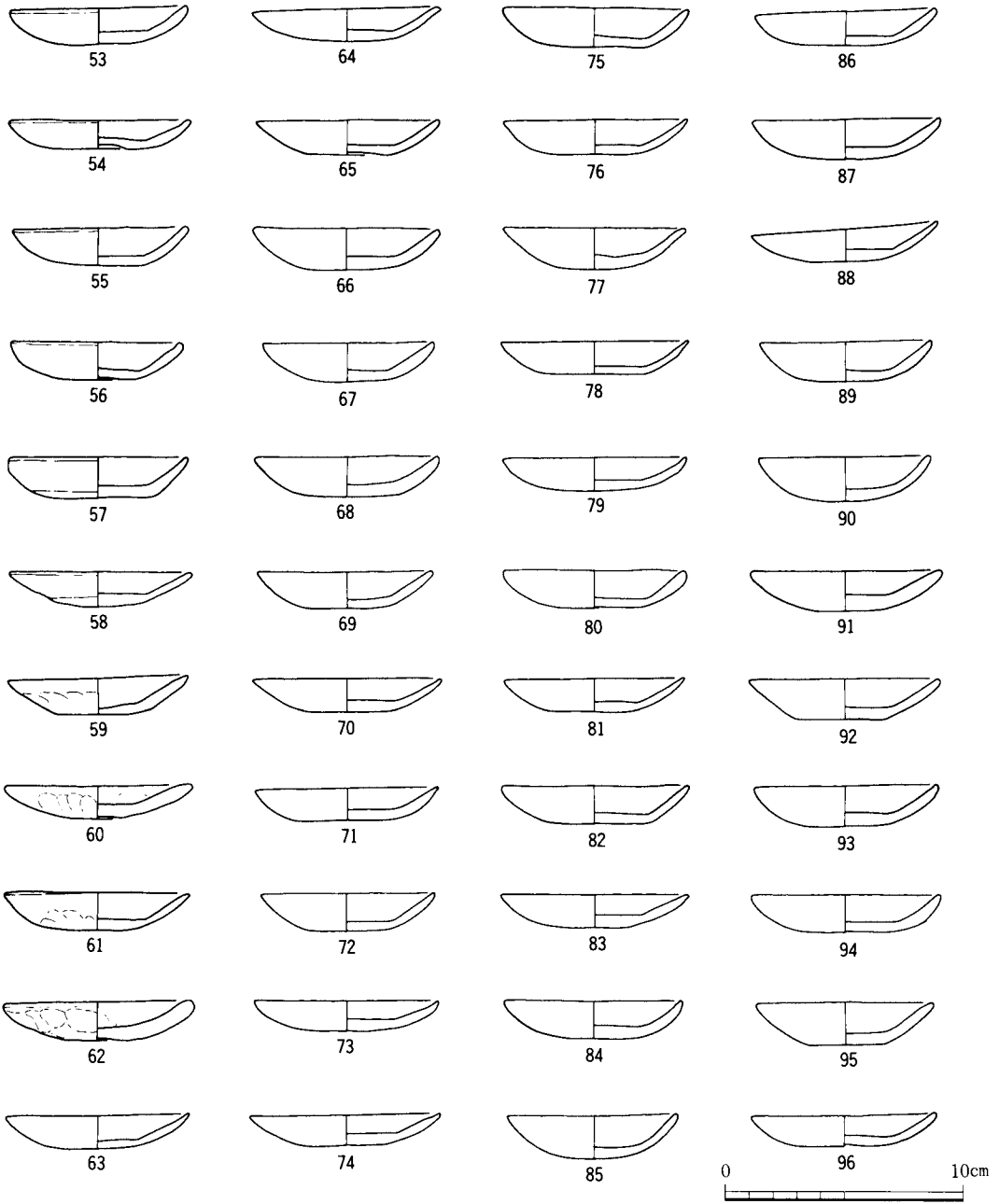
第62図 C調査区流土・包含層等出土遺物(Ⅲ)



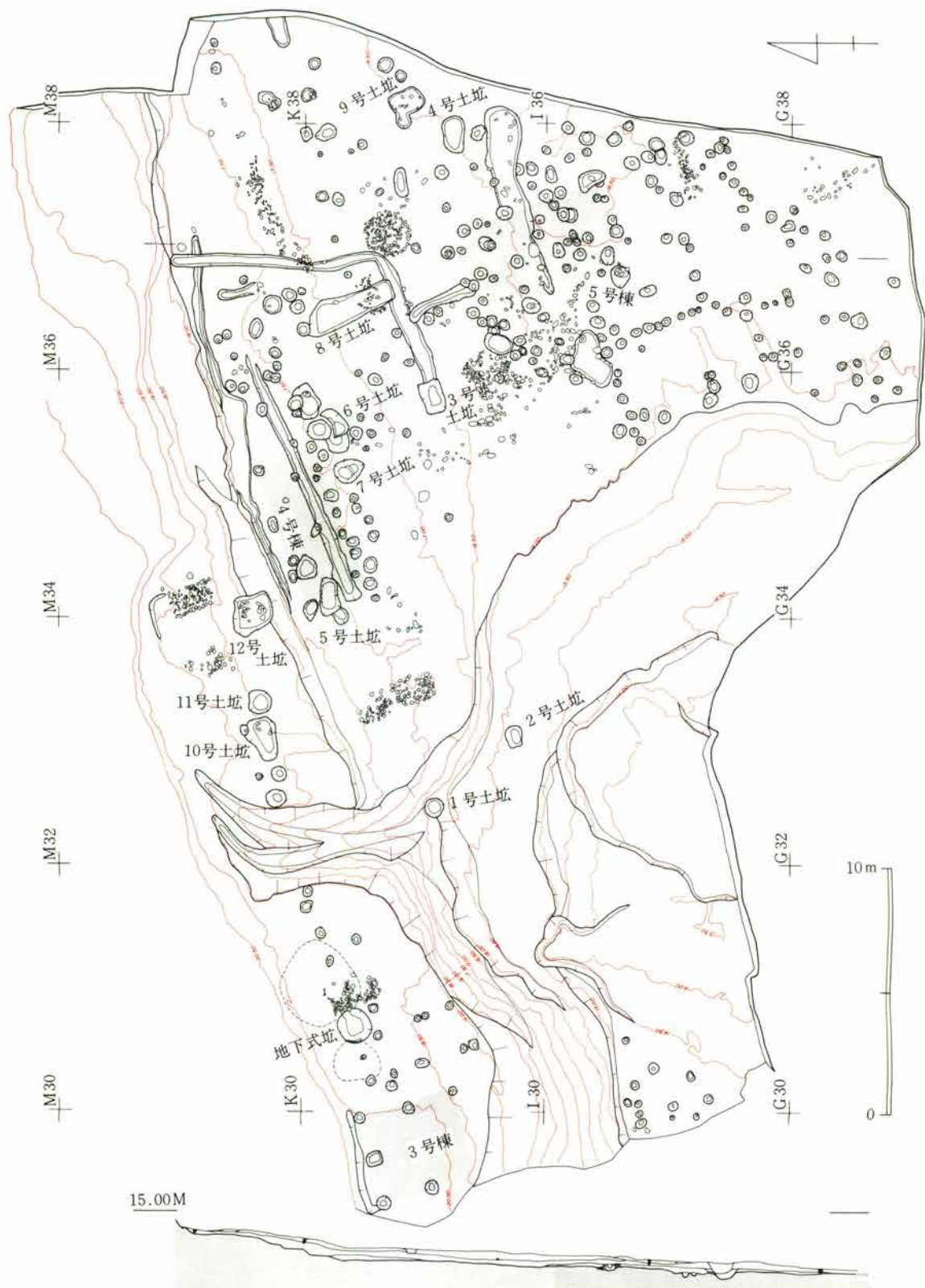
第63図 C調査区流土・包含層等出土遺物(Ⅳ)



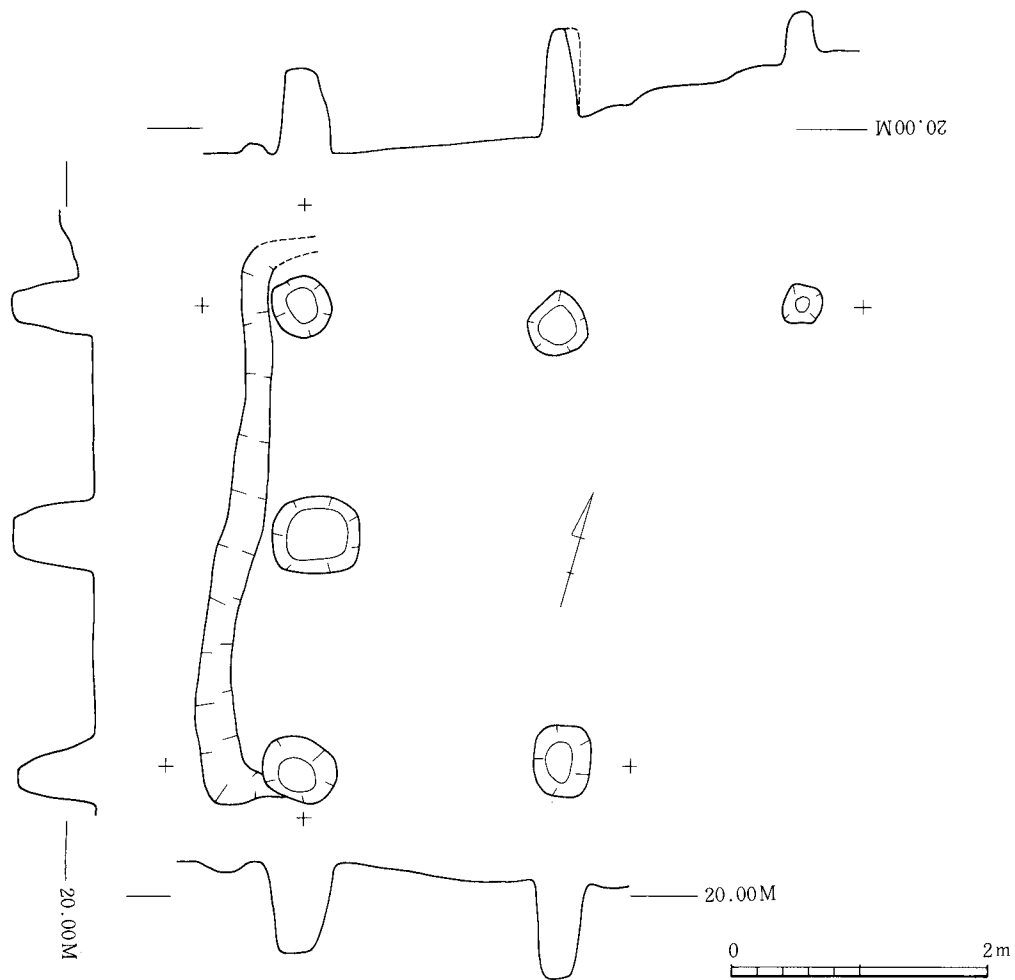
第64図 C調査区近世平担面出土遺物（I）



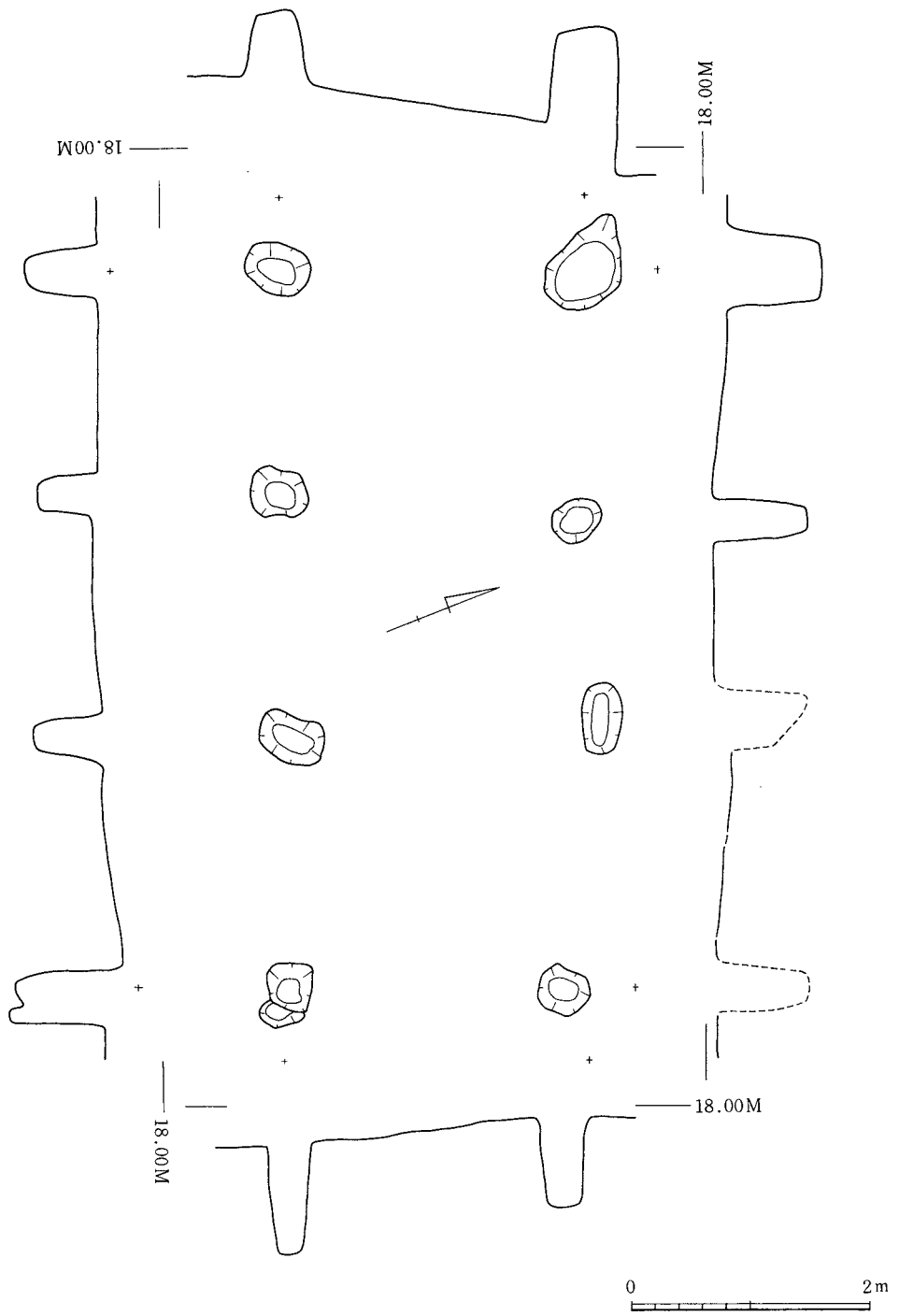
第65図 C調査区近世平坦面出土遺物(II)



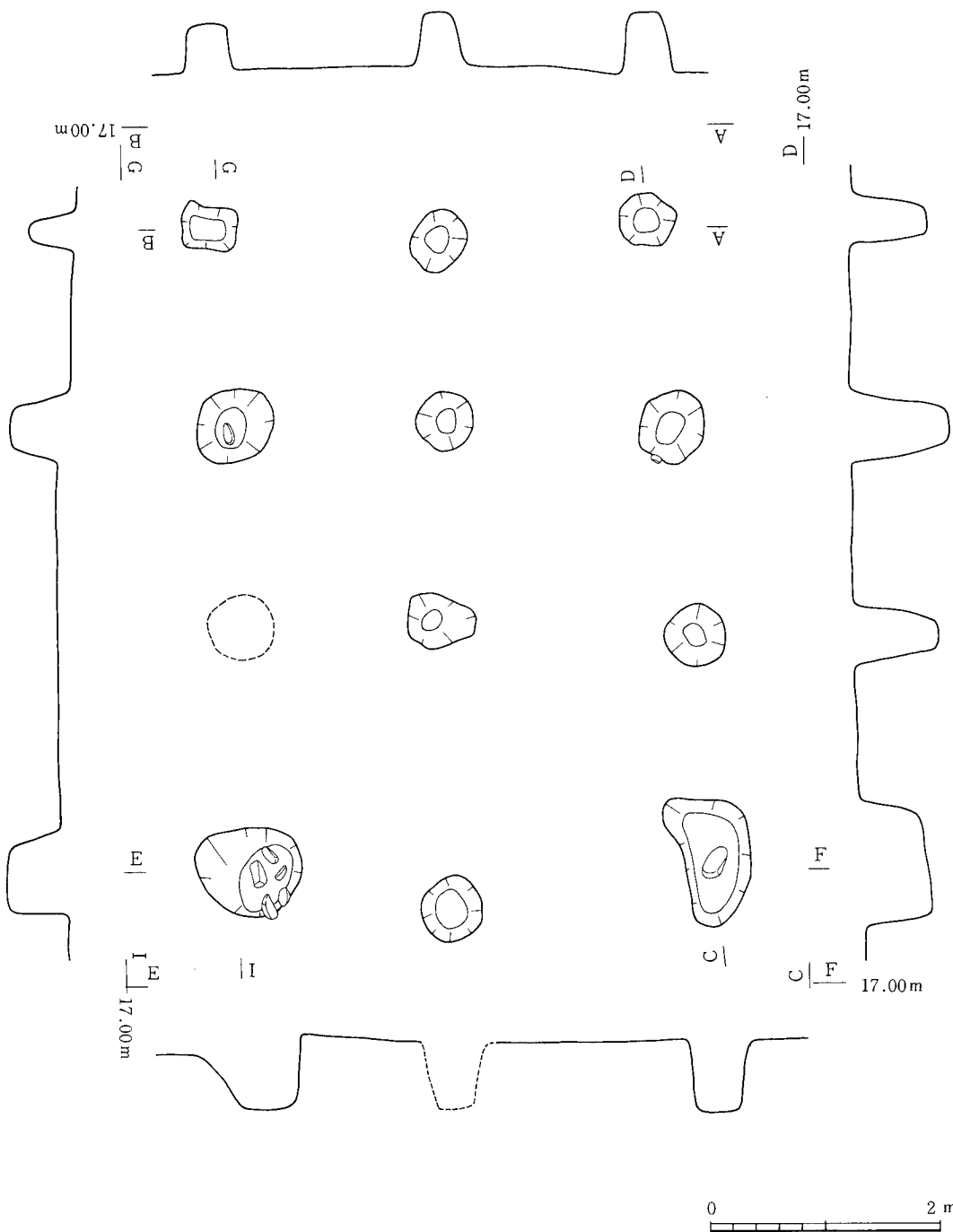
第66图 D₂调查区全体实测图



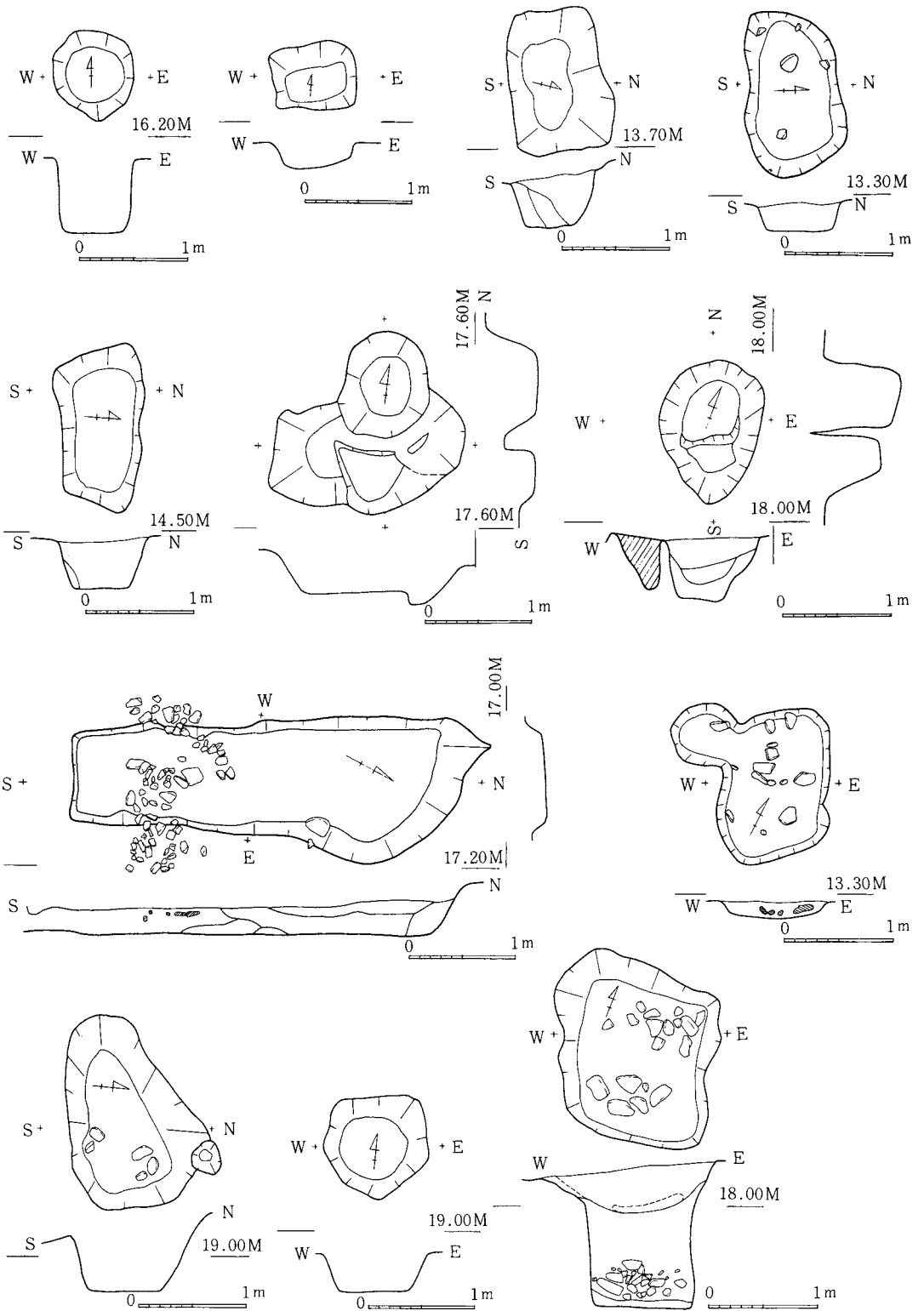
第67図 D₂調査区第3号棟実測図



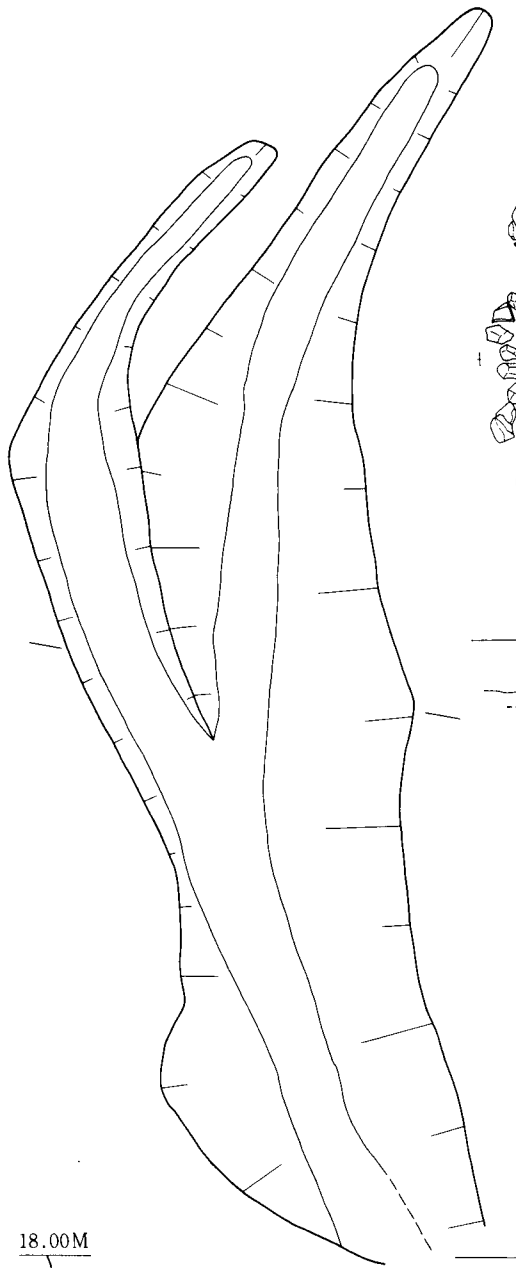
第68図 D₂調査区第4号棟実測図



第69図 D2調査区第5号棟実測図



第70图 D₂調査区検出土坑(1~12号)実測図

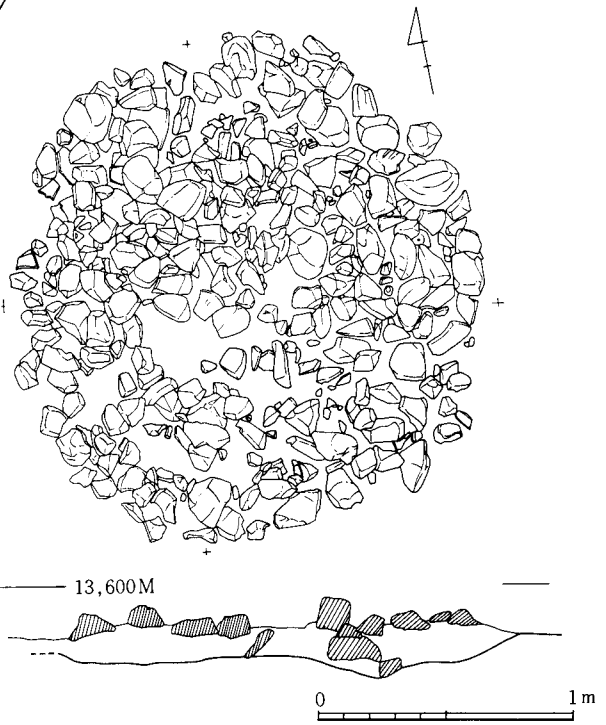


18.00M

暗茶褐色土 (礫を多量に含)
 暗茶褐色土
 黄褐色粘質土
 黄褐色土 (礫多量に含)
 暗灰色粘質土

0 2m

第72図 J32区溝(堀り割)



13,600M

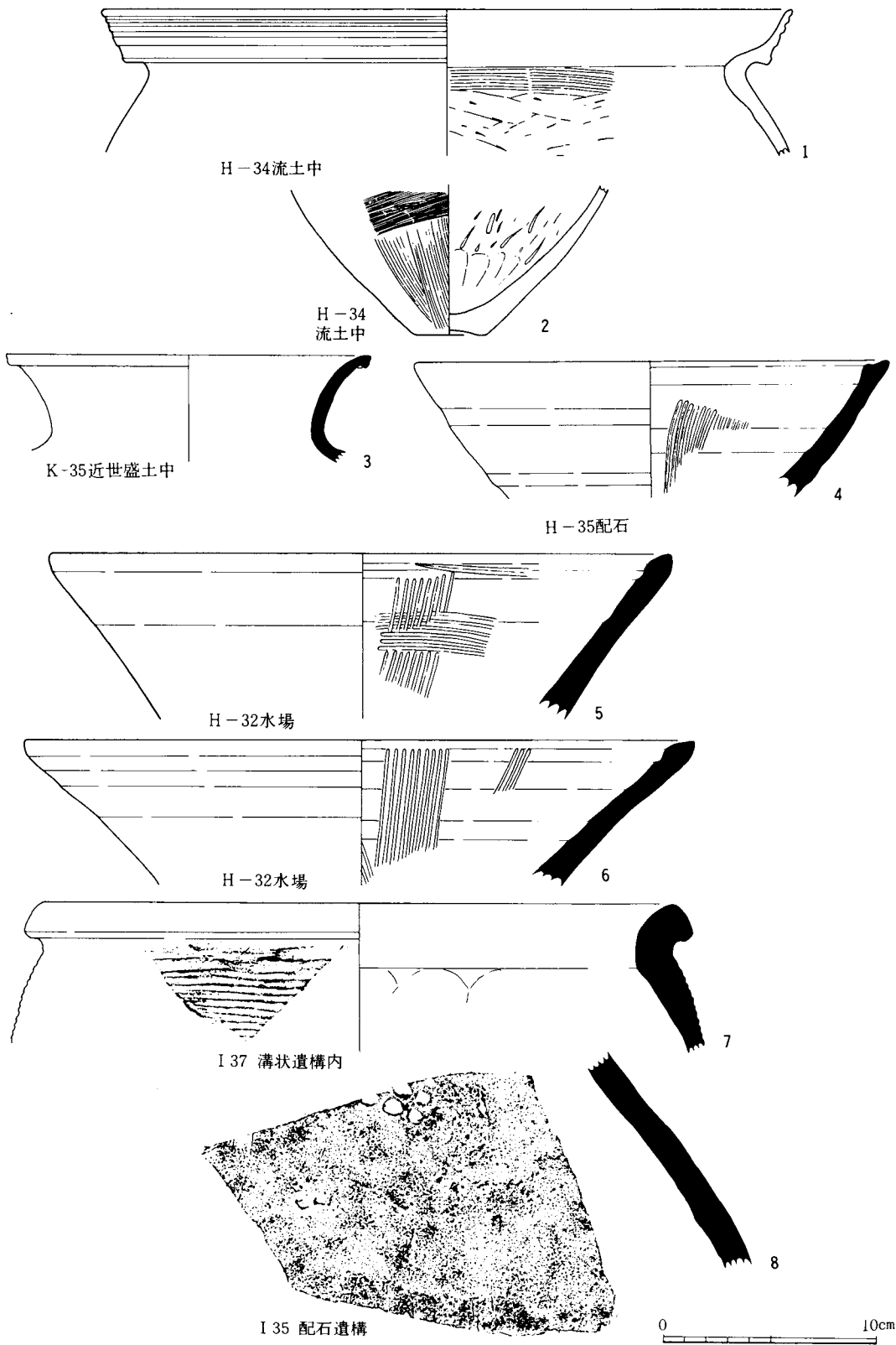
0 1m

第71図 J36区石組遺構

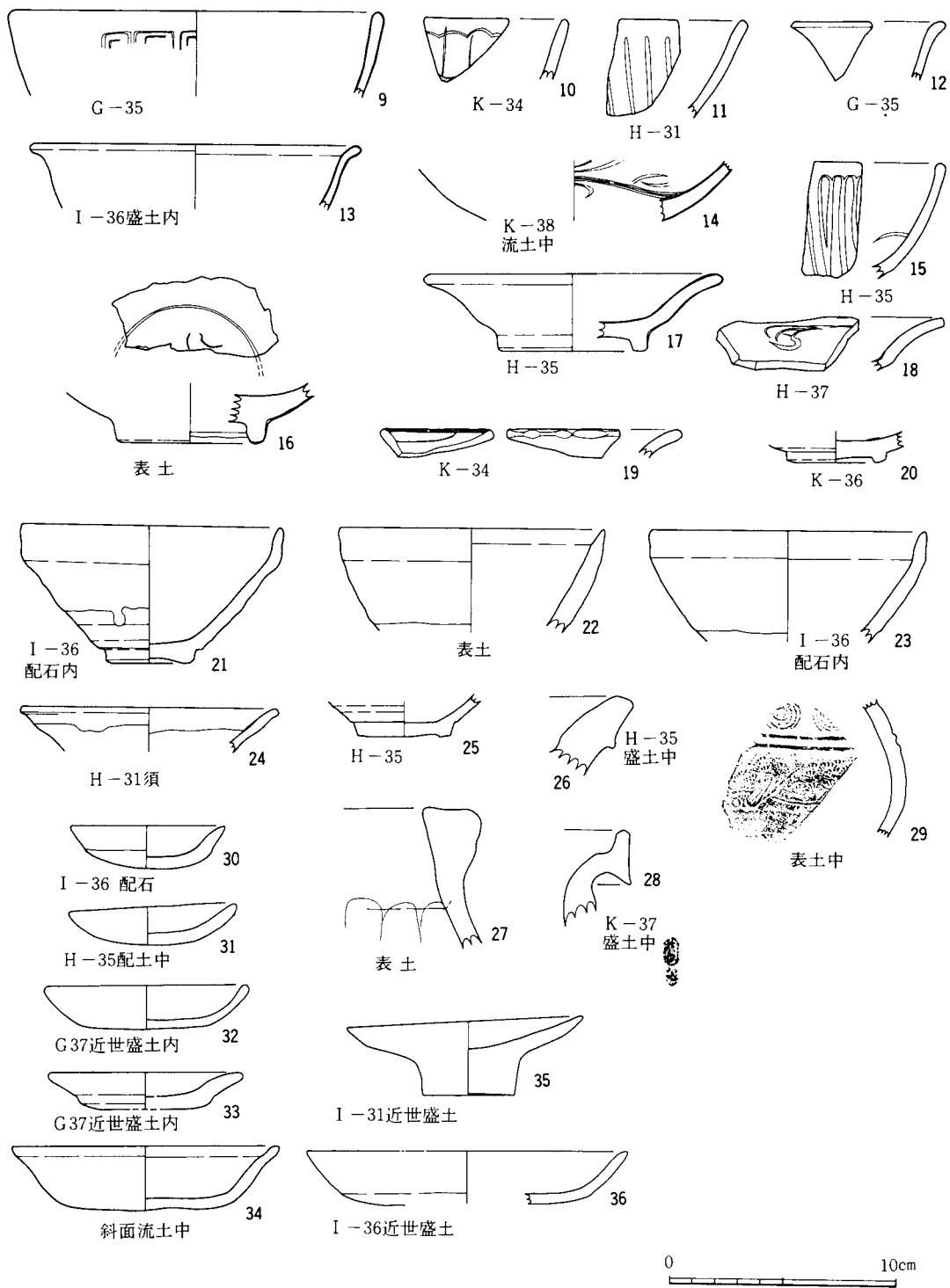


0 1m

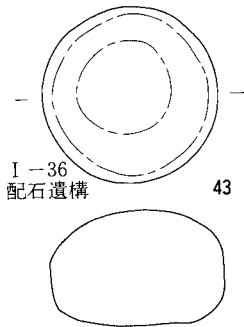
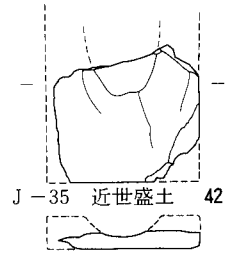
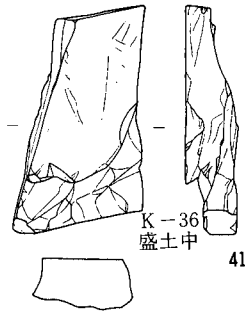
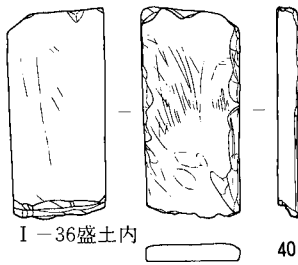
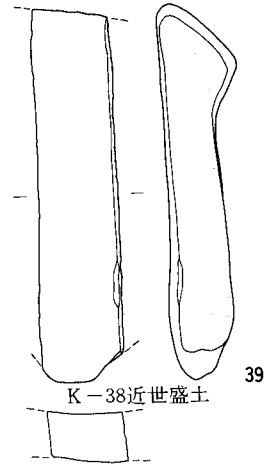
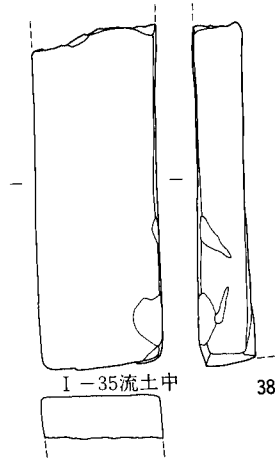
第73図 J33区土師質土器出土状況



第74図 D₂調査区内出土遺物 (I)



第75図 D₂調査区内出土遺物(II)



第76図 D₂調査区内出土遺物(III)

第4節 D₁・E・F調査区の遺構と遺物

第1項 D₁区の遺構と遺物

1 調査区の状況（第1図）

D₁調査区は、前年度に調査されたC区・D₂区の間には挟まれた窪状地形となる地点で、昭和22年の福井大震災の折に丘陵部斜面が崩落したといわれる生々しい痕跡（調査区外の上方向）と、その流土が扇状となってこの窪状地に厚く推積した状態であった。また、この震災以前は一部耕地としての利用があったといわれ、山裾から浸み出る僅かな水と雨に頼った耕作が行われていたとみられるが、部分的には下層部で湿潤性を保った範囲も認められた。

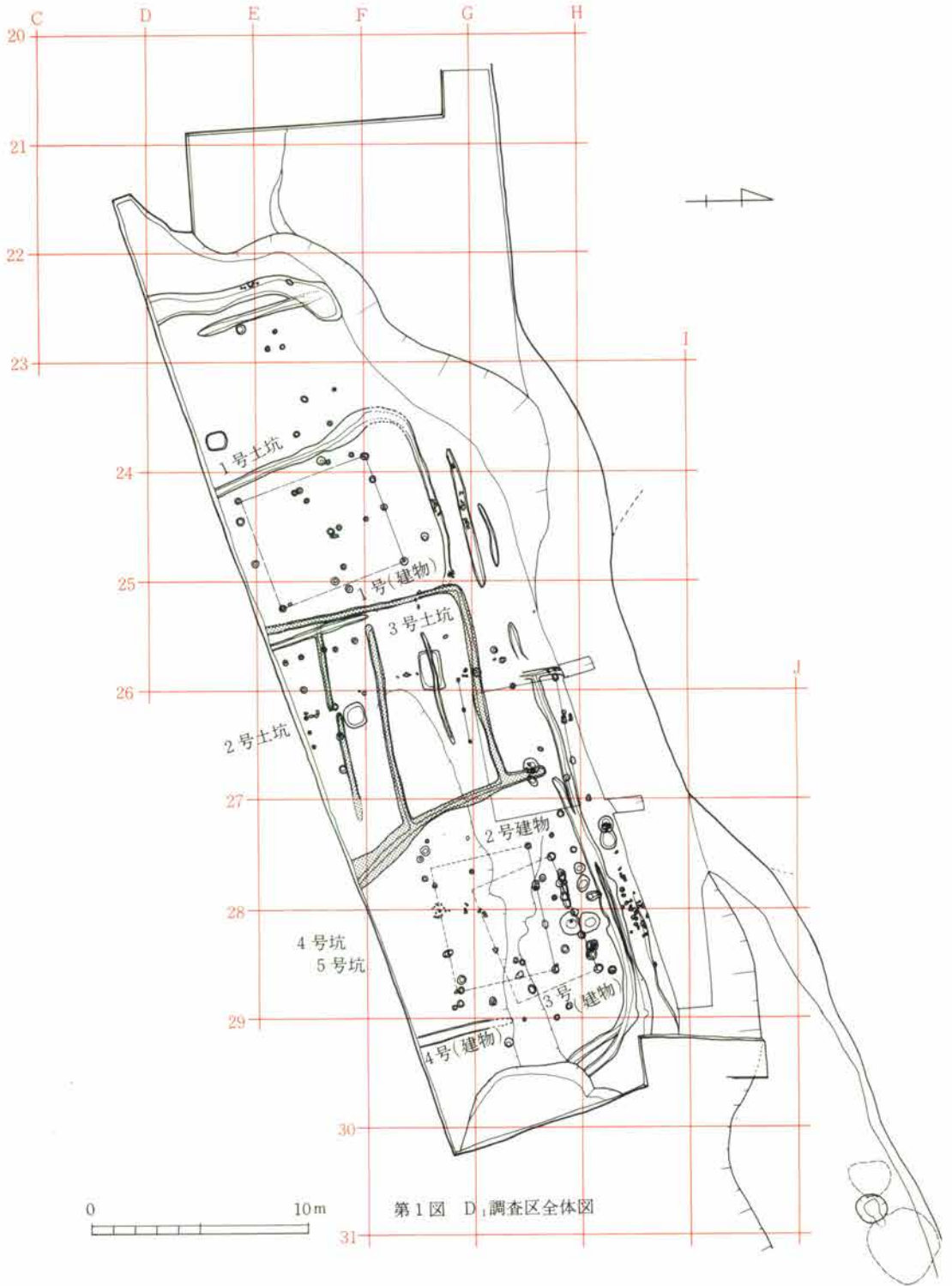
調査はまず、聞き取りを参考として崩落土の除去（パワーショベル）から開始し、耕作面の検出に着手した。この水田等耕作に係わるものと考えられるものは、調査区の中央部で崩落土に最も厚く被覆された部分下でコの字状に巡る溝（第1図でスクリントン提示）を確認した他は明瞭に捉えることはできなかったが、この溝の内覆土は青灰色粘性土と淡茶褐色の混成土であり、類似するその他の溝（茶褐色内充土）と一応識別しているが、例えばD・E-22区溝の場合、上の台状部裾に湧水点があってこの部分では若干灰色を滞る粘性土が認められるなど全般にわたっては必ずしも確証が得られたものではない。

なお、窪状地は弧状となる地形をもって、山側裾より約7～8m間は安定した地盤面（黄褐色土）が伴っていたが、谷側となる調査区南半部では同じく弧状に盛土整地されたと考えられる茶褐色となり（東側方向に従って締りが乏しくなる）、本来は狭い平坦状部をもつ段状地形をなしていたものと考えられる。

溝の他検出した遺構は、以下に掲げる土坑5基と建物跡4棟を推測してみたが、確実な建物となし得るのは礎石列等の遺存により復元を試みる事が可能であった第2号建物としたものの他は、梁・桁行列相互の対応がほとんど得られていない。そのなかで、第1号建物としたものは先に、水田耕作等に係わる溝とした遺構面より下部の、黄褐色地盤面～茶褐色土（谷側盛土）で検出した囲込状の溝と北側ピット列を基軸に可能性を提示してみたもので、第3・4号建物としたものでは山裾を通した溝にほぼ併走して柱穴状ピット列が存在するため総体的要素に欠けるが、これもまた可能性をもつものとしての提示であることをお断わりしておきたい。

これら、3・4号の南側（谷方向）では山裾～同一レベルの平坦面の造成があったかは、かなりボコボコとして締りのない状態であったので疑点も残るが、F-27・28区では上記暗茶褐色土中より6世紀前半代に想定される須恵器（第2図）が混乱した状態での出土があったので、削平と谷側への盛り出し整地が行われたと判断される。

なお、この下部層は淡茶褐色土となって安定した締りがあり、盛土以前の旧表面かと考えられ、調査区南東部28～30区の断ち割りでは山側の地盤（遺構面）高から約90cmで淡茶褐色土となっているがその以下約100cmまで掘削を行ったが、地盤に到達せず、恐らくこの付近より傾斜が一層の強まりをもったと考えられるので、東側のD₂調査区遺構群等と関連をもちながらも付帯



第1图 D₁ 調査区全体图

的な小郭的位置関係にあったものと推測される。

56年度調査区にあたるJ30・31区で発見された地下式横穴については、縦坑部の途中発掘を引き継いで57年度に横穴部の発掘を行った。位置は、D₁区とD₂区のほぼ中間点で結ばれた一段高まりをもった独立的小台状地に構築されており、縦坑の北は即丘陵崖面で、南でも若干の余裕もつがD₁区より更に低い窪地へ連なる急崖となっている。

2 遺構と遺物

第1号建物（第3図）

調査区の最も西側で区画的な溝と、これにほぼ同方位をもつ北側ピット列と南側に付属的2点のピットを基準に仮定したもので、柱列とすべき相互の対応が得られずに建物跡とするには誤解を招きかねないが、全面的には否定もし難い側面もみられるので参考資料として取りあげてみた。

以下、記述は建物に準じたものとしておきたい。

主軸はN-20°-Wにとる、梁行2間×桁行2間の建物を仮定した。規模は5.2×6mで、北側柱列は2.6m間隔である。その他は柱列として成立しないが、北側列に平行する南辺の2穴を結んで入口部ないし縁と仮定すればこれに納まって北側列に直行する、南側柱列東より第1番目のピット1点がわずかにのる。これらのピットは径25cm前後、検出面より深さ約20cm～25cmである。

溝はいずれも浅く、検出面より10cm前後となるが連結していた可能性が強い。この溝に囲まれた範囲内での遺物は、北側溝中央部の円礫（河原石）中で土師質土器片があったが風化・磨耗がひどく図化できていない。

第2号建物（第4図）

調査区の中央部、山際に寄り沿ってある建物で楚石建物と考えられる。梁行2間×桁行3間の東西棟建物と推定される。北側柱列西より第1・2番目に遺存する楚石（平坦面をもつ河原石で特に加工痕はない）と第3番の抜け跡痕が軸線にのり、これより外れて第4番目に相当すると考えられる礫によって桁行を想定し、梁行ではこれに直交する西側列の妻柱に相当するピット様痕跡1つのみであるが、それぞれに約2m間隔でとらえられてくると、南側柱列は不明となっているが、この想定線の南0.5mに杭跡状のピット列があって、これに限られると思われるので約4m×6mの小建物と推測される。方位は梁行軸でN-10°-Wとなる。

なお、この建物に伴ったと考えられる遺物群は第10図1～12のとおりであるが、建物の西側でブロック状をなして点的に出土し、小枝様の炭化物片と灯芯油痕のある土師質皿なども混在しているので、流し元的な張り出し部分が存在した可能性もあるが不明である。また、隣接した第3号土坑（第8図）とした遺構も方位的にこの建物とほぼ合致し、付帯する可能性が強いと思われるが不明な部分が多いので個別的に取り扱った。

第3・4号建物（第5図）

上述のとおり建物と認めうる要素に乏しいが、山裾を走らせる排水溝状遺構とこれらにほぼ平

行なピット列の存在によって無視し難い側面もあったので、参考資料という性格に留めたい。

調査区のほぼ北半は黄白色系の砂岩質地盤面となっており、南半は盛土整地に係る暗茶褐色土よりなっている。遺構としては、それぞれ岩盤面で検出された北側柱列と仮定するピット列以外は、この南半部上面では検出することができずに一段掘り下げた段階で認めたピット・礫石の一部を点的に採用して仮想したものであることを明記する。

第3号建物としたのは梁行2間(4.2m)×桁行3間(5.6m)、方位はN-22°-Wの東西棟。第4号としたものは梁行3間(4.8m)×桁行3間(5.8m)、方位はN-11°30'-Wの東西棟とそれぞれ推測してみた。

第1号土坑(第6図)

調査区西端部の暗茶褐色土面で検出した土坑で、壁体と床面に加熱を受けてかすかに赤茶けた色調が伺え、南側床面が特に赤く焼けた状態である。長軸1.18m・短軸0.83m・深さ0.08mを測る。主軸方位はN-4°-Wにある長方形型のものである。ほぼ床面に接して土師質土器皿が内包されていた他、全体的に炭化物粒(木)に混じえて灰ないし骨粉状の粒子も観察されている。なお、確証はないが土器群は再加熱を受けていないように想える。

遺物は全て土師質土器の皿で、4個体以上存在するが風化・磨耗等で計測可能だった4点を図示した。いずれも手づくねによった口径7cm~7.8cmのものと14.2cmの2種類がある。

小型のタイプはかなりイビツで、体下部~底部にかけてやや円みをもち、指オサエの痕跡をもつがナデによって不明瞭となっている。大型タイプの4は、腰部のナデと口縁部の大略2分割ナデによって特徴的な形態をもっている。

第2号土坑(第7図)

調査区のほぼ中央部やや南寄りの、暗茶褐色土面で検出した土坑である。東西幅1.1m・南北1.05mのほぼ方形にちがいのもので、深さ約0.2mである。床面は平坦で、円礫(河原石)2点が接床して在った。方位はN-16°-Wとなる。

遺物は、1の土師質土器皿と2の美濃瀬戸系天目茶碗片の他、遺構検出面よりやや上位に釘状鉄片の発見があり、この土坑に伴っていたものと思われる。1は、底部より体部にかけてゆるやかな円みをもち、口唇端部を先細りさせて口縁部を強く外反させた浅い皿となる。推定口径は14cm前後になる。2は口径11.2cm・器高7cm前後で、口縁端部をかるく外反させている。釉調は口唇部が茶褐色となって薄く、以下は黒褐色となって幾分厚く釉がのり、胎色は淡灰色である。

なお、これらの遺物の他に青磁・白磁細片も含まれていたが、いずれの遺物も坑上半部よりの出土で小破片で占められており、焼土粒を混じえた暗茶褐色土が内充していたことから埋め戻しと、これに混入した土器群の可能性もある。

第3号土坑(第8図)

調査区のほぼ中央部にある土坑で、第2号建物に付随していたとも考えられる。長軸1.8m・短

軸1.0m・深さ0.2mの長方形で、淡黄色の地山面で穿たれて内充土は暗茶褐色土である。方位は短軸方向でN-8°-Wにあって、坑内からは遺物の出土はない。

第4号・5号土坑（第9図）

調査区東端部の淡黄色地盤面に切り合い関係をもって穿たれた円形状の土坑であるが、内充土は相方とも暗茶褐色の同様の土で、前後関係を把握することができなかった。4号坑は径約1.0m・深さ0.45m、5号坑も径約1.0mで深さ0.6mである。方位はN-13°-W方向である。

遺物は4号坑から1点と5号坑から2点のいずれも土師質皿である。4号坑からの1と5号坑からの2はいずれも口径10.5cm前後でかなりイビツなものである。調整手法・形態ともに同様で、腰部～底部にかけてやや円みをもち、腰部から口縁部までの幅広いナデによってやや外反気味にすなりと立ち上がりをもたせている。3は底部～口縁部まで円みのある小皿で口径7cmである。口縁部がややポツリとしたふくらみがある。

地下式横穴（第12図）

前年度調査区内に位置して、D₁区東側の小高台平坦部で発見されていたものである。縦(竪)坑上面より礫石が充填されていたようである。調査は、この縦坑下部より前年度の発掘を引き継いで行った。この結果、一つの縦坑を共有して左右に大小の横穴を穿った複室横穴であることが判明した。以下、東側を第1室・西側を第2室と仮称して概要を説明していきたい。

縦坑は円形で、径は約1.2m・深さ約3.3m。左右の横穴(室)よりやや深く掘り窪めてある。1号室は奥行最大幅で3.3m・横行最大幅で約3mで、隅円長形状の不整形な平面プランであり、断面はカマボコ状の形態をもって推定最大高1.6m前後となる。2号室は奥行1.6m・横最大幅約1.9m・最大高1.05mであり、隅円三角形状とでも呼ぶべきかの平面形をなし、縦横断面形もアーチ状となっている。

なお、縦坑下部では礫石を認めなかったが、1号室入口～室内前面部にかけて夥しい河原石が流入したような状態で出土し、2号室では数点のみの転入があった。このことは、2号室が1号室より玄関相当部が低位置に設けられていたことと、縦坑の過半を土砂で埋め戻した後に礫石で最終的な封閉を行ったためと考えられる。2室ともに確実な遺物とするものは発見できなかったが、1号室には土師質土器の粒子様のものがあった。

この種の地下式横穴については最近、「地下式墳」^①の名称に改めるべく提言があり、主に14・15世紀代に盛行した一定の空間を必要とした一種の土葬墓との見解が示され、「地平面下に竪坑を掘り下げてこれを入口とし、その底面から横へ掘り拡げて本体である地下室を築いた遺構」との規定がなされている。

これに基づいて、当遺跡のものは無段B2類に相当すると思われるが、地下室が対面する2室より構成され、副室的ではなく複室的にも思えるが、大・小の関係を重視した場合は主室と副室の関係が存在したかもしれない。なお、この2室の主軸方位にそれぞれのずれが認められ、平面形態の取り方等を考慮に入れば当初より主室副室の関係をもって構築されていたとは考えにく

く、二次的な開口と追室が行われたものと思われる。

3 遺構外出土遺物

(1) 整地土内包の遺物(第2図1~6)

中世期の平地面の確保のため削平と谷側への盛り出しによって混入した遺物で、調査区南端側の断ち割りトレンチと一部拡幅によって確認した旧緩斜面部より、いずれも無造作な散乱状態で出土している。

1~3は坏蓋で、明瞭な稜をもつものとナデと沈線によって稜形態を保つものがある。3点とも外面天井部上半を回転ヘラ削りとし、以下と内面をナデ調整としている。前者は、口縁部を下方へ垂下して口径12.5cm・器高4.9cm・稜径で13.1cm前後となり、後者はやや外開きとなって口径13.6cm・器高4.2cmである。口縁端部はいずれも内面部に傾斜をとらせ、浅い凹面となしている。

4の坏身は口径11.5cm・器高4.8cm・受部径14cmで、口縁部は内傾して孤状の円みをもって立上り、端部も円く仕上げている。蓋受部は横方向へのばし底部~体部外面下半にかけて回転ヘラ削りであるが上半と内面ではナデ調整である。

5の高坏は口径11.3cm・器高9.5cm(身部分高4.7cm)・受部径13.8cm・脚端部10.5cmとなり、口縁部は内傾度を強めて4に似るが、蓋受部を上方に向けて円みをもたせて小さく納めている。体部の調整は

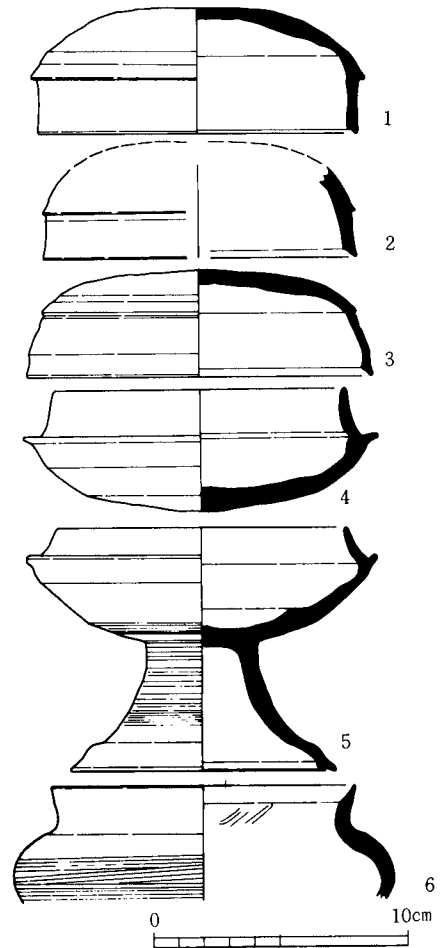
4と同じで、脚部の接合によって外面にはカキ目調整が一部加えられている。脚部はラッパ状として端部は坏蓋3の形状に似、透かしはないと思われる(3分の2遺存)。

6は口径12cmで、体部径15cmの中位に最大径をもった短頸壺と思われる。口縁部は内側の強いナデによって先細りとさせており、調整では内面をヨコナデ・外面口縁部~体上位ではナデ・中位以下でカキ目調整としている。これらは概ね陶邑編年II-1段階頃に相当するものと思われる。

(2) 遺構検出面および乞含層中出土遺物(第10図~第11図)

第10図1~12は第2号建物跡に伴うような状態で出土した一群である。1~10は土師質皿・11は越前の鉢・12は瓦質の火炉である。

1~4は口径10.5cm~10.8cm・5~10は口径7.4~8.4cmのいずれも底部に円みをもつ手づくね製品である。小型の皿では形態的な特徴をあまりみだせないが、大振りの皿では概ね3タイプがみられる。底部から口縁部にかけて円みをもたせた1のタイプは、口縁下部にややふくらみを



第2図 D1調査区整地土中出土土器

もたせて口唇部を先細りさせており、小皿の5・6がこの形態にちかい。2では底部から体部への立上りの外面基部にやや強めのナデを施こしている。小皿ではこのタイプとすべきものはない。4では体部中位での強いナデを行い、3では体中位から口唇部をつまんだナデによって外反する口縁を形づくっている。小皿では10が3ないし4のタイプとなろう。なお、5・7・10の口縁内面に灯芯油痕がある。

11は口径27cmで、口唇基部内外面の強いナデによって断面玉縁状となし、さらに外唇端部に受口状の引き出しをとっている。それぞれ円みをもたせた内唇部と外唇部を明瞭に区分する造作としている。表面には砂粒と粘土の凹凸が目立つが、丁寧なヨコナデが施こされている。胎土は暗灰色をなし堅い焼きあがりである。

12は窓とみられる波状の切り込みをもち、外面には円形の粘土塊の貼付とこれを画する上下2条の粘土紐の貼付による浮文装飾とした火炉となろう。

第10図13~21と第11図1~8はその他包含層等各地点より出土したものである。

第10図13~18は土師質土器皿でいずれも手づくねとナデ調整によって仕上げた製品である。

13・14は体部の立上り基部の押さえによって平底様となしている。15・16では体部中位より口縁部にかかるやや強めのナデを行い、16ではさらに強く外反さ気味としている。17は15・16の中間的なものとなろうか。これらの口径は10.2cm~11.5cmである。18は口径7.5cmの小皿で、立上り基部の押さえと外反気味とするナデが行われており、13と16の中間的な形態に思われる。

19はシノギハ文をもつ龍線窯系青磁碗で、口径14cmとなる。釉は透明感のある淡緑色をなし、貫入はみられない。素地は灰白色で堅緻である。

20・21は瀬戸の灰釉瓶で、それぞれ体上部ないし肩部に二段の櫛描文があり、20では上段部に2点と下段に1点の小形の菊印花をあしらっている。20の釉は淡黄緑色の平滑なものであり、細かな貫入がある。素地は白灰色で比較的堅緻である。成形はロクロ水挽きによったかと考えられる内面部のヒダ痕が顕著である。21は淡緑色の釉で、全体的には安定的であるが流条化がある。素地は灰白色をなし堅緻である。成形は紐土巻上げによったと思われるもので、外面はヘラ状具による削り痕と内面は指ナデ調整痕を留めている。

第11図1は口径約40cmの瓦質円形火鉢である。口縁部外面に二条の粘土紐を貼り付け、この区画帯内に円形の小粘土塊を列点状に貼付加飾している。胎色はにぶい灰色で、外表面はいぶした様な黒色となっている。

2~6は越前と思われる製品で、2・3の甕はほぼ同様の口縁形態をとり、くの字状に外反させた口縁上半部を強くつまんで口唇部を肥厚させており、外面中位でシャープな稜線が走る。4は大甕の肩部片で格子と上の字様の陽刻を押印している。5は口縁部をやや内湾気味として口唇上端に面取りを施こす薄手の鉢で、遺存片中の内面下半は使用によって特に平滑である。6でもやや口縁部を内湾気味とし、口唇端部は円みをもたせておわる。口径は約28.5cmの内外面ともナデ調整として、内面では2.5cm幅内で8条の荒めの卸し目が口唇部から施こされた薄手の小型鉢で、よく焼き締まっている。

7は口径約31cm・器高約14.5cm・底径約10cmの珠洲鉢で、内外面ともヨコナデ調整として体部

内面には1単位1.6cm幅で8条の卸し目をほぼ充填し、肥厚させた口縁部を上端より内傾する面取りを行った後、櫛歯状具で波状文を巡らせている。焼成は普通程度であるがよく使用されたとみられ、内面体中位より底面にかけて卸し目が消えてすべすべとした状態となっている。

3 小 結

D₁調査区は本来、実質的生活地区としての使用頻度に乏しいC・D₂(左右調査区)の丘陵裾平坦部に挟まれた窪状地の縫合地点にあたり、中世期の造成によって小郭の平坦部が確保されたと判断されるが、谷側の盛土中では6世紀前半代に想定される須恵器の内包があり、C調査区ではこの時期が主体となる竪穴住居跡20数棟の発見があったので、この調査区でも1～2棟存在していたものと推測される。

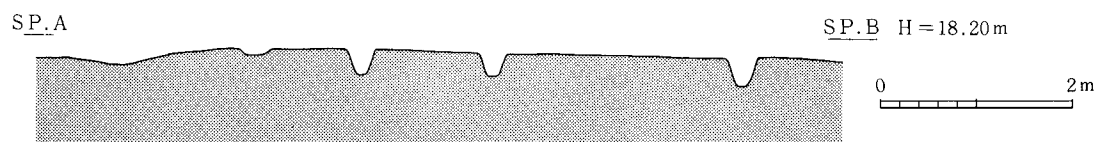
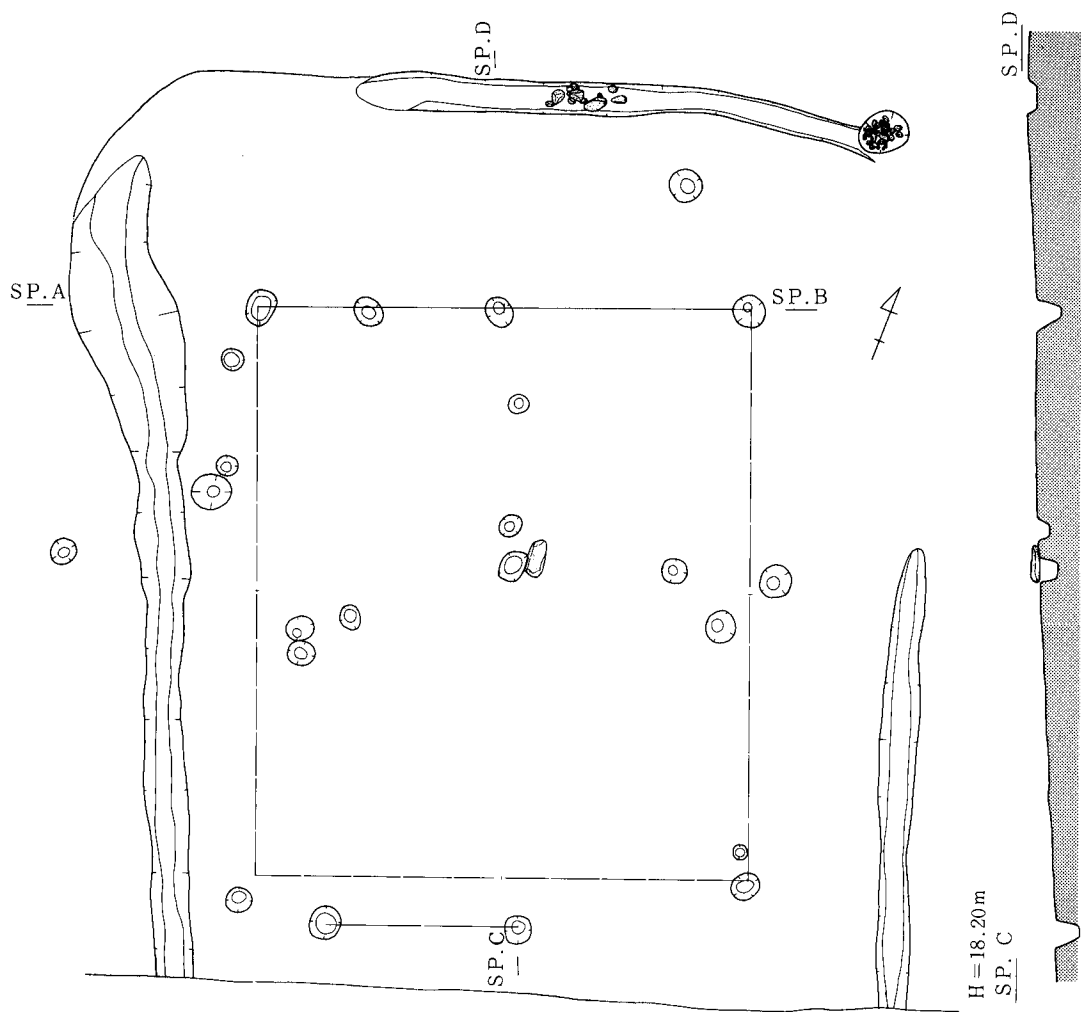
中世期の造成の内容についてはあまり明確としないが、基本的に自然地形に則って、一部に背斜面を削ったとみてよい露盤面が表われるので大々的とはいえないが幾分、L字状にカットしてこれを盛り出す整地が行われたものと考えられる。

陶磁器類では図示しえたものの他、見込に刻花文と櫛刺突文がある青磁皿片・簡略された雷文を描く青磁碗片・口縁外反の無文タイプの青磁碗片・体部に染付をもつ碗片(国産?)などの小片も含まれ、概ね13世紀代より16世紀代にかけての遺物群とみられるが、最も主体的となる遺存遺物の時期と確実な建物跡として捉えられる楚石建物の14世紀前半頃～15世紀前半頃に中心があったものと考えておきたい。

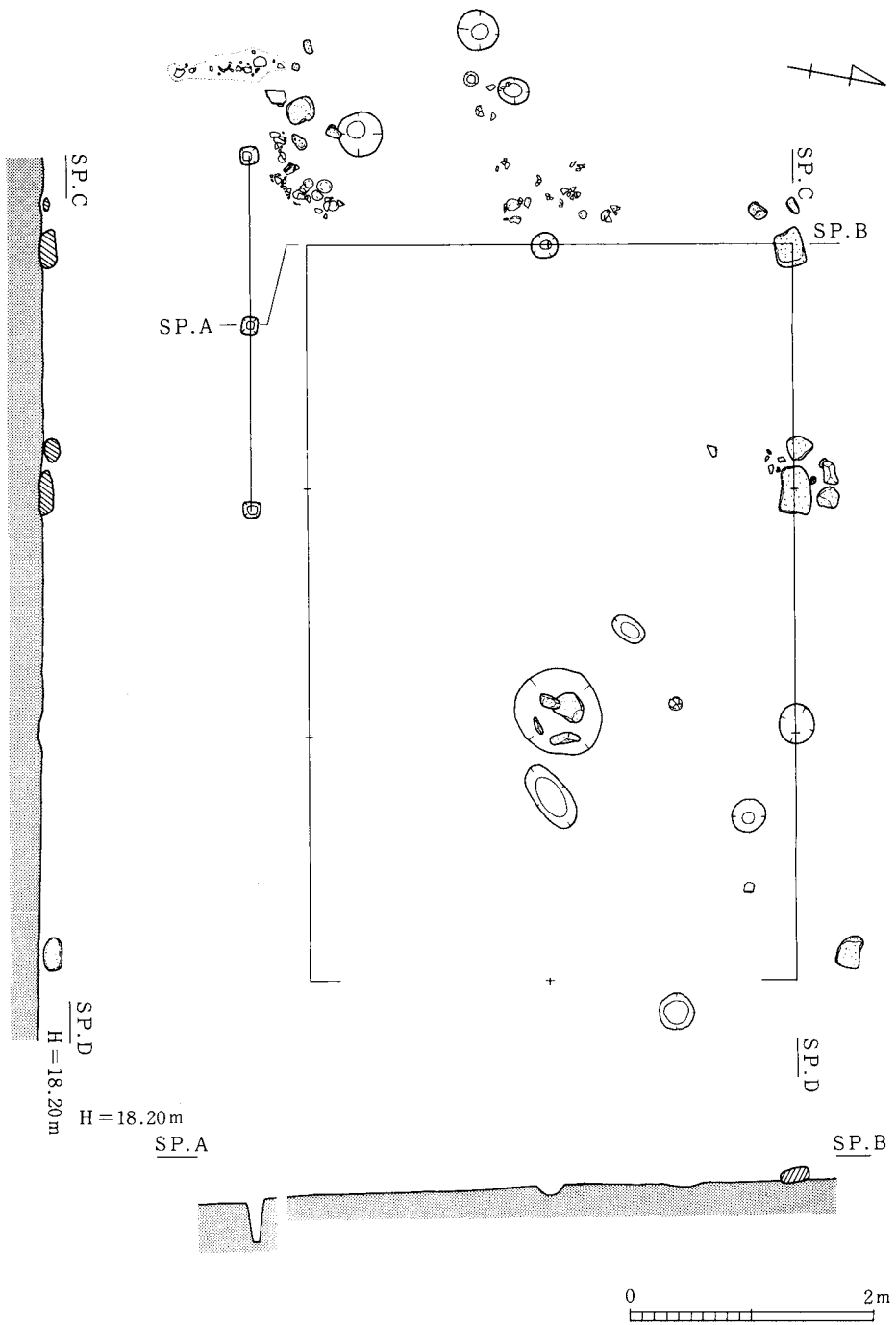
なお、楚石建物と第3号土坑とは一体的なものとも考えることも可能であるが、1・2号土坑は焼土坑であってその他の土坑とは区別される。2号土坑出土の天目茶碗等は15世紀後半代頃に想われるものであるが、出土状況と坑内充土の関係から埋め戻された際に混入した可能性もあり、また、仮に釘状鉄片がこの坑に伴うとすればこの種の土坑では、後節のF区において少範囲内に複合してかなり発見されており、近世前半代頃には存在が確実視される箱型座棺による火葬遺構と極めてちかいものがある。1号坑では坑底に礫石を置かず、捉置的な土師質土器が出土している点で2号坑とはやや異なるが、2基とも検出面的に他の遺構よりやや上層部での発見であって、中央部の谷側に偏在したあり方から同種の遺構と考えられる。坑底に伴う土師質皿は15世紀末葉か16世紀の初頭頃^③に位置付けされるので、先の地下式墳の存在を含めて当該区が15世紀後葉段階頃には葬場として使用されていた可能性が強くなってくる。

註

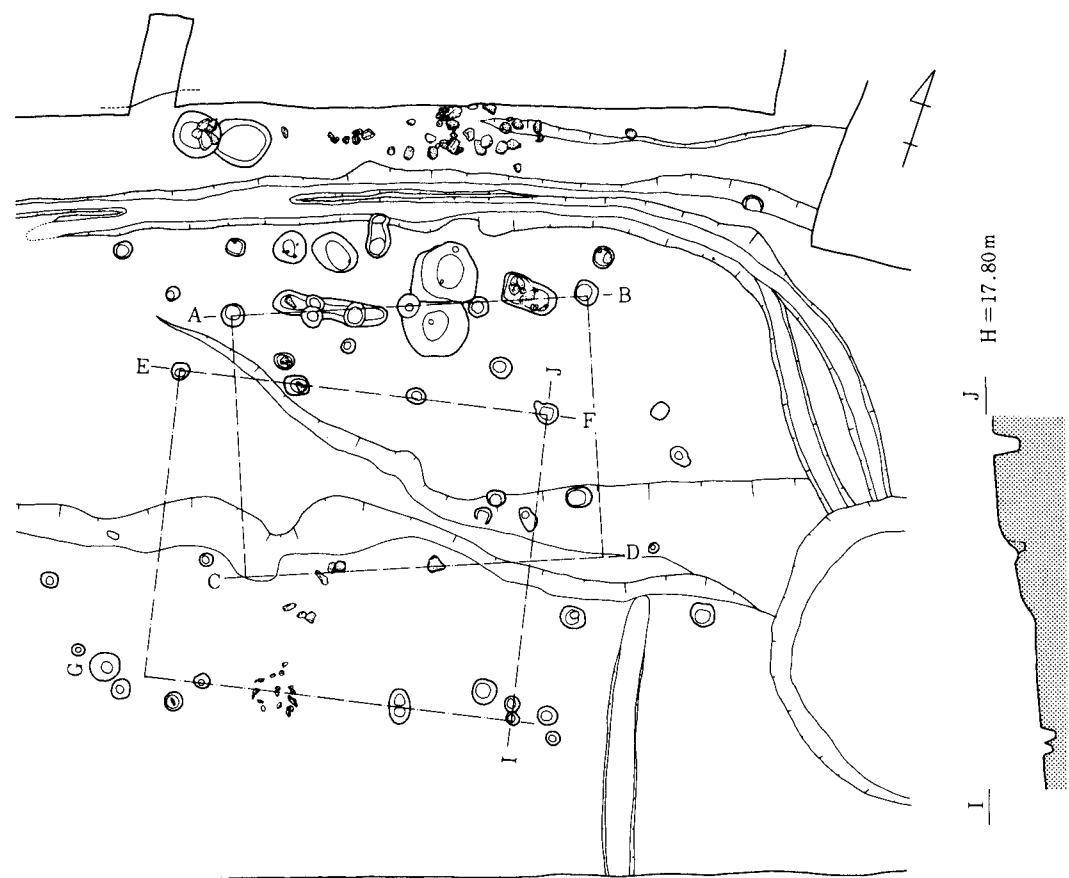
1. 江崎 武 「中世地下式墳の研究」『古代探叢Ⅱ』1985
2. 中村 浩・他 「陶邑Ⅱ」大阪府教育委員会 1977・他
3. 四柳嘉章・辻本馨 「西川島」穴水町教育委員会 1980



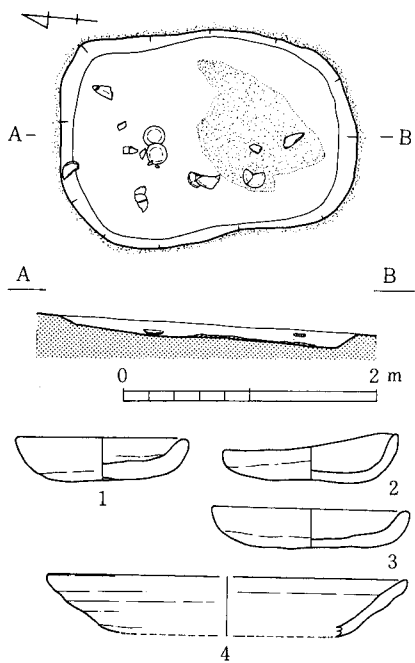
第3図 D1調査区第1号建物実測図



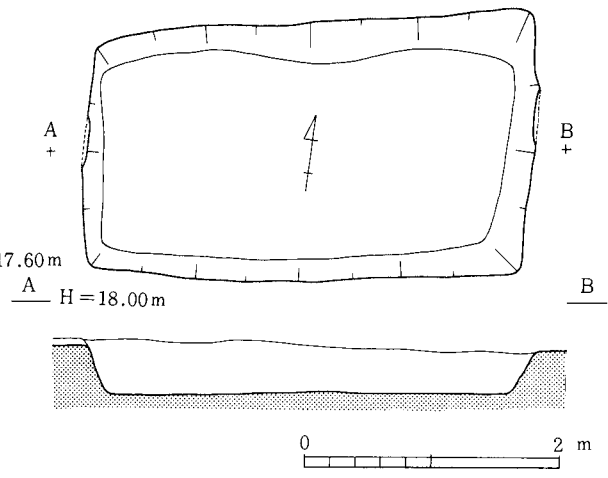
第4図 D1調査区第2号建物実測図



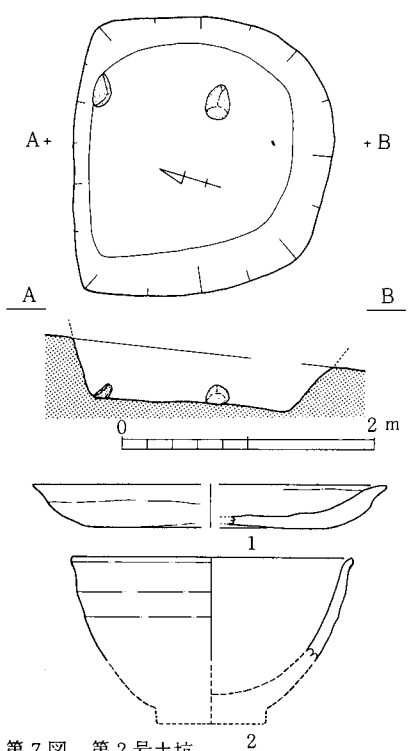
第5图、第4号建物实测图



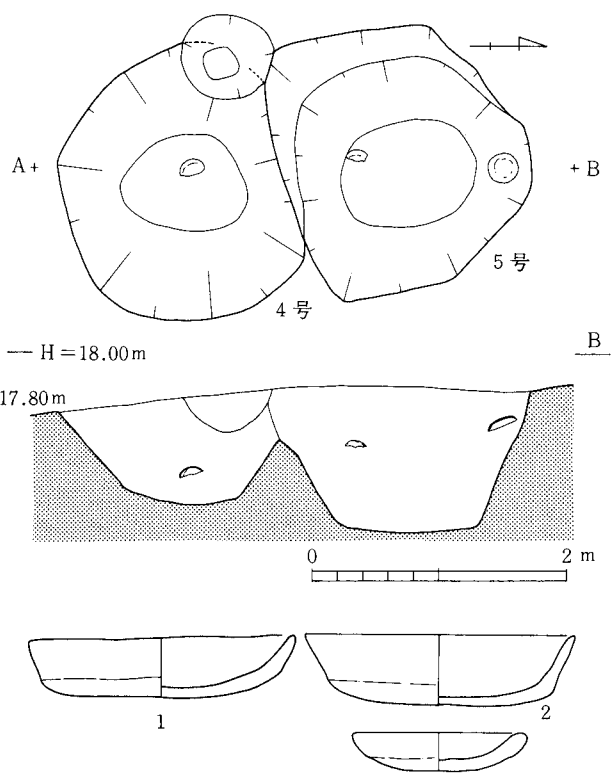
第6图 第1号土坑·出土土器(1/3)实测图



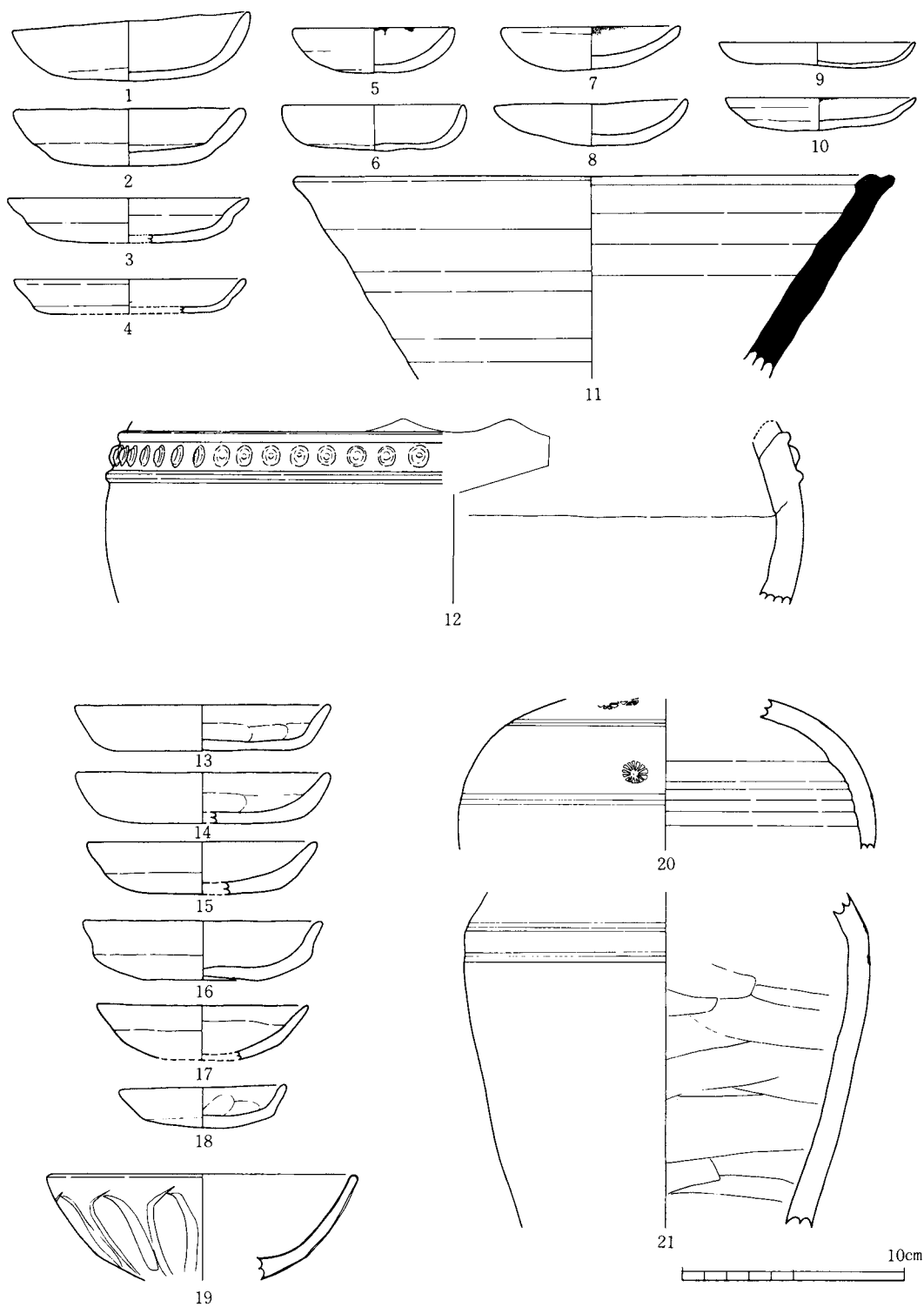
第8图 第3号土坑实测图



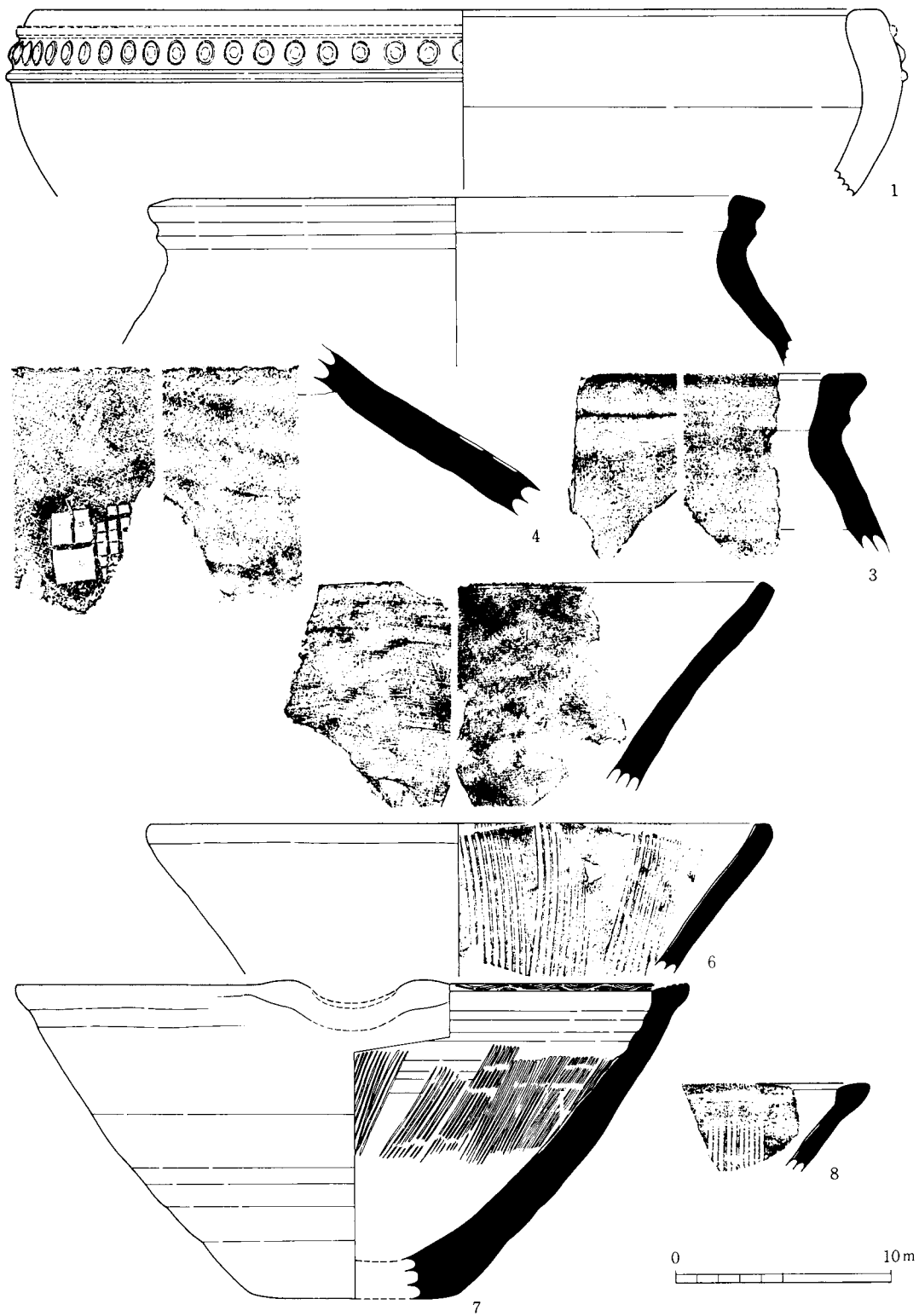
第7图 第2号土坑
·出土土器(1/3)实测图



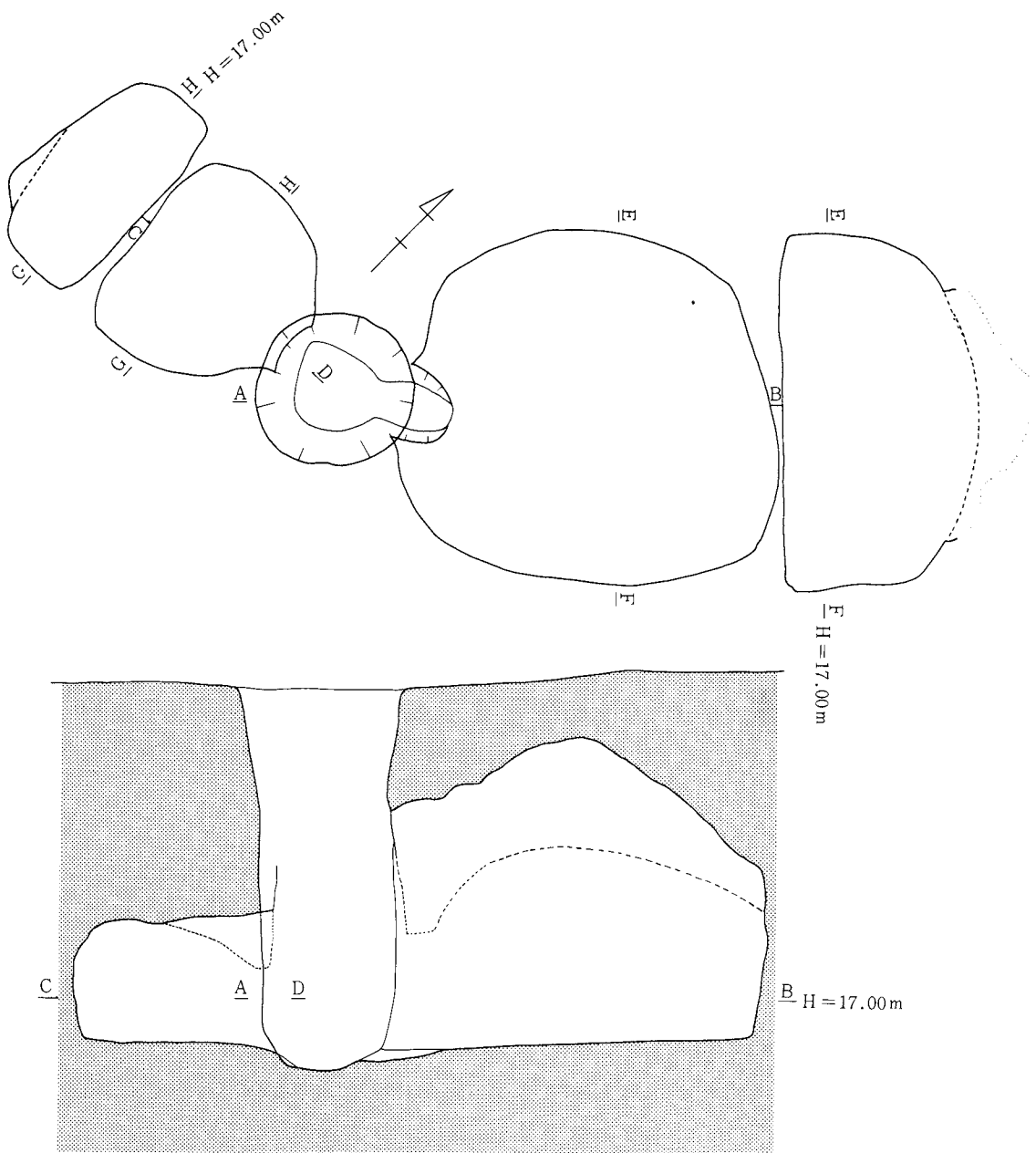
第9图 第4号、第5号土坑·出土土器(1/3)实测图



第10図 D1調査区遺構外出土土器



第11図 D 1 調査区遺構外出土土器



第12図 D 2 調査区地下式横実測図

0 2m

第2項 E地区の遺構と遺物（第13図～第17図）

1 調査区の状況（第13図）

本調査区は、中世期遺構群が所在した平坦部（D区）より東側に移動した丘陵斜面部分が主たる調査対象地となっており、後述されるF調査区とを結ぶ約190m間にあたる。ただ、この斜面より下手側（南）では広範な平坦部があって、D₂調査区と同様の標高をとって連続しており、道路線定計画時に係る事前の分布調査においても確実に遺跡が存在することが判明しており、これを背とする斜面中腹部にあまっている。

この斜面部には眉状の小平坦地が数ヶ所認められたが、部分的なトレンチを設けての確認では、報告に係る当該部分を除いては斜面の崩落によって形造られた地形であったため、これらを省略とした。従って、ここでは面的に発掘を行った約82mの調査区をE調査区と限定して呼ぶこととし、概要を報告していきたい。

発掘地の標高は約26mで、緩傾斜をもっている。斜面裾の広範な平坦地との比高は約7mであるが急崖となっており、背の丘陵頂部は標高約54mとなる急斜面でせまっている。遺構は、柱穴状ピット列とかすかに赤みをもつ焼土等を確認した。ピット列は径約25cm前後の小さなもので、西側より東側へ2.6m-2m-2.6mを測る4穴が連なりをもって、方位はN-98°-Eのほぼ東西方向にある。建物となるかは全く不明で、仮に建物を想定した場合は発掘区画の北西側には平地的スペースが確保され得ないので、南の谷側に梁行をとるものとなろう。

遺物の出土状況は、全てこの柱穴状ピット列の南側より出土し、据え置き様をとる小群や破片となり散乱状態となって出土するものなどがあるが、ある程度群的なまとまりも認められ、これらについては図版作成で分解せずにこれに従い、点的なものおよび包含層出土として先に取り上げたものを上記と区分して以下、第15図（16～19を除く）～第16図に掲げることとした。

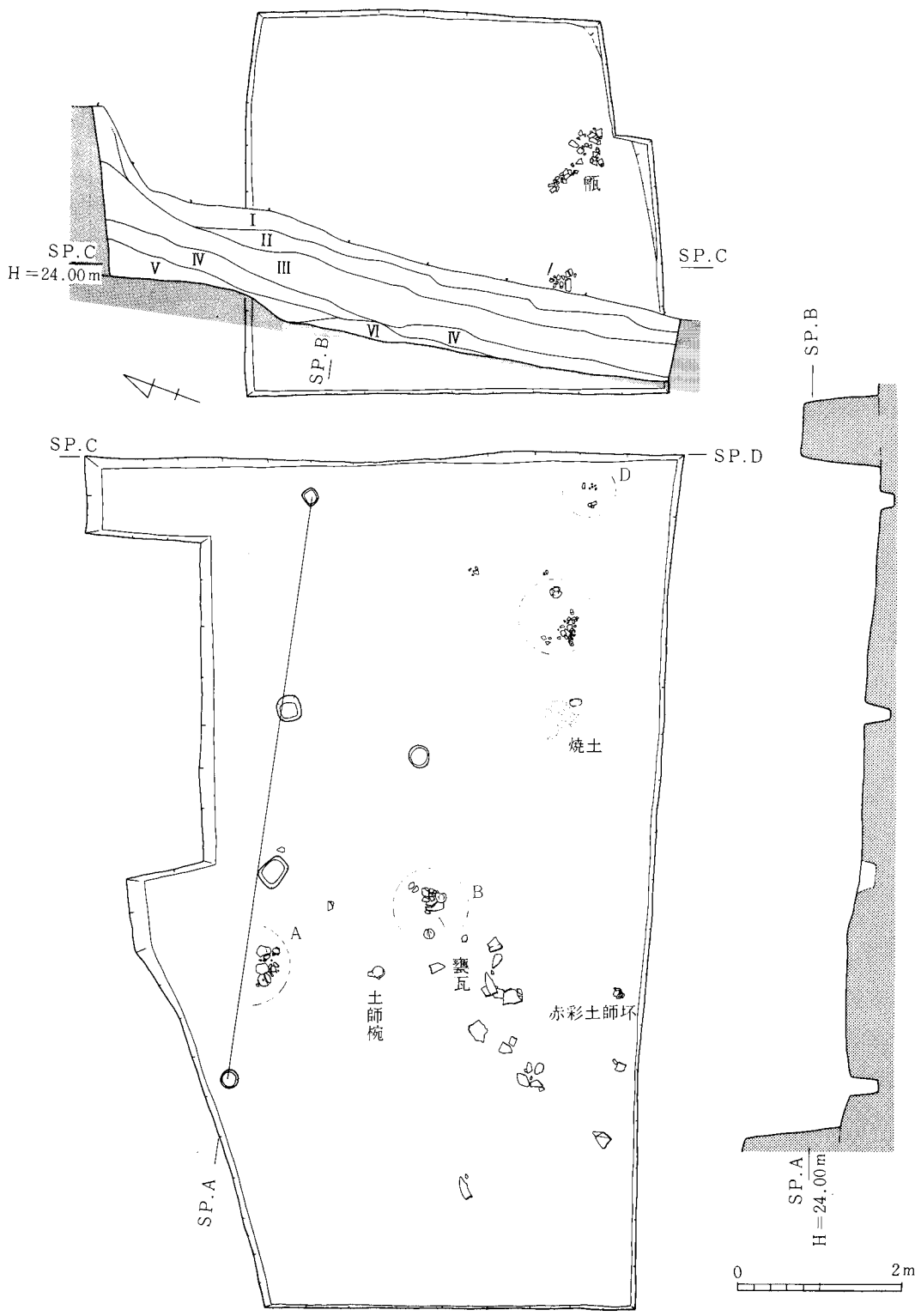
2 出土遺物（第14～16図）

(1) A群（第14図1～5）

須恵器蓋・無高台盤の5点が最も措置的狀態で出土した。1は口径15.7cmで僅かにふくらみをもつ天井部と鳥の嘴状に屈曲する口縁部からなり、天井部外面は削り調整後にナデと宝珠形つまみが付されている。胎中には雲母粒が目立つ。なお、内面頂部付近に「上」と判読する墨跡がある。2～4は口径約15cm前後・器高2.1～2.4cmであり、内外面ともナデ調整である。3の外底面には縦方向に引いたと思われる2条の墨跡がある。5は口径17.2cm・器高2.6cm・底径13.9cmの一回り大きめの盤となるが、全体的にナデ調整を施こし、胎土には微砂粒少量含まれるがほとんど目立たない。

(2) B群（第14図6～8）

6～8は第16図の須恵器大甕（壺）体部片と一部折り重なって出土した。6は口径13.6cm・器高7.4cm、7は12.9cm・3.5cm・底径7.8cm、8は12.7cm・3.4cm・7cmである。いずれもナデ調整としているが、7の外底面にはへら切痕上に櫛歯状工具による渦状調整痕が加えられてある。6・



第13图 E調査区全体图

7とも淡灰色系の色調をなし、特に7では底部のみが赤みを滞びてしまりが無い。また、8の底面でも粗略的なナデないしはナデツケ様調整とし、ヘラ先によるか一条の沈線が走る。

(3) C群(第14図9~15)

焼土がある東側約1.5m付近で、主に破片の多い小群である。12はやや東側に離れるがこの群に含めた。無高台の坏では口径12.7cm~13.3cm・器高2.9cm~3.6cm・底径8.2cm~9.5cmのもので、角ばったタイプと円みのあるタイプとがある。全体的にナデ調整とするが、外底面は粗略的なナデないしナデツケ様として平滑さに欠ける。IIの底面には体部への立上り外面基部に一部かかる約5mm~7mm間隔で7条の櫛歯様の浅い条痕が残り、木口状工具での縦ナデの痕跡である可能性もあるが擦痕が明瞭ではない。焼成は淡灰色をなしていずれもしまりが弱い。14は口径15cm・器高1.8cm・底径11.9cmの盤で、体基部に強めのナデが施こされている。胎中には砂粒を多量に含み、焼成はやや良である。15は深みのある付高台付の坏で、口径15.2cm・器高6.6cm・高台径9.2cmの体部内外面はナデ調整として平滑で焼成も良好なものである。外底面はヘラ切痕がかすかに残る回転の削り調整がみられるとともに、ヘラ押さえとすべきか乾燥時の接床痕とすべきか不明であるが交錯した浅い条線が残る。

(4) D群(第15図16~19)

先にC群としたものの東側に隣接して、破片からなる小群である。16は口径13.8cmで頂部はふくらみをもたずに平坦となる蓋で、嘴状の口縁部となっている。17・18は口径約17cm・器高2.4cm前後の盤で、口縁部の先細りと底部外周が肥厚気味とし、体基部にやや強めのナデを施こしている。第14図14あるいは3ともよく似た形態・手法となる。19は口径18.2cm・器高3.8cm・高台径12.8cmの盤で、底部外面には粘土紐の継ぎ目とみる痕跡が若干のこるナデを行っている。砂粒を多く含むが暗灰色をなして焼成は良い。

(4) その他(第15図20~37・第16図37~39)

上記の小群よりはみ出たもの・包含層中としたものなどをとり集めた。20は口径16.6cm・21は15cm・22は12.3cmで、天井部外面は削り調整にナデを加えてほぼ平坦な面をもち、口縁部を嘴状にとる蓋で、唇部の挽き出しが弱く面取り状となす21と細く外反して強制的に引き出された22とでは調整面でも若干異なり、21は平滑的であるが22は削り調整が荒くて肩部分はナデが省略されている。23~25は口径13cm前後で器高約3.3cm・底径8cmの坏で、内外面をナデ調整とするが底部外面にはヘラ切痕が留まる不定方向のナデとなっている。23では体部~口縁部にかけて器肉を一定的に保ってすなりとのばすのに対し、25では成形あるいは調整時のナデ等の押圧が不均一となっている。26は口径15.2cm・器高2.4cm・底径11.4cm、27は口径16.7cm・器高2.4cm・底径12cmとなる盤類で、内外面ともヨコナデ調整である。胎中には粗砂粒が若干含まれるが焼成は良い。28は口径15.4cm・器高4.9cm・高台径9.8cmとなり、体部は全体的にナデ調整を行い、底部外面は回転のヘラ削りとしてやや平滑的としている。高台は貼り付けによるもので、接合部のナデが粗雑となっている。焼成は堅固である。29・30は大振りの盤で、高台径は15.4cmと16cmである。外底面の調整は回転ヘラ削りにタテ方向への削りが一部加えられており、その後高台の貼り付けとなっている。14は白灰色をなし焼成のひじょうに弱いものである。

31は口径13.7cm・器高19cm前後となる壺で、外面は肩部～体部にかけてヘラ削りを行いヨコナデによって消去するが、下半部では削りのままである。内面はヨコナデで、底部付近では指頭圧痕がある。口縁端部は上方向よりの面取りが行われており、胎中には砂粒を多く含むが焼成は良い。

32は口径約17.8cm・高台部を除く器高4.6cmの内外面とも赤彩を施す土師器高台付坏である。体部外面はナデ調整・内面は体部下半にミガキが認められるが上半と内底面はナデと思われる。外底面では回転のヘラ削りのままとしている。胎中には微細砂を若干含むがあまり目立たない。

33・34は2枚重ねとなって、B群としたすぐ上方より出土した。口径約13cm・器高約4.2cm・底径約5.7cmの、底面端～体部立上りの稜部に高台を付けて高台径6.9cm前後とした土師器碗である。いずれも回転によるナデ調整で、18の外底面にはヘラ切り痕が残されたままであり、19は高台貼付時のナデによって不明となっている。なお、18は内底面が円滑となっているが、19は高台貼付時の押圧によるものか面的な歪みがひどいままの製品となっている。胎土は、18には砂粒が少量含まれるが目立たず19には多量に含まれてザラザラとした器肌となって焼成も良くない。

35は付高台径7cmの土師器碗片で、調整は磨耗により不明だが胎土に砂粒が多量に含まれる。

36・37は、35および第16図39の甑とともに調査区東南端で土師器の破片群をなして出土した、口径18cmと16cmの甕である。内外面ともナデ調整であり、くの字状口縁として口唇部を上方向へつまみ上げて受口状の口縁部としている。いずれも砂粒を多く含む、焼成は普通程度である。

第16図38は口径約35cm・器高約64cm・胸部最大径約60cmの須恵器大甕で、B群とした一部に体部片が重なって出土した。多くはこの近辺で散乱状態となっていた。体中位付近に最大径をもち、長胴気味として全体的に円みをもち込んでいる。底部は丸底ないしこれにちかいものとなろう。外面では頸基部～底部ちかくまで、幅約5～6cm中に16～18条を一単位とする工具による数度の叩き重ねが行われて部分では肉眼で網の目状に映るところもみられる。内面は同心円状に刻まれた工具で対応されている。胎土は精良で、砂礫粒はほとんどみられず焼成も良好である。

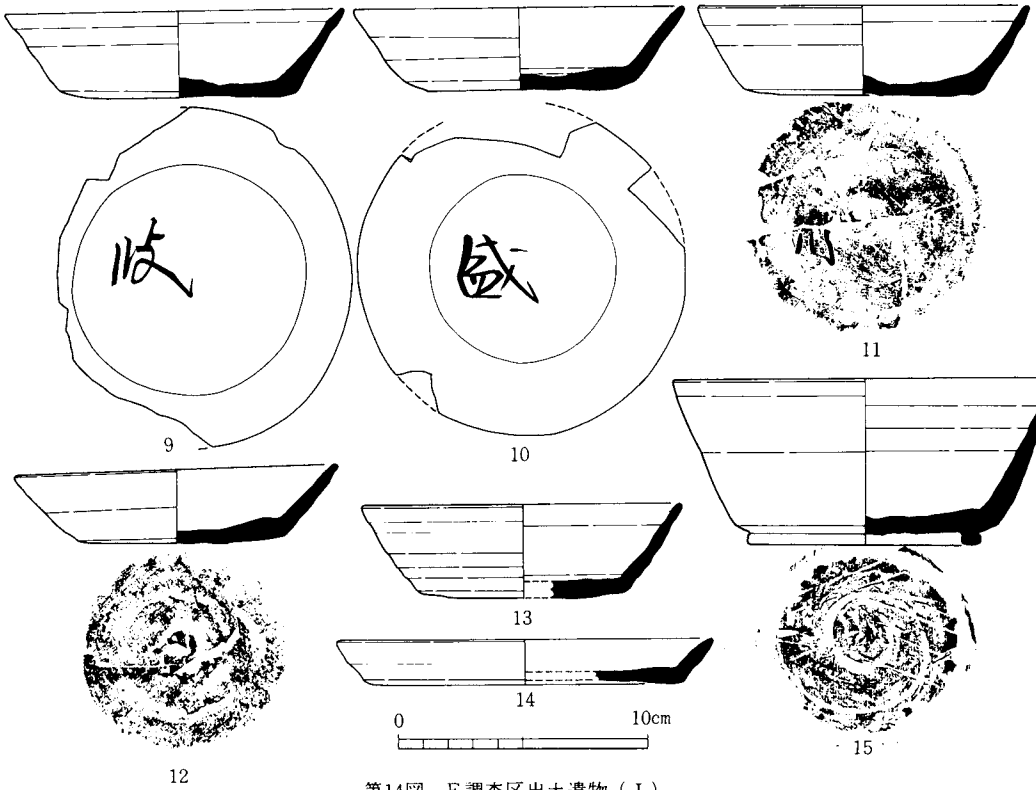
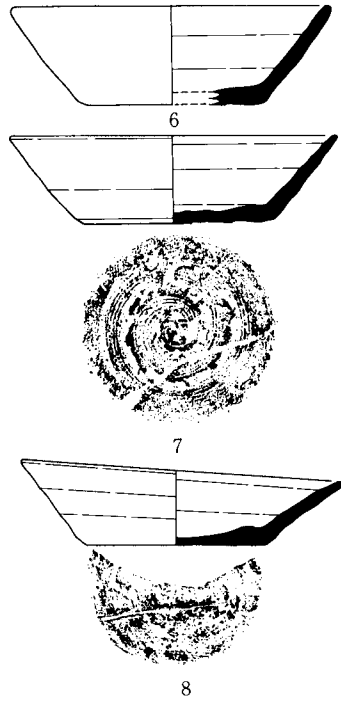
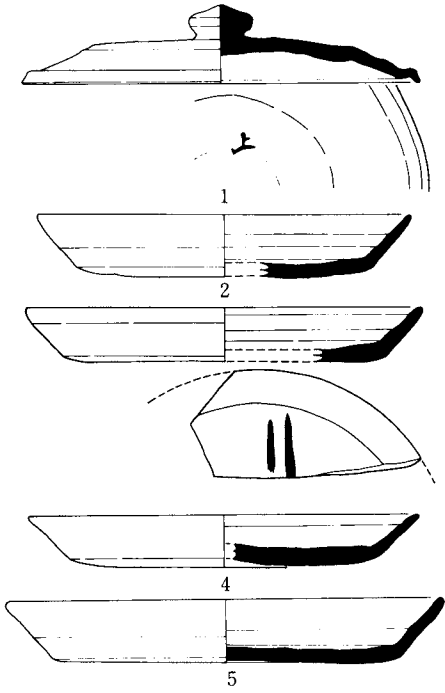
39は口径25.5cm・器高28.2cm・底部内径13cm（外径15.2cm）としてやや締りをもつが、全体的には筒状となる甑で、外面に平行叩き目・内面に同心円状の半弧の押圧が残されるが、部分的にナデが行われて特に上半部は消去されたようである。胎中には砂粒がかなり含まれるが焼成は良い。

40は長さ13.1cm・幅約6～10cm・厚さ約4cmで表裏と片側面の3面がかなり使い込まれて、中央部が深く窪んでいる。石質は細粒砂岩で、使用面は全て平滑となっている。

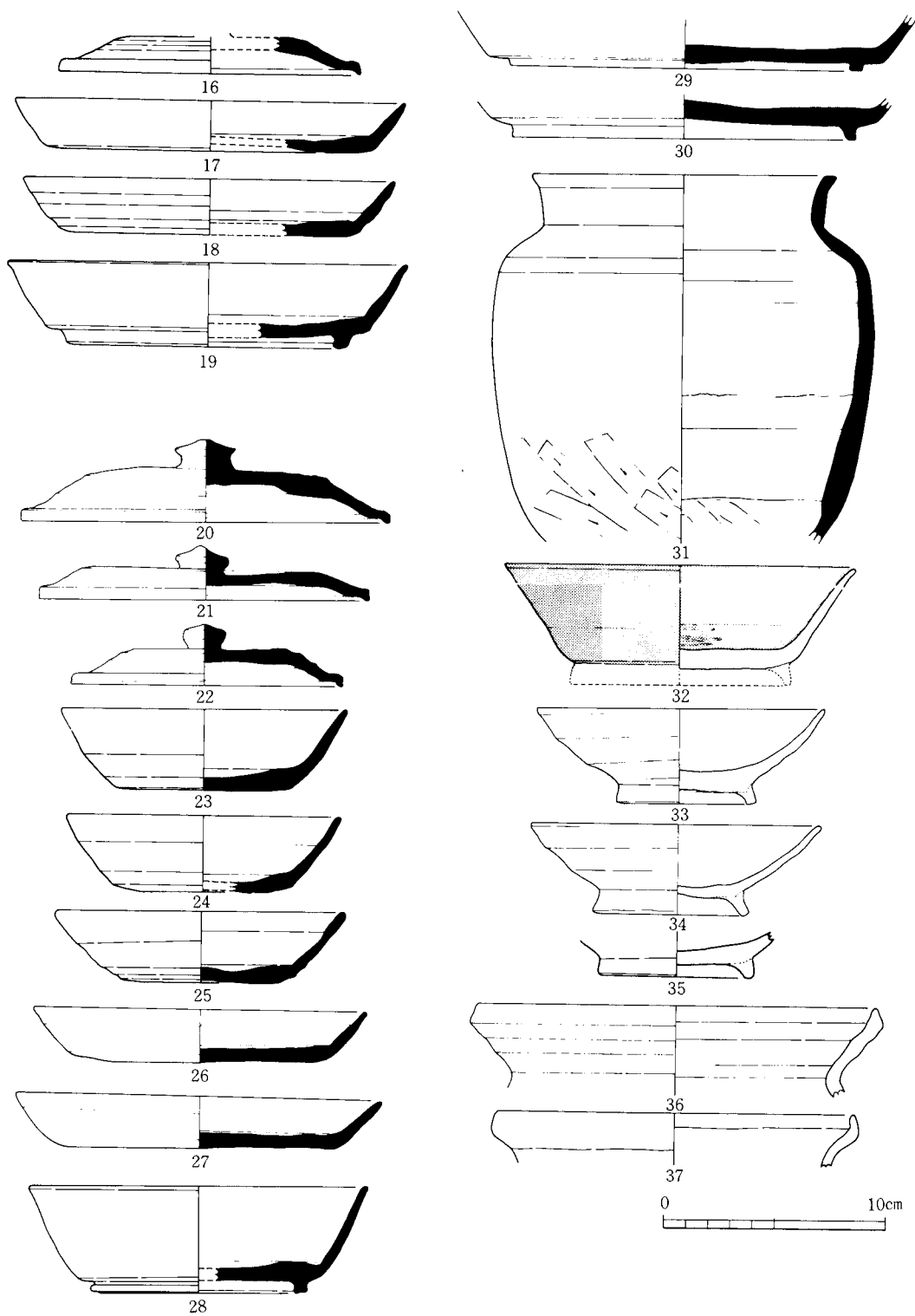
3 小 結

集落遺跡などの開放的状态で出土する土器群を対象として年代的な位置付けを求めていく場合、個々の土器が同時的あるいは同時期的存在なのか長期的営為の所産によったものか判然となし得ないものがある。

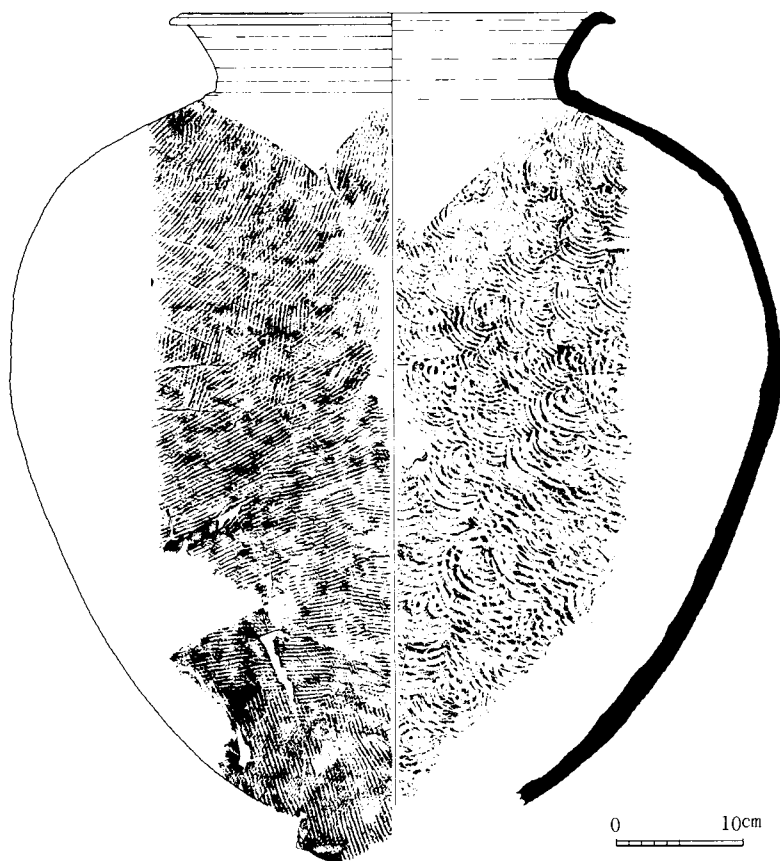
調査区は、丘陵斜面で僅かに確保されている約100 m²前後の孤立的な小眉状平坦地地であるが、出土遺物の総体面では供膳形態（約83%）・貯蔵（約4.5%）・厨房（約7%）に生産関係具



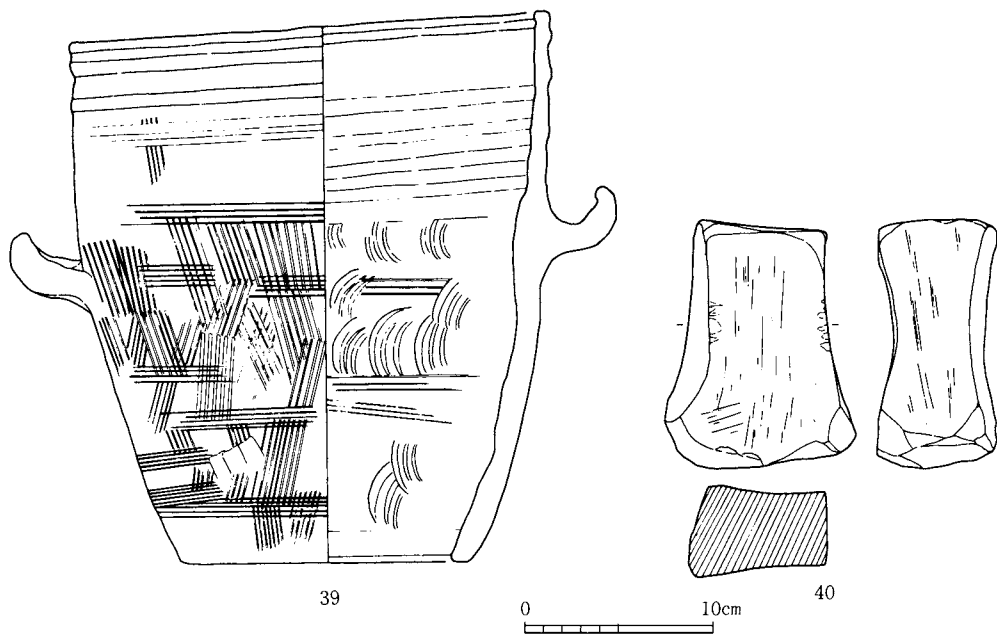
第14図 E調査区出土遺物 (I)



第15図 E調査区出土遺物(II)



38



39

40

第16図 E調査区出土遺物(Ⅲ)

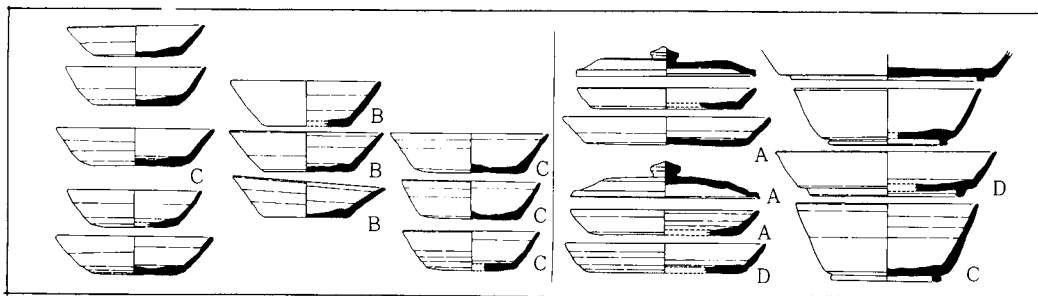
(約2.5%)など、用途的な側面ではある程度のそろいをとった出土とはいえ、単純組成として認めうるかどうかはここでも例外ではない。

須恵器と土師器の単純比率は須恵器約82%・土師器約8%となるが、とりあえずここでは出土状況を加味して、北陸の奈良平安時代土器編年研究を頼りとして量比の多い須恵器無高台杯を中心に器形態・調整面での微差的要素による分類と若干の整理を行っておきたい。

須恵器無高台杯はB小群3点・C小群5点・その他3点の計11点の出土があり、概ね3タイプに分類できる。(1)、体部に円みをもたせ、底部と体部の立上りの境をあまり明瞭とさせずに丸底風となるもの。(2)、底部から体部の立上りを直線的として、外傾度を大きくとってのぼすもので、このタイプは底部が平底風となる。(3)、底部は平底風にやや丸みもみられるが、体部をあまり外傾させずに上方向へ直線のかやや円みをもたせるタイプとである。調整面ではいずれも体部を回転ナデ・底部外面をへう切り渦状痕を消去しきれない粗略的な不定方向のナデが一般的であり、櫛歯様渦状痕をもつ1点を除けば分類の指標はみいだせず、体部の成形ないし調整時における器肉も一定に保ち平滑的なものと不均一で凹凸を残すものがあり、これは3タイプともに認められるので体部調整の精粗性によってタイプ毎に若干の新旧の様相をもったものと考えられる。

蓋についても宝珠形つまみをもって、頂部が偏平的となったもののみで占められるが、口縁端部調整ないし造作のあり方で、端部の面取りないし面取り様ナデとするものから挽き出(伸)しを強調したものへの区分は可能となる。口径15~16cmをもつやや大振りの蓋は、これらに口径がほぼ対応する無高台盤か有台杯に伴うものと考えられるが、無高台盤についても体部調整の精粗性によってある程度の新旧の分割は可能となってくる。

しかし、出土状況の特に据置的な状況をもつA小群を軸にそれぞれの小群等をからませた場合、土器自体は新旧の時間幅をもちつつも同時期併存の遺物群と考えざるを得なくなるが、そうした場合特に問題となるのはA小群とB小群のほぼ中間部の地山面で2枚重ねとなって出土した土師器高台付椀(第15図33・34)の位置付けとなる。奈良・平安期にかけた日常供膳器における土師器の登場は、まず黒色土器(内面)から始まり、須恵器の減産・衰退化と連動して9C後半期より土師器椀・皿への置換現象化と、10C頃より有台を含めた土師器椀・皿類が加速度的に増加し主体化してくるという、大略共通の認識にある。これは供膳器として主体的となる土師器高台付椀の時期的位置とあり方ということになるが、当面として量比の極めて乏しいこの2点の台付椀がその他の須恵器と同時期に扱えるかどうか問題となってくる。



第17図 杯類等分類図(アルファベットは出土小群・無記入は包含層出土)

内面黒色処理とせず、底外面の削り等の二次的調整のない未調整のまま付高台を付す粗製の土師器碗は9C後半以降より確認されてきているが、古相となるこの種土器は外底面～体下半部にかけて回転の削り調整としたものが一般的であって、後出的とみられる未調整品は外底面を回転糸切りのままとしたものが10Cを前後する頃より出現してくるようであり、ヘラ切りの未調整品は現状では未確認である。あるいは底面の削り・高台貼付時の底面全体へのナデによる消去などがこの間の推移を含んでいるとも思える。従って、土師器では奈良時代的な様相をもつ赤彩環と平安時代前期後半頃とも想える粗製高台付碗とは同時間的併存（組成）関係にあったとは認め難いものがあるが、須恵器群では環3タイプとしたもの特に(2)タイプのものは戸津5号窯頃^③以来出現しているようで、以降おおむね3タイプをとって碗形タイプの出現する戸津9号窯頃（10C頃）まで器高の低平化を加えながら継承されてきているが、蓋では宝珠形つまみのみであること・Ⅲ期（9C中葉以降）では消失したとみられている有台盤^④が存在していることなど須恵器のみで見れば大きく時間幅を想定することは難かしい。

当面は、隔離的な立地と出土状況を重視して、戸津5号窯期頃からやや後出的な時期（Ⅲ期内＝9C前半）に納まる遺物群と想定して、以後叱正を仰ぎ再検討できうらばと思う。

遺跡の性格について概要報告時（『敷地天神山遺跡群』1983 石川県埋文センター）では、社内と伝えられる現在の菅生石部神社の背後丘陵縁辺部にあたり、孤立的で平地空間に極めて乏しい斜面部での土器群の据置的狀況や、赤彩土器・墨書土器等の存在から短絡に祭祀的側面を暗に強調したきらいがあるが、いずれかに特定しうる所在をみいだせていない。

素材としては、墨書土器の「上」カ・「盛」・「波」カ・「川」カとも読める（以下便宜的に？を外す）単字句からなる4点があり（他に不明1点）、出土位置としては、出土遺物群の最も上位地点の措置的状況のあるA小群中で「上」、これより下手で故意に割られたかとも想える破片を主としたC小群中にその他の3点が含まれて在った。この「上」・「盛」・「波」・「川」の読解が仮に妥当だとして安直に解釈を進めてみると、最も上位位置に定置させた盤類に天・神への供物を献じて「上」り奉るの意と、下位では環類により「波」の水湧き流る「川」の流れが常に豊かざること、黍稻（稷）を「盛」って祀る、農耕神ないし祖霊神への祭祀的行為が想われってくるが、基本となる素材の認定的操作を欠き、蛇足に走るものとなるため以上状況の報告までとしておきたい。

（中島）

註

- 1 吉岡康暢 『東大寺領横江庄遺跡』 昭和58年 松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 2 田嶋明人 『漆町遺跡 I』 昭和61年 石川県立埋蔵文化財センター
- 3 高堀勝喜・他 『戸津5号窯跡』 昭和54年 石川県教育委員会・戸津古窯跡調査委員会
- 4 註1に同じ。

第3項 近世火葬場地区（F区）

近世火葬場遺構検出区は敷地天神山遺跡全調査区の最東端に位置し、菅生石部神社裏手より続く“天神山”の南側谷あいをカットした平坦部約150m²に造営されている。上層部（第19図4、5層）は攪乱を受けた黒褐色系の粘質土で覆われ、その下の遺構面（第19図9～11層）も多数の土壌、溝などが僅かずつ上下しながら重なり合っているため細部にわたる層位的な観察は困難であった。遺構は第18図にも示したとおりに、溝状遺構、土壌状遺構、石組状遺構が検出されている。また遺物は陶磁器片を主体として、土製人形、鉄釘、煙管、銅銭、人骨片等が出土している。

1 遺 構

溝状遺構

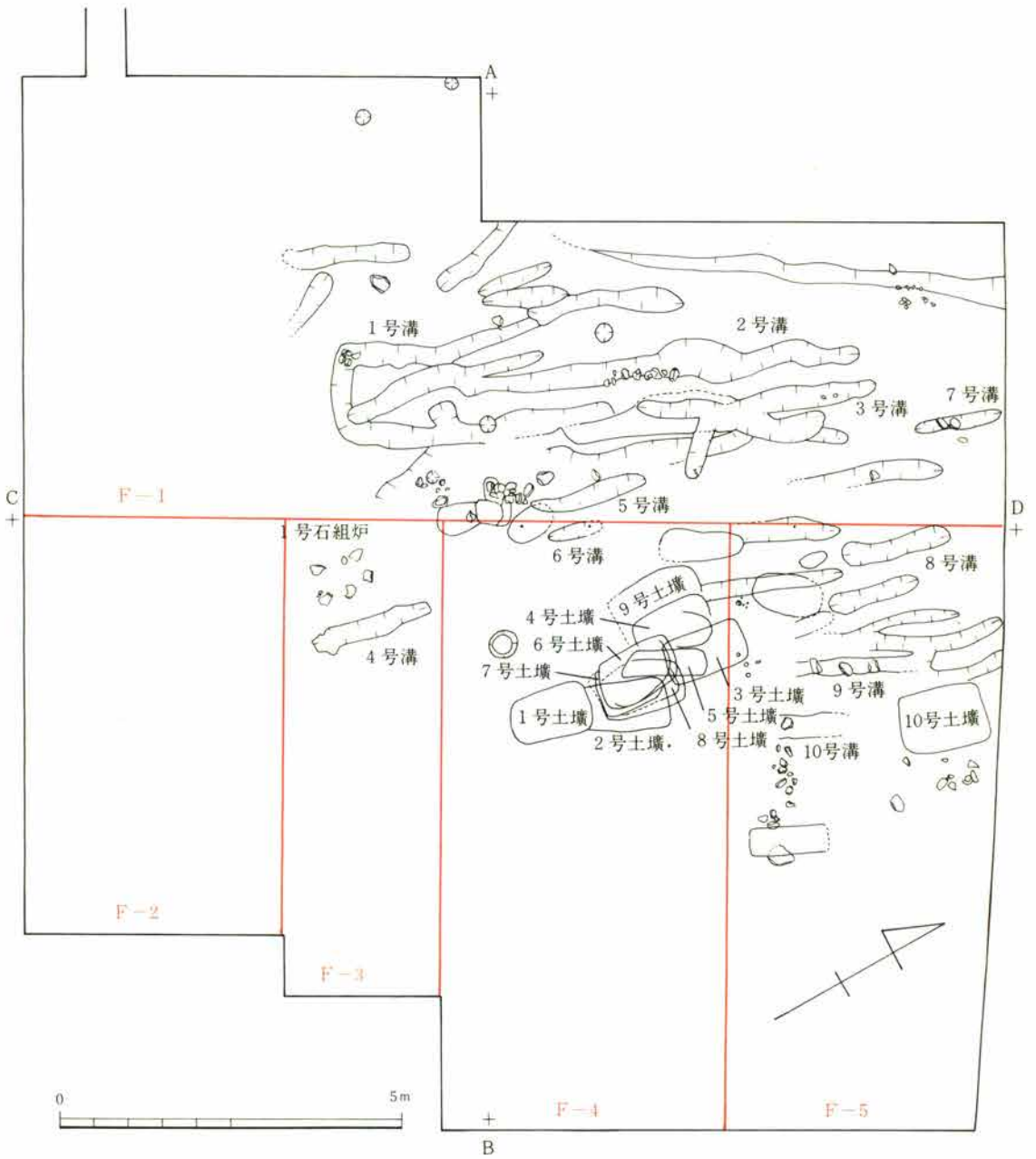
調査区西側の山際F-1区を中心として南北に軸をもつ溝状遺構が数条確認されている。幅20～40cm、深さ5～30cmを測り、土層断面図によると調査区中央の土壌群より先行するものと見受けられる。1号溝はコの字型を呈し、顕著な焼土壁や焼け石を伴わない。2号溝は1号溝に挟まれるようにして北から南に伸びており、溝中央部に1列に並ぶ角石をはじめ溝壁にも熱を受けた痕跡が認められる。また溝内より出土した人骨、鉄釘のほか土鈴（第27図6）にも加熱による変色が見られる。3号溝からは染付瓶（第26図62）、形状不明品（第27図5）と共に寛永通寶が5枚重なり合って出土している。4号溝は長さ175cm、幅30～40cm、深さ5～15cmを測り、F-3区に位置する。全体にしっかりとした焼土壁が残っており、溝内からは多量の人骨片、炭化物、焼土が出土している。5～10号溝は焼土壁や焼け石を伴うものであり、特に10号溝は壁面に強く火を受けた痕跡があり、多量の人骨片が出土している。

土壌状遺構

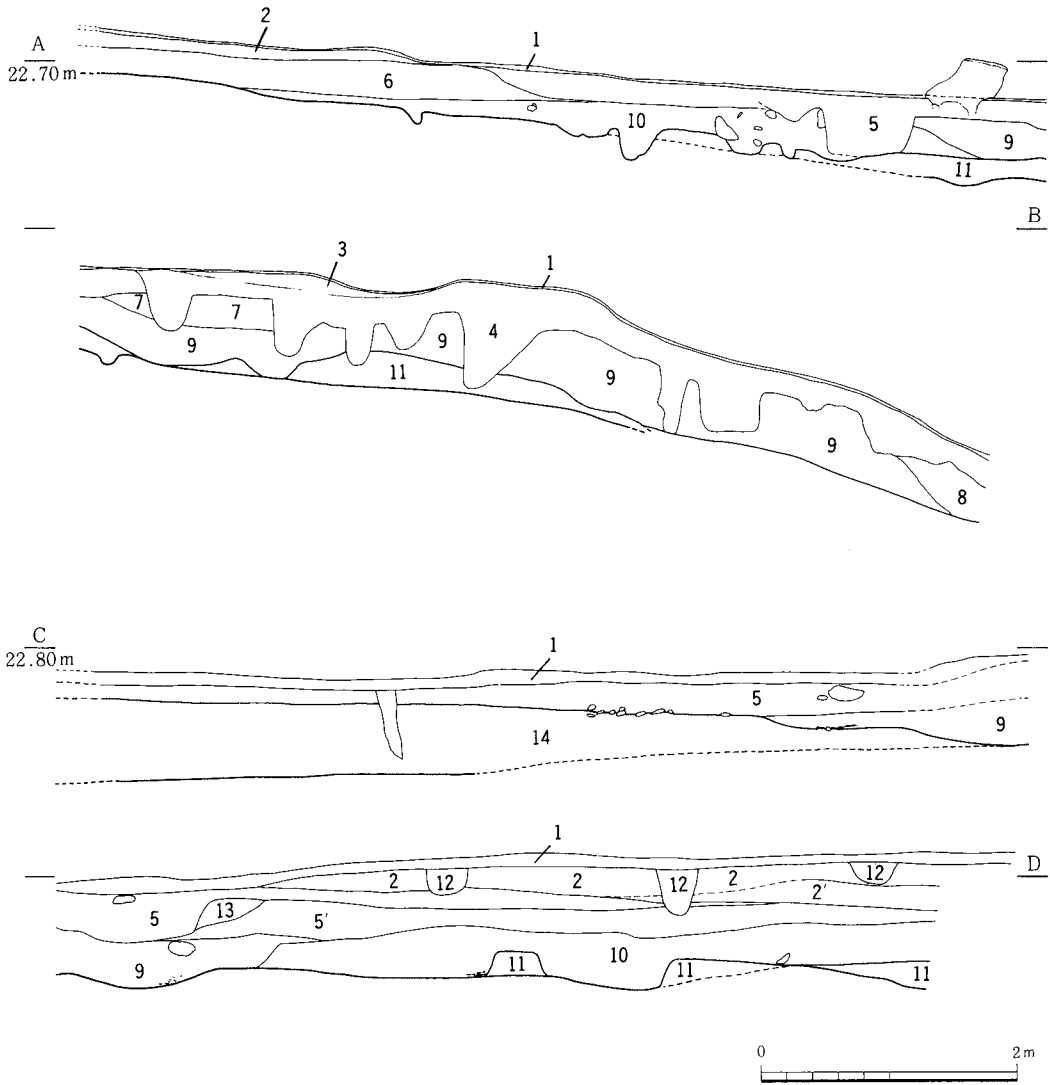
F-4区を中心にして数基の方形土壌が重なり合って検出された。いずれも長軸を南北に持ち、平均法量は約60×120cmを測る。1号土壌は75×115cm、深さ5～15cmを測る。床面には熱を受けて赤変した10cm大の石が敷き詰められており、土壌南側には厚さ2～3cmの焼土壁が残存している。3号土壌は65×115cm、深さ10～15cmを測る。覆土内には炭化物が目立ち、床面は焼けて赤灰色を呈する。6～8号土壌は、1号土壌の北に位置し、土壌状火葬遺構群の中心部に当たる。規模はそれぞれ75×105cm、75×(110cm)、(85)×125cmを測り、石の残りは少ない。10号土壌は95×130cm、深さ20～35cmを測り、やはり同一遺構内での新旧関係が認められる。一度使用した石を何度も再利用したものであろうか。なおほとんどの土壌内からは人骨、炭化物と共に棺桶に使われていたと思われる鉄釘が出土している。

石組状遺構

4号溝の西、F-3区に位置する。熱を受けて赤変した20～30cm大の角石が6個並んだもので、他の遺構と同様に南北に長軸を持つ。しかし、人骨片、鉄釘などの遺物は付近から出土せず、直接火葬に使用された施設かどうかは不明である。

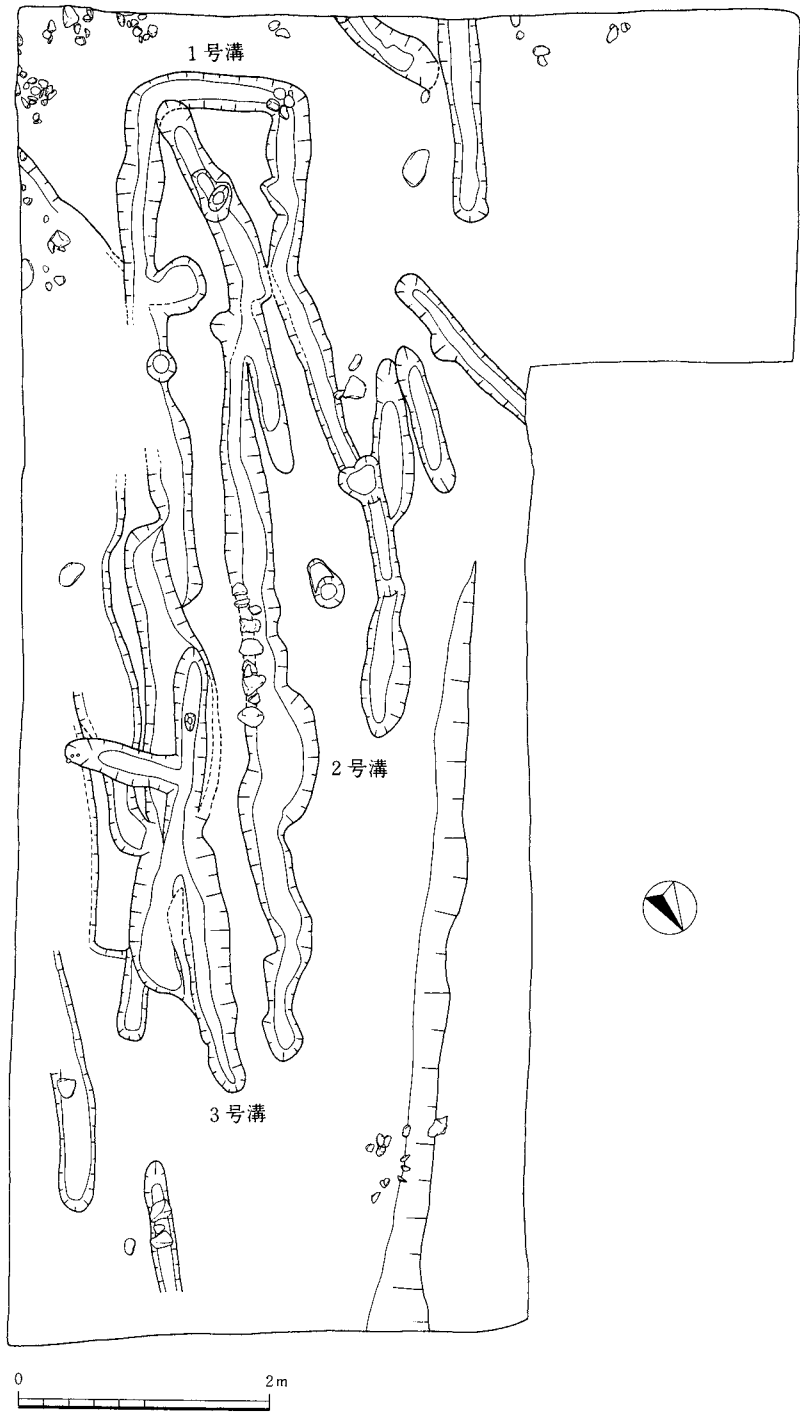


第18图 近世火葬場地区 (F地区) 主要遺構模式図 (S=1/100)

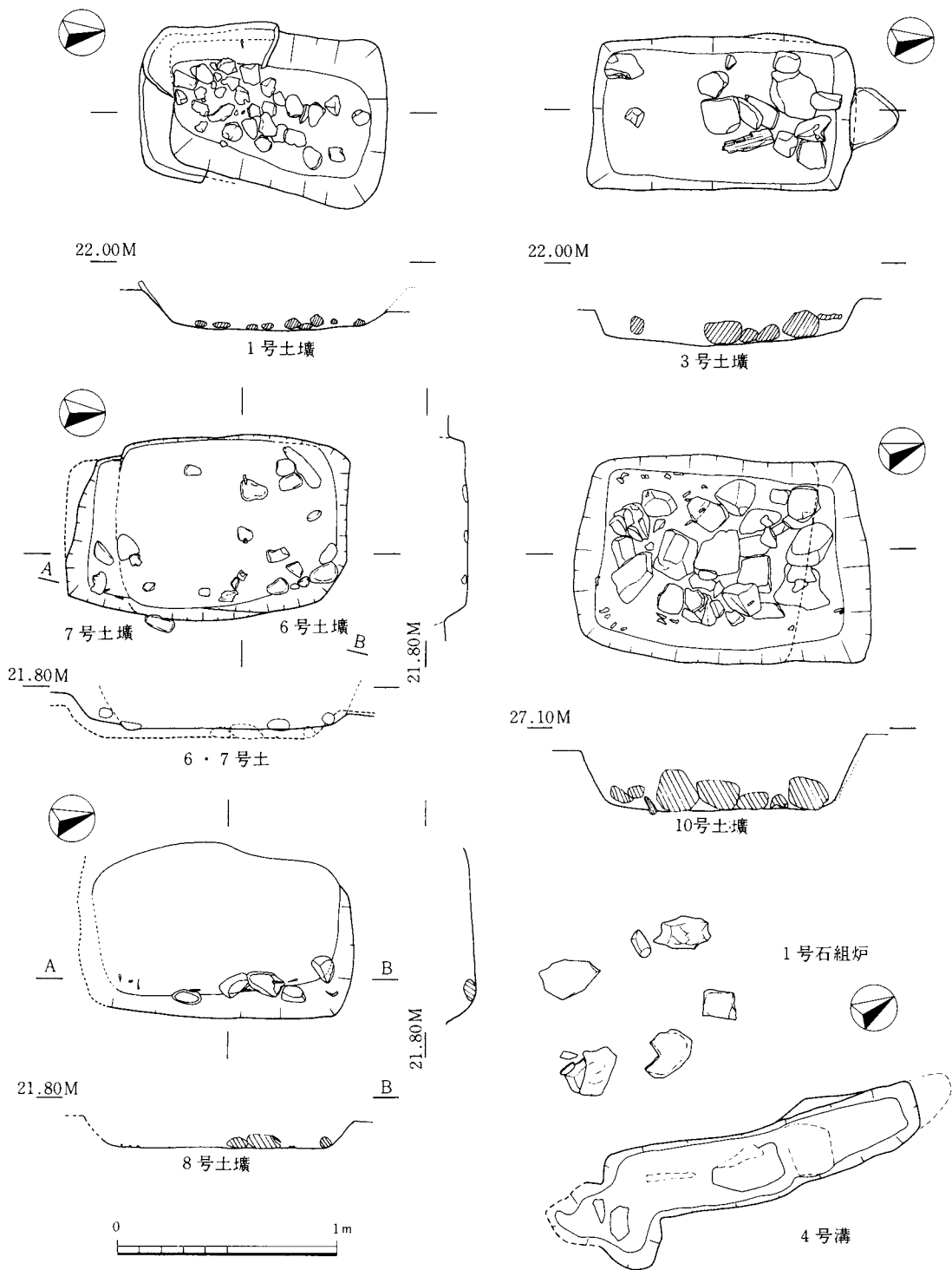


- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 1 表土層 | 8 4に褐色粘質土混入 |
| 2 黄褐色粘質土層 | 9 暗褐色粘質土層（骨片・炭化物・焼土ブロック混入） |
| 2' 淡黄褐色粘質土層 | 10 濁暗褐色粘質土層（骨片・炭化物・焼土ブロック混入） |
| 3 黒褐色粘質土層（黄褐色ブロック少量混入） | 11 淡褐色粘質土層（骨片・土器片少量混入） |
| 4 黒色粘質土層（しまり非常に弱い） | 12 褐色粘質土層 |
| 5 黒褐色粘質土層 | 13 5に黄色粘質土混入 |
| 5' 黒褐色粘質土層（焼土ブロック混入） | 14 淡褐色砂質土層（遺物・炭化物等含まず） |
| 6 淡褐色粘質土層 | |
| 7 濁褐色土層（骨片少量混入） | |

第19図 F地区土層断面実測図（S=1/60）



第20图 F-1区1~3号沟实测图 (S=1/60)



第21图 F地区土壤、石組炉、溝実測図 (S=1/30)

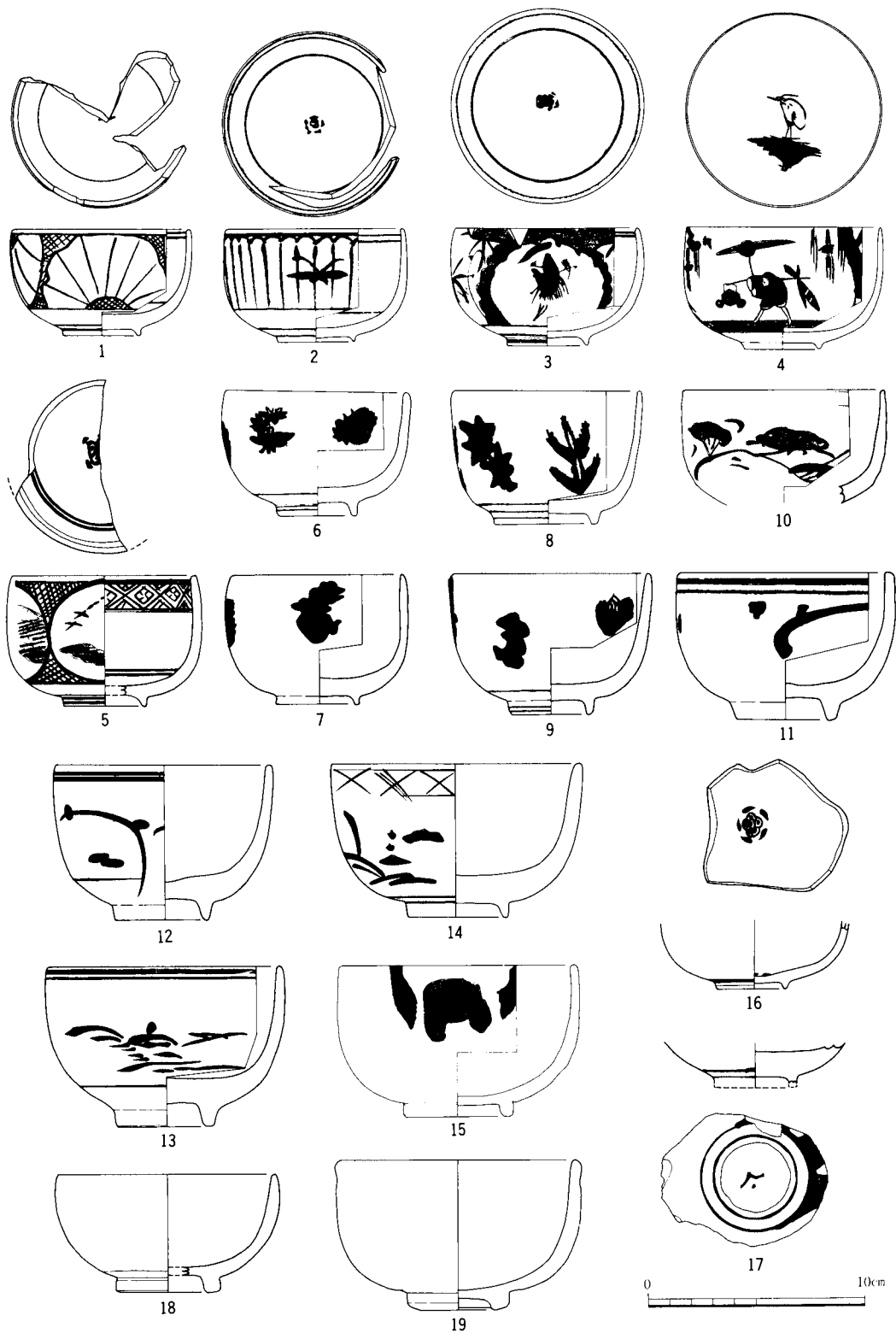
2 遺 物

陶磁器（第22～26図）

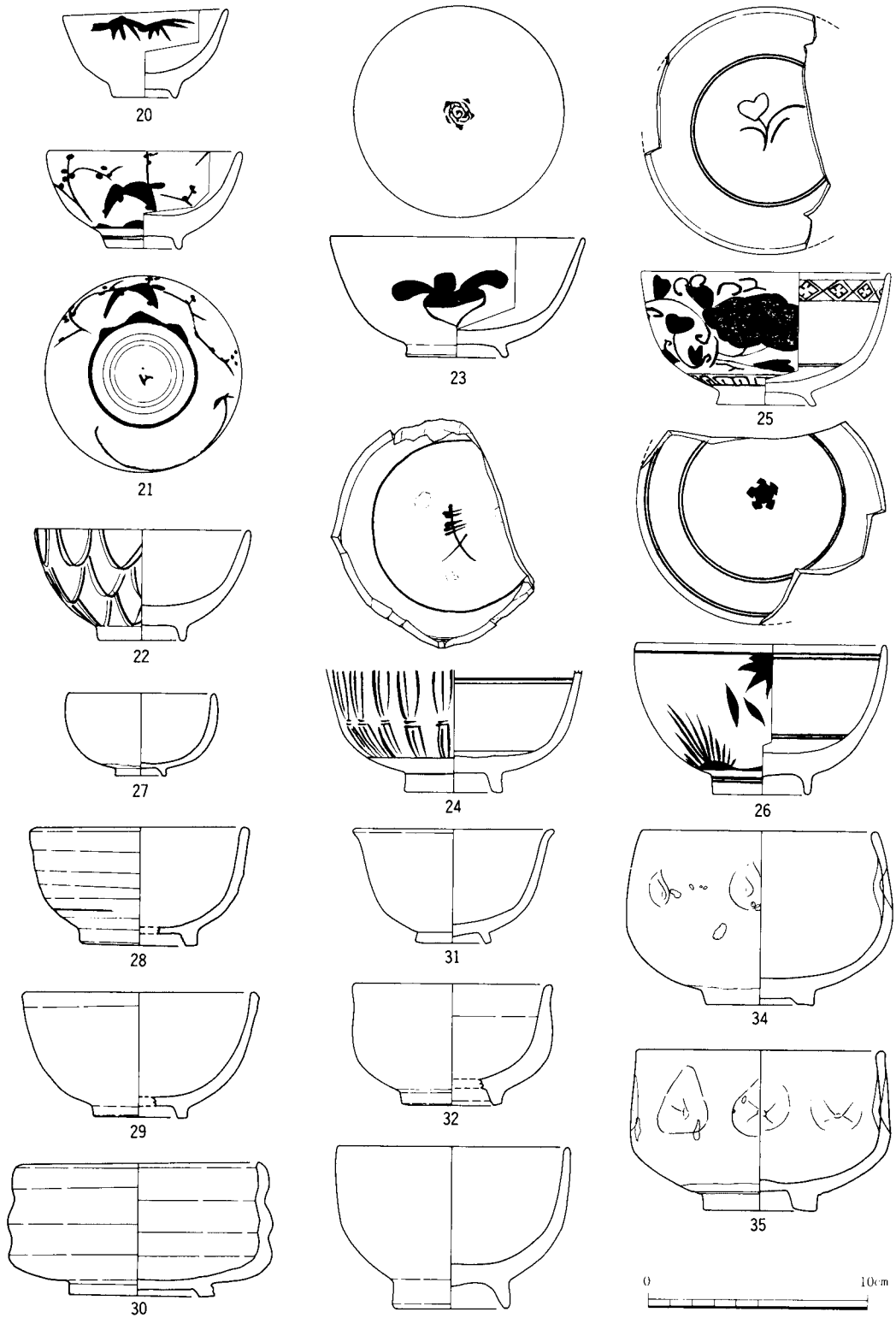
F区からは破片数にして数百点を越える多量の陶磁器片が出土している。しかし遺構に付くものは数点しかなく、残りのすべては包含層からの出土遺物である。おそらく葬儀の際に使用した後、廃棄されたものであろうが、銅銭等と異なり二次的な加熱（以下二次加熱）を受けたものが少なく、碗類に較べ皿類が極端に少ないという特徴を持つ。また上層（2～5層）、下層（9、11層）間で接合出来るものも相当数確認されるため、層序で新旧関係を検討することは困難である。

1～7、10は高台脇から腰部にかけて丸みを帯びて立ち上がり、口縁部分で緩く内湾する染付茶碗。1は8枚の花弁を持つ半菊花文を4つ交互に配する。高台は低く、胆土はややくすんだ白色を呈する。2は簡略化された蓮弁の中に3匹の蝶文を、そして見込にはくずれた花文を描く。胎土、釉とも灰色がかり、呉須の発色は黒ずんでいる。3は胴部全体に草花文を描く。胎土、釉調、見込文様は2に似る。4は唐人風の馬上人物とその後ろに荷物を持った傘人物が描かれている。見込には水鳥（鷺）を配す。器壁は薄く、胎土は白く緻密で釉は青みが少ない。5は丸文の窓の中に雁文が見られる。口縁部内面には菱形花弁文が巡る、二重の圏線内には五弁花を描く。また見込内には二ヶ所の目跡が認められる。⁽¹⁾6～9は印判による装飾法をとる。6、7、9は鳥文と花文、8は紅葉であろうか。6は器壁が厚く、釉調、呉須の発色ともに灰色を呈する。7の釉は黄色味が強く、文様は灰緑色となる。8は他の茶碗に較べ高台径が広く、胴部は直線的に立ち上がる。9は内外面ともに二次加熱を受けており、全体がくすんだ灰色になっている。10もやはり胎土、釉調ともに灰色で、器表面には松文が描かれている。11～14は半磁器製の大幅の茶碗である。いずれも見込、外底面に文様を持たず、器表面には貫入がはいる。また高台畳付部は無釉に仕上げる。11は赤褐色の胎土の上に白釉がかかる。簡略化された草花文は青黒く発色し、体部下半は二次加熱のためか輝きを失っている。12は灰色のざらついた胎土を持ち、灰白色の釉上に草花文を描く。13にはやや緑がかった釉がかかり、文様は褐色の鉄絵で描かれている。14の口縁部外面には、くずれた菱形花弁文が消えぎえに認められる。また高台は低くなるが胎土は12、13と同様、ざらつきのある灰色を呈する。15は陶器茶碗である。全面に貫入のはいったガラス質の黄釉は高台脇で止まり、外底部は無釉となる。文様はコバルトと鉄絵(?)で描かれるが意味は不明である。胎土は粘りのある白色を呈し、所々に石英粒が見うけられる。16、17は共に茶碗の底部片である。16は薄い器壁と白く緻密な胎土を持ち、見込には五弁花を配する。17は底部が厚く、胎土、釉調も灰色がかり。また高台部は故意に打ち欠いたような印象を受ける。18は半磁器製で、貫入のはいった光沢のある黄釉は高台脇で止まる。高台の削りはシャープで、断面は方形を呈する。19は柔らかな淡灰色の胎土の上によく溶けきらない(?)灰釉がかかる。釉は高台脇で止まり、外底部は露胎となる。20～26は体部が外側へ開くタイプの染付製品。20は口径7.6cmの小盃で、文様は口縁部の笹文のみである。釉は白灰色を呈し畳付付近は無釉となる。21は梅花文を純度の低い呉須で描いている。器壁は厚く、胎土、釉共に灰色を呈する。また外底部の文

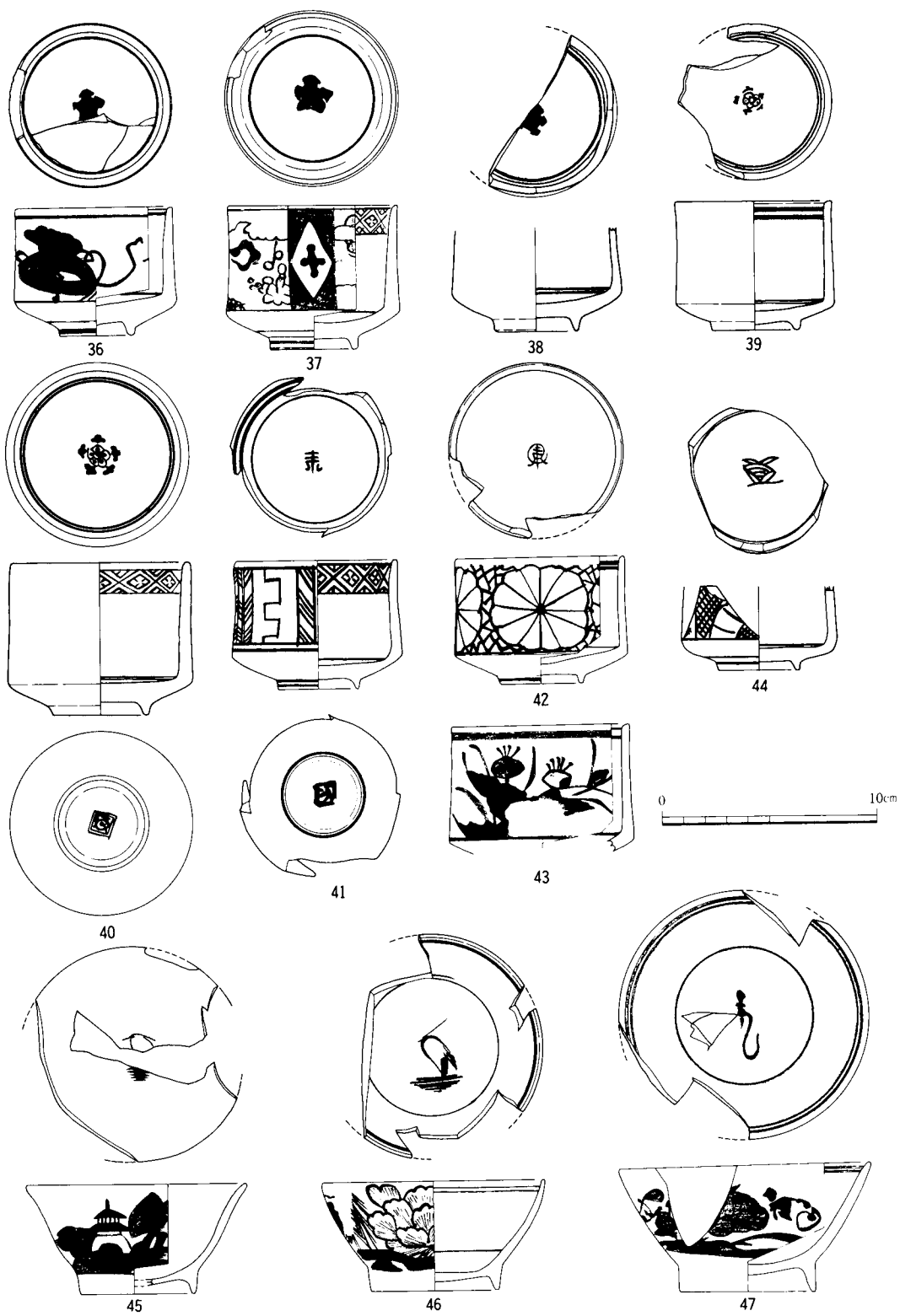
様は17に似る。22は21によく似た胎土、釉調を持つ網目文碗。文様は二重にからませた網文を三段に交互に配するが、この二重の網目は「割り筆」で一気に描く手法をとる⁽²⁾。23は虫文(?)を三方に配し、見込にはくずれた五弁花を描く。高台は外側にふんばり、器表面には貫入がはいる。また五弁花を囲むように三つの目跡が見られる。24の文様は簡略化された暦文であろうか。見込には23と同様の目跡が認められる。25は内外面に草花文、口縁部内面には菱形花卉文が描かれる。しかし器表面全体に二次加熱を受けているため、文様は青黒くくすんでいる。26は外面に草文、見込には印判による五弁花を描く。器壁は厚く、胎土、釉調は灰色がかかる。27は全面に貫入がはいる灰釉の小盃。釉は高台脇で止まり、外面には二次加熱の痕跡が残る。28の灰釉は体部下半で止まり、高台を含めた外底の露胎部は淡赤褐色を呈する。29は外面のみに鉄釉を施した磁器茶碗。内面の釉調は灰色がかり、畳付の鉄釉は削り取られている。30は高台部を除いた全面に鉄釉がかけられている。31は口縁部が外反する全面施釉の灰釉盃。釉には若干むらがあり、口縁部内面のみを淡青色に仕上げる。32の体部は厚く、褐色の鉄釉は高台脇で止まる。胎土は軟質な灰色を呈する。33はやや濁ったガラス質の黄釉を持つ全面施釉の陶器茶碗。高台は高く、器表面には顕著な貫入が見られる。34、35は黒褐色の鉄釉がかかる陶器茶碗であるが、高台および畳付は無釉となる。外面には長石を散らし、横一列に数カ所くぼみを持つ。げんこつ茶碗と呼ばれるものか。36~44は腰部が鋭角に立ち上がる器形を持つ染付筒形碗。36は外面に笠と蓑、見込には印判によるくずれた五弁花が描かれる。釉調は灰色がかり、呉須の発色もやや黒ずんでいる。37も見込に五弁花が見られる。また外面には菱形文と松文、口縁部内面には菱形花卉文を描く。器表面は二次加熱により白くくすみ、文様の輪郭もぼやけている。38~40は外面を青磁、内面を染付に仕上げていく。いずれの見込にも二重圏線内に五弁花を配する。40の口縁部内面には菱形花卉文、高台内の外底部には方形枠内にくずした福字(渦福)が描かれる。41は幾何文と綾杉文を組み合わせである。見込には来字、高台内には方形文様がはいる。42は12枚の花弁を持つ菊花文が6つ描かれている。見込の文は来字であろうか。43は大ぶりのもので、外面には草花文を描く。44は格子状の網目文の中に半菊花文を二段に配したもの。見込の文様は他の破片中にも何点か見られる。45~51は外側へ開く体部と高い高台を持つ染付碗。45は器壁が薄く、口縁部は緩く外反する。文様は山水の中に樓閣を描き、見込には鳥文を配する。46の見込にも水辺にたたずむ鷺の姿が表現されている。47は外面に草花文、見込には寿字文が見られる。48、49は柳下に一軒の家を配した山水文、その反対側の数艘の帆掛船、そして見込の帆掛船文様と、描かれている図柄はそれぞれ実によく似ている。しかし48が磁器であるのに対して、49は全面に貫入がはいる陶器であり、胎土、釉調に関しては顕著な相違を見せている。50は胴部中央に算木文、見込に笠文を描く。器壁は全体に薄く、呉須はくすんだ蓬色を呈する。51は全面に灰白色の釉がかかり、外面には山水文、見込には梅鉢様の花文を描く。また胎土は陶器に近い印象を受ける。52は見込部分の釉を蛇の目形に剥ぎ取る染付皿。二重の圏線内には印判による五弁花を配し、円外には簡略化した唐花唐草文を描く。器壁は厚手で高台は急角度で内に傾く。56は胴部に屈曲を持つ鉄絵皿であり見込に細筆で草文を描く。高台の削り出しは浅く、体部下半で止まる釉は一部高台脇まで流れている。57は畳付を除く全面に長石釉をかけた角形皿か。胎土は柔らかな乳白色を呈する。58は赤褐色の胎



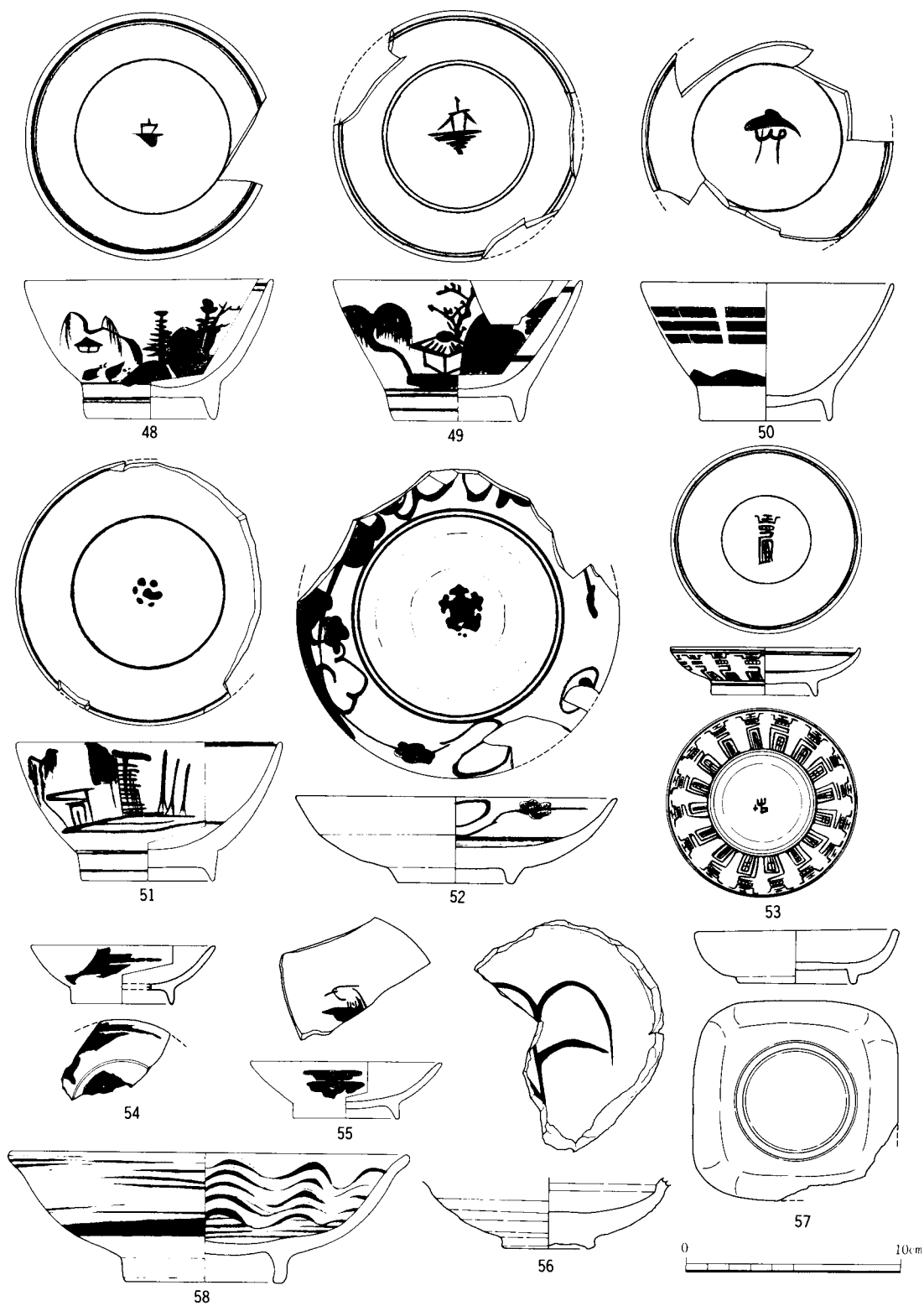
第22图 F地区出土遗物实测图 (S=1/3)



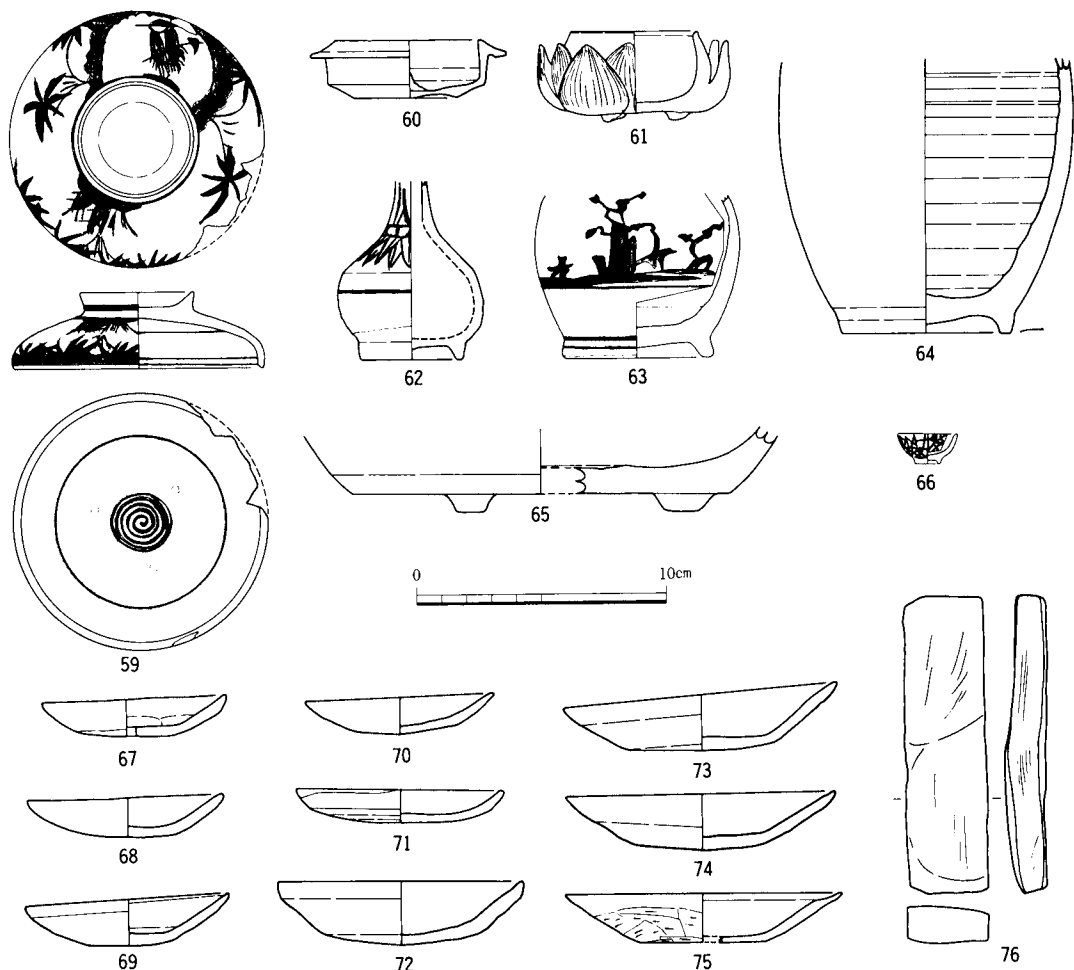
第23图 F地区出土遗物实测图 (S=1/3)



第24图 F地区出土遗物实测图 (S=1/3)



第25图 F地区出土遗物实测图 (S=1/3)



第26図 F地区出土遺物実測図 (S=1/3)

土に白刷毛で波状文、平行線文を描いた刷毛目陶器鉢。見込の釉は蛇の目形に剥ぎ取られ、体部下半は露胎となる。53~55、59は図上では一部皿の表現をとっているが、いずれも染付蓋と思われる。53は内外面に文字文を配する。54、55は同一個体である。外面の文様は城門と旗を描いた入城図であろうか。内面には鷺が見られ、呉須の発色は青く鮮やかである。59は笹文の中に笠蓑を着けた人物が描かれている。また内面の渦巻文を囲むようにして三ヶ所の目跡が認められる。60は鉄釉の落とし蓋である。釉は上面だけかけられ、中には粘土を半捻りしたつまみが付く。61は陶製の緑釉香炉である。中央容器の外側に12枚の蓮弁を交互に配し、底部には3つの足を持つ。62~64は染付花瓶である。62は3号溝から出土した数少ない遺構資料で、肩部には上下に蓮弁状の文帯を巡らし、胴部には一本の圈線を描いている。また二次加熱を受けた釉は高台脇で止まり、外底部は露胎となる。それに較べて63、64は畳付のみが無釉となっている。65は底部に足を持つ土師質の火炉か。66は口径2.4cmを測るミニチュア製品である。紅皿のような化粧具として使われていたのだろうか。

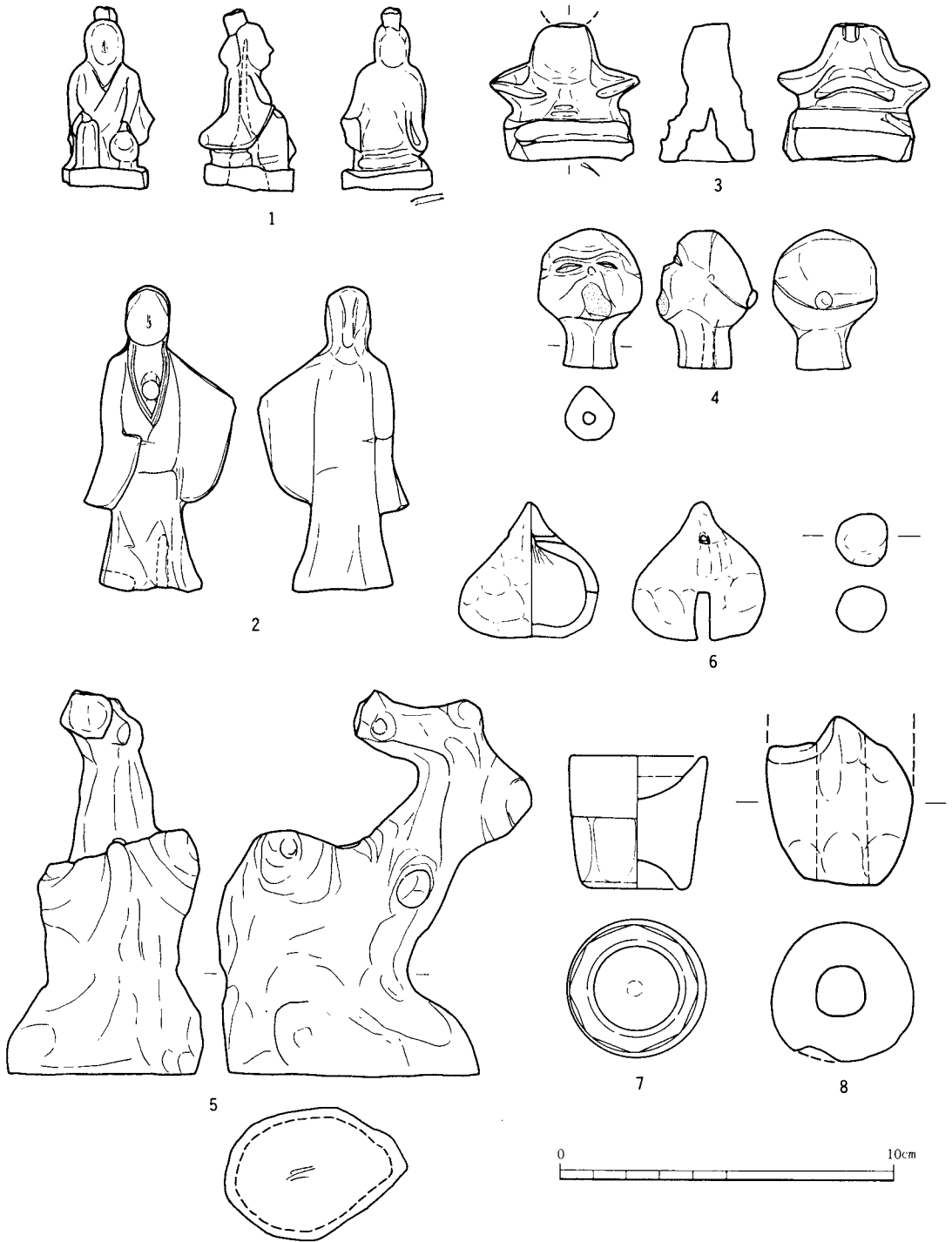
67~75は土師質土器、76は片側にだけ研面のある砥石である。

第1表 陶磁器、土師質土器一覽

番号	器種	出土地点	法 量 (cm)	番号	器種	出土地点	法 量 (cm)
1	碗	F-1・3(2,5層)	口径8.2 底径3.6 器高4.9	39	碗	F-5(4層)	口径7.4 底径4.1 器高6.0
2	碗	F-4・5(4,9層)	口径8.4 底径3.6 器高5.2	40	碗	不明	口径8.5 底径4.5 器高7.1
3	碗	F-3・4(4層)	口径 8.5底径3.8 器高4.4	41	碗	F-3(4層)	口径7.6 底径3.8 器高6.0
4	碗	F-2~4(4層)	口径8.9 底径3.4 器高5.6	42	碗	F-3・4(4,9層)	口径8.0 底径3.8 器高5.9
5	碗	F-5(4層)	口径8.4 底径3.8 器高6.0	43	碗	F-3~5(9層)	口径8.4
6	碗	F-1・3(2,5層)	口径8.4 底径3.7 器高5.8	44	碗	F-3(4層)	底径3.8
7	碗	F-5(4層)	口径7.8 底径3.7 器高6.0	45	碗	F-3~5(4,9層)	口径10.6底径5.8 器高5.2
8	碗	F-4・5(9層)	口径8.6 底径4.7 器高6.2	46	碗	F-2(4層)	口径10.6底径6.0 器高5.2
9	碗	F-4・5(9,11層)	口径9.0 底径3.6 器高6.5	47	碗	F-4・5(4層)	口径11.7底径6.3 器高6.1
10	碗	F-2・4・5(3,4層)	口径9.2	48	碗	F-2~5(4,9層)	口径11.7底径6.0 器高6.6
11	碗	F-4(4層)	口径9.6 底径4.4 器高6.8	49	碗	F-4(4層)	口径11.8底径6.3 器高6.6
12	碗	F-5(4層)	口径9.8 底径4.5 器高7.1	50	碗	F-4・5(9層)	口径11.7底径6.2 器高6.5
13	碗	F-5(4層)	口径10.7底径4.3 器高7.4	51	碗	F-3・4(4層)	口径12.4底径6.2 器高6.5
14	碗	F-3(5層)	口径11.6底径4.6 器高7.2	52	皿	F-3(4層)	口径15.1底径5.5 器高4.1
15	碗	F-3(5層)	口径11.2底径5.1 器高7.0	53	蓋	F-5(4層)	鈕部径5.0口径8.8 器高2.2
16	碗	F-3(5層)	底径3.2	54	蓋	F-4(9層)	鈕部径4.9口径8.9 器高2.7
17	碗	旧水田面	底径(3.8)	55	蓋	F-4・5(9層)	54と同一個体
18	碗	F-4(4層)	口径10.0底径4.8 器高5.5	56	皿	F-3(4層)	底径4.4
19	碗	F-2(1層)	口径11.5底径4.8 器高7.0	57	皿	水田面	口径9.3 底径5.6 器高2.6
20	盃	F-5(4層)	口径7.6 底径3.0 器高4.1	58	鉢	F-4(4層)	口径19.0底径7.4 器高6.2
21	碗	F-3(4層)	口径9.0 底径3.4 器高4.5	59	蓋	不明	鈕部径4.7口径9.8 器高3.0
22	碗	F-2・4(4,9層)	口径10.0底径6.0 器高5.1	60	蓋	F-3(4層)	口径5.8 底径4.2 器高2.3
23	碗	不明	口径11.8底径4.5 器高5.6	61	香炉	F-4・5(9層)	口径5.0 底径3.6 器高3.6
24	碗	F-4(9層)	底径4.5	62	瓶	F-1(3号溝)	底径4.0
25	碗	F-3・4(4,9層)	口径11.3底径4.6 器高6.1	63	瓶	F-3(4層)	底径6.0
26	碗	F-3・5(4層)	口径11.5底径4.5 器高6.9	64	瓶	F-3(4層)	底径6.6
27	盃	F-3(4層)	口径6.8 底径2.4 器高3.8	65	火炉	F-3(4層)	底径15.0
28	碗	F-4(4層)	口径10.1底径5.5 器高5.5	66	碗	不明	口径2.4 底径1.0 器高1.2
29	碗	F-4・5(9層)	口径10.6底径4.4 器高5.8	67	皿	F-3(4層)	口径7.3 器高1.4
30	碗	F-5(4層)	口径10.8底径6.6 器高5.3	68	皿	F-5(4層)	口径7.8 器高1.7
31	盃	F-3・4(4層)	口径9.4 底径3.5 器高5.3	69	皿	F-4・5(9層)	口径8.1 器高2.1
32	碗	F-5(4層)	口径9.0 底径4.6 器高5.6	70	皿	F-4・5(4層)	口径7.4 器高1.6
33	碗	F-3(4層)	口径10.8底径5.4 器高7.6	71	皿	F-5(4層)	口径8.2 器高1.3
34	碗	F-4・5(4,9層)	口径10.5底径4.9 器高8.0	72	皿	F-4・5(4層)	口径9.6 器高2.5
35	碗	F-3(4層)	口径11.2底径5.2 器高7.4	73	皿	F-4・5(9層)	口径10.9器高2.7
36	碗	F-3(4層)	口径7.4 底径3.5 器高5.9	74	皿	F-4・5(9層)	口径10.7器高2.3
37	碗	F-3(4層)	口径8.0 底径4.0 器高6.7	75	皿	F-4.5(4層)	口径11.0底径4.8 器高1.9
38	碗	F-4(4層)	底径5.6	※第22~26図1~75の一覧表である。			

土製品（第27図）

1～4は素焼きの型造り土人形である。いずれも前面と背面の2枚の型を張り合わせて成型されている。現在全国各地に流布している郷土土製人形の源流は江戸時代初期に京都の伏見稻荷大社周辺で生み出された伏見人形に求めることが出来るが、これら4点もその例外ではないであろう。しかし時期的には、一般庶民が土製の玩具を使用しての遊びが盛んになった江戸後期頃の作品と考えている。1は高さ5.5cmを測る人物座像である。片膝を立て、頭には冠を付けている。目、口の成型は分からないが、鼻筋だけがやけに目立つ。底部にはくぼみがあり小孔が穿たれているが、型おこしの後の陰干しの際に、でく棒を差し込んだ痕跡と思われる。⁽³⁾2は女人の立像であり、高さは9.2cmを測る。髪を後ろで束ね、懷に子供を抱く子抱き人形ではないだろうか。福島県の張子人形である三春人形にも同様の題材がみられる。底部にはやはり小孔が穿たれている。⁽⁴⁾3は頭部を欠くが、袴姿の天神人形と思われる。座像であり基台は2段になっている。天神人形とは言うまでもなく菅原道真をかたどったものであり、近世における天神信仰がここ大聖寺においても、一般庶民に深く浸透していたことを窺わせる好資料であろう。天神は今日においても郷土玩具として全国各地で製作されており、宮城県の宮入り天神、京都府、秋田県の牛乗り天神などのように、それぞれの地域で信仰と結び付き、多くのバリエーションある作品を生み出している。⁽⁵⁾4は首人形である。口の部分が一部欠けているが、髪を後ろで結んだ老婆であろうか。見様によってはユーモラスな顔立ちをしている。長さは4.2cmを測り、底部には径0.4～0.5cmの小孔が穿たれている。首に竹串をつけ、苞³にさして売られたのであろう。このような首人形は、遊びの少なかったとされる近世、近代の庶民生活の中における女子の着せ替え遊びの道具として知られている。5は3号溝から出土している数少ない遺構資料の一つである。陶製の型造りでは空洞になっている。色調は白濁色で所々に少量の銀粉が付着するが、被熱による溶解のためか形状は判断出来ない。肩部には径約0.8cmの孔を持つ。底部は型おこしの後に張り付けられたもので、編物状の圧痕と指押さえの痕跡が認められる。用途としては一輪差しなどが考えられようか。6は2号溝出土の素焼きの土鈴である。巾着型の鈴で熱を受けて赤変してはいるが、今でも振るとカラカラという小気味の良い音が聞かれる。長さは4.2cmを測り、内には径約1.5cmの土玉を持つ。土鈴も古くから全国で作られているが、岐阜県などでは縁起物の蚕鈴として庶民生活に定着していたという。⁽⁶⁾大聖寺藩でも絹織物が18世紀中葉に藩内に持ち込まれており、九谷古窯と並ぶ大聖寺の特産になっている。この鈴も開運祈願の蚕鈴として蚕室にかけられていたとは考えられないだろうか。7は上下に半円形の窪みを持つ高さ4.0cmの土製品である。上部径4.0cm、下部径3.0cmを測り、下半分には八角柱状の面取りが施されている。面部分は下に行くほど摩耗が激しく、形状からは何らかの土型として使われたことが推測される。柿右衛門様式では六角形や八角形の小碗を大量生産する際に土型を使用したことが知られているが、本品に関しての詳細は明らかではない。⁽⁷⁾8は残存率50%程度の土錘である。孔径1.5cm、重さ67.5gを量り器表面には指押さへの痕が残る。なおそれぞれの出土地点は1がF-4区9層、2、8がF-3区4層、3、4、7がF-4・5区4層である。



第27图 F地区出土遗物实测图 (S=1/2)

金属製品（第28～30図）

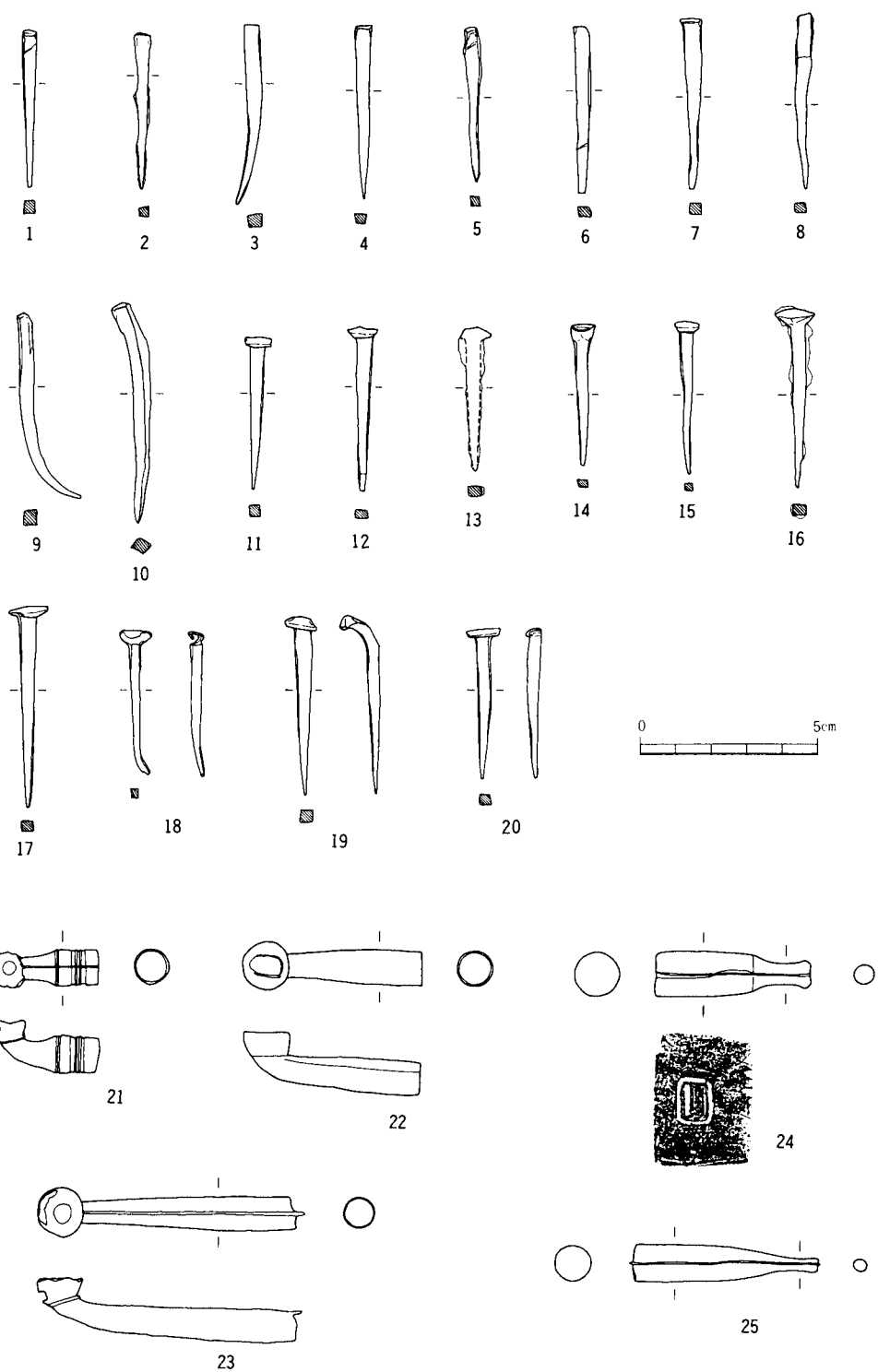
鉄釘 F区全域から多量に出土している鉄釘は断面が方形の和釘であり、建築用材として棺桶に使用されていたものであろう。ここでは比較的残りの良い20点を図示した。

1～10は頭部に折り返しを持たない平釘である。頭頂部は打撃が加えられたために若干肥厚している。長さは4.4～6.3cmと多少差があり、平均重量は2.7gを量る。11～20は頭巻釘である。頭部の一方をたたき出して偏平に伸ばした後、先を少し折り曲げている。図示した釘はすべて使用痕の残るものであるが、18は頭部への打撃が弱かったためか、鑄造製作時の形態を比較的良好に止めている。他の頭巻釘は頭部が打撃により潰れ、使用後はあたかも西洋丸釘と同様の形態をとっていることが分かる。現長は4.0～5.7cm、平均重量は2.2gを量る。鉄釘は包含層だけではなく溝、土壌内からも骨片と共に多量に出土しており、出土状態から見ると平釘と頭巻釘は特別に区別されずに使用されていたらしい。

煙管 昭和57年度の調査区からは合計5点の煙管が確認されている。日本に煙草が渡来したのは16世紀末ごろと考えられており、それに伴う喫煙具としての煙管も慶長年間（1596～1615）には広く一般に普及したものと見られている。その後喫煙習慣が男女子供を問わず各層に急速に広がったため、幕府からはたびたび禁煙令が出されているほどであるが、ほとんど効き目はなかったという。なお日本において紙巻き煙草が作られるようになったのは明治13年のことで、それまでは刻み煙草しかなく、勢い煙管の需要も増加していくことになる。本遺跡出土の煙管はおそらく故人の愛用品として、火葬の際棺桶内に添えられたものであろう。

さて煙管は大きく雁首、羅宇（らう）、吸い口の3つの部分に分かれる。羅宇は雁首と吸い口に挟まれた竹の管のことであるが考古資料としては残りにくい。雁首は煙草をつめる火皿とそれに続く胴中とに細分されるが、それぞれに作って後に接着するという製作過程をとる。⁽⁸⁾

21は火皿の上部を欠く短い雁首。胴中の合わせ目を背面に持ち、羅宇挿入部に「筋」、あるいは「毛筋巻」といわれる沈線⁽⁹⁾を施す。22は長さ5.1cmを測る完形の雁首。火皿は浅い碗形を呈し、胴中の合わせ目は側面に持つ。また図示できなかったが胴中の表面には植物の葉を表現したような丸文が全部で6つ配列されている。文様は浅く彫刻され、手彫りのため一つ一つの大きさ、形は微妙に違っている。23は3点の中で最も長い7.6cmを測る。胴中を背面で合わせて火皿を接着した後、1mm弱の細い金属板で合わせ目と、火皿と胴中の接合部を補強している。24、25は吸い口であり、一枚の金属板を叩き丸めて作られている。また合わせ目には23で見られたような補強帯を持つ。24は羅宇挿入部が太く、吸い口部分は急に細くなる。合わせ目の反対側には鑿（たがね）で打ち込まれたと思われる方形の銘が認められるが、何を表現しているのか定かではない。25は24に較べ地金が薄い。全体に緩やかで極端な変化のない形態で、最も一般的な吸い口と思われる。これら5点の煙管は22、23、25がF-3区4層、21、24が天神山下の旧水田面から出土している。材質は銅あるいは真鍮製である。



第28图 F地区出土铁钉、烟管实测图 (S=1/2)

近年全国各地で煙管の出土量が増加して来ており、東京の江戸遺跡では大まかな編年案も出さ⁽¹⁰⁾れている。それを基に本遺跡出土の雁首を見た場合、3点とも直線的な胴中に直接火皿が付く、いわゆる首を持たない形態をとる。これは江戸遺跡の雁首第II類Cに近く、江戸中期～後期を中心とする時期に位置付けられている。吸い口に関しては雁首ほどに顕著な差異が生じにくく、25は雁首第II類Cに対応しても良い形態であるが、24はそれよりも古くなるという。

銅銭 F区からは全部で30枚の銅銭が確認されている。その内訳は寛永通寶28枚、永樂通寶1枚、銭文不明が1枚であり、出土地点は遺構密度の高いF-1、3～5区に集中している。おそらく六道銭の風習から火葬の際に銭を棺桶内に収めたのであろうが、6枚そろって出土した例は確認出来なかった。寛永通寶の研究、収集家は鑄造技術等の相違から寛永3年(1626)より明暦2年(1656)までに鑄造された銭貨を古寛永、寛文8年(1668)より明治2年(1869)までの銭貨を新寛永として区別している。本遺跡F地区の出土層から見ても上層(2、4、5層)からは新寛永、下層(3号溝、9、11層)からは古寛永の出土率が高い。寛永通寶は鑄造場所、銭文等について不明な点も多いが、ここでは従来の研究に基づいて、簡単にそれぞれの銭貨に説明を加えてみたい。

1は文字が全体に細く、寛字の末尾が跳ね上がる特徴を持つ(虎之尾寛)。また熱を受けて周囲の一部が欠損している。2は背の「文」字で他との識別が可能である。文銭または大仏銭とも呼ばれる寛文期の銭貨であり、収集家はこれよりを新寛永とする。3、4は通字の_レがやや間延びしており、寶字の後足は短くおさめる。文字は全体に大きい。5、6は銭文の四字の点が草書体になっており(四草点)、寶字の後足は跳足となる。なお2～6は3号溝より一括して出土している。8はマ頭と呼ばれる通字を持ち、永字が通字の方へ退く(退永)。11は永字の水画がやや段違いになっており(奇永)、寶字12画の後点は右下に伸びて内郭に接する。12は寛字の前足が短く(狭足寛)、四文字全てが内郭に接する。11、12はF-3区最下層(11層)から出土している。13は文字全体が小さく、通字一字が目立って下がっている。14は銭文大きく、永字、通字の点が草書になる。また内郭上端と通字上画が直接状に並び、寶字の後足は跳足となる。18は出土銅銭中唯一の永樂通寶であり、F-4区9層から出土している。19は銭径が小さく、銭文も細くなる(細字)。また背文字には「元」が見える。20は通字_レの折頭を一度下方へ折り返す特徴を持つ。永字の点はやや左方へ進み(進点永)、寶字の王はエと一に分かれる。21は4に似るが、寶字の後足は跳足となる。22は銭文が全体に太く、通字の用はやや縦長となる。24は寛字が他の三字に較べ縦に縮んでいる(縮寛)。23～26はF-5区9層から一括して出土した古寛永であるが、23、24は熱を受けて背どうしが溶着している。27は通字の用が狭く、寶字冠の前垂れが王の上画にかかっている。28は8と同種の新寛永であるが、この一枚はF区より南の寺坂地区から出土している。また図、表にはないがF-4区9層からは銭文不明の銅貨片が一枚検出されている。なおF区出土の銅銭はほとんどが被熱しており、特に1、17、18、23～26は銭形が歪むほどの高熱を受けている。しかし今回出土した30枚の銅銭のうち、火葬炉として使用された土壌に確実にともなう例は認められなかった。



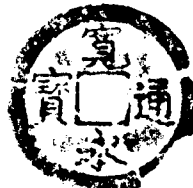
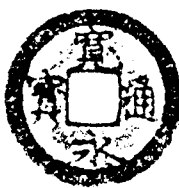
1

2

3

4

5



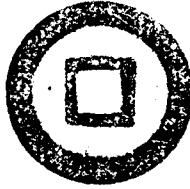
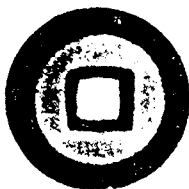
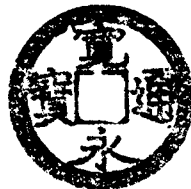
6

7

8

9

10

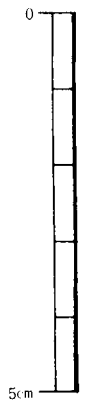


11

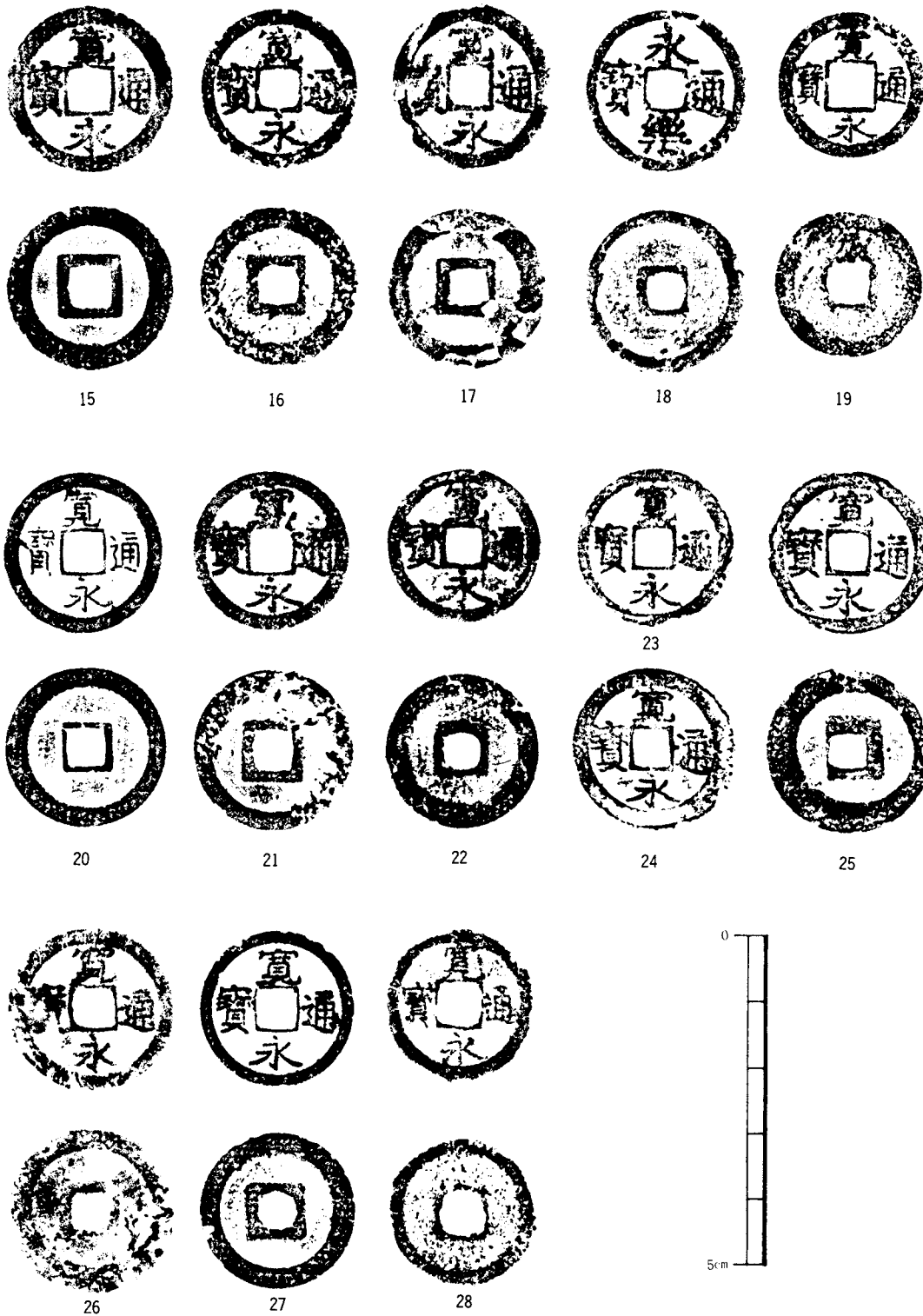
12

13

14



第29圖 銅錢拓影 (S=1/1)



第30圖 銅錢拓影 (S = 1/1)

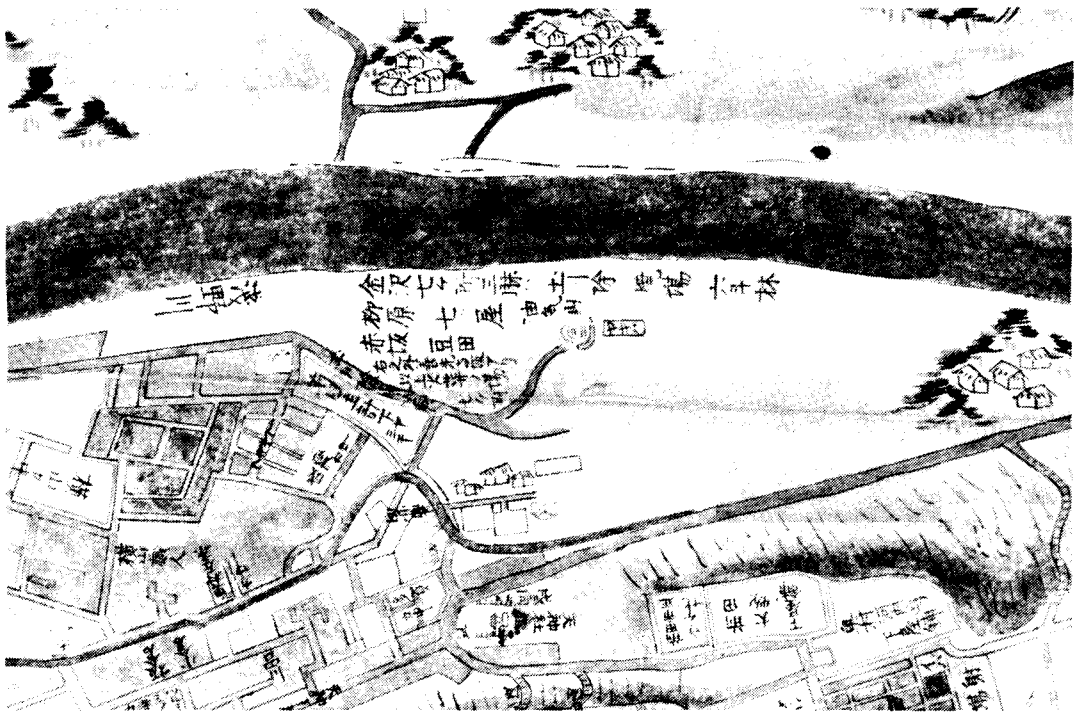
第2表 銅錢一覽表

図No.	種 類	出 土 地 点	外径(cm)	鑄 錢 所	初 鑄 年 次	備 考
1	新 寛 永	F-1、2層	(2.13)	平野新田(東京)	元文4年(1739)	他に一枚寛永通寶共伴、被熱
2	新 寛 永	F-1、3号溝	2.51	亀戸 (東京)	寛文8年(1668)	被熱
3	古 寛 永	F-1、3号溝	2.48	建仁寺 (京都)	承応2年(1653)	被熱
4	古 寛 永	F-1、3号溝	2.50	建仁寺 (京都)	承応2年(1653)	被熱
5	古 寛 永	F-1、3号溝	2.42	芝? (東京)	寛永13年(1636)	被熱
6	古 寛 永	F-1、3号溝	2.38	芝 (東京)	寛永13年(1636)	被熱
7	新 寛 永	F-3、4層	2.33	平野新田(東京)	元文4年(1739)	被熱
8	新 寛 永	F-3、4層	2.39	鳥羽 (京都)	元文元年(1736)	被熱?
9	新 寛 永	F-3、9層	2.49	亀戸 (東京)	寛文8年(1668)	被熱
10	古 寛 永	F-3、9層	2.35	仙台? (仙台)	寛永14年(1637)	被熱
11	古 寛 永	F-3、11層	2.46	萩 (山口)	寛永14年(1637)	被熱
12	古 寛 永	F-3、11層	2.34	水戸 (茨城)	寛永14年(1637)	被熱?
13	古 寛 永	F-4、5層	2.47	岡山 (岡山)	寛永14年(1637)	被熱
14	古 寛 永	F-4、9層	2.47	沓谷 (静岡)	明暦2年(1656)	被熱?
15	古 寛 永	F-4、9層	2.53	建仁寺 (京都)	承応2年(1653)	被熱?
16	古 寛 永	F-4、9層	2.43	水戸? (茨城)	寛永14年(1637)	被熱
17	古 寛 永	F-4、9層	2.47	沓谷 (静岡)	明暦2年(1656)	被熱
18	永楽通寶	F-4、9層	2.48	明 (中国)	永楽6年(1408)	被熱
19	新 寛 永	F-5、4層	2.25	高津 (大阪)	寛保元年(1741)	被熱
20	新 寛 永	F-5、4層	2.44	石巻 (仙台)	享保13年(1728)	被熱
21	古 寛 永	F-5、4層	2.44	鳥越 (東京)	明暦2年(1656)	被熱
22	古 寛 永	F-5、9層	2.38	吉田 (愛知)	寛永14年(1637)	被熱
23	古 寛 永	F-5、9層	2.39	岡山 (岡山)	寛永14年(1637)	被熱
24	古 寛 永	F-5、9層	2.47	高田 (新潟)	寛永14年(1637)	被熱
25	古 寛 永	F-5、9層	2.51	仙台? (仙台)	寛永14年(1637)	被熱
26	古 寛 永	F-5、9層	(2.47)	岡山? (岡山)	寛永14年(1637)	他に一枚寛永通寶共伴、被熱
27	古 寛 永	F-5、9層	2.39	仙台 (仙台)	寛永14年(1637)	被熱?
28	新 寛 永	寺坂地区	2.34	鳥羽 (京都)	元文元年(1736)	F地区外

3 おわりに

本遺跡の近世火葬場遺構は原則的に一基の土壌状炉址で一人の人間を火葬したものであり、今日一般的に見られるような一基の焼却炉で多人数を火葬するものとは性格、形態を異にしている。日本における火葬風習は文献上では『続日本紀』の文武天皇四年（675）に元興寺の僧道昭が飛鳥の栗原で火葬されてから始まる。それ以来火葬は土葬と並行しながら続いて行くが、火葬が庶民生活一般に受容されるようになるのは、浄土真宗が広まっていく鎌倉時代以降のこととされている。福井県鯖江市で調査された下河端遺跡⁽¹¹⁾では、12世紀後半～13世紀初頭に推定される火葬炉が16基、火葬人骨を埋納した埋納骨ピットが5基確認されている。火葬炉の平面プランは一辺1m内外の方形ないしは長方形を呈するものが多く、炉底面中央に通風溝を持つものと持たないものに分かれるという。また奈良県宇陀郡榛原町萩原の谷畑中世墓地からは、室町期に想定される方形の土葬墓17基、火葬墓約30基、火葬施設と考えられる土壌10基が検出されている。火葬施設は長さ1.0～1.5m、幅0.7～1.2m程度の方角土壌で、下河端遺跡の火葬炉と同じように、土壌底部から両端外面に伸びる煙道状の溝施設を持っている。そしてその半数以上には外部施設が備わっていたと思われ、それ自体単なる火葬施設ではなく、火葬墓であった可能性が大きいとしている。

江戸時代にはいと儒学者達の間では異国の蛮俗であることなどを理由として火葬反対論が唱えられたが、真宗王国⁽¹³⁾の加賀地方では都市部や農村部を含めて既に火葬がかなり浸透していたと思われる。現在金沢市立図書館に保管されている『寛政 金沢地図』によると、当時金沢の城下町には七ヶ所の火葬場があったことが認められる。地図自体は文化六年（1809）に模写されたものであるが、寛政年間（1789～1800）の金沢の町並みを良く伝えている。地図の浅野川沿いには「金沢七ヶ所三味ハ 土川除ノ焼場 六斗林 柳原 七ツ屋 油気山 赤坂 豆田 右之外善光寺坂アリ 以上火葬ノ場七ヶ所」とあり（第31図）、“三味”、“火葬場”そしてその他“ヤキバ”という名称も当時使われていたことが分かる。また七ヶ所のうち三ヶ所には上屋らしきものが描かれているが、古来火葬の方法として最も一般的であったのは野焼きである。本調査で検出された火葬施設もその例外ではなく、その中でいわゆる火葬炉に想定できるものとして溝状遺構と土壌状遺構が挙げられる。溝状遺構は2号溝のように数mの長さを持つものと4号溝のような2m前後のものに分かれるが、どちらも通風溝として掘られたものであろう。機能的には2号溝に一部見られるように溝脇に石を並べてその上に棺を置くタイプと4、10号溝のように直接溝に乗せるタイプが考えられるが、後者の溝内には20～30cm大の焼け石を伴う場合が多い。また一方の土壌状遺構内にもやはり底に拳大の石を敷き詰めた例が数基認められる。石と葬送儀礼の関係は古くからよく知られているが、当施設内の焼け石等はおそらく火葬の際の熱効率を高めるために置かれたものと思われる。ただ仏教の教儀書『五分律』には「火葬の場合は石のうえに屍体を置き、草上には置くべきでない。」とあり、当地でこの教儀を意識していたとすれば、大変興味深いことである。棺の形は土壌の形態から見て、平板を打ち付けた座棺と推定される。（溝状の火葬炉を使うときは、寝棺であったのかもしれない。）仏は膝を抱えて坐ることになるが、地域



第31図 『寛政金沢地区』部分（金沢市立図書館蔵）

によっては棺に入れる前から仏を縛るところもある。葬式は部落単位で行われ、火葬の場合は寺の切手（火葬・埋葬の許可証）をもらってヤキバへ赴く。⁽¹⁶⁾ 墳が掘られ、石が敷かれ、多量の藁と藪に囲まれた棺に火がつけられる。炉の構造が単純であるため死体は長時間かかって焼かれるが当然焼け方にはむらが出る。出土人骨を見ても、完全に焼けた白く鋭利な骨と、湿り気のある粘質の骨が認められた。その後焼かれた骨は頭蓋骨を中心に拾われて納骨されるわけであるが、付近からは下河端遺跡のような埋納骨ピットは検出されていない。その他4号溝西の石組状遺構をもう一つのタイプの火葬施設として認めるかどうかであるが、前述したように付近からは骨片、炭化物等の出土はない。⁽¹⁷⁾ しかし福井県吉田郡松岡町の帝王三昧では自然石（河原玉石）を8～10個積んだだけの石組状火葬場も調査されており、その可能性は捨て切れない。なおF区を縦断する土層断面図（第19図）を見ると溝状遺構群は土壌遺構群に先行して造営されており、時期差は不明であるが、同一地内において火葬施設の形態が溝型から土壌型に移り変わって行ったことが推察される。

では次に出土した遺物を中心にして当火葬場の様相並びに造営時期を考えてみたい。まず出土遺物中最も量が多いのは陶磁器である。江戸時代の陶磁器はその後半期になると各地で類似する製品が数多く作られるようになるため、産地の特定は非常に難しくなる。本地区出土の陶磁器類もその例外ではなく、個々の生産地に関してはとうてい筆者の力量の及ぶところではない。ここではその中である程度特徴的なものを抜き出して概観してみたい。1～5、10は同様の器形を持つ磁器碗であり外面、見込に植物、動物、人物文を描く。4を除いては胎土、釉調ともに灰色がかり、呉須の発色もやや黒ずんでいる。5の口縁部内面に巡る菱形花卉文（変形市松文、四方樺文、

四つ割花弁文等とも呼ばれる。)は肥前地方によく見られるものであり、東京都の文京区で調査された動坂遺跡⁽¹⁸⁾でも19世紀の染付碗に頻繁に描かれている。6～9は外面文様にコンニャク判を用いた磁器碗。いずれも口縁部内外面に圈線を持たない。この印判は有田周辺の雑器窯でも盛んに用いられ、18世紀前半を中心に流行した装飾法であるという。⁽¹⁹⁾6の団鶴(鶴丸)、菊花などは各地に出土例が多く、近くでは福井県の九十九橋下遺跡⁽²⁰⁾、豊原寺跡に類例が求められる。両遺跡ではこれらの製品に18～19世紀の年代を与えている。11～14は厚手の半磁器碗であり、長崎県佐世保市三川内地区の江永窯などで焼かれた製品によく似ている。江永窯の下限は文献的には寛政11年⁽²²⁾(1779)に置かれている。15は簡略な文様を持つ陶器碗。19世紀の瀬戸・美濃製品と思われる。21、22は灰色の胎土、釉調を持つ厚手の磁器碗で、長崎県の波佐見地方に多い江戸末期の製品である。なお網目文碗は17世紀中葉から盛んに作られるが、18世紀に入ると22のような二重線文が主体となっていく。⁽²³⁾27～35は灰釉、鉄釉の製品を並べてみた。29の鉄釉の内外面塗り分け、31の口縁部の灰釉流しがけなどは、瀬戸・美濃地方に見られる手法であろうか。33は瀬戸・美濃の陶器碗。34、35は口径が胴部径を越えない鉄釉のげんこつ茶碗でやはり瀬戸・美濃地方の製品である。18世紀頃のものと思われる。36～44は筒形碗である。この手の遺物は実測した以外にも多くの破片が認められており、当地区においてはかなりの比率を占めていたものと思われる。普通一般的な集落遺跡では筒形碗の比率はここまで高くなく、どちらかと言えば少ない部類にはいるものである。ここでは碗以外の用途(例えば香炉)としても用いられていたのであろうか。なお見込に多く見られる五弁花、また40の底裏に描かれた渦福は元禄の後半期(1690年代)以降に流行した文様だという。⁽²⁴⁾動坂遺跡からは五弁花、菱形花弁文をはじめ44に見られるような見込内文様も確認されているが、その中で佐々木氏は19世紀の肥前地方の製品における口縁文様と見込文様のいくつかの組み合わせを指摘されている。⁽²⁵⁾46～51は逆ハの字型の体部と高い高台に特徴のある陶磁器碗である。この器形は瀬戸地方では田舎茶碗、関東茶碗、美濃地方では太白茶碗、砥部ではくらわんか茶碗、九州地方では高高台茶碗、広東碗等と呼ばれるもので、肥前地方においては18世紀後半から、また瀬戸・美濃地方では19世紀にはいと一様に認められるものである。⁽²⁶⁾47の類似品は米子市の陰田遺跡などに見られ、18世紀末～幕末の伊万里系の製品とされている。49、51は胎土、釉調から見て、19世紀代に瀬戸・美濃地方で作られた太白碗と思われる。他は肥前地方のいわゆる広東碗であろうか。52は見込に重ね焼きの痕跡が残る皿。小さい高台径を持つ19世紀の波佐見地方の製品か。56は絵唐津皿であり、出土陶磁器の中でも最も古手のものであろう。蓋類に関しては染付蓋と鉄釉蓋に分かれるが、前者は肥前、後者は瀬戸・美濃によく見られる製品である。62～64の器形は古手⁽²⁷⁾のものは底部を抉り込んで作られており、高台作りになるのは17世紀後半以降であるという。⁽²⁸⁾

さてこのようにして当地区出土の陶磁器類を見てみると、おおよそ18世紀から幕末にかけての江戸後末期を中心とする製品がその大半を占めているように思われる。この時期は肥前磁器生産の最盛期から低迷期に当たっており、有田皿山の職人も肥前領内や四国地方、東北地方などに移動している。⁽²⁹⁾また瀬戸・美濃地方の磁器生産も19世紀前半には完成するが、当区での出土率はそう高くない。それでは当時このような陶磁器はどれ程の値段で取り引きされていたのだろうか。

(30)

幕末の北前船に対する注文書を見ると、「注文書 一、夜喰茶碗 拾人前 直段八拾五文位の処より九拾文位迄 一、茶ノミ茶碗 式十 直段廿七八文位の処 右之品乍御世話様御買求被被下度奉願上候、己上 戊（文久二年か） 三月六日 正徳丸 五郎右衛門様 塩田屋 長作⁽³¹⁾」、また「注文覚 一、あら茶わん 拾人前 但しはでな処直段百五十位処 一、皿 拾人前 直段百文位処 一、小皿 式拾人前 直段六七十文処 一、尺三寸砂鉢 式枚 直段五百文位処 一、大井 壺ツ 但し水式升位入丈之処 直段ハ式分位 一、盃洗 壺ツ 直段五百文位処 一、酒亀 壺ツ 水壺斗入位 直段五百文位処 右之通見立西側様御下り之砌買求被下度候、奉頼上候 以上 正月七日 角甚様 庄蔵」と記されており、一般的な茶碗、皿は百文前後であったことが分かる。また佐々木氏は武州生麦村（横浜市）の名主関口藤右衛門家の『関口日記』から当時（天保年間）の日用品の価格を拾い出して、値段百文の茶漬碗一個の価値を求めておられるが、それによると茶漬碗一個は、酒二・七合、さんま一四本、こんにゃく一七枚、傘一本の直し代、下駄の片方といった値段であり、江戸後期の肥前磁器の価格は、全国の農民層が購入できる程の値であるとしている。

次に土製品であるが、第27図に示したとおりわずか8点しか確認できなかった。しかし中でも3の天神人形は他の近世遺跡中にも多くの類例が求められる製品である。天神信仰と天神人形のつながりについては、学問の守菅原道真公にあやかろうと明治から大正時代にかけて男子の間で流行した「天神様遊び」との関連性が指摘されている。⁽³²⁾ なお時期の推定できる資料としては江戸遺跡のⅠ、Ⅱ層（18世紀前後半）出土の各種天神人形、名古屋市小島町遺跡の東西溝・南石垣裏ゴメ（19世紀前半）から出土している頭部の欠けた土製天神人形などが挙げられる。⁽³³⁾

金属製品としては煙管と銅銭を取り上げた。前述したように当地区出土の煙管（雁首）は江戸遺跡の雁首第Ⅱ類C（江戸中期～後期を中心とする時期に比定）に近い形態をとるが、22などは火皿が小型化し、逆台形を呈するという江戸末期（19世紀）の特徴を持っているようにも思われる。また古泉氏は煙管の変遷の中でやや乱暴な位置付けとしながらも、21のようなタイプを19世紀前半に持ってこられている。⁽³⁴⁾

寛永通寶も各地で多くの遺跡から出土している。しかし出土の仕方が散発的でしかも使用期間が長いために年代基準の一級資料とはなり得ていない。また死者に銅銭を添える風習も各県で報告されているが、銭の枚数はさまざまで六道銭といわれるように6枚に一定しているものではないという。富山県魚津市で調査された印田近世墓⁽³⁵⁾では納骨甕中より計10枚の寛永通寶が出土している。その中には熱を受けて「く」の字に曲がったものも確認されているが、これは死者と共に焼かれた銅銭が再び墓内に埋納されたことを物語っている。当調査区の土壌内から銅銭が検出されなかったのも、おそらくこのような理由によるものであろう。ただし出土した寛永通寶のうち初鑄年次の最も新しいものが寛保元年（1741）であり、18世紀中葉以降のものが一点も確認されていないのは近世の貨幣流通問題を考える上での一つの留意点となろう。

その他の遺物としては2号溝内より一括して出土した60～70個体分のタブノキの種子が目される。タブノキは県内でも社叢、寺院内に老木の残っていることが多く、墓地の脇にもしばしば見られる樹木である。⁽³⁶⁾ 今回出土した種子は葬送儀礼とタブノキの関係を知るうえで興味ある資料

になると言えよう。

火葬場というものは誰もが最後に行き着く所ではあるが、逆にまた誰もが避けて通りたい場所であり、そして話題でもある。そのような意識はもちろん近世社会にもあったであろうし、そのため火葬場の事を積極的に取り上げている資料は極めて少ない。こと大聖寺においては、文献的にはもちろん、何枚か現存している近世の古絵図を見ても火葬場の具体的な記載は一切ない。

今日調査区の西方約 300 m には宝暦 10 年 (1760) 浄念によって建立されたという真宗大谷派空善寺が位置している。そして空善寺裏手の丘陵には現在も敷地の共同墓地が営まれている。墓碑は形状による新旧の区別が可能であり、古手の墓に刻まれた銘の中には判読できるものも幾つか認められる。読み取れるうちで最も古いものには「文政」の文字が見え、以下「天保」、「弘化」、「嘉吉」、「安政」、「慶応」と続く。これには 1818~1867 年頃の年代が与えられよう。また墓碑にはすべて滝ヶ原石が使われているが、大聖寺藩で滝ヶ原石の採掘を始めたのは藩政時代も後期にはいった文化 11 年 (1814) 頃の事だという。つまり 19 世紀前半の段階には、この共同墓地は明らかに機能していたわけである。そしてまた地元古老の話によれば、当調査区から南東に約 150 m 離れた通称“貧乏山”と呼ばれた場所には、幕末から明治にかけて村の火葬場があったという伝承が、不確かではあるが残っているという⁽³⁷⁾。もしこの伝承を生かすことができるならば、“貧乏山”以前に存在していた共同火葬場の下限を幕末近くに置くことが可能になり、今回の調査で明らかになった“天神山下”火葬場をそれに該当させれば、陶磁器類を中心とした出土遺物の年代から見ても大きな矛盾はないと思われる。おそらく幕末以前の敷地村の人間は死ぬと、“天神山下”火葬場で茶毗に付されて、空善寺裏手近くの墓域に埋葬されたのであろう。しかしそのうち、火葬施設は山際から集落方向へと移動し、村自体も幕末近くの人口増加などによって徐々に拡張して来る。こうなると火葬場と居住区が近すぎるという問題は当然起こって来るであろうし、それによって火葬場だけが“天神山下”から“貧乏山”へ移動したことも十分に考えられる。なお“天神山下”火葬場の上限に関しては、それを裏付ける根拠に乏しいが、出土遺物の年代と、埋葬場所を提供できた空善寺の建立時期等から見て 18 世紀中葉近くを想定しておきたい。

今回検出された遺構は、江戸後末期に営まれていた大聖寺敷地村の共同火葬場と結論づけたが、県内ではこの手の遺跡は初見である。そのため手探りの状況で整理作業を進めることが多かったが、整理途中においては、佐々木達夫、鈴木重治、田中照久、伊林永幸の各氏より適切な御指示を頂いた。記して感謝の意を表し、あわせて諸先学の御批判、御叱正を待つものである。

(藤田)

註

- (1) 肥前地方でよく見られる施文法で、コンニャク判といわれるもの。
- (2) 大橋康二 「肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として—」 『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 1984
- (3) 金箱文夫他 『江戸』 都立一橋高校内遺跡調査団 1985
- (4) 俵勇作他 『人形 3』 京都書院 1986
- (5) 牧野玩太郎 稲田年行編 『郷土玩具 3 土』 読売新聞社 1969
- (6) (5)に同じ
- (7) 西田宏子 「伊万里と柿右衛門—肥前色陶磁の展開—」 『世界陶磁全集 8』 小学館 1978

- (8) 中江克己 『江戸の職人』 泰流社 1986
- (9) 古泉弘他 『江戸』 都立一橋高校内遺跡調査団 1985
- (10) (9)に同じ
- (11) 斎藤優 青木豊昭 『下河端遺跡』 福井県教育委員会 1973
- (12) 白石太郎 田坂正昭 「榛原町萩原・谷畑中世墓地の調査」 『青陵』 榎原考古学研究所 1974
- (13) 浅香勝輔 八木澤壯一 『火葬場』 大明堂 1983
- (14) 死者の頭の下に石を敷いたり、棺桶の釘を打つ時に石を用いたりする例がある。
- (15) 久保常晴 「墓地と火葬地」 『仏教考古学講座 第七巻 墳墓』 雄山閣 1975
- (16) (13)に同じ
- (17) 武藤正典 『帝王三昧発掘調査概要(4)』 福井県教育委員会 1970 (時期的には江戸時代中期以降としている。)
- (18) 佐々木達夫他 『動坂遺跡』 動坂貝塚調査会 1978
- (19) (2)に同じ
- (20) 田中照久 「福井市九十九橋下遺跡の陶磁器について」 『福井考古学会会誌 第2号』 福井考古学会 1984
- (21) 小野正敏 金元憲治 『豊原寺跡 II 華藏院跡第2次発掘調査概報』 丸岡町教育委員会 1981
- (22) 久村貞男他 「肥前磁器古窯と出土品」 『世界陶磁全集 8』 小学館 1978
- (23) (2)に同じ
- (24) (2)に同じ
- (25) (18)に同じ
- (26) 仲野泰裕 「群馬県勢多郡富士見村皆沢焼について」 『愛知県陶磁資料館 研究紀要3』 愛知県陶磁資料館 1984
- (27) 杉谷愛象他 『陰田』 米子市教育委員会 1984
- (28) (2)に同じ
- (29) 永竹威 「肥前磁業史総論」 『世界陶磁全集 8』 小学館 1978
- (30) 加賀市史編纂委員会編 『加賀市史 資料編 第四巻』 加賀市 1978
- (31) 佐々木達夫 「波佐見下登窯跡」 『日本海文化 第九号』 金沢大学文学部日本海文化研究室 1982
- (32) 佐々木達夫 佐々木花江他 『動坂遺跡』 動坂貝塚調査会 1978
- (33) 愛知県陶磁資料館学芸課編 『城下町のやきもの』 愛知県陶磁資料館 1986
- (34) 古泉弘 「江戸の街の出土遺物」 『季刊考古学 第13号』 雄山閣 1985
- (35) 斎藤隆他 『印田近世墓』 魚津市教育委員会 1981
- (36) 小嶋芳孝氏の御教示による。
- (37) 伊林永幸氏の御教示による。

参考文献

- 角川日本地名大辞典編纂委員会 『角川日本地名大辞典 17 石川県』 角川書店 1981
- 小川浩 『寛永通寶錢譜』 日本古銭研究会 1972
- 増尾富房 『古寛永泉志』 穴銭堂 1971
- 豊田武 児玉幸多編 『体系日本史叢書 13 流通史 I』 山川出版社 1969
- 中島俊一他 『敷地天神山遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター 1983
- 田口昭二 『考古学ライブラリー 17 美濃焼』 ニュー・サイエンス社 1983
- 倉田芳郎 久村貞雄 『三川内古窯跡群緊急確認調査報告』 佐世保市教育委員会 1978
- 鈴木重治 松藤和人 『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』 同志社大学校他学術調査委員会 1977
- 福岡晃彦他 『勝川』 愛知県教育サービスセンター 1984
- 古泉弘 『江戸を掘る』 柏書房 1983



航空写真（北から）



航空写真（東から）



昭和54年度 A調査区全景



A調査区1号溝全景



1号沟遗物出土状态



1号沟遗物出土状态



昭和54年度 C調査区全景



C調査区より検出した竪穴住居跡



調査地と大聖寺市街



航空写真（西から）



調査前の試掘（東から）



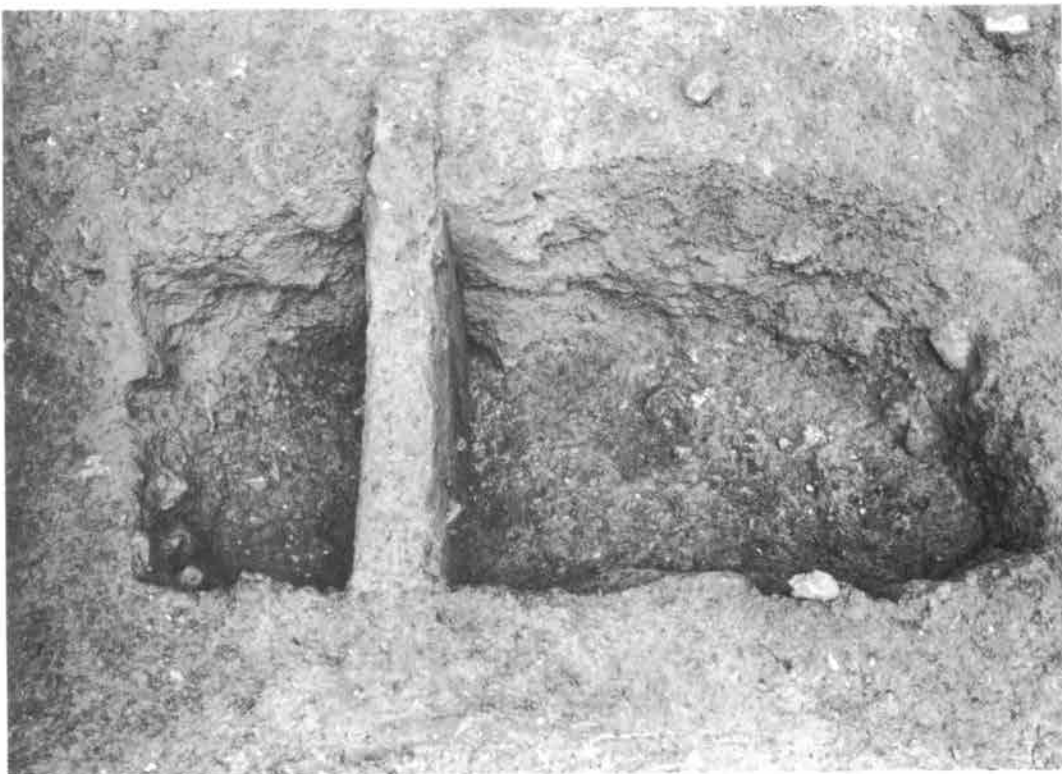
調査前の試掘（西から）



B₁区全景



B₁区中段



B₁区第1号土坑



B₁区第2号土坑



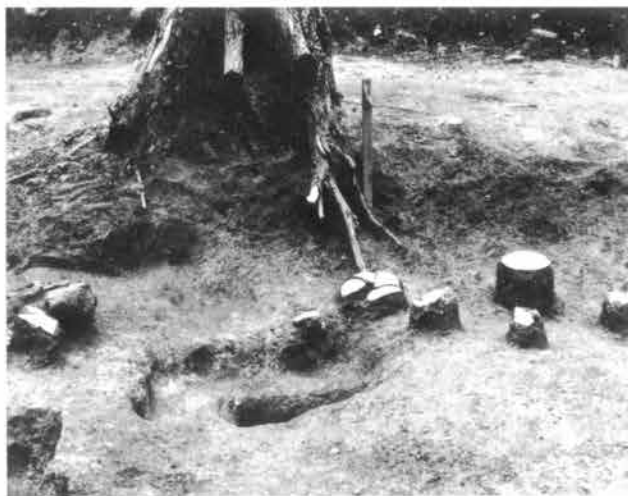
B₁区山頂部の調査（西から）



B₁区山頂部の調査（第1号溝、東から）



縄文土器出土状態



須恵器出土状態



土師器出土状態



土師器、鉄製品出土状態



土師器出土状態



越前出土状態

B₁区遺物出土状態



B₁区東調査区



B₂区調査前



B₂区調査前（北より）



B₂区鞍部の試掘



B₂区弥生土器出土状態



B₂区第1、第2土坑(北より)



B₂区用水の弥生土器



B₁区出土遺物（繩文、弥生、土師器）



B₁区出土遺物（須惠器）



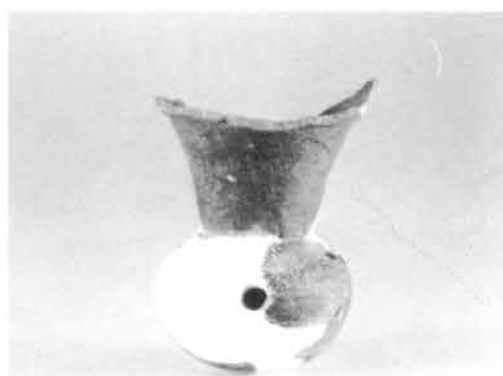
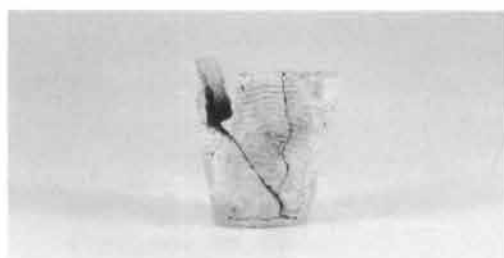
B₁区出土遺物（須恵器、砥石）



B₁区出土遺物（越前）



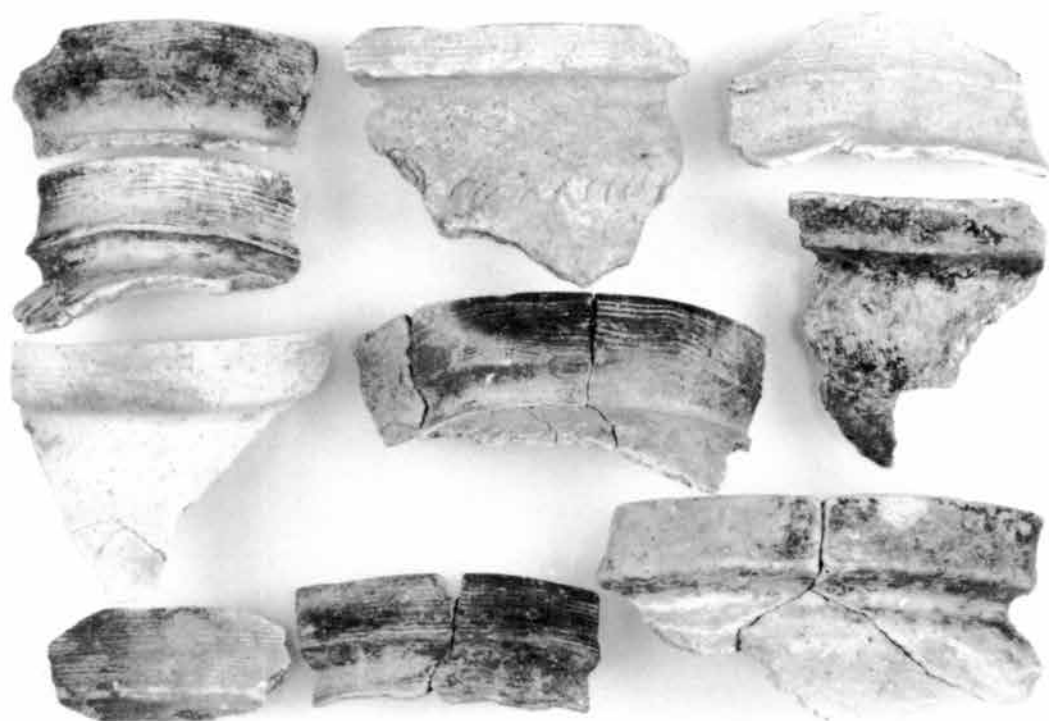
B₁区出土遺物（越前、錢、鉄砲玉、石製品）



B₂区出土遺物（縄文、須恵器、土師器）



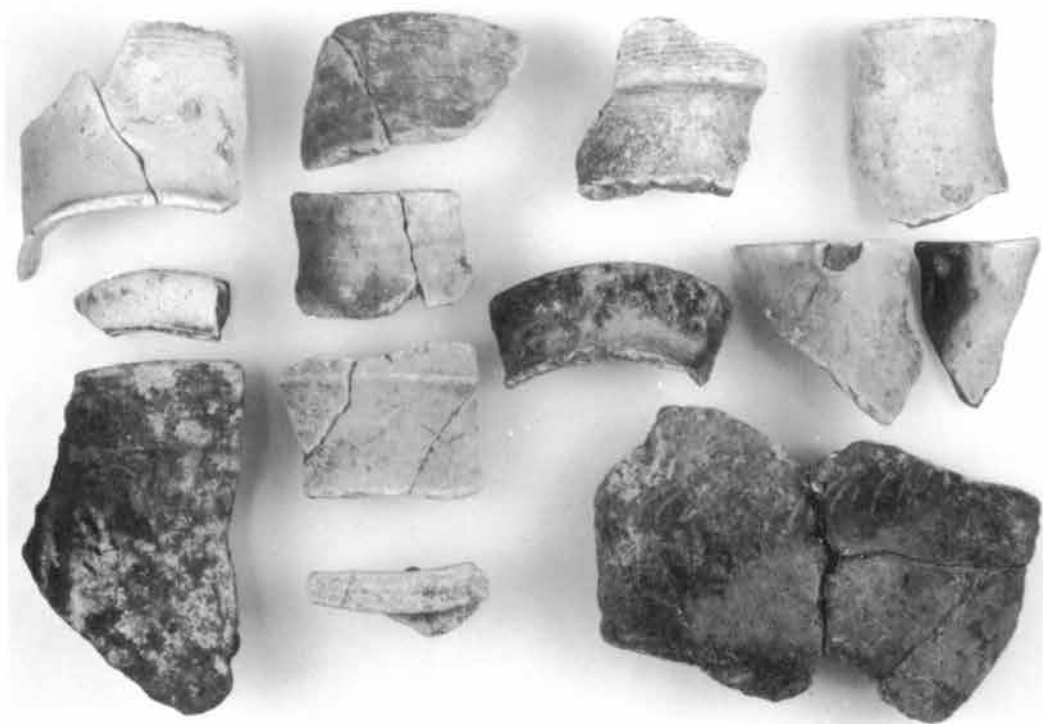
B₂区出土遗物(弥生)



B₂区出土遗物(弥生)



B₂区出土遺物(弥生)



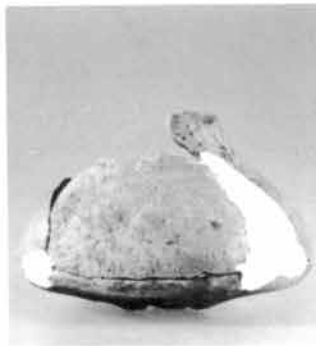
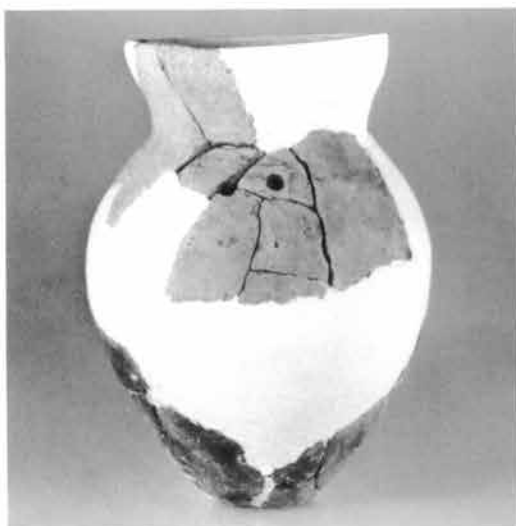
B₂区出土遺物(弥生)



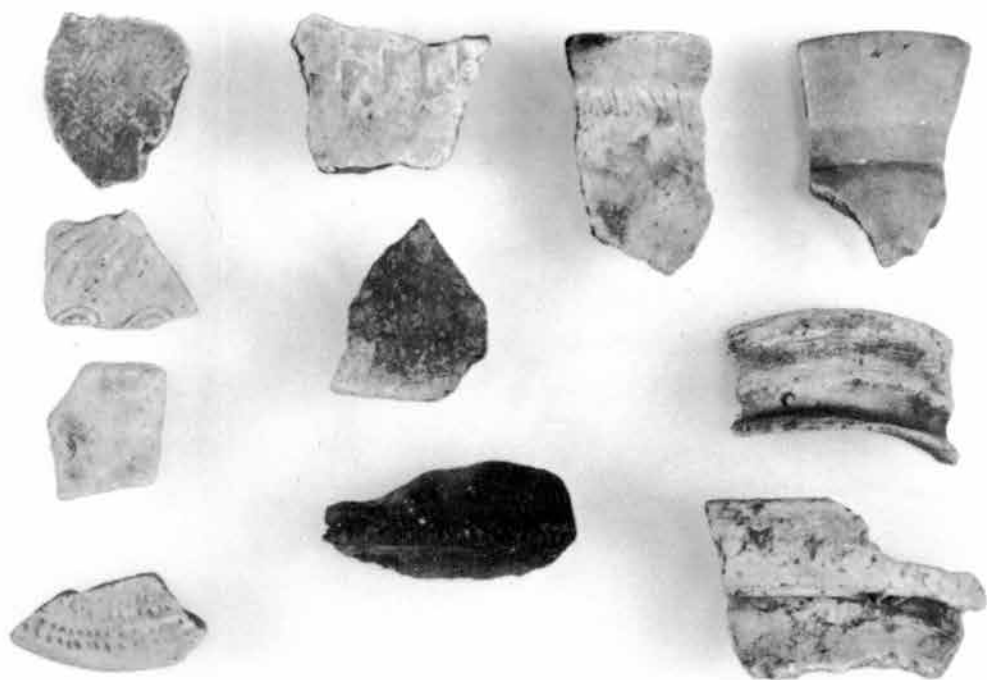
B₂区出土遺物(弥生)



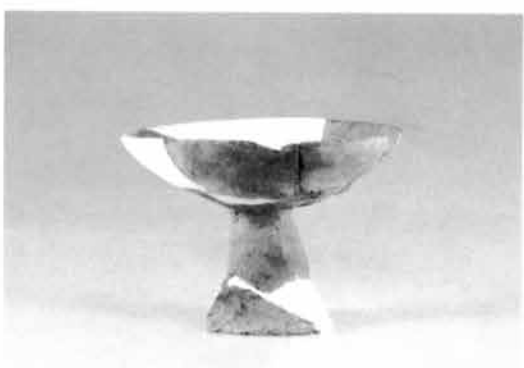
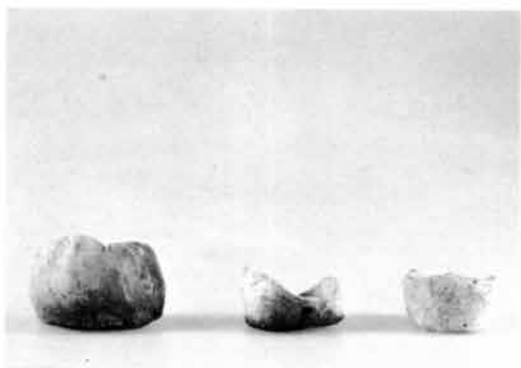
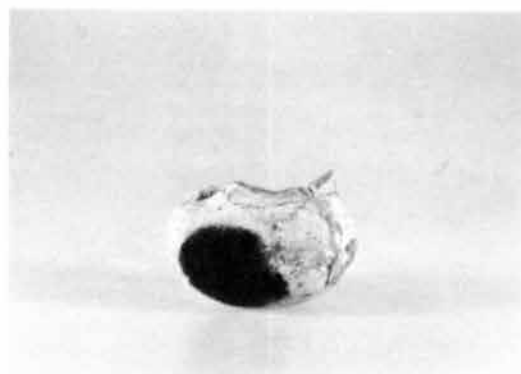
B₂区出土遺物(弥生)



B₂区出土遺物（弥生）



B₂区出土遺物（弥生）



B₂区出土遺物（弥生、土師器）



B₂区出土遺物（繩文、須惠器、中世陶磁器）



B₂区第1号土坑出土遺物



C調査区 近世平坦面全景（東より）



C調査区 下部遺構全景（東より）



C調査区 土壘（南より）



同上、土壘断面（南より）



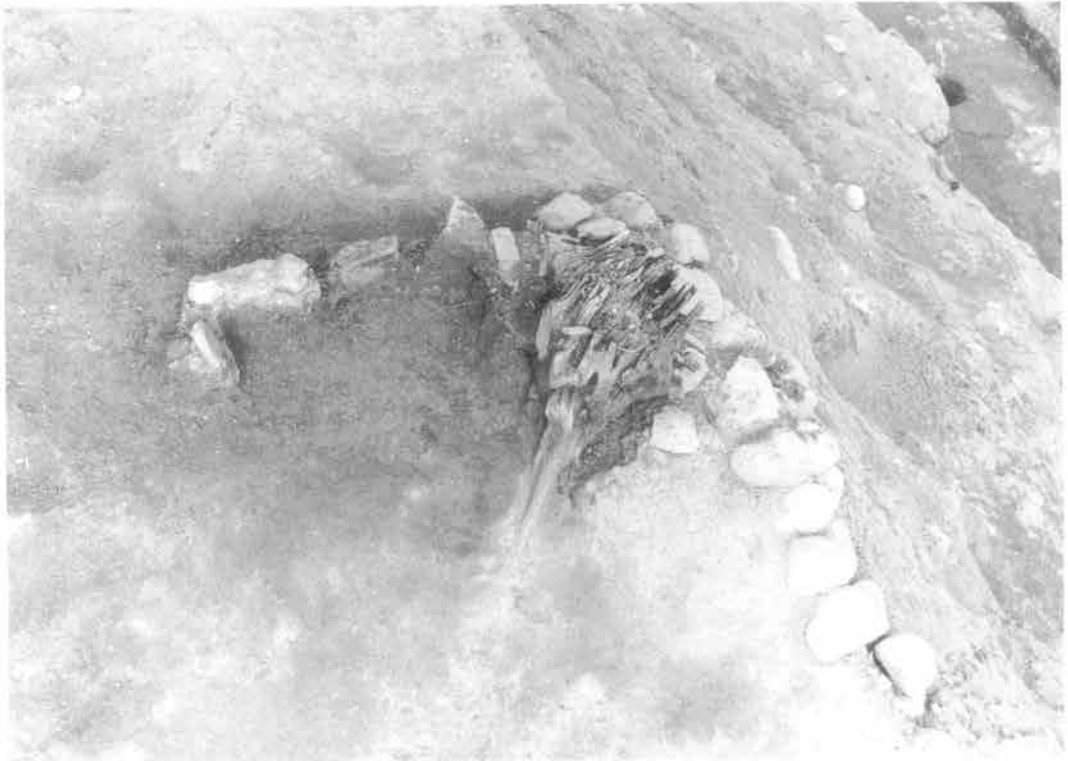
C調査区 東側平坦面調査前（南より）



同上、調査後全景（西より）



C調査区 近世平坦面検出状況(北より)



同上、石組列(北より)



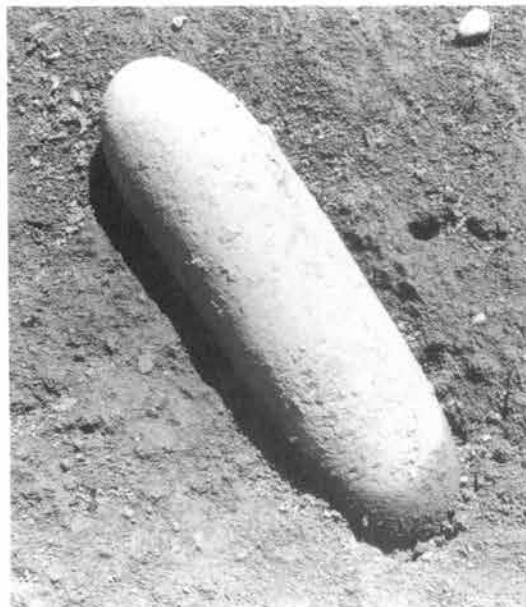
C調査区 近世平坦面裾とピット（東南より）



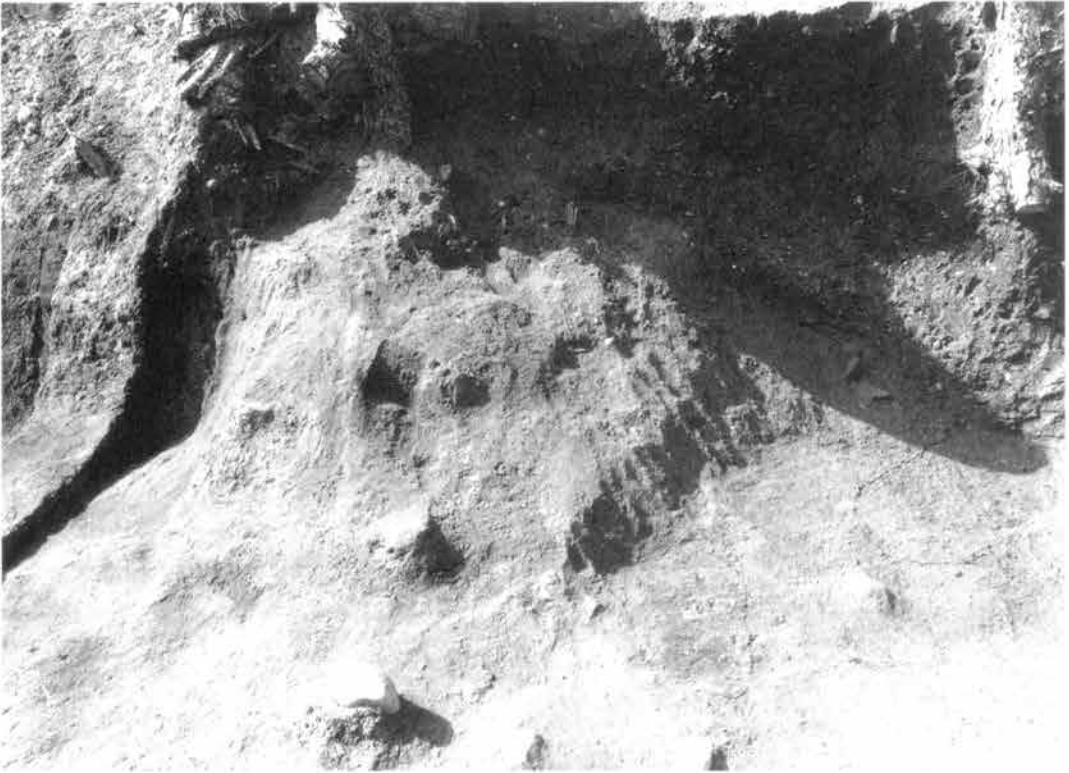
同上、部分（南より）



C調査区 近世平坦部断ち割り



同上、平坦部出土石（器？）



C 調査区 E 7 地点祭壇(?)



C 調査区 D 15 地点近世平坦面配石



C調査区 F15地点近世平坦面カワラケ出土状況



同上、部分写真



C調査区 土器溜り（東より）



同上、部分写真



C調査区 古墳時代遺構全景（東側より）



同上、（西側より）

同上，西側壁の土器内底残跡



C調査区 第1号住居跡(南上9)





C調査区 第2号住居跡(西より)



同上(西側より)



C調査区 第3号住居跡 (西より)



同上 (東より)



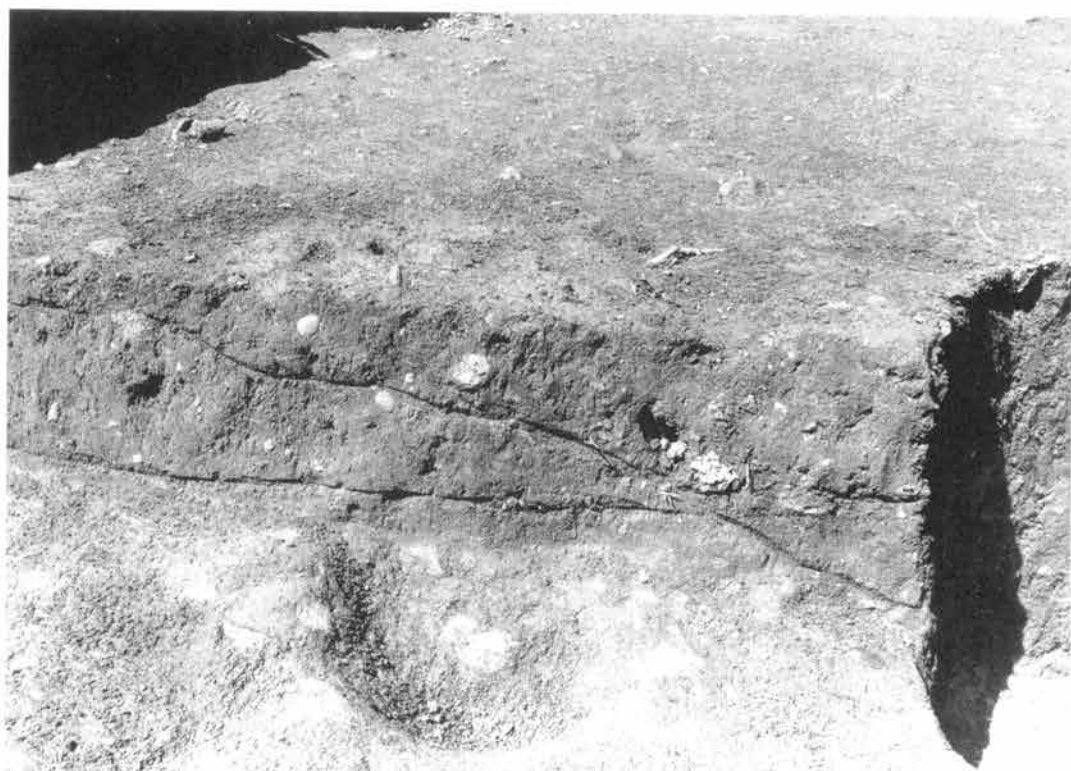
C調査区 第3号住居跡床面出土土器状況



同上、皿状土製品



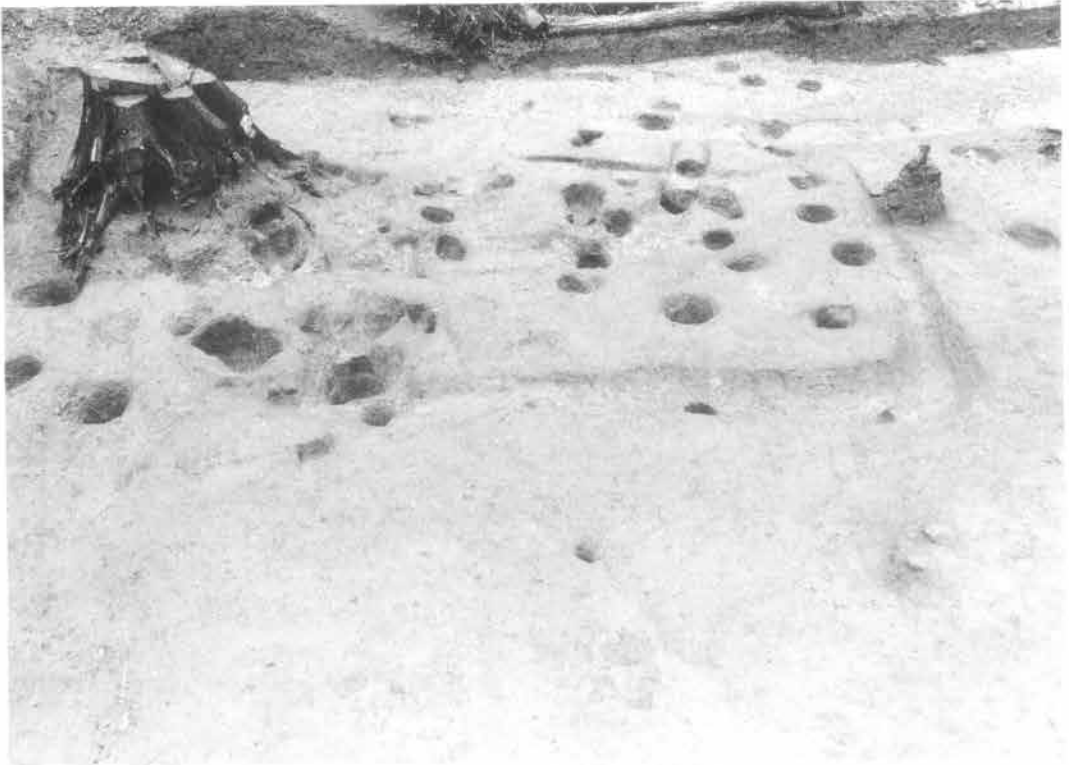
C調査区 第3号住居跡、貼り床状況



同上、部分拡大写真



C調査区 第3・4号住居跡（南より）



C調査区 第11・12号住居跡（北より）



C調査区 第10号住居跡（南より）



同上、土器出土状況（南側より）



(上) 第10号住居跡
出土土器(甑)



(左) 同、角杯・土製支脚等

(下) 同、管玉





C調査区 第19号A・B住居跡（北より）



同上、第19号B住居跡（東より）



C調査区 第19号B住居跡土器出土状況(南より)



C調査区 第23号住居跡(東より)



C調査区 第24号住居跡（北より）



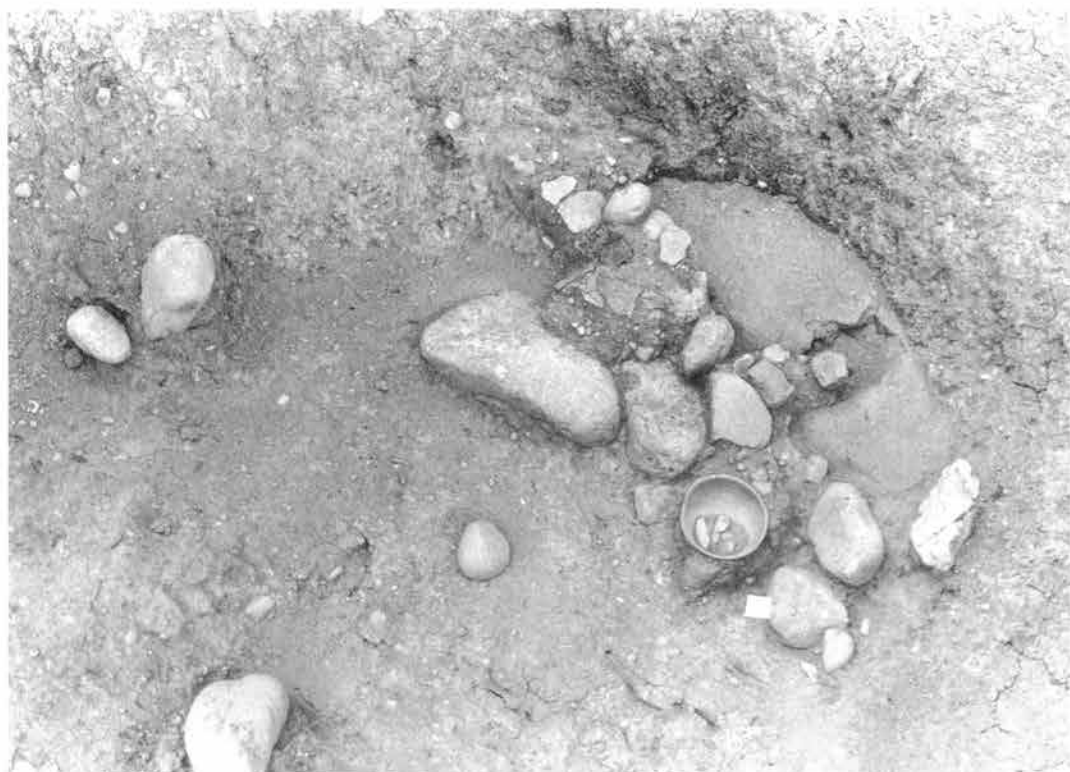
C調査区 第3・4・26・29・30・33号住居跡（西より）



C調査区 第3・4・26・29・30・33・34号住居跡（南側より）



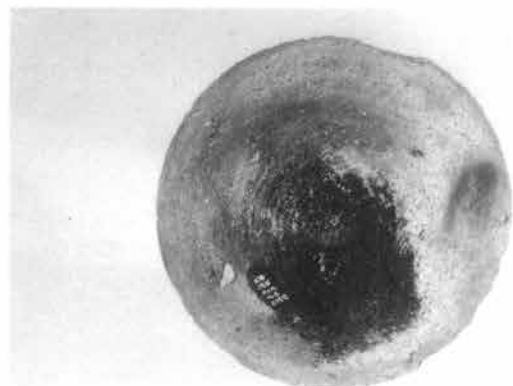
同上、土層断面一部（東より）



C調査区 第1号土坑



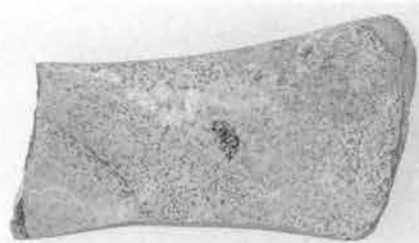
C調査区 第3号土坑



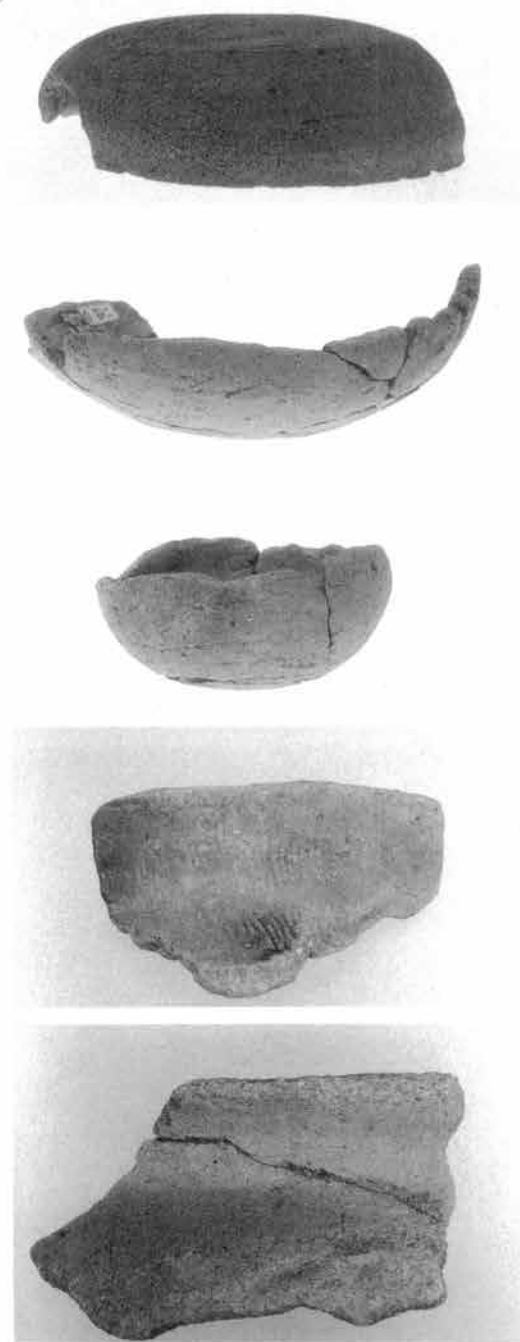
第1号住ピット内



第2号住居跡内



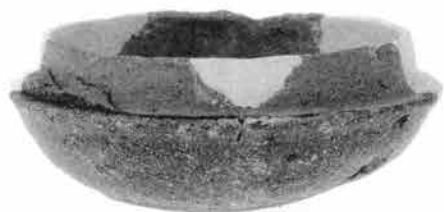
第3号住居跡内



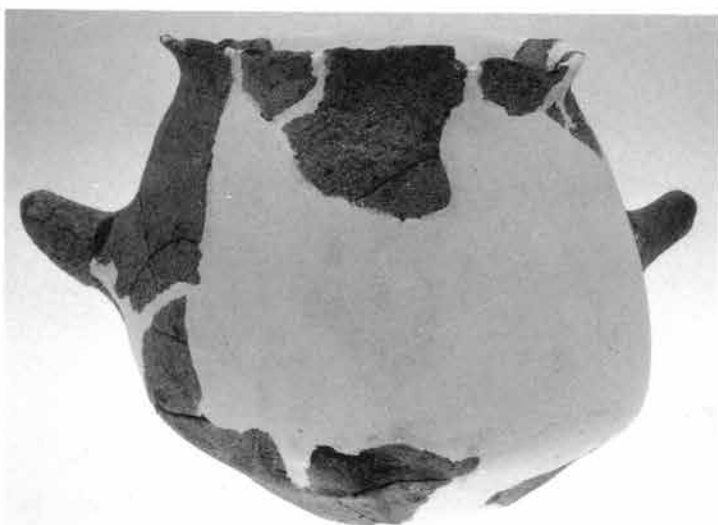
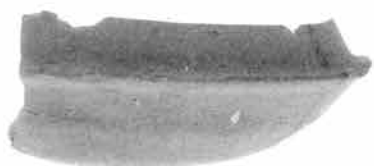
(左列) 第14号住居跡内

(右列) 第7号住居跡内

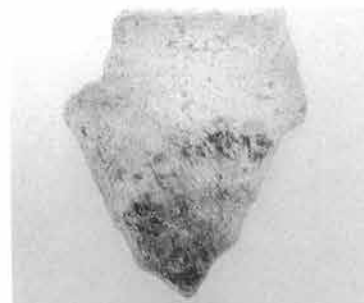




第8号住居跡内



第10号住居跡内(フクド)



第10号住居跡内出土遺物



第11号住居跡内



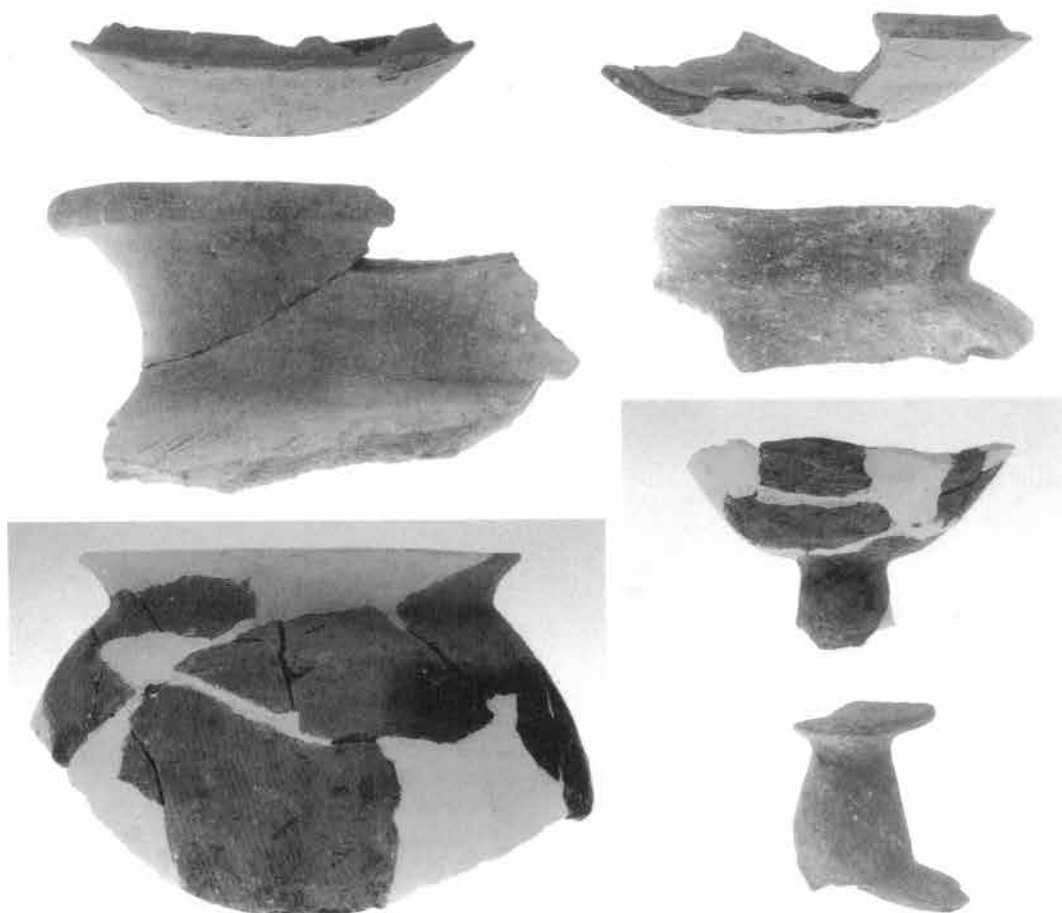
第19号住居跡内



第12号住居跡内



第23号住居跡内



第24号住居跡内出土遺物



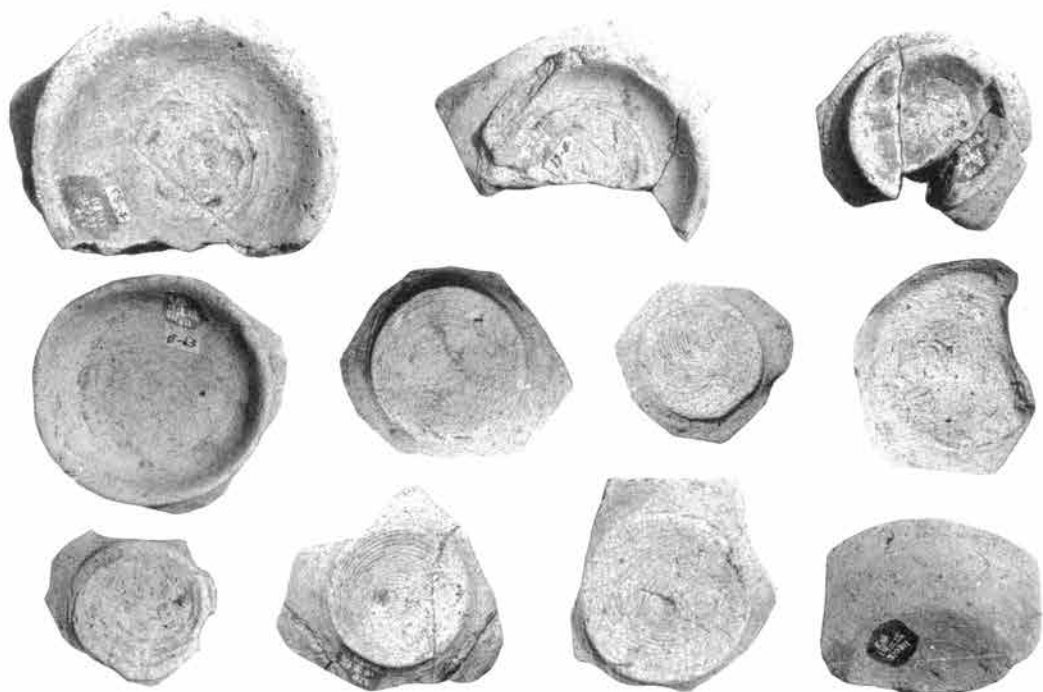
第26号住(マクド)



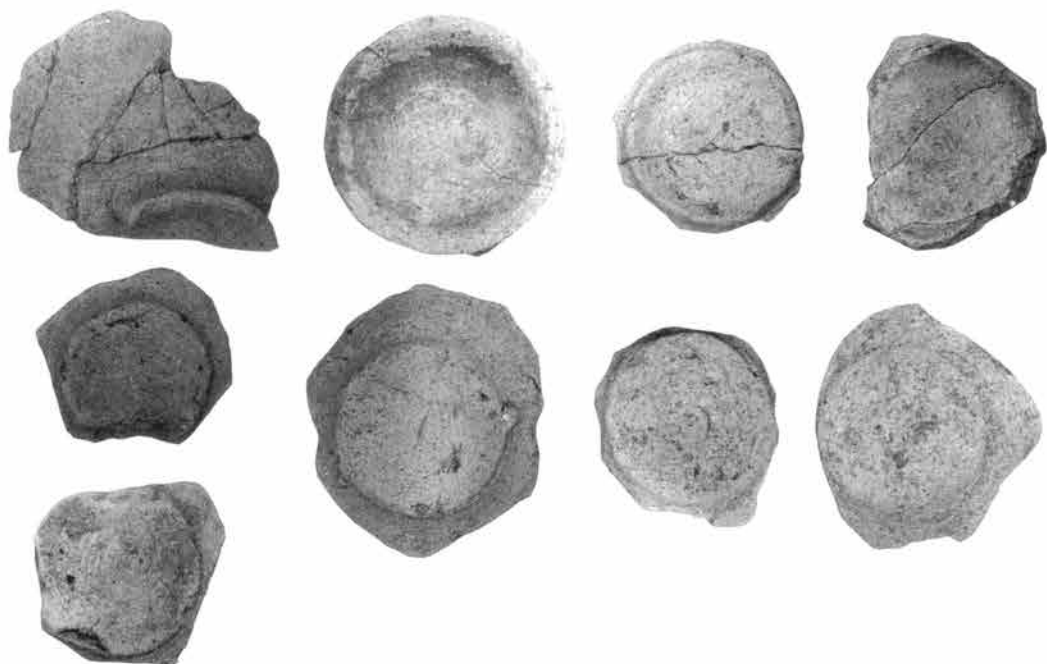
29号住居跡内



1号土壇内



第1号土坑内出土遗物



第2号土坑内出土遗物



第4号土坑内



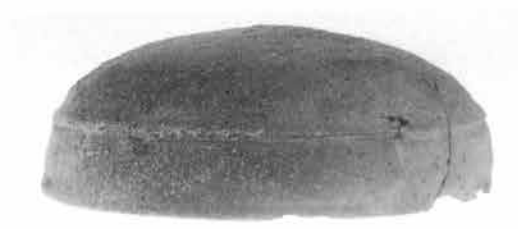
第6号土坑内



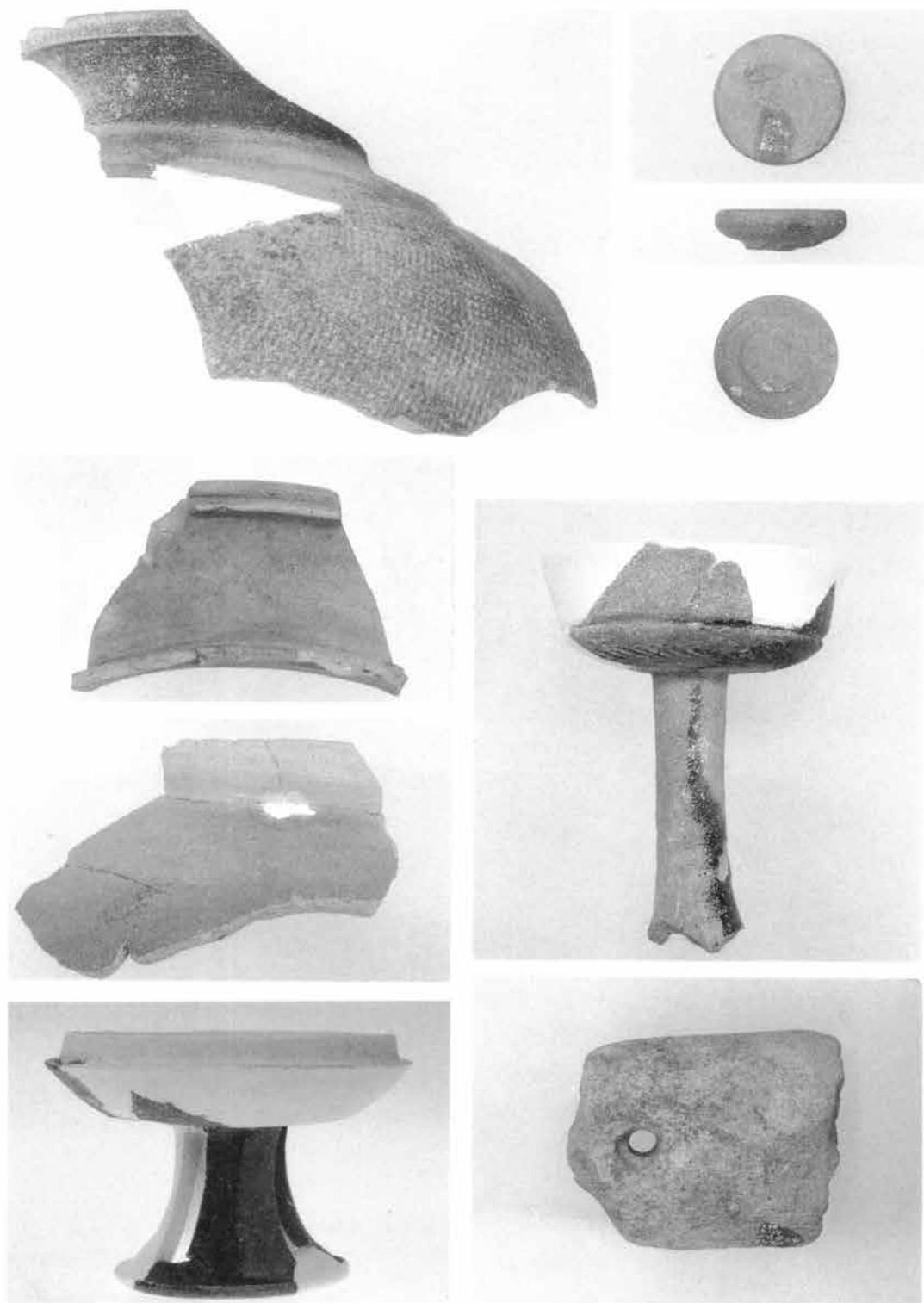
第1号溝内出土遺物



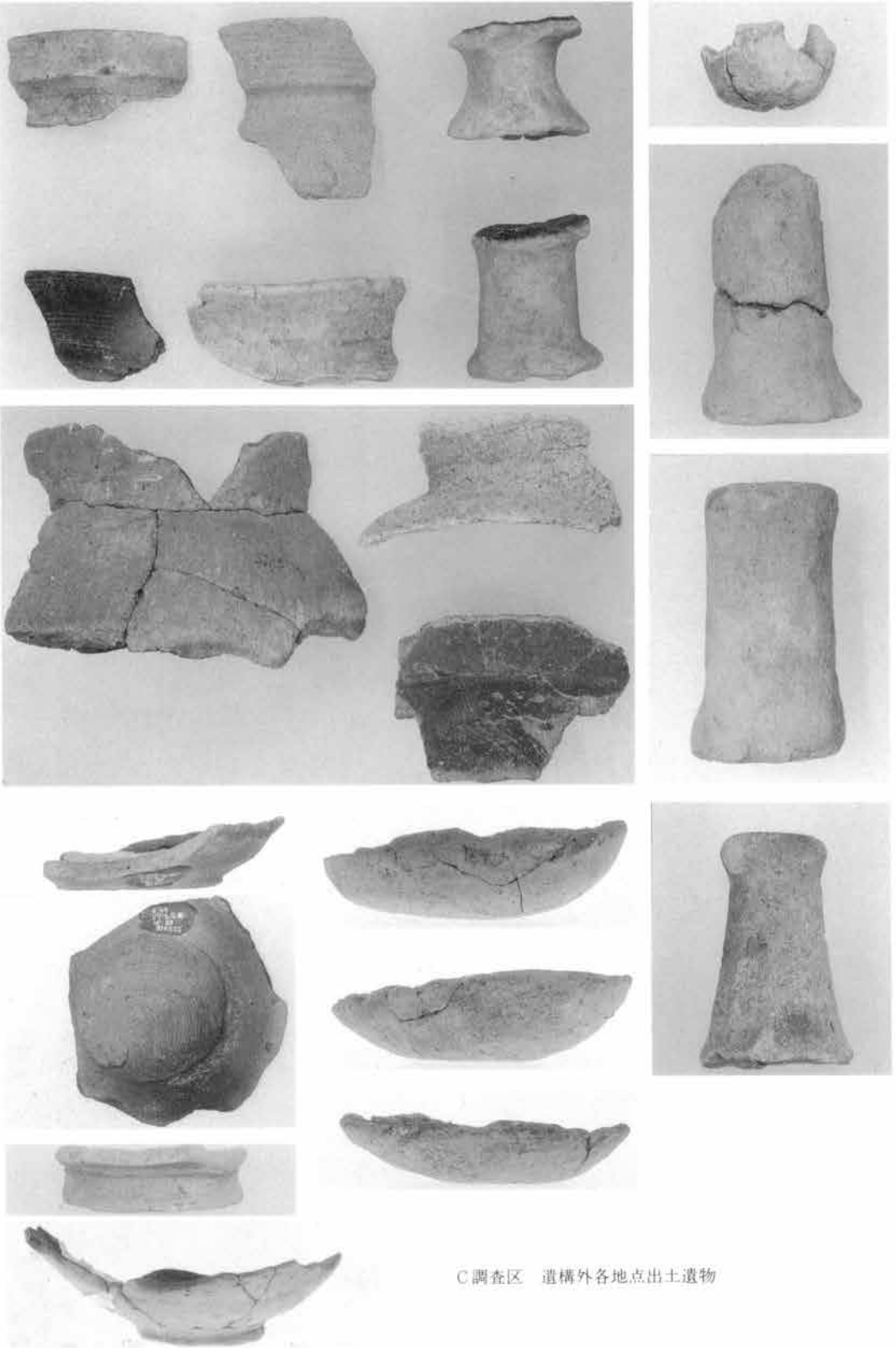
土器溜り



土器溜り



C調査区 遺構外各地点出土遺物



C調査区 遺構外各地点出土遺物



C調査区 遺構外出土遺物



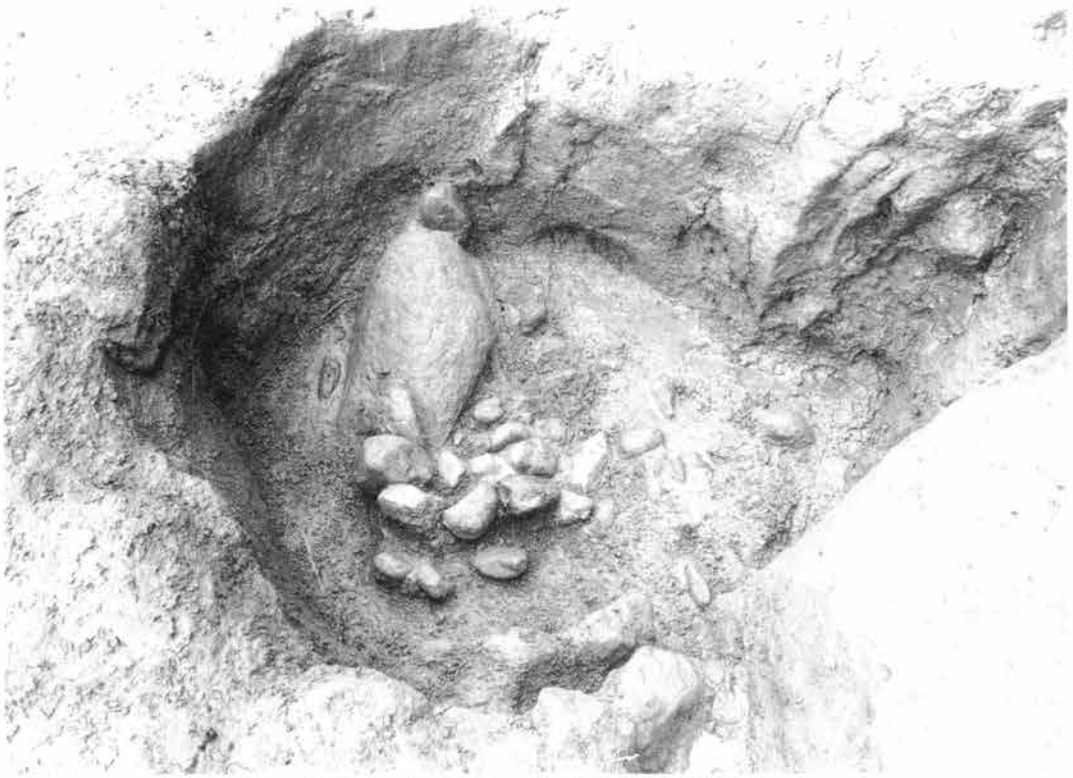
C調査区 表層面集積出土のカワラケ(一部)



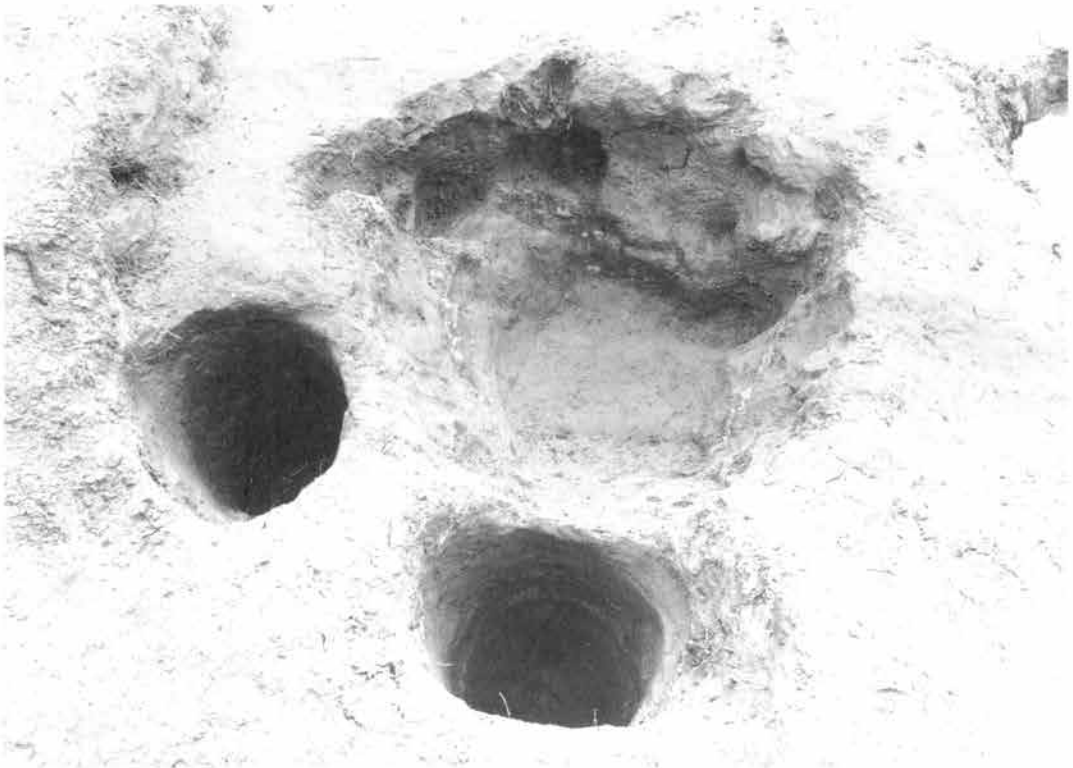
D₂調査区 全景写真



D₂調査区 調査作業風景



D₂調査区(L-33グリッド) 地下式壙竪坑部状況



D₂調査区(J-34グリッド) 第5号土坑



D₂調査区(J-35グリッド) 第7号土坑



D₂調査区(J-36グリッド) 第8号土坑



D₂調査区(K-33グリッド) 第10号土坑



D₂調査区(K-34グリッド) 第12号土坑



D₀調査区(K-31グリッド) 階段遺構



同上、登り口(J-32グリッド) 土層断面



D₂調査区(J-37グリッド) 円形状石組み遺構



同上、断ち割り写真



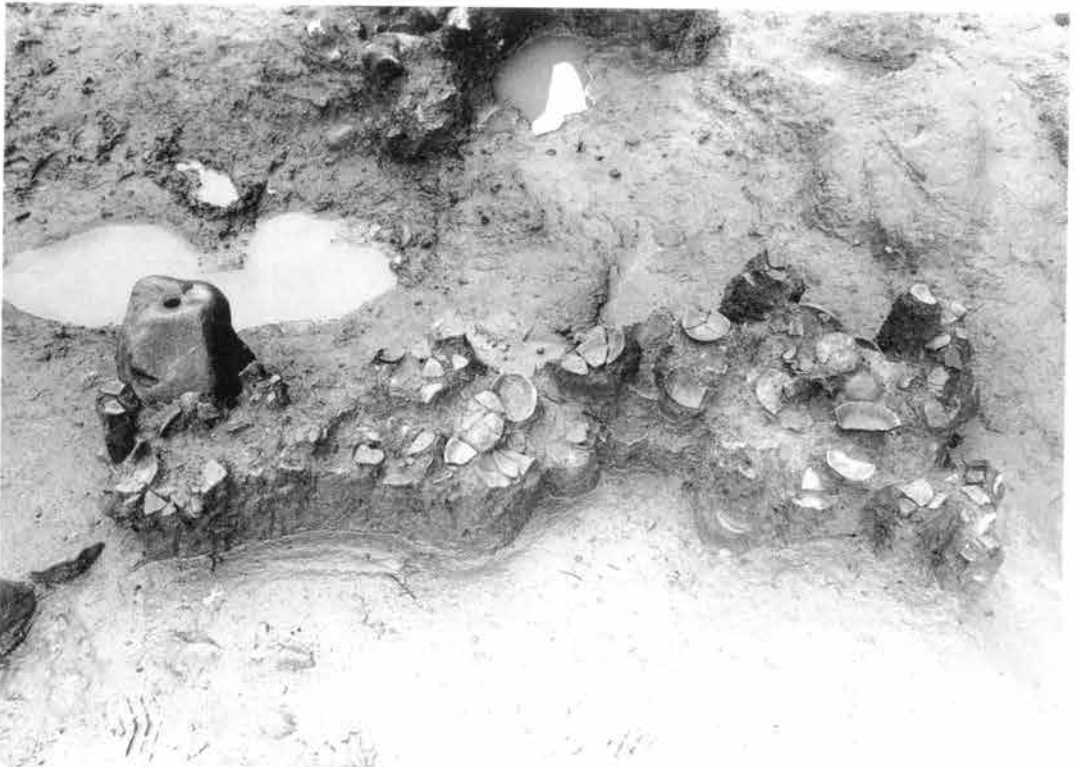
D₂調査区(J-30グリッド) 近世石組



同上、拡大写真(北より)



D₂調査区(J-33グリッド) 石組み



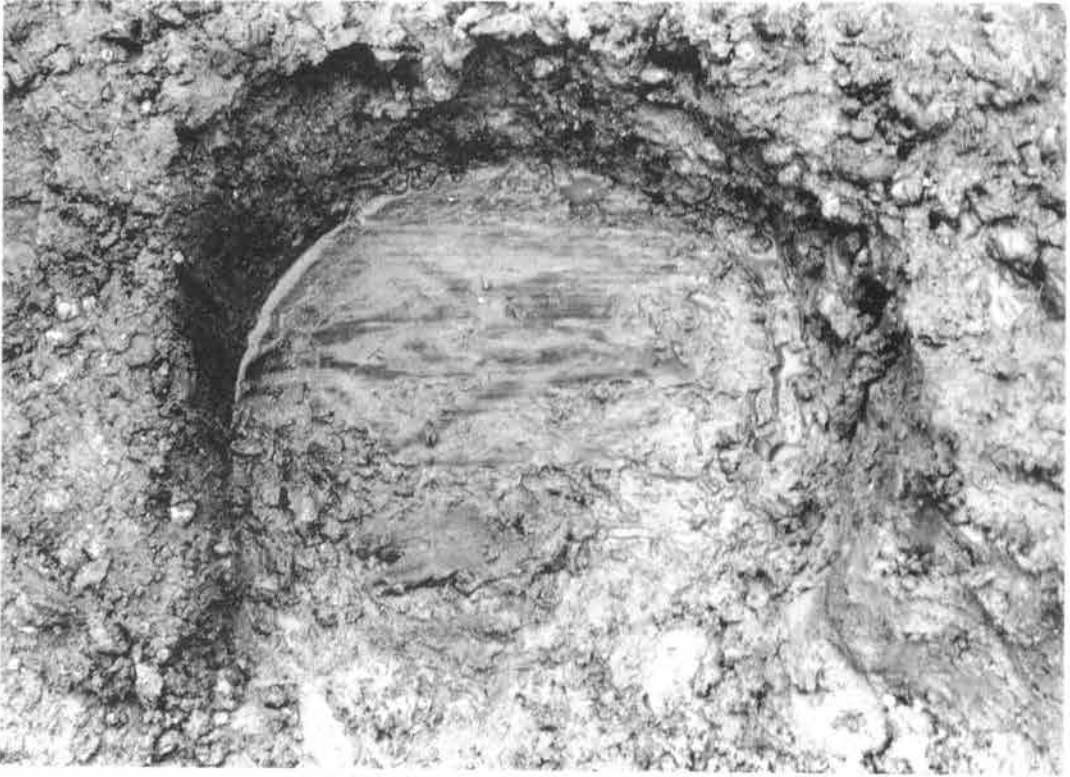
D₂調査区(J-33グリッド) 土師質土器群



D₂調査区(F-37グリッド) 溝状配石



D₂調査区(G-37グリッド) 中世平坦面溝状石列



D₂調査区(H-30・31グリッド) 桶出土状況



D₂調査区(H-32・33グリッド) 台座石出土状況



D₂調査区 第3号掘立柱建物跡（西側より）



同上より、調査区の東側を望む



D₂調査区 南東部分（第5号掘立建物他）



D₂調査区 全景（北より）



H-34 配石



G-37 溝状列石



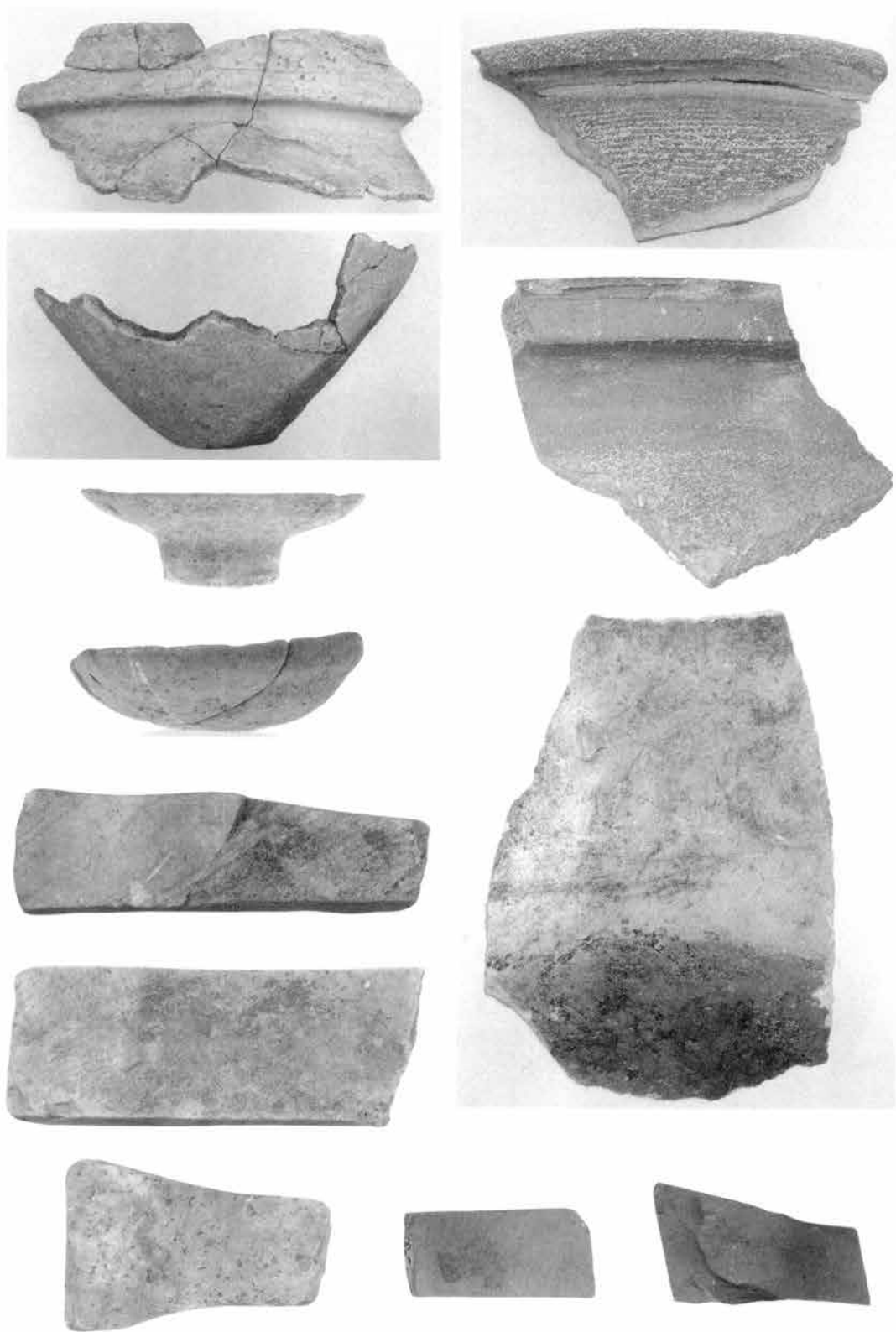
H-36 配石



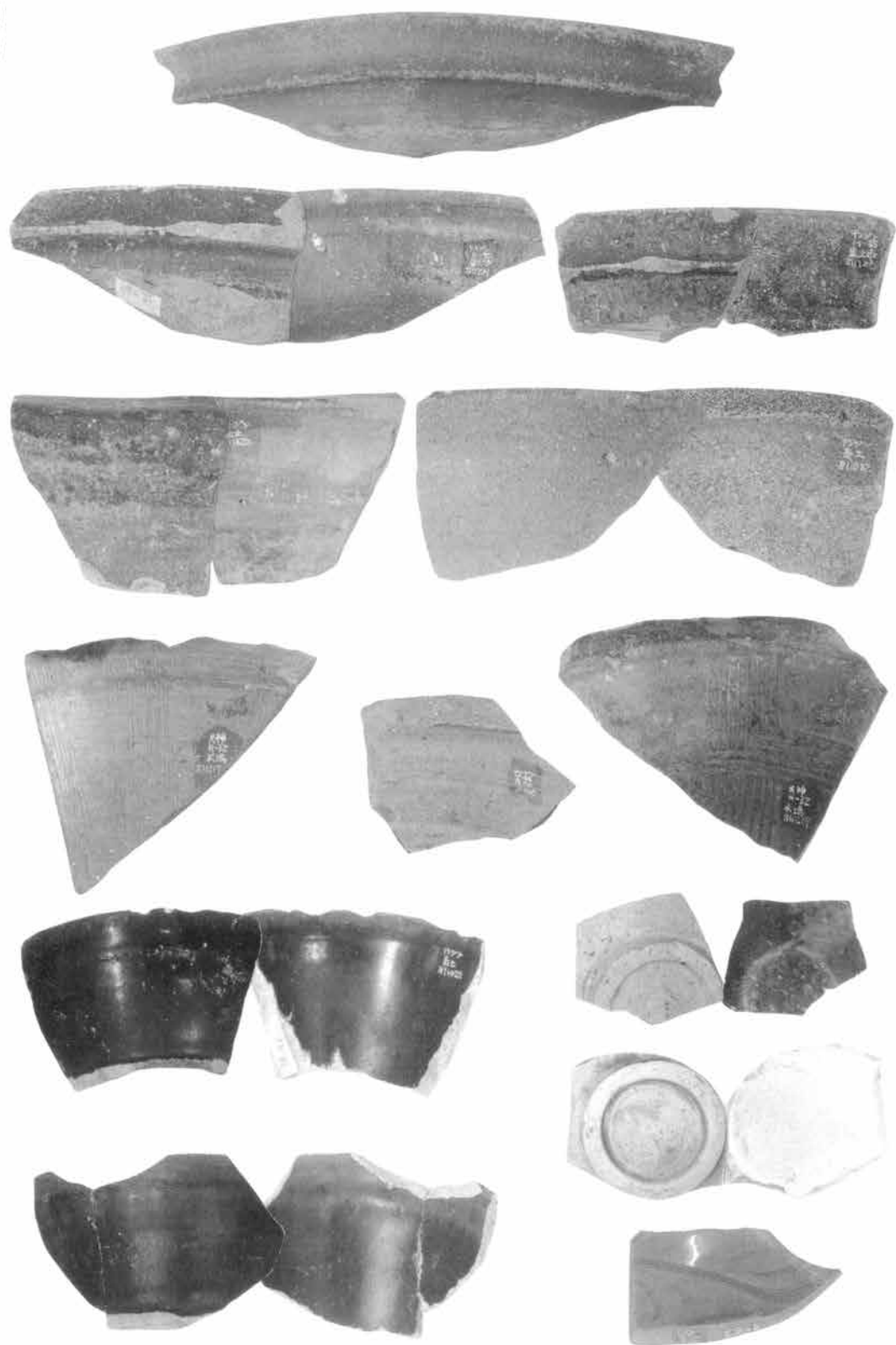
H-35 配石



I-36 配石



Dc調査区 遺構外出土遺物



D₂調査区 遺構外出土遺物



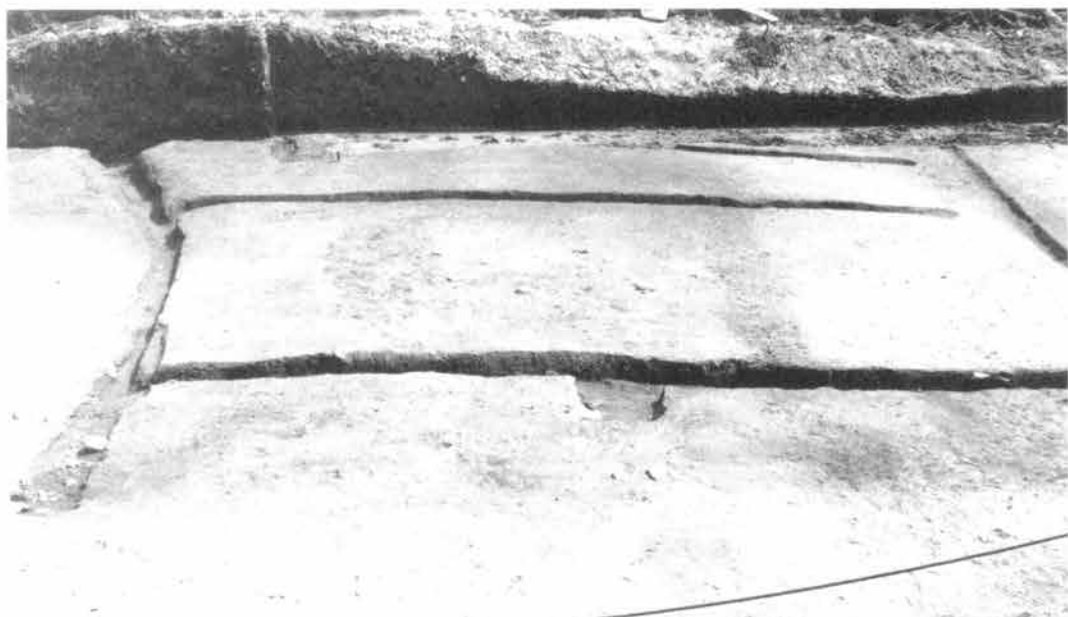
D₂調査区 遺構外出土遺物



D₁調査区（中央部）遠景（東側より）



D₁調査区 調査前近景（手前はC調査区・奥はD₂調査区）



D1調査区 上部溝状跡（北より）



D1調査区 発掘風景（東側より）



D₁調査区 第1号建物（北より）



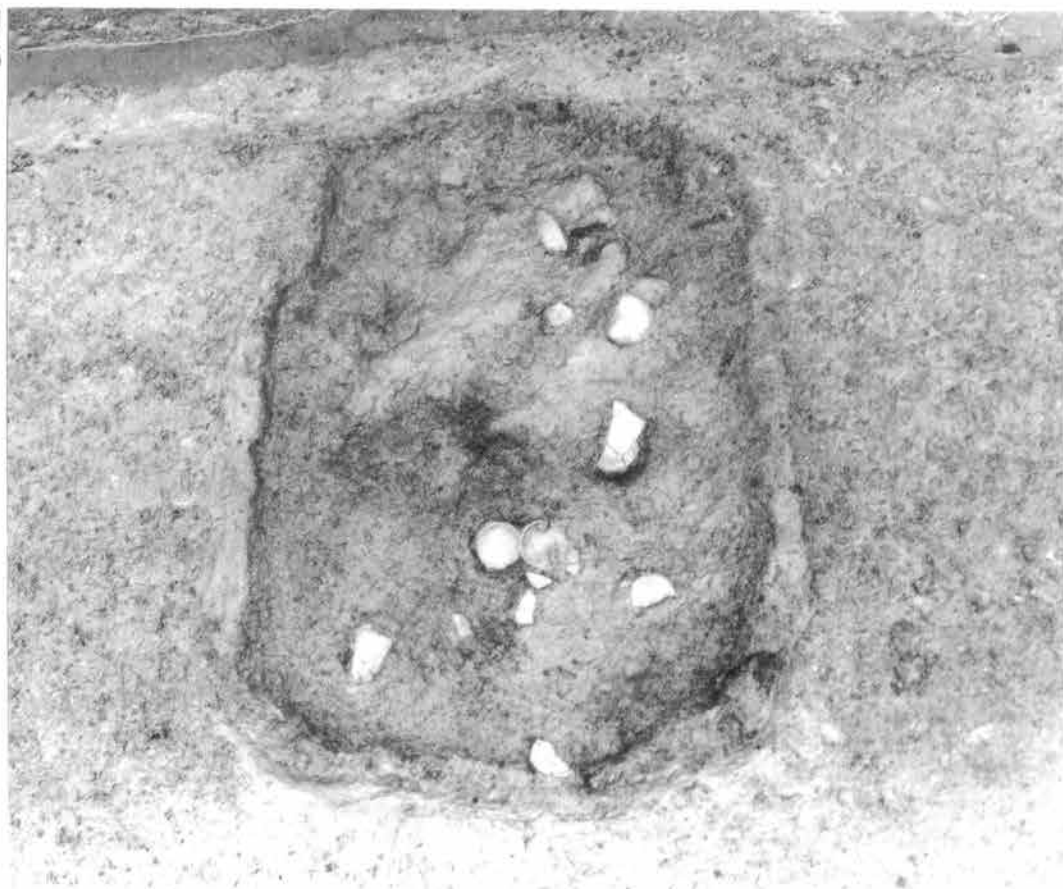
D₁調査区 第1号・第2号建物（西より）



D;調査区 第2号建物（北西方向より）



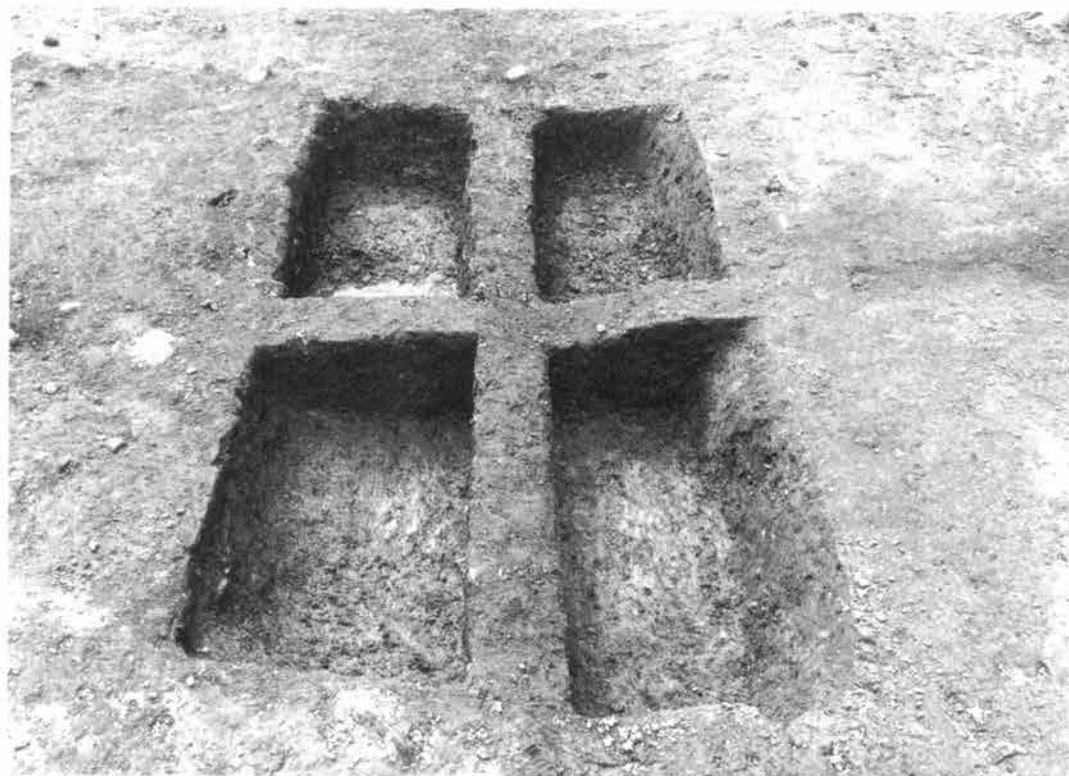
同上、西側（手前）溝状遺構



D₁調査区 第1号土坑(北より)



同、第2号土坑(南より)



D1調査区 第3号土坑(西より)



D1調査区 第2号建物横出土遺物(南側より)



D₁調査区 第2号建物横出土遺物の状況(南側より)



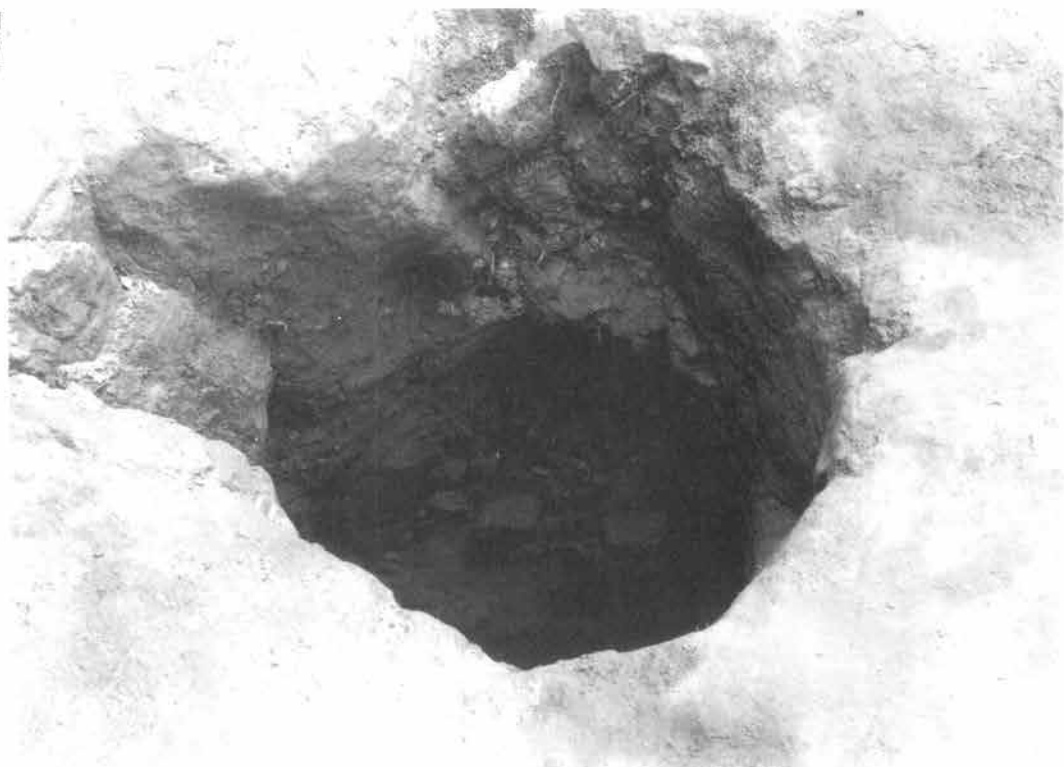
同上、整地(移動)土中出土遺物の状況



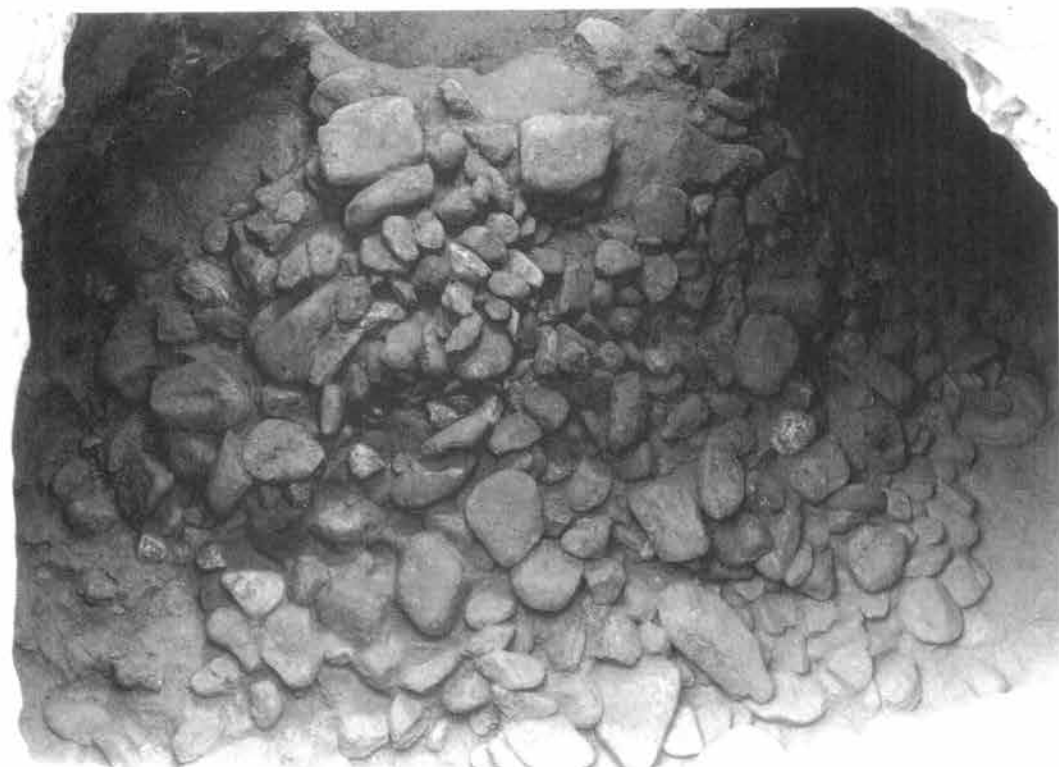
D1調査区 全景（西より）



同上。（東より。地下式横穴は右下隅の高台に所在）



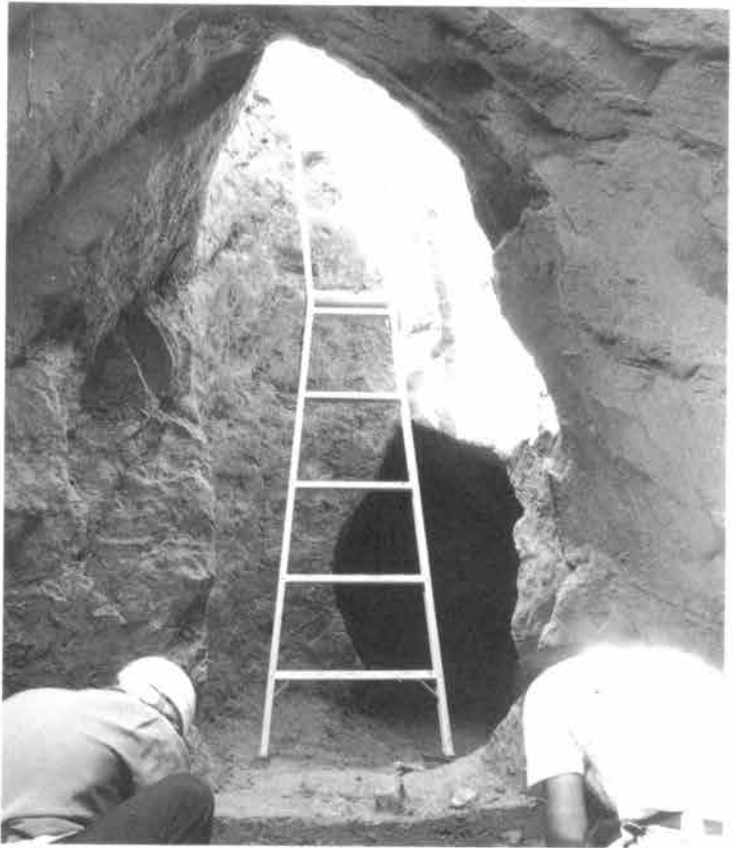
D₂調査区 地下式横穴竈坑より1号室内を望む



同上、1号室入口部付近（礎石の転入状況）

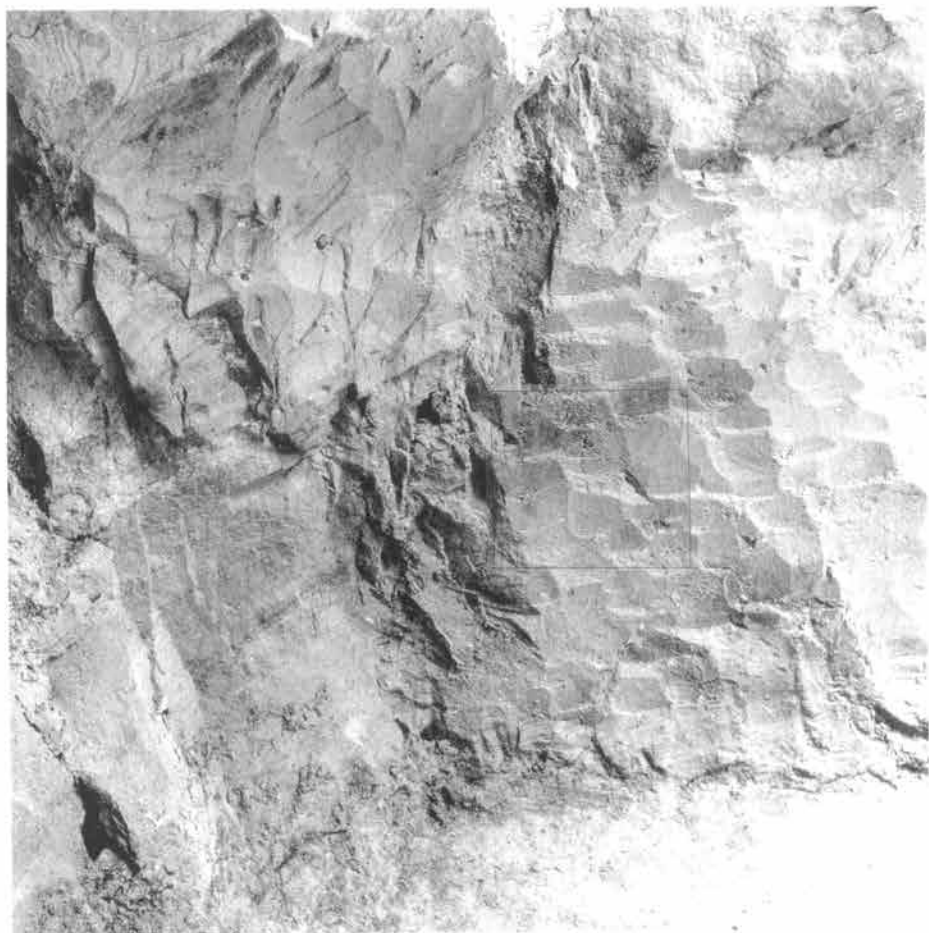


D₂調査区 地下式横穴（1号室内より2号室入口部を望む）



同上、調査風景

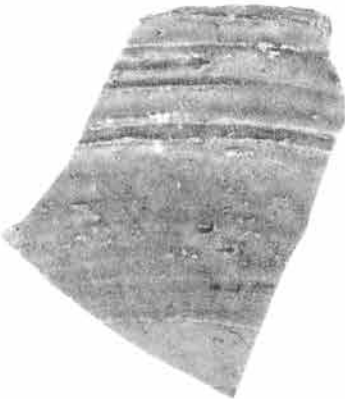
D₂調査区
地下式横穴一号室、奥壁（入口部より左半）



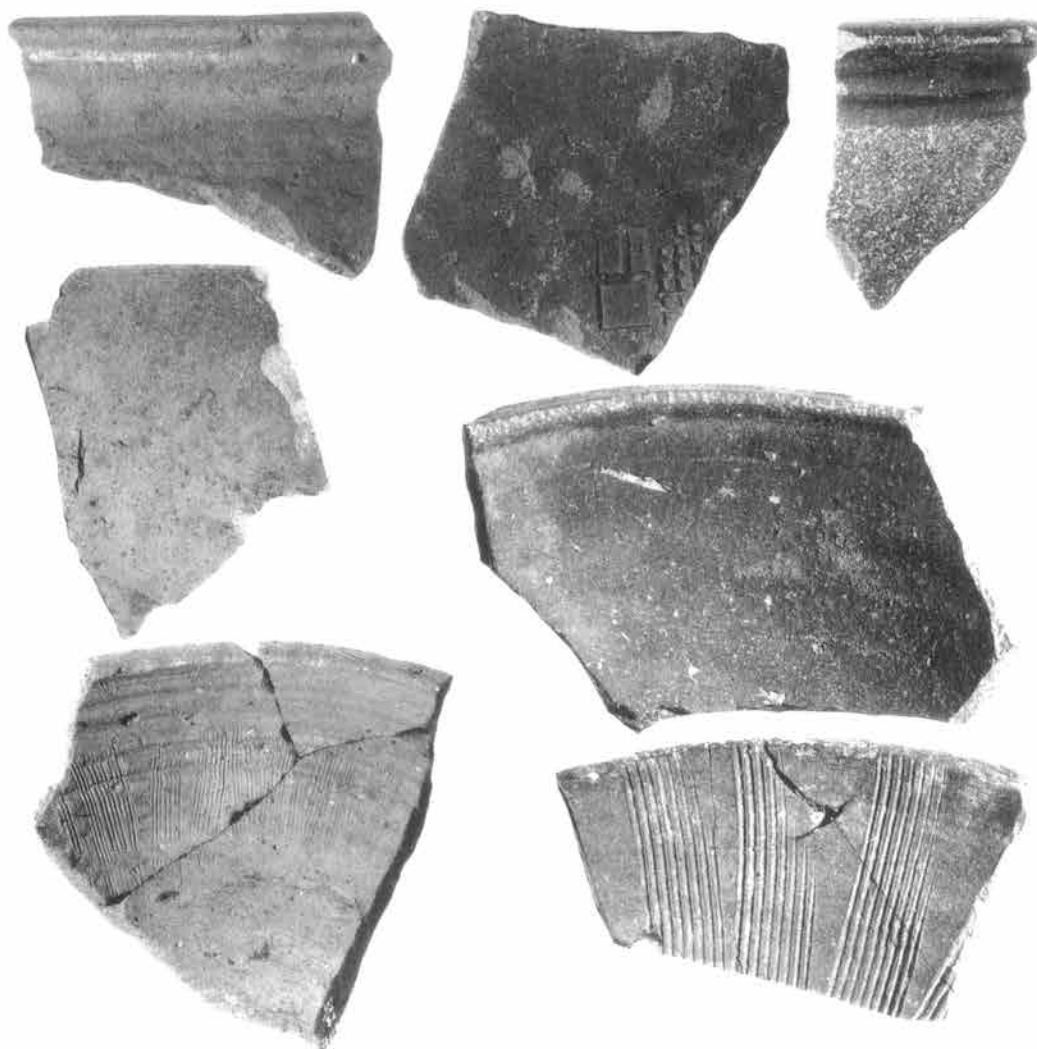
同上、工具痕（二部拡大）



(中世整地土より出土)



D1調査区内出土遺物



D₂調査区内出土遺物



E調査区 発掘作業（東側より）



E調査区 遺物の出土状況（A小群）



E調査区 遺物の出土状況 (B小群)



E調査区 同上



E調査区出土遺物



近世火葬場地区全景①（西から）



近世火葬場地区全景②（西から）



1、6、3号土坑完掘状況（東から）



1、6、3号土坑完掘状況（西から）



6号土壇完掘状況（南から）



6、7号土壇完掘状況（西から）



3号土坑完掘状況（東から）



10号土坑完掘状況（西から）



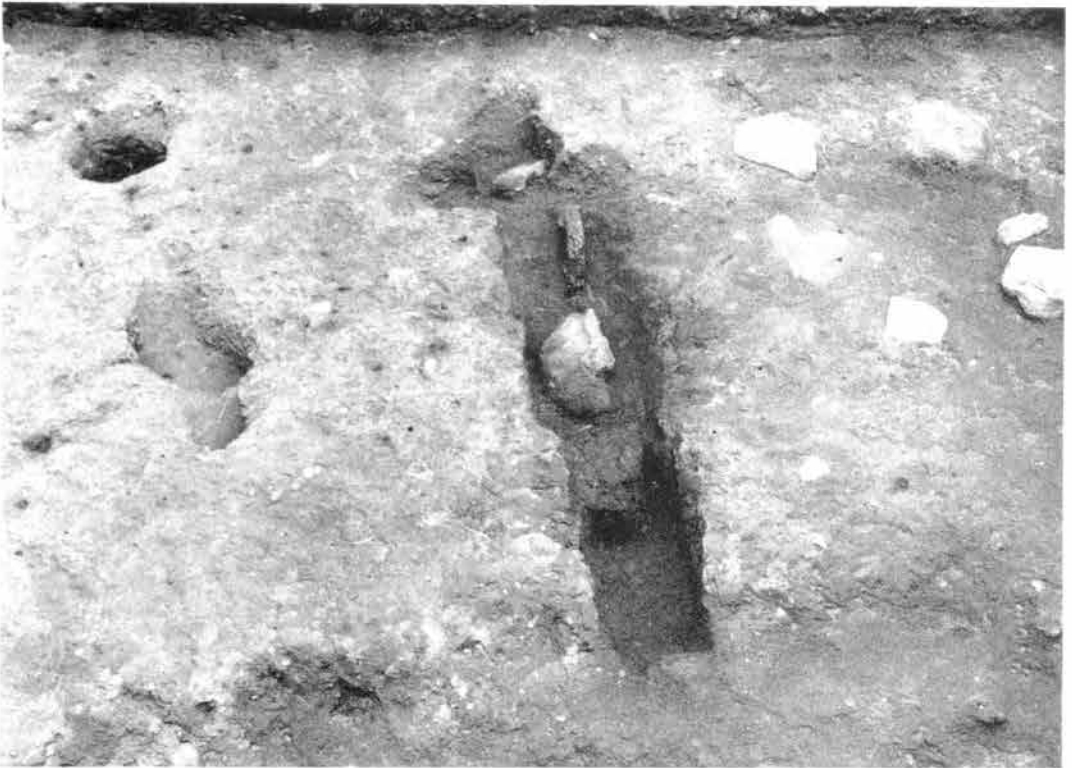
1号溝（部分）完掘状況（東から）



2、3号溝（部分）完掘状況（南から）



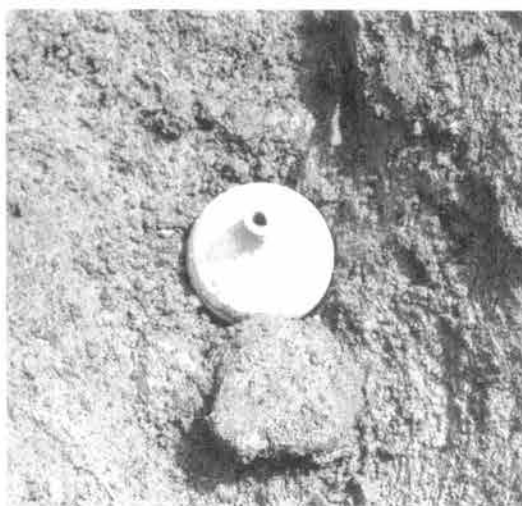
4号溝完掘状況(西から)



4号溝、1号石組板(?)完掘状況(北から)



土製人形出土状況



柴付小瓶出土状況



土製人形出土状況



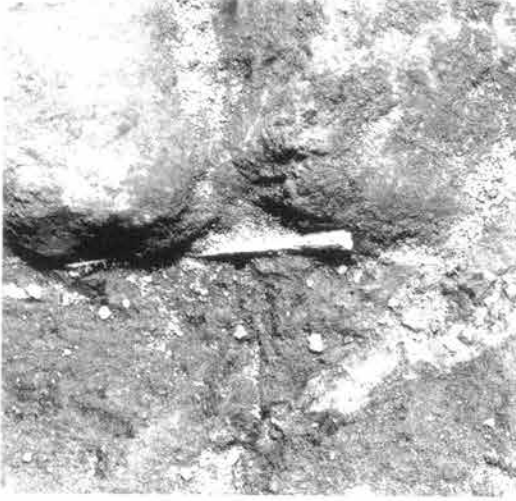
形状不明品出土状況



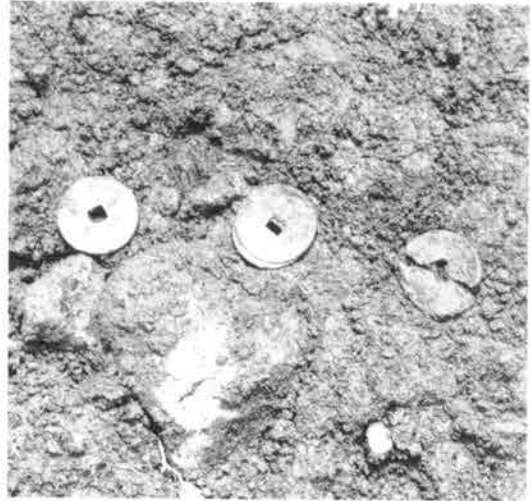
土鈴出土状況



土師質土器（かわらけ）出土状況



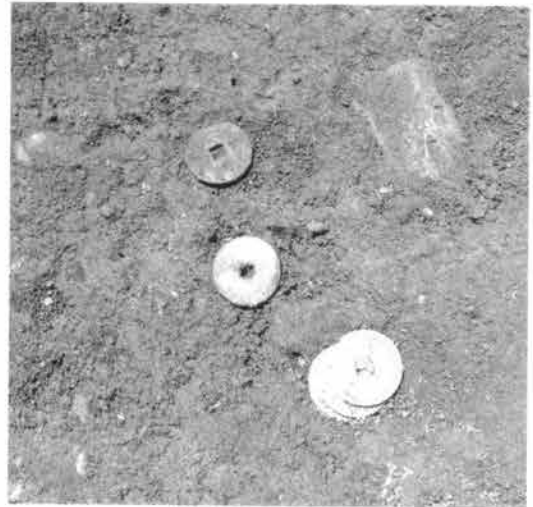
鉄釘出土状況



寛永通宝出土状況①



鉄製品出土状況



寛永通宝出土状況②



簪(かんざし)出土状況



寛永通宝出土状況③



調査作業風景①



調査作業風景②



2



22



4



40



6



42



7



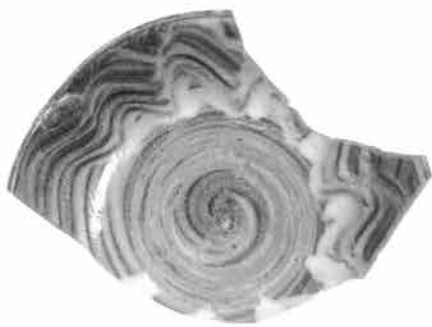
21



49



52



58



56



62



57



5



2



3



6

敷地天神山遺跡群

昭和 62 年 3 月 20 日 印刷

昭和 62 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町 4 丁目133番地

〒921 電話 (0762) 43-7692番代

印刷 北国書籍印刷株式会社

©石川県立埋蔵文化財センター 1987

